

【社会科学】

研究論文

性犯罪の刑期判断基準に関する定量的研究

柴田 守^{*1}A Quantitative Study of Sentencing Standards for the Term of
Imprisonment to be Imposed for Sexual Offenses

SHIBATA Mamoru

Summary

This article presents a quantitative sentencing standard for sexual offenses using statistical analyses of judicial precedents obtained from database. The analyses found the following. (1) The basic position on the sentencing standards for sexual offences is determined by the number of victims and the presence or absence and degree of injury related to the most serious case. (2) The victim's failure and drinking influence the range of the sentencing as modifying factors to the basic position determined in (1) above. And, (3) settlement out of court, likelihood of recidivism, youth, etc., exert an influence as modifying factors to the range of sentencing determined in (1) and (2) above to finally determine the sentencing. Japanese sentencing standards for sexual offences have revealed a tendency to emphasize results. In addition, the present study found that sexual offences against spouses, partners, and mentally-handicapped persons tended to receive lighter sentences, while sexual abuse by parents and teachers tended to receive heavier sentences. The study also reveals that sentencing for sexual offences has become moderately heavier in Japan over the 15-year period from 2002 to 2016.

Keywords : (sexual offenses, sentencing standard, term of imprisonment, judicial precedent)

1. はじめに

1.1 本研究に着手する背景と目的

2017 年に刑法の一部を改正する法律（平成 29 年法律第 72 号）が成立し、性犯罪規定が抜本的に改正された。その主な内容は、（1）強姦罪の構成要件を拡張して強制性交等罪とすること、（2）強制性交等罪（強姦罪）の法定刑の下限を懲役 3 年から 5 年に引き上げること、（3）

強制性交等罪とすることに伴う改正（①準強制性交等罪（準強姦罪）の構成要件及び法定刑の見直し、②強制性交等致死傷罪（強姦致死傷罪）の法定刑の下限の引き上げ、③集団強姦罪及び集団強姦致死傷罪の廃止）、（4）監護者わいせつ罪及び監護者性交等罪を新設すること、（5）強盗強姦罪の構成要件等を改めて強盗・強制性交等罪とすること、（6）強制性交等罪などを非親告罪化する

^{*1} 共通教育部門 准教授

強制性交等罪（＊性交、肛門性交、口膣性交）										強制わいせつ罪				強姦・強制性交等罪											
実行態様	暴行・脅迫型	13歳未満型	心神喪失・抗拒不能型		監護影響力型		致死類型		致死型	強姦型	強姦型	強姦型	強姦型	強姦型	強姦型	強姦型	強姦型								
			刑法177条前段	刑法178条2項	刑法176条後段	刑法179条2項	刑法176条前段	刑法176条後段										刑法178条1項	刑法179条1項	刑法181条2項	刑法181条1項	刑法241条1項	刑法241条1項	刑法241条3項	刑法241条3項
根拠条文			未遂(刑法180条)																						
主体	男性・女性																								
客体	男性・女性																								
法定刑	懲役5年以上20年以下						無期懲役・懲役6年以上20年以下		懲役5年以上10年以下				無期懲役・懲役7年以上20年以下		死刑・無期懲役										
告訴の要否	告訴不要																								
公訴時効	10年 (刑事訴訟法250条2第3号)		15年 (刑事訴訟法250条2第1号)		30年 (刑事訴訟法250条1第1号)		7年 (刑事訴訟法250条2第4号)		15年 (刑事訴訟法250条2第1号)		30年 (刑事訴訟法250条1第1号)		15年 (刑事訴訟法250条2第1号)		なし (刑事訴訟法250条1項参照)										

強姦罪(単独型) (＊強姦)																	集団強姦罪 (＊強姦)										強制わいせつ罪【単独型】										強制わいせつ罪【集団型】										強姦強姦罪																																																																																																																																																																																																																																																		
実行態様	暴行・脅迫型		心神喪失・抗拒不能型		13歳未満型		暴行・脅迫型		13歳未満型		心神喪失・抗拒不能型		強姦型		致死類型		強姦型		心神喪失・抗拒不能型		13歳未満型		暴行・脅迫型		強姦型		心神喪失・抗拒不能型		強姦型		致死類型		強姦型	致死型																																																																																																																																																																																																																																																															
	刑法177条 1項 前段	刑法177条 1項 後段	刑法176条 1項 前段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条 1項 後段	刑法176条

※ 上段が改正前、下段が改正後である。グレーで塗りつぶし、文字を太字強調している欄の内容が小さく変更された点である。なお、ここでは、条項が変更された点については主な変更としないことに留置されたい。

図表 1 性刑法の改正前後の対照表

出典：拙稿「批判的被害者学からみた改正性刑法の評価と今後の課題— 3 年後を目処とした検討に向けて」被害者学研究 28 号（2018 年） 33 頁。

ことである¹⁾ [図表 1]。

同法は、近年における性犯罪の実情等にかんがみ、事案の実態に即した対処を可能にするため、性犯罪に関する罰則の整備を行ったもので、その附則 9 条において、「政府は、この法律の施行後 3 年を目途として、性犯罪における被害の実情、この法律による改正後の規定の施行の状況等を勘案し、性犯罪に係る事案の実態に即した対処を行うための施策の在り方について検討を加え、必要があると認めるときは、その結果に基づいて所要の措置を講ずるものとする。」と規定し、さらなる見直しの可能性を定めた²⁾。

同附則 9 条や、同法律案に対する衆議院法務委員会及び参議院法務委員会における附帯決議などを受けて、2018 年 4 月に法務省関係者で構成される性犯罪に関する施策検討に向けた実態調査ワーキンググループが設置され、約 2 年にわたり各種調査研究やヒアリングが行われて³⁾、2020 年 3 月 31 日にその取りまとめ結果が公表された⁴⁾。そして、同日、被害者心理・被害者支援等関係者、刑事法研究者、実務家によって構成される性犯罪に関する刑事法検討会（以下、「検討会」とする。）が法務省内に設置されたことも発表され、検討会では、ヒアリングや論点の抽出・整理などを経て、現在、見直し（法改正）の可否・当否に関する議論が行われている⁵⁾。

また、内閣府に設置された性犯罪・性暴力対策強化のための関係府省会議は、2020 年 6 月に「性犯罪・性暴力対策の強化の方針」を決定した^{6)・7)}。2020 年度からの 3 年間で性犯罪・性暴力対策の「集中強化期間」に定め、性犯罪・性暴力の根絶に向けた取り組みや被害者支援を強化することとなった。

このように、現在の日本では、性犯罪・性暴力対策の強化という方針のもとで、改正性刑法の見直しに関する議論が行われている状況である。

ところで、筆者は、機会あって、性犯罪規定の抜本的改正以前には、性犯罪の非親告罪化と公訴時効停止制度の導入に関する検討を行ってきており⁸⁾、そして改正後には、抜本的に改正された性犯罪規定に関する今後の課題などを検討すること⁹⁾や、公益財団法人日工組社会安全研究財団 2018 年度一般研究助成を受けて、性犯罪規定のさらなる見直しに向けた、性刑法改正後の性暴力対策及び被害者支援のあり方に関する実証研究などに取り組

んできた¹⁰⁾。

だが、このような刑事政策的観点からの性暴力対策に関する研究を行っていくなかで、最近の性犯罪の量刑基準や量刑傾向について十分に検討されていないことが気がかりであった。というのも、改正性刑法では法定刑の見直しも行ったので、その施行状況の確認も行われることになるのだが、度数分布分析だけでは実態を的確に捉えることができないとかねてから考えていたからである。量刑に関して、公式統計では一般的に度数分布表で分析する傾向にあるが、ただ、この場合、罪名別に分類されているものの、犯情や一般情状に関する内容を問わずに量刑だけ見ることから、毎年、同じような犯罪者が、同じような形で犯罪を行っているという前提に立つ。だが、実際にはそうではない。特定した対象から得られた相互に関連する多種類のデータ（変数）を総合的に要約したり、目的変数を決めて、将来の数値を予測するといった統計解析作業（多変量解析）を行って読み解いていく必要がある。筆者は、これまた機会あって、殺人、交通犯罪などの量刑基準に関する定量的研究を行ってきた¹¹⁾。そこで、筆者が行ってきた「刑事政策的観点からの性暴力対策に関する研究」と「量刑基準に関する定量的研究」を組み合わせた研究として、「平成年間性の犯罪の量刑基準に関する定量的研究」を行うことにより、改正性刑法の見直しに資するのではないかと考え、本研究に取り組んだ次第である。

1.2 先行研究から得られる知見

では、まず前提として、性犯罪の量刑基準・傾向に関する先行研究の知見をまとめておこう。代表的な先行研究として、少し古くなるが、①重森幸雄による研究¹²⁾、②鬼塚賢太郎による研究¹³⁾、③萩原玉味による研究¹⁴⁾があり、比較的最近では、④並木正男=石川恭司=丸田顕による研究¹⁵⁾、⑤佐々木尚による研究¹⁶⁾がある。

①重森幸雄による研究

重森は、①東京地方検察庁において昭和 39 年 7 月 1 日から昭和 40 年 6 月 30 日までの間に受理した強姦、同未遂、準強姦、同未遂、強姦致死傷、強姦強盗、同致死に関する事件（ただし、毎月 11 日から 20 日までの 10 日間に受理したものに止め、日曜・祭日の受理事件を除く）、②宇都宮、熊本、山形の各地方検察庁において昭和 39 年

7月1日から昭和40年6月30日までの間に受理した上記①と同様の事件について、被疑者626人のものを対象に、独自の調査票を作成して、被疑者や被害者の実態、事件処理の実情などを集計した。

その結果、量刑に関しては、宣告刑は求刑よりも軽く、法定刑の下限に集中するという量刑傾向があることを確認した。

②鬼塚賢太郎による研究

鬼塚は、昭和35年から38年までの約4年間の強姦罪、同致傷罪に関する事件（他罪と併合罪のものを含む）57件（被告人82名分）、並びに最高裁判例集（17巻12号まで）、高裁判例集（16巻9号まで）、第一審刑事裁判例集（全）、下級裁判刑事裁判例集（6巻1・2号まで）にそれぞれ掲載された強姦罪、同致傷罪に関する事件（量刑が明示されているものに限る）47例（被告81名分）を対象に、裁判例や記録にあたって、犯罪類型（強姦未遂、同既遂、強姦致傷（未遂）、同（既遂））及び犯行類型（同伴型、屋外型、侵入型、共同型）別に分類し、基準量刑を中心に定性的な検討を行った。

その結果、量刑傾向として、①強姦未遂の基準量刑は2年を中心として1年6月から2年6月までの範囲であり、執行猶予を付けるのが原則であること、②強姦既遂の基準量刑は3年（なお、判例集のケースでは2年から3年の範囲）であり、執行猶予を付けるのが通例となっていること、③強姦致傷（未遂）の基準量刑は（強姦既遂と同様に）3年であり、執行猶予を付けるのが通例となっていること、④強姦致傷（既遂）の基準量刑は3年から4年までの範囲であり、実刑とするのが原則であることを確認した。

③萩原玉味による研究

萩原は、昭和42年1月から平成9年12月までの強姦に関する事件の第一審判決を中心とした256件（被告人は成人に限る）を対象に、これらの裁判例のなかから注目すべきものを抽出して、犯行態様や刑期によって分類し、定性的な検討を行った。

その結果、強姦事件の量刑については、①被害者の落ち度、②被告人が年若く前途有望な青年であること、③衝動的な行動であること、④示談成立が軽減因子となり、他方で、⑤被害者が処女あるいはいたいけな少女、幼女であること、⑥計画的犯行、⑦行為の残虐性が加重因子

となっていることを特定した。また、懲役10年以上、無期懲役、死刑が宣告されているものについては、特に、その事件が社会の人々に与えた恐怖、不安感、一般予防的見地からの配慮がなされていることを確認した。

④並木正男=石川恭司=丸田顕による研究

並木らは、平成15年8月から平成19年3月までに大阪地方裁判所で言い渡された強姦致傷罪（他罪と併合罪の例を含む）47件（第1審が大阪地方裁判所で高等裁判所において破棄自判した事例3件を含む）を対象に、これらの裁判例における主要な量刑因子を抽出し、被害者が1名の場合と複数の場合とに分けて、定性的な検討を行った。

その結果、（1）まず、被害者が1名の事案については、姦淫が既遂に達しているか否か、犯行態様（暴行・脅迫の程度、陵辱行為の有無や内容）、傷害の内容・程度、前科前歴（とりわけ同種犯罪のもの）の有無により、概ねの刑の大枠が決定づけられていることを特定した。そして、執行猶予が付く事案は、上記の各因子において、最も軽い場合に限られることを確認した。

その他の量刑因子については、①慰謝的措置は被害感情の緩和あるいは反省の態度の表れとして有利に考慮されていること（特に、示談の成否は重要な量刑要素となるが、単に金銭的賠償による示談ができたということにとどまるのか、さらに被害者による宥恕の意思が表明されているかによって量刑に与える影響の大きさは相当に異なるが、ただし、執行猶予を付すかどうかという観点からすると、被害者の宥恕は、通常考えられているほど決定的な因子ではないと推定している）、②13歳未満の未成年者が被害者の場合には刑を重くする方向での重要な要素となるが、成人女性の場合には年齢による量刑への影響は少ないこと、③被害者の落ち度は、決定的な要素とはなっていないこと、④強姦致傷罪では、動機がほとんど量刑に影響することはないことを特定した。

（2）被害者が複数の事案については、被害者数（罪名としては強姦罪、強姦未遂罪に留まるものを含む）が判断に最も関連する量刑因子であり、被害者数に比例して量刑も段階的に重くなっている傾向があること（執行猶予が付くことはまず考えられず、被害者が10名を超える場合には無期懲役をも射程において量刑が検討されていること）を特定した。

⑤佐々木尚による研究

佐々木は、並木正男=石川恭司=丸田顕による研究でまとめられた強姦致傷罪の別表を情報源として、48 件の事例について、既遂・未遂の件数、併合時の強姦既遂・未遂の件数、処罰感情、行為の悪質性などを 0~4 の範囲で点数化して、それらを説明変数に採用して、重回帰分析を用いて解析し、刑期判断に関する予測モデルを検討した。

その結果、①既遂・未遂の件数、併合時の強姦既遂件数、行為悪質性が刑期判断に強く影響していること、②処罰感情、若年性、暴力的行為がある程度影響していることを確認した。

以上を整理すると、先行研究から性犯罪の量刑基準・傾向について見えてくるのは、以下のことである。

①刑の大枠は、被害者数、姦淫既遂・未遂（姦淫が既遂に達しているか否か）、犯行態様（暴行・脅迫の程度、陵辱行為の有無や内容）、傷害の内容・程度、前科前歴（とりわけ同種犯罪のもの）の有無により決定されている。

②慰謝的措置（示談の成立）、被告人の若年性、非計画性が軽減因子となり、他方で、被害者の年齢（13 歳未満）、計画性が加重因子となっている。

③被害者の落ち度は決定的な要素とはなっていないという指摘もあるが、軽減因子となるという指摘もある。

④宣告刑と求刑には関連性があり、宣告刑は求刑よりも軽くなる傾向がある。

⑤宣告刑は、法定刑の下限に集中し、①強姦未遂の基準量刑は 2 年を中心として 1 年 6 月から 2 年 6 月までの範囲であり、執行猶予を付けるのが原則であること、②強姦既遂の基準量刑は 3 年（なお、判例集のケースでは 2 年から 3 年の範囲）であり、執行猶予を付けるのが通例となっていること、③強姦致傷（未遂）の基準量刑は（強姦既遂と同様に）3 年であり、執行猶予を付けるのが通例となっていること、④強姦致傷（既遂）の基準量刑は 3 年から 4 年までの範囲であり、実刑とするのが原則である。

なお、⑤については、昭和 30 年代に関するもので、平成年間においても法定刑が重罰化していることから、過去の量刑傾向として参考のものと位置づけられるであろう。

1.3 本研究の展開について

以下では、性犯罪の量刑判断基準のうち、有期刑における刑期判断基準に焦点を絞って、その定量的解明に取り組む。まず、平成年間の裁判例をもとに、統計解析によって予測モデル式を構築する。そして、予測モデル式に照らして、犯行類型別の量刑傾向や平成年間での量刑傾向の変化を分析するとともに、求刑との関係も分析したうえで、先行研究の知見とも照らし合わせて、性犯罪の刑期判断基準や量刑傾向を導き出したいと思う。

2. 調査の概要

2.1 対象の選定について

本調査で対象としたのは、LEX/DB インターネット〔TKC 提供〕及び裁判所ホームページの裁判例情報に 2020 年 7 月 7 日の時点で収録されていた平成年間の強姦（強制性交等）、強姦致傷（強制性交等致傷）などに関する性犯罪事件の裁判例で、第一審において有罪となり、有期懲役（執行猶予を含む）に処された事案 335 件である。

対象選定の手続は、以下のとおりである。

①まず、犯情が最も重い処断罪名が、「強姦（強制性交等）」、「強姦致傷（強制性交等致傷）」、「強姦未遂（強制性交等未遂）」、「準強姦（準強制性交等）」、「準強姦未遂（準強制性交等未遂）」、「準強姦幫助」「集団強姦」、「集団強姦致傷」、「集団強姦未遂」、「集団準強姦」、「強制わいせつ」、「強制わいせつ致傷」、「強制わいせつ未遂」、「準強制わいせつ」に絞った。

②このうち、宣告刑が「有期懲役」のものに限定した（「無期懲役」のものは除外した）。

③なお、①・②に該当する裁判所ホームページの裁判例のうち、裁判年月日が特定できないものは、本分析から除外した。

2.2. 量刑因子（アイテム）／カテゴリーの設定について

量刑因子（アイテム）／カテゴリーは、「刑事事件量刑データベース」〔TKC 提供〕を参考にして「たたき台」のものを設定した上で、本調査が対象としている裁判例を一度すべて目を通して、「犯情」と「一般情状」に関するものを詳細に設定した。ここで設定した量刑因子（アイテム）の数は43で、それらのカテゴリーは合計すると151になる。

本分析で設定した犯情に関する量刑因子（アイテム）は、分析の便器上、（1）性犯罪の犯情（性犯罪で犯情が最も重いもの）、（2）犯行後の行為、（3）すべての性犯罪の被害者数に大別した。その詳細は、（1）性犯罪の犯情（性犯罪で犯情が最も重いもの）では、（1-①）被害者との関係、（1-②）姦淫行為、（1-③）共犯関係、（1-④）被害結果（死傷）（※なお、以下の分析では、対象から「致死」を外しているため、「被害結果（傷害）」と表記した）、（1-⑤）動機、（1-⑥）凶器等、（1-⑦）犯行場所、（1-⑧）精神症状、（1-⑨）心神耗弱、（1-⑩）被害者の落ち度、（1-⑪）飲酒、（1-⑫）薬物、（1-⑬）計画性、（1-⑭）組織性である。（2）犯行後の行為では、（2-①）罪証隠滅行為、（2-②）窃盗・詐欺（未遂も含む）、（2-③）逃亡・逃走、（2-④）その他犯行後の行為である。（3）すべての性犯罪の被害者数では、（3-①）強姦、（3-②）強姦未遂、（3-③）強制わいせつ、（3-④）強制わいせつ未遂である。

他方で、一般情状に関する量刑因子（アイテム）は、（4-①）前科・前歴（少年院歴）、（4-②）累犯前科、（4-③）服役歴、（4-④）反省、（4-⑤）謝罪、（4-⑥）示談、（4-⑦）損害賠償、（4-⑧）被害者感情、（4-⑨）自首、（4-⑩）通報、（4-⑪）再犯可能性、（4-⑫）更生可能性、（4-⑬）高齢、（4-⑭）若年、（4-⑮）真相解明の協力、（4-⑯）社会的影響、（4-⑰）同情の余地、（4-⑱）不遇、（4-⑲）身元引受け・更生支援体制、（4-⑳）その他、（4-㉑）執行猶予期間中である。

これらの量刑因子（アイテム）のカテゴリーは、以下のとおりである。

【（1）性犯罪の犯情（性犯罪で犯情が最も重いもの）】

（1-①）被害者との関係〔〈親〉、〈子〉、〈配

偶者（内縁を含む）〉、〈その他の親族〉、〈交際相手〉、〈元配偶者・元交際相手〉、〈友人・知人〉、〈勤務先関係〉、〈教師・指導者〉、〈関係なし〉、〈その他〉、〈不明〉]

（1-②）姦淫行為〔〈姦淫・既遂〉、〈姦淫・未遂〉、〈強制わいせつ〉]

（1-③）共犯関係〔〈単独犯〉、〈共同正犯：主導的立場〉、〈共同正犯：従属的立場〉、〈幫助犯〉、〈教唆犯〉]

（1-④）被害結果（死傷）〔〈死亡〉、〈傷害：全治2週間以内〉、〈傷害：全治1か月以内〉、〈傷害：全治3か月以内〉、〈傷害：全治6か月以内〉、〈傷害：全治6か月超〉、〈傷害：全治不能〉、〈傷害：全治不明〉、〈その他〉、〈なし〉] ※なお、以下の分析では、対象から「致死」を外しているため、「被害結果（傷害）」と表記した。

（1-⑤）動機〔〈怨恨〉、〈嬰兒殺〉、〈介護疲れ〉、〈無理心中〉、〈家族関係（その他）〉、〈けんか〉、〈金銭トラブル〉、〈男女関係〉、〈保険金〉、〈憤怒〉、〈自己保身・発覚のおそれ〉、〈無差別殺人〉、〈わいせつ目的〉、〈背景なし・不明〉、〈その他〉]

（1-⑥）凶器等〔〈自動車等〉、〈薬物・毒物〉、〈刃物類〉、〈工具類〉、〈ひも・ロープ類〉、〈棒状の凶器〉、〈銃〉、〈凶器なし〉、〈火器・爆発物〉、〈その他〉]

（1-⑦）犯行場所〔〈被告人住居内〉、〈被害者住居内〉、〈公共施設内〉、〈宿泊施設内〉、〈店舗・事務所等〉、〈その他屋内〉、〈乗り物内〉、〈路上・駐車場〉、〈その他屋外〉]

（1-⑧）精神症状〔〈うつ病〉、〈パーソナリティ障害〉、〈統合失調症〉、〈発達障害〉、〈その他の精神症状〉、〈なし〉]

（1-⑨）心神耗弱〔〈あり〉、〈なし〉]

（1-⑩）被害者の落ち度〔〈あり〉、〈なし〉]

（1-⑪）飲酒〔〈あり〉、〈なし〉]

（1-⑫）薬物〔〈あり〉、〈なし〉]

（1-⑬）計画性〔〈あり〉、〈なし〉]

（1-⑭）組織性〔〈あり：対一般市民〉、〈あ

り：対組織メンバー〉，〈なし〉]

【(2) 犯行後の行為】

(2-①) 罪証隠滅行為 [〈あり〉，〈なし〉]

(2-②) 窃盗・詐欺（未遂も含む） [〈あり〉，〈なし〉]

(2-③) 逃亡・逃走 [〈あり〉，〈なし〉]

(2-④) その他犯行後の行為 [〈あり〉，〈なし〉]

【(3) すべての性犯罪の被害者数】

(3-①) 強姦 [〈1名〉，〈2名〉，〈3名〉，〈4名〉，〈5名以上〉，〈なし〉]

(3-②) 強姦未遂 [〈1名〉，〈2名〉，〈3名〉，〈4名〉，〈5名以上〉，〈なし〉]

(3-③) 強制わいせつ [〈1名〉，〈2名〉，〈3名〉，〈4名〉，〈5名以上〉，〈なし〉]

(3-④) 強制わいせつ未遂 [〈1名〉，〈2名〉，〈3名以上〉，〈なし〉]

【(4) 一般情状】

(4-①) 前科・前歴（少年院歴） [〈あり（同種事案含まず）〉，〈あり（同種事案含む）〉，〈なし〉，〈言及なし〉]

(4-②) 累犯前科 [〈あり〉，〈なし〉，〈言及なし〉]

(4-③) 服役歴 [〈あり〉，〈なし〉，〈言及なし〉]

(4-④) 反省 [〈あり〉，〈なし〉，〈言及なし〉]

(4-⑤) 謝罪 [〈あり〉，〈なし〉，〈言及なし〉]

(4-⑥) 示談 [〈全部成立〉，〈一部成立〉，〈未成立〉，〈言及なし〉]

(4-⑦) 損害賠償 [〈全部済み〉，〈一部済み〉，〈意思あり〉，〈なし〉，〈言及なし〉]

(4-⑧) 被害者感情 [〈宥恕〉，〈一部宥恕〉，〈処罰〉，〈言及なし〉]

(4-⑨) 自首 [〈あり〉，〈言及なし〉]

(4-⑩) 通報 [〈あり〉，〈言及なし〉]

(4-⑪) 再犯可能性 [〈あり（高い）〉，〈なし（低い）〉，〈言及なし〉]

(4-⑫) 更生可能性 [〈あり（高い）〉，〈なし（低い）〉，〈言及なし〉]

(4-⑬) 高齢 [〈あり〉，〈言及なし〉]

(4-⑭) 若年 [〈あり〉，〈言及なし〉]

(4-⑮) 真相解明の協力 [〈あり〉，〈言及なし〉]

(4-⑯) 社会的影響 [〈あり〉，〈言及なし〉]

(4-⑰) 同情の余地 [〈あり〉，〈言及なし〉]

(4-⑱) 不遇 [〈あり〉，〈言及なし〉]

(4-⑲) 身元引受け・更生支援体制 [〈あり〉，〈言及なし〉]

(4-⑳) 執行猶予期間中 [〈期間中〉，〈なし〉]

(4-㉑) その他の一般情状 [〈あり〉，〈言及なし〉]

2.3. データの収集について

データは、判決書全文を1つずつ読んで、それに記載されている内容をもとに、被告人1名ごとに、宣告刑の刑期を入力して、すべての量刑因子のカテゴリを選択するという方法によって収集した。したがって、1つの判決書でも、被告人が複数の場合には、被告人の人数分のデータを取っている。また、被告人1名であるが、1つの判決書に、複数の宣告刑が言い渡されている事例もある。この場合には、宣告刑ごとにデータを取っている。

収集の作業手順は、以下のような2段階の方式を採った。第1段階として、筆者が作成したExcelデータベースのフェイスシートに、判決書全文から抜き取って箇条書きで入力していく作業を行った。この作業は、3名の研究アシスタントで行った。その上で、第2段階として、筆者と3名の研究アシスタントが再度、判決書全文を1つずつ読んで、第一段階で入力した内容も手がかりにして、宣告刑の刑期を入力して、各量刑因子（アイテム）のカテゴリを選択するという作業を行った。入力上の誤りや入力者の主観などが加わらないようにするため、1度目に入力した者とは別の者が、再度、判決書全文を読み、入力内容に誤りがないかをチェックするという体制をとった。

宣告刑		合計		実刑		付執行猶予	
刑 期	月換算	N	%	N	%	N	%
懲役10月	(10月)	1	0.3	0	0.0	1	1.3
懲役1年	(12月)	5	1.5	2	0.8	3	4.0
懲役1年2月	(14月)	1	0.3	0	0.0	1	1.3
懲役1年6月	(18月)	11	3.3	2	0.8	9	12.0
懲役1年8月	(20月)	1	0.3	0	0.0	1	1.3
懲役1年10月	(22月)	2	0.6	1	0.4	1	1.3
懲役2年	(24月)	25	7.5	14	5.4	11	14.7
懲役2年2月	(26月)	1	0.3	0	0.0	1	1.3
懲役2年4月	(28月)	3	0.9	3	1.2	0	0.0
懲役2年6月	(30月)	20	6.0	11	4.2	9	12.0
懲役2年8月	(32月)	1	0.3	1	0.4	0	0.0
懲役3年	(36月)	55	16.4	17	6.5	38	50.7
懲役3年4月	(40月)	1	0.3	1	0.4		
懲役3年6月	(42月)	17	5.1	17	6.5		
懲役4年	(48月)	25	7.5	25	9.6		
懲役4年6月	(54月)	14	4.2	14	5.4		
懲役4年10月	(58月)	1	0.3	1	0.4		
懲役5年	(60月)	13	3.9	13	5.0		
懲役5年6月	(66月)	5	1.5	5	1.9		
懲役6年	(72月)	10	3.0	10	3.8		
懲役6年6月	(78月)	4	1.2	4	1.5		
懲役7年	(84月)	19	5.7	19	7.3		
懲役7年6月	(90月)	2	0.6	2	0.8		
懲役8年	(96月)	13	3.9	13	5.0		
懲役8年6月	(102月)	2	0.6	2	0.8		
懲役9年	(108月)	6	1.8	6	2.3		
懲役9年6月	(114月)	1	0.3	1	0.4		
懲役9年10月	(118月)	1	0.3	1	0.4		
懲役10年	(120月)	14	4.2	14	5.4		
懲役11年	(132月)	8	2.4	8	3.1		
懲役12年	(144月)	5	1.5	5	1.9		
懲役13年	(156月)	6	1.8	6	2.3		
懲役14年	(168月)	4	1.2	4	1.5		
懲役15年	(180月)	6	1.8	6	2.3		
懲役16年	(192月)	3	0.9	3	1.2		
懲役17年	(204月)	3	0.9	3	1.2		
懲役18年	(216月)	3	0.9	3	1.2		
懲役19年	(228月)	1	0.3	1	0.4		
懲役20年	(240月)	6	1.8	6	2.3		
懲役21年	(252月)	1	0.3	1	0.4		
懲役22年	(264月)	1	0.3	1	0.4		
懲役23年	(276月)	3	0.9	3	1.2		
懲役24年	(288月)	2	0.6	2	0.8		
懲役25年	(300月)	2	0.6	2	0.8		
懲役26年	(312月)	2	0.6	2	0.8		
懲役29年	(348月)	1	0.3	1	0.4		
懲役30年	(360月)	4	1.2	4	1.5		
合 計		335	100.0	260	100.0	75	100.0
宣告刑 刑期(月換算)	平均値	81.39		96.44		29.23	
	標準偏差	72.86		76.24		8.07	
	中央値	48.00		72.00		36.00	
	最頻値	36		48		36	
	最小値	10		12		10	
		360		360		36	

図表 2 宣告刑の分布状況

3. 刑期判断基準の予測モデル式

3.1 方法

対象としたのは、335 件である。

分析は、数量化理論第Ⅰ類で行った（ソフトは、エスミ社の数量化理論 Ver.4.0 を用いた）。変数増減法を組み合わせた分析では、F 値は 2.0 に設定した。

従属変数は、月に換算した「宣告刑の刑期」である。図表 2 は、対象とした 335 件の宣告刑を刑期別に集計したものである [SA]。平均値は 81.39 月で、標準偏差は 72.86 である。中央値は 48.00 月で、最頻値は 36 月（懲役 3 年）である（最小値は 10 月（懲役 10 月）であり、

最大値は 360 月（懲役 30 年）である）。

説明変数は、上記の「（1-⑥）凶器等」を除いた 42 量刑因子（アイテム）・141 カテゴリーとした。「（1-⑥）凶器等」については、他の量刑因子（アイテム）との関係で顕著に高い相関となり、計算上不都合が生じたことから、説明変数から外した。

3.2 結果①—予測モデル式

ここでは、「変数増減法を組み合わせた数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」の結果を中心に、「変数増減法を組み合わせていない数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」の結果も参照しながら、予測モデル式について整理していきたいと思う。

3.2.1 分析の精度

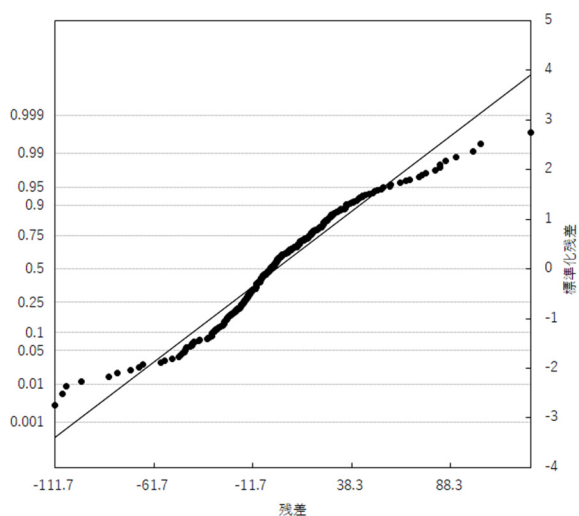
図表 3 は、数量化理論第Ⅰ類の決定係数や重相関係数などを示したものである。「変数増減法を組み合わせた数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」では、自由度修正済み決定係数は 0.785（自由度修正済み重相関係数は 0.886）で、赤池情報量規準（AIC）は 3347.896 であった。他方で、「変数増減法を組み合わせていない数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」では、自由度修正済み決定係数は 0.774（自由度修正済み重相関係数は 0.880）で、赤池情報量規準（AIC）は 3410.408 であった。モデル式の当てはまりがとても良かった。

	宣告刑 [すべて] (N=335)	宣告刑 [すべて] (N=335)
	変数増減法を 組み合わせた 数量化理論第Ⅰ類 による予測モデル式	変数増減法を組み 合わせていない 数量化理論第Ⅰ類 による予測モデル式
自由度修正済み決定係数	0.785	0.774
決定係数	0.810	0.843
自由度修正済み重相関係数	0.886	0.880
重相関係数	0.900	0.918
赤池情報量規準(AIC)	3347.896	3410.408

図表 3 決定係数／重相関係数

図表 4 は、数量化理論第Ⅰ類の正規確率（残差と標準化残差の関係）をプロットし、近似曲線（線形）を書き入れたものである [正規 Q-Q プロット]。残差に正規分布を仮定して、正規性の検証をした結果、近似曲線にほぼ直線上に並んでいることから、正規分布にほぼ従っ

ていることが確認された。



図表 4 正規 Q-Q プロット

標準化残差の範囲を $-2.0 \leq q \leq 2.0$ に設定して、その範囲から外れた事例数を確認してみると、「変数増減法を組み合わせた数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」では、標準化残差が -2.0 を下回った事例（実績値が予測値に比べて軽かった事例）は8例で、 2.0 を上回った事例（実績値が予測値に比べて重かった事例）は12例であった。他方で、「変数増減法を組み合わせていない数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」では、標準化残差が -2.0 を下回った事例は5例で、 2.0 を上回った事例は6例であった。「変数増減法を組み合わせた数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」では、外れ値事例が若干増えているものの、量刑因子（アイテム）を選別した結果であることを勘案すると、大きなズレではなく、したがって、性犯罪の刑期判断の中心となっているものと解される。

3.2.2 カテゴリースコア／レンジ／偏相関係数

「変数増減法を組み合わせた数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」では、変数増減法によって、42の量刑因子（アイテム）のなかから、16のものが選別された〔図表5〕。偏相関係数の大きさ順に行列すると、すべての性犯罪の被害者数〔「(3-①)強姦」(0.840)、「(3-③)強制わいせつ」(0.536)、「(3-②)強姦未遂」(0.506)、「(3-④)強制わいせつ未遂」(0.260)〕

と、性犯罪で犯情が最も重いものに関する致傷結果〔「(1-④)被害結果(傷害)」(0.367)〕などの犯情と、「(4-⑥)示談」(0.315)や「(4-②)累犯前科」(0.140)などの一般情状が、刑期判断の重要な要素となっていることが見て取れる。

では、選別された量刑因子（アイテム）を中心に、選別から漏れたが、「変数増減法を組み合わせていない数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」の結果から重要と思われるものもとりあげて、量刑因子（アイテム）の影響度を見ていこう。

(1) 性犯罪の犯情（性犯罪で犯情が最も重いもの）

〔図表6〕

「変数増減法を組み合わせた数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」では、性犯罪の犯情（性犯罪で犯情が最も重いもの）について、13の量刑因子（アイテム）のなかから、「(1-④)被害結果(傷害)」,「(1-⑩)被害者の落ち度」,「(1-⑪)飲酒」が選別された。

「(1-④)被害結果(傷害)」については、レンジが60.342(8位)で、偏相関係数が0.367(6位)であった〔相関比0.082, $p \leq 0.01$ 〕。＜傷害：全治不明＞(-23.387)がマイナス方向に引っ張られているが、傷害の程度に応じて、カテゴリースコアがおおむね正比例している。犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、相関比も比較的高いことから、刑期判断上、その基本的な位置づけを決める量刑因子となっているものと解される。

「(1-⑩)被害者の落ち度」については、レンジが17.633(12位)で、偏相関係数が0.112(9位)であった〔相関比0.020, $p \leq 0.01$ 〕。被害者に落ち度があると認定された場合（＜あり＞(-16.843)）には、刑期が軽減される傾向が示されている。被害者の落ち度については、相関比などから、刑期判断の基本的な位置づけに関する修正要素として影響を与えているものと解される。

「(1-⑪)飲酒」については、レンジが12.649(15位)で、偏相関係数が0.115(13位)であった〔相関比0.015, $p \leq 0.05$ 〕。被害者との飲酒状況下での犯行については、被害者の落ち度とまでは言えないものの、それに類似したものとして刑期判断に影響を与えているものと推察される。飲酒状況下での犯行は、刑期判断にある程度影響

偏相関係数 順位	宣告刑 [すべて] (N=335)				宣告刑 [すべて] (N=335)			
	変数増減法を組み合わせた 数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式				変数増減法を組み合わせない 数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式			
		偏相関係数	レンジ／順位			偏相関係数	レンジ／順位	
1位	強姦	0.840	223.767	2位	強姦	0.764	239.290	1位
2位	強制わいせつ	0.536	83.299	4位	強制わいせつ	0.517	78.302	4位
3位	強姦未遂	0.506	100.334	3位	強姦未遂	0.435	71.890	5位
4位	更生可能性	0.380	254.213	1位	被害結果(傷害)	0.391	67.480	7位
5位	被害結果(傷害)	0.367	60.342	6位	更生可能性	0.330	210.626	2位
6位	示談	0.315	38.321	8位	示談	0.318	40.779	11位
7位	強制わいせつ未遂	0.260	64.706	5位	強制わいせつ未遂	0.282	68.557	6位
8位	その他(犯行後)	0.181	25.124	10位	その他(犯行後)	0.228	29.693	17位
9位	自首	0.157	44.339	7位	被害者との関係(加害者の立場)	0.228	60.474	8位
10位	再犯可能性	0.149	29.066	9位	犯行場所	0.207	20.735	19位
11位	累犯前科	0.140	14.643	14位	再犯可能性	0.187	40.163	13位
12位	若年	0.134	14.903	13位	精神症状	0.166	113.327	3位
13位	飲酒	0.115	12.649	15位	姦淫行為	0.161	19.141	20位
14位	被害者の落ち度	0.112	17.633	12位	累犯前科	0.150	14.312	22位
15位	身元引受け更生支援体制	0.104	7.122	16位	不遇	0.144	30.635	16位
16位	高齢	0.097	22.140	11位	自首	0.136	39.025	14位
17位					組織性	0.126	46.801	9位
18位					謝罪	0.118	9.979	31位
19位					身元引受け更生支援体制	0.115	7.917	34位
20位					若年	0.113	12.067	26位
21位					心神耗弱	0.112	40.165	12位
22位					前科・前歴(少年院歴)	0.108	14.115	24位
23位					被害者感情	0.106	11.077	28位
24位					被害者の落ち度	0.103	15.289	21位
25位					服役歴	0.097	10.419	30位
26位					損害賠償	0.096	11.505	27位
27位					共犯関係	0.088	46.800	10位
28位					動機	0.085	35.316	15位
29位					逃亡・逃走	0.083	24.213	18位
30位					反省	0.082	6.371	37位
31位					真相説明の協力	0.074	13.221	25位
32位					飲酒	0.070	7.295	36位
33位					執行猶予期間中	0.047	10.477	29位
34位					高齢	0.043	9.332	32位
35位					窃盗・詐欺(犯行後)※未遂も含む	0.042	8.044	33位
36位					罪証隠滅行為	0.038	7.738	35位
37位					通報	0.037	14.213	23位
38位					薬物	0.031	6.264	38位
39位					社会的影響	0.029	3.713	39位
40位					同情の余地	0.008	2.817	40位
41位					計画性	0.001	0.069	41位
42位					その他	0.000	0.005	42位

図表 5 量刑因子(アイテム)の順位

を与えていると捉えるべきであり、「(1-⑩)被害者の落ち度」と同様に、刑期判断の基本的な位置づけに関する修正要素として影響を与えているものと解される。

では、補足的に、「変数増減法を組み合わせない数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」の結果から、刑期判断に影響があると思われる、「(1-①)被害者との関係(加害者の立場)」、「(1-③)共犯関係」、「(1-⑨)心神耗弱」を挙げて見ていこう。

「(1-①)被害者との関係」については、レンジが 60.474 (8 位) で、偏相関係数が 0.228 (9 位) であった [相関比 0.073, $p \leq 0.01$]。<教師・指導者> (22.950) など立場を利用した犯行については、刑期が加重される

傾向を示す一方で、<配偶者(内縁を含む)> (-15.134)、<交際相手> (-14.391)、<元配偶者・元交際相手> (-22.082) による犯行については、刑期が軽減される傾向が示された。被害者と加害者の関係は、刑期判断に直接関係する量刑因子(アイテム)という位置づけよりも、意識的ではない形で刑期判断に影響を与えているものと推察される(なお、この点について後ほど検証してみたいと思う)。

「(1-③)共犯関係」については、レンジが 46.800 (10 位) で、偏相関係数が 0.088 (27 位) であった [0.027, $p \leq 0.05$]。<共同正犯: 主導的立場> (4.127) は、多少のプラス方向となり、<単独犯> (-0.356) と

(1) 性犯罪の犯情 (性犯罪で犯情が最も重いもの)		宣告刑[すべて] (N=335)						宣告刑[すべて] (N=335)											
		変数増減法を組み合わせた 数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式						変数増減法を組み合わせた 数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式											
		N	カテゴリー スコア	レンジ	偏相関係数	目的変数との 相関比	N	カテゴリー スコア	レンジ	偏相関係数	目的変数との 相関比								
(1-①) 被害者との関係 (加害者の立場)	親						7	4.988	60.474	8位	0.228	9位	0.073 [**] (p=0.006)						
	配偶者(内縁を含む)						1	-15.134											
	その他の親族						2	38.392											
	交際相手						4	-14.391											
	元配偶者・元交際相手						4	-22.082											
	友人・知人						36	-5.088											
	勤務先関係						18	-1.718											
	教師・指導者						24	22.950											
	関係なし						193	-0.869											
	その他						26	-2.179											
	不明						20	-3.154											
(1-②) 姦淫行為	姦淫・既遂						162	-8.405	19.141	20位	0.161	13位	0.175 [**] (p=0.000)						
	姦淫・未遂						62	10.736											
	強制わいせつ						111	6.270											
(1-③) 共犯関係	単独犯						277	-0.356	46.800	10位	0.098	27位	0.027 [*] (p=0.030)						
	共同正犯: 主導的立場						35	4.127											
	共同正犯: 従属的立場						22	-0.143											
	幫助犯						1	-42.673											
(1-④) 被害結果(傷害)	傷害: 全治2週間以内	146	11.886	60.342	6位	0.367	5位	0.082 [**] (p=0.000)	146	12.971	67.480	7位	0.391	4位	0.082 [**] (p=0.000)				
	傷害: 全治1か月以内	9	18.535						9	16.804									
	傷害: 全治3か月以内	3	33.922						3	40.266									
	傷害: 全治6か月以内	3	36.956						3	20.631									
	傷害: 全治不明	8	-23.387						8	-27.214									
	なし	166	-11.612						166	-12.108									
	男女関係																9	-2.578	35.316
自己保身・発覚のおそれ						3	-4.937												
わいせつ目的						312	-0.200												
背景なし・不明						9	4.406												
その他						2	30.379												
(1-⑦) 犯行場所	被告人住居内							38	1.348	20.735	19位	0.207	10位	0.071 [**] (p=0.002)					
	被害者住居内							56	8.320										
	公共施設内							12	4.519										
	宿泊施設内							30	2.679										
	店舗・事務所等							22	-9.472										
	その他屋内							25	-7.086										
	乗り物内							55	-4.595										
	路上・駐車場							60	4.842										
	その他屋外							28	-12.414										
	うつ病							1	-1.266						113.327	3位	0.166	12位	0.003 [] (p=0.954)
	発達障害							1	-31.954										
パーソナリティ障害							1	-46.518											
統合失調症							2	66.809											
その他の精神症状							4	12.763											
(1-⑧) 心神耗弱	あり							326	-0.322	40.165	12位	0.112	21位	0.005 [] (p=0.220)					
	なし							3	-39.806										
								332	0.360										
(1-⑩) 被害者の落ち度	あり	15	-16.843	17.633	12位	0.112	14位	0.020 [**] (p=0.010)	15	-14.605	15.289	21位	0.103	24位	0.020 [**] (p=0.010)				
	なし	320	0.790						320	0.685									
(1-⑪) 飲酒	あり	33	-11.403	12.649	15位	0.115	13位	0.015 [*] (p=0.025)	33	-6.576	7.295	36位	0.070	32位	0.015 [*] (p=0.025)				
	なし	302	1.246						302	0.719									
(1-⑫) 薬物	あり								9	-6.096	6.264	38位	0.031	38位	0.002 [] (p=0.390)				
	なし								326	0.168									
(1-⑬) 計画性	あり								77	0.053	0.069	41位	0.001	41位	0.074 [**] (p=0.000)				
	なし								258	-0.016									
(1-⑭) 組織性	あり: 対一般市民								3	29.516	46.801	9位	0.126	17位	0.007 [] (p=0.338)				
	あり: 対組織メンバー								9	-17.286									
	なし								323	0.207									

注 該当のないカテゴリーについて計算の過程で除外することになるため、本表には掲載していない。

[*] p≦0.05 [**] p≦0.01

[注] 該当のないカテゴリーについて計算の過程で除外することになるため、本表には掲載していない。

[*] $p \leq 0.05$ [**] $p \leq 0.01$

図表6 【性犯罪の犯情（性犯罪で犯情が最も重いもの）】のカテゴリースコア／レンジ／偏相関係数

のレンジは 4.483 であった。集団強姦罪については、性刑法が 2017 年に抜本的に改正される前まで、強姦罪の法定刑の下限よりも 1 年加重されていたが、宣告刑のレベルで見る限り、4 月程度の差ということになる。＜幫助犯＞ (-42.673) は、刑期が軽減される傾向を示している。現状は該当例が 1 例であるので、さらなる検証が必要と思うが、幫助犯などについては、刑期判断上、刑期判断の基本的な位置づけに関する修正要素として影響を与えているものと推察される。

「(1-⑨) 心神耗弱」については、レンジが 40.165 (12 位) で、偏相関係数が 0.112 (21 位) であった [相関比 0.005]。＜あり＞ (-39.806) がマイナス方向を示

したが、刑法 39 条 2 項が必要的軽減規定であることから、その結果が示されているものと解される。したがって、刑期判断上、刑期判断の基本的な位置づけに関する修正要素として影響を与えているものと推察されるものの、ただ、本分析では該当事例がわずか 3 例であったことから、今後サンプルをさらに増やして検証する必要があるだろう。

(2) 犯行後の行為 [図表 7]

「変数増減法を組み合わせた数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」では、犯行後の行為について、4 つの量刑因子 (アイテム) のなかから、「(2-④) その他犯行後

(2) 犯行後の行為	カテゴリー	宣告刑[すべて] (N=335)						宣告刑[すべて] (N=335)					
		変数増減法を組み合わせた 数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式						変数増減法を組み合わせない 数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式					
		N	カテゴリー スコア	レンジ	偏相関係数	目的変数と の相関比		N	カテゴリー スコア	レンジ	偏相関係数	目的変数と の相関比	
(2-①) 罪証隠蔽行為	あり							8	-7.553	7.738	35位	0.038	36位
	なし							327	0.185				0.003 [] (p=0.339)
(2-②) 窃盗・詐欺(未遂も含む)	あり							10	7.804	8.044	33位	0.042	35位
	なし							325	-0.240				0.033 [**] (p=0.001)
(2-③) 逃亡・逃走	あり							4	-23.824	24.213	18位	0.083	29位
	なし							331	0.289				0.001 [] (p=0.612)
(2-④) その他犯行後の行為	あり	20	23.624	25.124	0.181	8位	0.007 [] (p=0.116)	20	27.920	29.693	17位	0.228	8位
	なし	315	-1.500					315	-1.773				0.007 [] (p=0.116)

注) 該当のないカテゴリーについて計算の過程で除外することになるため、本表には掲載していない。

[*] $p \leq 0.05$ [**] $p \leq 0.01$

図表 7 【犯行後の行為】のカテゴリースコア／レンジ／偏相関係数

の行為」が選別された。

「(2-④) その他犯行後の行為」については、レンジが 25.124 (10 位) で、偏相関係数が 0.181 (8 位) であった [相関比 0.007]。犯行後の行為については、内容にもよるが、それが認定された場合 (<あり> (23.624)) には、刑期判断の基本的な位置づけに関する修正要素として、刑期を加重する傾向があるものと解される。

では、補足的に、「変数増減法を組み合わせていない数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」の結果から、刑期判断に影響があると思われる、「(2-②) 窃盗・詐欺(未遂も含む)」を挙げて見ていこう。

「(2-②) 窃盗・詐欺(未遂も含む)」については、レンジが 8.044 (33 位) であり、偏相関係数が 0.042 (35 位) であった [相関比 0.033, $p \leq 0.01$]。犯行後に窃盗などが行われた場合 (<あり> (7.804)) には、刑期判断の基本的な位置づけに関する修正要素として、刑期を加重する傾向があるものと解される。

(3) すべての性犯罪の被害者数 [図表 7]

「変数増減法を組み合わせた数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」では、すべての性犯罪の被害者数について、すべての量刑因子 (アイテム) が選別された。

「(3-①) 強姦」については、レンジが 223.767 (2 位) であり、偏相関係数が 0.840 (1 位) であった [相関比 0.547, $p \leq 0.01$]。<4 名> (70.517) のカテゴリースコアについては、多少留意して解釈する必要があるものの、基本的には、被害者人数が増えるにつれてカテゴリースコアが正比例している。レンジ、偏相関係数はいずれも高く、説明変数との関係で相関比も最も高いことから、刑期判断上、その基本的な位置づけを決める量刑因子

(アイテム) となっているものと解される。

「(3-②) 強姦未遂」については、レンジが 100.334 (3 位) であり、偏相関係数が 0.506 (3 位) であった [相関比 0.254, $p \leq 0.01$]。<4 名> (46.063)、<5 名以上> (5.283) のカテゴリースコアについては、多少留意して解釈する必要があるものの、基本的には、被害者の人数が増えるにつれてカテゴリースコアが正比例している。レンジ、偏相関係数はいずれも高く、説明変数との関係で相関比も最も高いことから、刑期判断上、その基本的な位置づけを決める量刑因子 (アイテム) となっているものと解される。

「(3-③) 強制わいせつ」については、レンジが 83.299 (4 位) で、偏相関係数が 0.536 (2 位) であった [相関比 0.126, $p \leq 0.01$]。各カテゴリーは、人数が増えるにつれて、そのスコアがおおむね正比例している。レンジ、偏相関係数はいずれも高く、説明変数との関係で相関比も最も高いことから、刑期判断上、その基本的な位置づけを決める量刑因子 (アイテム) となっているものと解される。

「(3-④) 強制わいせつ未遂」については、レンジが 64.706 (5 位) であり、偏相関係数が 0.260 (7 位) であった [相関比 0.030, $p \leq 0.05$]。<1 名> (28.917) がプラス方向に強く引っ張られ、<2 名> (-35.789) がマイナス方向に強く引っ張られる形になった。「(3-①) 強姦」、「(3-②) 強姦未遂」、「(3-③) 強制わいせつ」の被害者数に影響を受けた結果であると推察される。

「(3-④) 強制わいせつ未遂」は、相関比などを見ても、刑期判断上、さほど大きな影響を与えるものではないが、だが、「(3-①) 強姦」、「(3-②) 強姦未遂」、「(3-③) 強制わいせつ」の被害者数に準じる形であるが、そ

(3) すべての性犯罪の被害者数	宣告刑[すべて] (N=335)							宣告刑[すべて] (N=335)							
	変数増減法を組み合わせた 数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式							変数増減法を組み合わせない 数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式							
	N	カテゴリー スコア	レンジ	偏相関係数		目的変数との 相関比	N	カテゴリー スコア	レンジ	偏相関係数		目的変数との 相関比			
(3-①) 強姦	1名	120	9.134	223.767	2位	0.840	1位	0.547 [**] (p=0.000)	120	14.990	239.290	1位	0.764	1位	0.547 [**] (p=0.000)
	2名	24	56.513					24	71.099						
	3名	13	122.224					13	132.068						
	4名	5	70.517					5	84.413						
	5名以上	10	185.434					10	192.833						
	なし	163	-38.333					163	-46.457						
(3-②) 強姦未遂	1名	61	18.143	100.334	3位	0.506	3位	0.254 [**] (p=0.000)	61	18.827	71.890	5位	0.435	3位	0.254 [**] (p=0.000)
	2名	18	59.758					18	53.733						
	3名	3	89.948					3	62.265						
	4名	2	46.063					2	19.569						
	5名以上	4	5.283					4	8.959						
	なし	247	-10.387					247	-9.625						
(3-③) 強制わいせつ	1名	98	5.298	83.299	4位	0.536	2位	0.126 [**] (p=0.000)	98	4.904	78.302	4位	0.517	2位	0.126 [**] (p=0.000)
	2名	14	14.835					14	16.089						
	3名	9	32.959					9	33.844						
	4名	4	18.414					4	18.271						
	5名以上	22	69.348					22	64.940						
	なし	188	-13.951					188	-13.363						
(3-④) 強制わいせつ未遂	1名	23	28.917	64.706	5位	0.260	7位	0.030 [*] (p=0.018)	23	30.035	68.557	6位	0.282	7位	0.030 [*] (p=0.018)
	2名	5	-35.789					5	-38.521						
	3名以上	3	1.654					3	0.750						
	なし	304	-1.615					304	-1.646						

注) 該当のないカテゴリーについて計算の過程で除外することになるため、本表には掲載していない。

[*] $p \leq 0.05$ [**] $p \leq 0.01$

図表 8 【すべての性犯罪の被害者数】のカテゴリースコア／レンジ／偏相関係数

の基本的な位置づけを決める量刑因子（アイテム）であると解される。

(4) 一般情状 [図表 9]

「変数増減法を組み合わせた数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」では、性犯罪の犯情（性犯罪で犯情が最も重いもの）について、21 の量刑因子（アイテム）のなかから、「(4-②) 累犯前科」，「(4-⑥) 示談」，「(4-⑨) 自首」，「(4-⑪) 再犯可能性」，「(4-⑫) 更生可能性」，「(4-⑬) 高齢」，「(4-⑭) 若年」，「(4-⑰) 身元引受け・更生支援体制」が選別された。

「(4-②) 累犯前科」については、レンジが 14.643 (26 位) で、偏相関係数が 0.140 (11 位) であった [相関比 0.068, $p \leq 0.01$]。累犯前科がある場合 (<あり> (11.438)) には、処断刑の範囲だけでなく、宣告刑の判断にも影響しているものと解される。これは、刑法 57 条が必要的加重規定となっていることによるものであろう。

「(4-⑥) 示談」については、レンジが 38.321 (8 位) で、偏相関係数が 0.315 (6 位) であった [相関比 0.087, $p \leq 0.01$]。<全部成立> (-12.052)，<一部成立> (-30.725) は、刑期が軽減される傾向を示している。示談の成否は、刑期判断の基本的な位置づけに関する修正要素として影響を与えていると解される。

「(4-⑨) 自首」については、レンジが 44.339 (7 位) で、偏相関係数が 0.157 (7 位) であった [相関比 0.052, $p \leq 0.01$]。自首は裁量の減輕事由（刑法 42 条）であるが、刑期判断に関して言えば、必ずしも被告人に有利な方向に働いていないと解される。

「(4-⑪) 再犯可能性」については、レンジが 29.066 (9 位) で、偏相関係数が 0.149 (10 位) であった [相関比 0.021, $p \leq 0.05$]。再犯可能性が高いと認定された場合 (<あり (高い) > (10.795)) には、刑期が加重される傾向を示し、低いと認定された場合 (<なし (低い) > (-18.271)) には、刑期が軽減される傾向を示した。再犯可能性の高低は、刑期判断の基本的な位置づけに関する修正要素として影響を与えていると解される。

「(4-⑫) 更生可能性」については、レンジが 254.213 (1 位) で、偏相関係数が 0.380 (4 位) であった [相関比 0.001]。<なし (低い) > (-252.379) が大幅にマイナス方向に引っ張られる形になった。該当事例が 1 例であったため、外れ値（異常値）として検出し、事例確認を行った。その結果、当該事例 (LEX/DB 28115130) は少年事件であったことから、この結果につながったものと推測される。説明変数との関係で相関比を見ても、刑期の判断に関する影響はほとんどないと解される。したがって、現状では、更生可能性については、再犯可能性の低さを裏づけるために挙げられる要素として捉えるべきであろう。

(4) 一般情状	宣告刑[すべて] (N=335)							宣告刑[すべて] (N=335)							
	変数増減法を組み合わせた 数量化理論第Ⅰ 類による予測モデル式							変数増減法を組み合わせた 数量化理論第Ⅰ 類による予測モデル式							
	カテゴリー	N	カテゴリー スコア	レンジ	偏相関係数		目的変数との 相関比	N	カテゴリー スコア	レンジ	偏相関係数		目的変数との 相関比		
(4-①) 前科・前歴 (少年院歴)	あり(同種事案含まず)							49	-8.315	14.115	24位	0.108	22位	0.017 [] (p=0.134)	
	あり(同種事案含む)							48	-1.460						
	なし							160	0.156						
	言及なし							78	5.801						
(4-②) 累犯前科	あり	35	11.438	14.643	14位	0.140	11位	0.068 [**] (p=0.000)	35	10.889	14.312	22位	0.150	14位	0.068 [**] (p=0.000)
	なし	223	-3.204					223	-3.424						
	言及なし	77	4.080					77	4.966						
	あり							43	4.541	10.419	30位	0.097	25位	0.038 [**] (p=0.001)	
(4-③) 服役歴	なし							199	1.765						
	言及なし							93	-5.877						
	あり							196	2.208	6.371	37位	0.082	30位	0.014 [] (p=0.099)	
	なし							79	-2.317						
(4-④) 反省	言及なし							60	-4.193						
	あり							88	0.256	9.979	31位	0.118	18位	0.041 [**] (p=0.001)	
	なし							76	6.817						
	言及なし							171	-3.182						
(4-⑤) 示談	全部成立	59	-12.052	38.321	8位	0.315	6位	0.087 [**] (p=0.000)	59	-8.972	40.779	11位	0.318	6位	0.087 [**] (p=0.000)
	一部成立	23	-30.725					23	-33.552						
	未成立	58	-1.095					58	-1.888						
	言及なし	195	7.596					195	7.228						
(4-⑦) 損害賠償	全部済み							35	-5.636	11.505	27位	0.096	26位	0.044 [**] (p=0.005)	
	一部済み							36	-2.896						
	意思あり							35	5.868						
	なし							34	-2.707						
(4-⑧) 被害者感情	言及なし							195	0.965						
	宥恕							22	-4.664	11.077	28位	0.106	23位	0.030 [*] (p=0.017)	
	一部宥恕							10	-1.817						
	処罰							228	-1.580						
(4-⑨) 自首	言及なし							75	6.413						
	あり	5	43.678	44.339	7位	0.157	9位	0.052 [**] (p=0.000)	5	38.443	39.025	14位	0.136	16位	0.052 [**] (p=0.000)
	言及なし	330	-0.662					330	-0.582						
	あり							2	-14.128	14.213	23位	0.037	37位	0.004 [] (p=0.265)	
(4-⑩) 通報	言及なし							333	0.095						
	あり(高い)	48	10.795	29.066	9位	0.149	10位	0.021 [*] (p=0.030)	48	11.068	40.163	13位	0.187	11位	0.021 [*] (p=0.030)
	なし(低い)	7	-18.271					7	-29.095						
	言及なし	280	-1.394					280	-1.170						
(4-⑪) 更生可能性	あり(高い)	30	1.834	254.213	1位	0.380	4位	0.001 [] (p=0.815)	30	-1.761	210.626	2位	0.330	5位	0.001 [] (p=0.815)
	なし(低い)	1	-252.379					1	-209.762						
	言及なし	304	0.649					304	0.864						
	あり	7	21.677	22.140	11位	0.097	16位	0.005 [] (p=0.201)	7	9.137	9.332	32位	0.043	34位	0.005 [] (p=0.201)
(4-⑫) 高齢	言及なし	328	-0.463					328	-0.195						
	あり	32	-13.480	14.903	13位	0.134	12位	0.018 [*] (p=0.013)	32	-10.915	12.067	26位	0.113	20位	0.018 [*] (p=0.013)
	言及なし	303	1.424					303	1.153						
	あり							11	12.787	13.221	25位	0.074	31位	0.034 [**] (p=0.001)	
(4-⑬) 真相解明の協力	言及なし							324	-0.434						
	あり							23	3.458	3.713	39位	0.029	39位	0.002 [] (p=0.378)	
	社会的影響							312	-0.255						
	言及なし							3	-2.792	2.817	40位	0.008	40位	0.000 [] (p=0.885)	
(4-⑭) 同様の余地	あり							332	0.025						
	言及なし							9	-29.812	30.635	16位	0.144	15位	0.006 [] (p=0.149)	
	あり							326	0.823						
	言及なし							7	10.258	10.477	29位	0.047	33位	0.001 [] (p=0.550)	
(4-⑮) 執行猶予期間中	期間中							328	-0.219						
	なし							97	0.004	0.005	42位	0.000	42位	0.037 [**] (p=0.000)	
	あり							238	-0.001						
	言及なし														

注) 該当のないカテゴリーについて計算の過程で除外することになるため、本表には掲載していない。

[*] p≦0.05 [**] p≦0.01

注) 該当のないカテゴリーについて計算の過程で除外することになるため、本表には掲載していない。

[*] $p \leq 0.05$ [**] $p \leq 0.01$

図表 9 【一般犯情】のカテゴリースコア／レンジ／偏相関係数

「(4-⑬) 高齢」については、レンジが 22.140 (11 位) で、偏相関係数が 0.097 (16 位) であった [相関比 0.005]。偏相関係数や相関比を見る限り、性犯罪の刑期判断においては直接的に影響を与えていないと解される。

「(4-⑭) 若年」については、レンジが 14.903 (13 位) で、偏相関係数が 0.134 (12 位) であった [相関比 0.018, $p \leq 0.05$]。被告人に有利な量刑事由として、若年であることが挙げられている場合には、「(4-⑥) 示談」, 「(4-⑩) 再犯可能性」などと同様に、刑期判断の基本的な位置づけに関する修正要素として影響を与えていると解される。

「(4-⑮) 身元引受け・更生支援体制」については、

レンジが 7.122 (16 位) で、偏相関係数が 0.104 (15 位) であった [相関比 0.000]。身元引受け・更生支援体制の有無は、非常に限定的な形ではあるが、刑期判断の基本的な位置づけに関する修正要素として影響を与えていると解される。

3.2.3 小括①

以上の結果について、量刑実務に沿った量刑判断モデル(「行為責任の原則から、まず犯情の評価を基に、当該犯罪行為にふさわしい刑の大枠を設定し、更にその枠内で、被告人に固有の事情等の一般情状に関する事情を考慮して調整した上、最終的な刑を決定する」というモ

デル 17)・18)) に基づいて整理すると、以下のようになる。

①すべての被害者数〔「(3-①) 強姦」, 「(3-②) 強姦未遂」, 「(3-③) 強制わいせつ」, 「(3-④) 強制わいせつ未遂」〕と, 犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度〔「(1-④) 被害結果(傷害)」〕によって, 刑期の基本的位置づけが決定している。

②性犯罪で犯情が最も重い犯行に関する, 「(1-③) 共犯関係」, 「(1-⑨) 心神耗弱」, 「(1-⑩) 被害者の落ち度」, 「(1-⑪) 飲酒」, 「(2-②) 窃盗・詐欺(未遂も含む)」, 「(2-④) その他犯行後の行為」などが, ①の犯情で決定した基本的な位置づけに対する修正的な要素として影響を与えて, 刑期の枠を決定している。

③そして, 「(4-②) 累犯前科」, 「(4-⑥) 示談」, 「(4-⑪) 再犯可能性」, 「(4-⑫) 更生可能性」, 「(4-⑭) 若年」, 「(4-⑲) 身元引受け・更生支援体制」が, 一般情状として, 上記①及び②の犯情要素で決定した刑期の大枠に対する修正要素として影響を与えるとともに, また, 限定的ながら, 不遇(4-⑱), 身元引受け・更生支援体制(4-⑲)も, 同様の影響を与えている。

また, 「変数増減法を組み合わせしていない数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」の結果から補足すると, 「(1-③) 共犯関係」, 「(1-⑨) 心神耗弱」が, 犯情で決定した基本的な位置づけに対する修正的な要素(上記②)として影響を与えてものと解される。

3.3 結果②—予測モデル式の比較

では, 上記3.2の結果(対象: 335例)について, より最適な予測モデル式が立てられるかを検証するため, 実刑の事例(260例)に限定した「変数増減法を組み合わせた数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」の結果〔予測モデル式②〕と, 求刑が判明している事例(285例)を対象とした同予測モデル式の結果〔予測モデル式③〕を対比して見ていきたいと思う。

予測モデル式①: 宣告刑〔すべて〕(N=335)

予測モデル式②: 宣告刑〔実刑のみ〕(N=260)

予測モデル式③: 宣告刑〔求刑判明分のみ〕
(N=285)

3.3.1 分析の精度

図表10は, 予測モデル式①～③の数量化理論第Ⅰ類の決定係数や重相関係数などを示したものである。予測モデル式②では, 自由度修正済み決定係数は0.757(自由度修正済み重相関係数は0.870)で, 赤池情報量規準(AIC)は2661.803であった。予測モデル式③では, 自由度修正済み決定係数は0.830(自由度修正済み重相関係数は0.911)で, 赤池情報量規準(AIC)は2795.281であった。3つのモデルのなかでは, 予測モデル式③の当てはまりがとても良かった。

	モデル①: 宣告刑 〔すべて〕 (N=335)	モデル②: 宣告刑 〔実刑のみ〕 (N=260)	モデル③: 宣告刑 〔求刑判明分のみ〕 (N=285)
	変数増減法を 組み合わせた 数量化理論第Ⅰ類 による予測モデル式	変数増減法を 組み合わせた 数量化理論第Ⅰ類 による予測モデル式	変数増減法を 組み合わせた 数量化理論第Ⅰ類 による予測モデル式
自由度修正済み決定係数	0.785	0.757	0.830
決定係数	0.810	0.792	0.855
自由度修正済み重相関係数	0.886	0.870	0.911
重相関係数	0.900	0.890	0.925
赤池情報量規準(AIC)	3347.896	2661.803	2795.281

図表10 決定係数／重相関係数

3.3.2 カテゴリースコア／レンジ／偏相関係数

図表11は, 予測モデル式①～③の偏相関係数の大きさ順に行列したものである。まず共通項としては, いずれの予測モデル式においても, すべての性犯罪の被害者数〔「(3-①) 強姦」, 「(3-③) 強制わいせつ」, 「(3-②) 強姦未遂」, 「(3-④) 強制わいせつ未遂」〕と, 性犯罪で犯情が最も重いものに関する致傷結果〔「(1-④) 被害結果(傷害)」〕などの犯情と, 「(4-⑥) 示談」などの一般情状が, 刑期判断の重要な要素となっていることである。

だが他方で, 一般情状を中心に多少の相違もあるので, 項目別に見ていこう。

偏相関係数 順位	予測モデル式①: 宣告刑[すべて] (N=335)				予測モデル式②: 宣告刑[実刑のみ] (N=260)				予測モデル式③: 宣告刑[求刑判明分のみ] (N=285)			
	変数増減法を組み合わせた 数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式				変数増減法を組み合わせた 数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式				変数増減法を組み合わせた 数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式			
	偏相関係数		レンジ／順位		偏相関係数		レンジ／順位		偏相関係数		レンジ／順位	
1位	強姦	0.840	223.767	2位	強姦	0.781	251.592	2位	強姦	0.861	219.194	2位
2位	強制わいせつ	0.536	83.299	4位	強制わいせつ	0.538	82.003	3位	強制わいせつ	0.634	85.693	4位
3位	強姦未遂	0.506	100.334	3位	更生可能性	0.390	253.591	1位	強姦未遂	0.599	129.490	3位
4位	更生可能性	0.380	254.213	1位	被害結果(傷害)	0.379	66.288	5位	更生可能性	0.481	277.229	1位
5位	被害結果(傷害)	0.367	60.342	6位	強姦未遂	0.369	63.255	6位	被害結果(傷害)	0.389	49.472	6位
6位	示談	0.315	38.321	8位	示談	0.315	38.885	7位	示談	0.385	44.238	7位
7位	強制わいせつ未遂	0.260	64.706	5位	強制わいせつ未遂	0.265	69.894	4位	強制わいせつ未遂	0.291	59.862	5位
8位	その他(犯行後)	0.181	25.124	10位	姦淫行為	0.263	37.677	9位	その他(犯行後)	0.233	26.981	11位
9位	自首	0.157	44.339	7位	その他(犯行後)	0.207	28.424	12位	再犯可能性	0.196	31.233	10位
10位	再犯可能性	0.149	29.066	9位	若年	0.186	25.608	13位	飲酒	0.196	19.636	14位
11位	累犯前科	0.140	14.643	14位	身元引受け 更生支援体制	0.170	12.677	16位	謝罪	0.187	12.065	16位
12位	若年	0.134	14.903	13位	真相解明の協力	0.150	29.178	11位	累犯前科	0.176	16.150	15位
13位	飲酒	0.115	12.649	15位	自首	0.131	38.765	8位	薬物	0.172	36.275	9位
14位	被害者の落ち度	0.112	17.633	12位	被害者の落ち度	0.129	30.627	10位	身元引受け 更生支援体制	0.164	10.249	17位
15位	身元引受け 更生支援体制	0.104	7.122	16位	飲酒	0.116	14.370	15位	逃亡・逃走	0.127	40.012	8位
16位	高齢	0.097	22.140	11位	窃盗・詐欺(犯行後) ※未遂も含む	0.105	23.182	14位	窃盗・詐欺(犯行後) ※未遂も含む	0.126	21.658	13位

注 モデル②では、「心神耗弱」の該当事例がなかったので説明変数から外した。

図表 11 量刑因子（アイテム）の順位

(1) 性犯罪の犯情（性犯罪で犯情が最も重いもの）〔図表 12〕

予測モデル式①～③では、「(1-④)被害結果(傷害)」、「(1-⑩)飲酒」が共通して選別されたが、「(1-②)姦淫行為」、「(1-⑩)被害者の落ち度」、「(1-⑫)薬物」については相違があった。

「(1-②)姦淫行為」については、予測モデル式②において、レンジが 37.677 (9 位) で、偏相関係数が 0.263 (8 位) であった〔相関比 0.101, $p \leq 0.01$ 〕。＜姦淫・既遂＞(-10.609) がマイナス方向に、＜姦淫・未遂＞(27.068) と＜強制わいせつ＞(8.055) がプラス方向に引っ張られる形となった。これは、後に見る【(3)すべての性犯罪の被害者数】が刑期判断上強く影響しているためと考えられる。よって、性犯罪で犯情が最も重い事例に関し、既遂であるか未遂であるかは、刑期判断にあまり影響を与えていないのではないかと推察される。

「(1-⑩)被害者の落ち度」については、予測モデル式①において、レンジが 17.633 (12 位) で、偏相関係数が 0.112 (9 位) であった〔相関比 0.020, $p \leq 0.01$ 〕。また、予測モデル式②において、レンジが 30.627 (10 位)

で、偏相関係数が 0.129 (14 位) であった〔相関比 0.010〕。ちなみに、求刑が判明している事例 (285 例) を対象とした「変数増減法を組み合わせていない数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」では、レンジが 6.074 (34 位) で、偏相関係数が 0.040 (34 位) であった〔相関比 0.014, $p \leq 0.05$ 〕。これらの結果を見る限り、被害者に落ち度があると認定された場合(＜あり＞)には、刑期が多少軽減される傾向があり、したがって、被害者の落ち度については、刑期判断の基本的な位置づけに関する修正要素として影響を与えているものと解される。

「(1-⑫)薬物」については、予測モデル式③において、レンジが 36.275 (9 位) で、偏相関係数が 0.172 (13 位) であった〔相関比 0.006〕。上記 3-2 での「変数増減法を組み合わせていない数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」の結果(レンジ: 6.264 (38 位), 偏相関係数: 0.031 (38 位)〔相関比 0.002〕)をあわせて考えたとしても、犯行に薬物が使用された否かは、レンジや偏相関係数を見る限り、刑期判断上、ほとんど影響を与えていないであろう。

(1) 性犯罪の犯情 (性犯罪で犯情が最も重いもの)		予測モデル式①: 宣告刑[すべて] (N=335)					予測モデル式②: 宣告刑[実刑のみ] (N=260)					予測モデル式③: 宣告刑[求刑判明分のみ] (N=285)					
		変数増減法を組み合わせた 数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式					変数増減法を組み合わせた 数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式					変数増減法を組み合わせた 数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式					
		N	カテゴリー スコア	レンジ	偏相関係数	目的変数との 相関比	N	カテゴリー スコア	レンジ	偏相関係数	目的変数との 相関比	N	カテゴリー スコア	レンジ	偏相関係数	目的変数との 相関比	
(1-①) 被害者との関係 (加害者の立場)	親																
	配偶者(内縁を含む)																
	その他の親族																
	交際相手																
	元配偶者・元交際相手																
	友人・知人																
	勤務先関係																
	教師・指導者																
	関係なし																
	その他																
(1-②) 姦淫行為	姦淫・姦淫						155	-10.609	37.677	9位	0.263	8位	0.101 [**] (p=0.000)				
	姦淫・手淫						42	27.068									
	強制わいせつ						63	8.058									
(1-③) 共犯関係	単独犯																
	共同正犯: 主導的立場																
	共同正犯: 従属的立場																
(1-④) 被害結果(傷害)	傷害: 全治1週間以内	146	11.888	60.342	6位	0.367	5位	0.082 [**] (p=0.000)	118	12.729	66.288	5位	0.379	4位	0.073 [**] (p=0.002)	126	10.577
	傷害: 全治1か月以内	9	18.535					8	18.278				8	20.101			
	傷害: 全治2か月以内	3	33.822					2	37.354				3	33.479			
	傷害: 全治3か月以内	3	36.956					3	33.675				3	37.114			
	傷害: 全治不明	8	-23.387					8	-28.934				5	4.982			
	なし	166	-11.612					121	-13.168				140	-12.358			
(1-⑤) 動機	男女関係																
	自己保身・発露のおそれ																
	わいせつ目的																
	被害なし・不明																
	その他																
	被害者住居内																
(1-⑥) 犯行場所	被害者住居内																
	公共施設内																
	商店施設内																
	店舗・事務所等																
	その他屋外																
	車内・駐車場																
(1-⑦) 精神症状	うつ病																
	発達障害																
	パーソナリティ障害																
	統合失調症																
	その他の精神症状																
	なし																
(1-⑧) 心神耗弱	あり																
	なし																
	あり	15	-16.843	17.633	12位	0.112	14位	0.020 [**] (p=0.010)	6	-29.920	30.627	10位	0.129	14位	0.010 [] (p=0.106)		
(1-⑨) 被害者の落ち度	なし	320	0.790					254	0.707								
	あり	33	-11.403	12.649	15位	0.115	13位	0.015 [**] (p=0.023)	24	-13.044	14.370	15位	0.116	15位	0.018 [**] (p=0.028)	28	-17.707
	飲酒	302	1.246					236	1.326						257	1.929	
(1-⑩) 薬物	あり														7	-35.384	
	なし														278	0.891	
	あり																
(1-⑪) 計画性	あり																
	なし																
	あり: 対一般市民																
(1-⑫) 組織性	あり: 対組織メンバー																
	なし																

注)該当のなりカテゴリーについて計算の過程で除外することになるため、本表には掲載していません。

[*]p<0.05 [**]p<0.01

注) 該当のないカテゴリーについて計算の過程で除外することになるため、本表には掲載していない。

[*] $p \leq 0.05$ [***] $p \leq 0.01$

図表 12 【性犯罪の犯情（性犯罪で犯情が最も重いもの）】のカテゴリースコア／レンジ／偏相関係数

(2) 犯行後の行為		予測モデル式①: 宣告刑[すべて] (N=335)							予測モデル式②: 宣告刑[実刑のみ] (N=260)							予測モデル式③: 宣告刑[求刑判明分のみ] (N=285)																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
		変数増減法を組み合わせた 数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式							変数増減法を組み合わせた 数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式							変数増減法を組み合わせた 数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
		N	カテゴリー スコア	レンジ	偏相関係数	目的変数との 相関比	N	カテゴリー スコア	レンジ	偏相関係数	目的変数との 相関比	N	カテゴリー スコア	レンジ	偏相関係数	目的変数との 相関比																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
(2-①) 罪証隠滅行為	あり																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									

注) 該当のないカテゴリーについて計算の過程で除外することになるため、本表には掲載していない。

図表 13 【犯行後の行為】のカテゴリースコア／レンジ／偏相関係数

(2) 犯行後の行為 [図表 13]

予測モデル式①～③では、「(2-④) その他犯行後の行為」が共通して選別されたが、「(2-②) 窃盗・詐欺(未遂も含む)」, 「(2-③) 逃亡・逃走」については相違があった。

「(2-②) 窃盗・詐欺(未遂も含む)」については、予測モデル式②において、レンジが 23.182 (14 位) で、偏相関係数が 0.105 (16 位) であった [相関比 0.045, $p \leq 0.01$]

。また、予測モデル式③において、レンジが 21.658 (13 位) で、偏相関係数が 0.126 (16 位) であった [相関比 0.042, $p \leq 0.01$]。上記 3-2 での「変数増減法を組み合わせていない数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」の結果(レンジ: 8.044 (33 位), 偏相関係数: 0.042 (35 位) [相関比 0.033, $p \leq 0.01$])をあわせて考えると、犯行後に窃盗などが行われた場合(<あり>)には、刑期判断の基本的な位置づけに関する修正要素と

(3) すべての性犯罪の被害者数	予測モデル式①: 宣告刑[すべて] (N=335)										予測モデル式②: 宣告刑[実刑のみ] (N=260)										予測モデル式③: 宣告刑[求刑明分のみ] (N=285)									
	変数増減法を組み合わせた 数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式										変数増減法を組み合わせた 数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式										変数増減法を組み合わせた 数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式									
	カテゴリー	N	カテゴリー スコア	レンジ	偏相関係数	目的変数との 相関比	N	カテゴリー スコア	レンジ	偏相関係数	目的変数との 相関比	N	カテゴリー スコア	レンジ	偏相関係数	目的変数との 相関比														
(3-①) 強姦	1名	120	9.134	223.767	2位	0.840	1位	110	9.096	251.592	2位	0.781	1位	103	9.298	219.194	2位	0.861	1位	0.581 [**] (p=0.000)										
	2名	24	56.513					24	56.240					19	81.381															
	3名	13	122.224					13	127.815					10	122.397															
	4名	5	70.917					5	72.792					3	83.435															
	5名以上	10	185.404					10	187.779					8	189.895															
	なし	163	-38.333					98	-63.813					142	-38.209															
(3-②) 強姦未遂	1名	61	18.143	100.334	3位	0.506	3位	44	8.042	63.255	6位	0.369	5位	0.239 [**] (p=0.000)	50	18.172	129.490	3位	0.599	3位	0.249 [**] (p=0.000)									
	2名	18	59.758					18	55.282					14	80.600															
	3名	3	89.948					3	40.946					3	82.190															
	4名	2	46.083					2	28.713					2	26.542															
	5名以上	4	5.280					4	-5.580					2	-47.500															
	なし	247	-10.387					189	-7.973					214	-10.477															
(3-③) 強制わいせつ	1名	98	5.298	83.299	4位	0.536	2位	0.126 [**] (p=0.000)	55	7.908	82.003	3位	0.538	2位	0.086 [**] (p=0.000)	87	5.675	85.693	4位	0.634	2位	0.124 [**] (p=0.000)								
	2名	14	14.835					11	21.251	12					21.040															
	3名	9	32.859					8	32.339	8					38.733															
	4名	4	18.414					4	20.322	2					32.840															
	5名以上	22	69.348					22	66.548	22					68.380															
	なし	188	-13.951					160	-15.455	154					-17.313															
(3-④) 強制わいせつ未遂	1名	23	2.817	64.706	5位	0.260	7位	0.030 [*] (p=0.018)	19	31.346	69.894	4位	0.265	7位	0.033 [*] (p=0.036)	21	29.788	59.862	5位	0.291	7位	0.034 [*] (p=0.020)								
	2名	5	-35.789					3	-38.548	4					-30.085															
	3名以上	3	1.854					3	11.872	3					-0.084															
	なし	304	-1.615					234	-2.036	257					-1.963															

注 該当のないカテゴリーについて計算の過程で除外することになるため、本表には掲載していない。

[*] p≦0.05 [**] p≦0.01

[注] 該当のないカテゴリについて計算の過程で除外することになるため、本表には掲載していない。

[*] $p \leq 0.05$ [**] $p \leq 0.01$

図表 14 【すべての性犯罪の被害者数】のカテゴリースコア／レンジ／偏相関係数

して、刑期を加重する傾向があるものと解される。

「(2-③) 逃亡・逃走」については、予測モデル式③において、レンジが 40.012 (8 位) で、偏相関係数が 0.127 (15 位) であった [相関比 0.001]。上記 3-2 での「変数増減法を組み合わせていない数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」の結果 (レンジ: 24.213 (18 位), 偏相関係数: 0.083 (29 位) [相関比 0.001]) をあわせて考えたとしても、逃亡・逃走は、刑期判断にほとんど影響を与えていないと解される。

(3) すべての性犯罪の被害者数 [図表 14]

予測モデル式①～③では、「(3-①) 強姦」, 「(3-②) 強姦未遂」, 「(3-③) 強制わいせつ」, 「(3-④) 強制わいせつ未遂」が共通して選別された。

(4) 一般情状 [図表 15]

予測モデル式①～③では、「(4-⑥) 示談」, 「(4-⑫) 更生可能性」, 「(4-⑬) 身元引受け・更生支援体制」が共通して選別されたが、「(4-②) 累犯前科」, 「(4-⑤) 謝罪」, 「(4-⑨) 自首」, 「(4-⑪) 再犯可能性」, 「(4-⑬) 高齢」, 「(4-⑭) 若年」, 「(4-⑮) 真相解明の協力」については相違があった。

「(4-②) 累犯前科」については、予測モデル式③において、レンジが 16.150 (15 位) で、偏相関係数が 0.176 (12 位) であった [相関比 0.077, $p \leq 0.01$]。ちなみに、実刑の事例 (260 例) に限定した「変数増減法を組み合わせていない数量化理論第Ⅰ類による予測モデル

式」では、レンジが 12.260 (30 位) で、偏相関係数が 0.161 (15 位) であった [相関比 0.038, $p \leq 0.01$]。累犯前科がある場合 (<あり>) には、処断刑の範囲だけでなく、宣告刑の判断にも影響していることが裏づけられたと解される。

「(4-⑤) 謝罪」については、予測モデル式③において、レンジが 12.065 (16 位) で、偏相関係数が 0.187 (11 位) であった [相関比 0.034, $p \leq 0.01$]。ちなみに、上記 3-2 での「変数増減法を組み合わせていない数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」では、レンジが 9.979 (31 位) で、偏相関係数が 0.118 (18 位) であった [相関比 0.041, $p \leq 0.01$]。また、実刑の事例 (260 例) に限定した「変数増減法を組み合わせていない数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」では、レンジが 10.315 (33 位) で、偏相関係数が 0.125 (21 位) であった [相関比 0.038, $p \leq 0.01$]。これらの結果から分かるのは、謝罪がなかった／見られなかった場合 (<なし>) に、刑期が多少加重される傾向があるということである。刑期判断に直接関係する量刑因子 (アイテム) という位置づけよりも、心情的な面で刑期判断に影響を与えているものと解される。

「(4-⑨) 自首」については、予測モデル式②において、レンジが 38.765 (7 位) で、偏相関係数が 0.131 (13 位) であった [相関比 0.048, $p \leq 0.01$]。ちなみに、求刑が判明している事例 (285 例) を対象とした「変数増減法を組み合わせていない数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」では、レンジが 6.138 (33 位) で、偏相関係数が 0.026 (36 位) であった [相関比 0.057, $p \leq 0.01$]。予

(4)一般情状	カテゴリー	予測モデル式①: 宣告刑[すべて] (N=335)						予測モデル式②: 宣告刑[実刑のみ] (N=260)						予測モデル式③: 宣告刑[求刑併用分のみ] (N=295)								
		実数増減法を組み合わせた 数量化理論第1類による予測モデル式						実数増減法を組み合わせた 数量化理論第1類による予測モデル式						実数増減法を組み合わせた 数量化理論第1類による予測モデル式								
		N	カテゴリー スコア	レンジ	偏相関係数	目的変数と の相関比	N	カテゴリー スコア	レンジ	偏相関係数	目的変数と の相関比	N	カテゴリー スコア	レンジ	偏相関係数	目的変数と の相関比						
(4-①) 前科・前歴 (少年院歴)	あり(同様事案含まず) あり(同様事案含む) なし																					
(4-②) 暴犯前科	あり なし 言及なし	35 223 77	11.438 -3.204 4.080	14.643	14位	0.140	11位	0.068 [**] (p=0.000)					29 190 66	12.502 -3.847 5.007	16.150	15位	0.176	12位	0.077 [**] (p=0.000)			
(4-③) 服役歴	あり なし 言及なし																					
(4-④) 反省	あり なし 言及なし																					
(4-⑤) 謝罪	あり なし 言及なし												78 62 145	6.516 4.781 -5.549	12.065	16位	0.197	11位	0.034 [**] (p=0.008)			
(4-⑥) 示談	全部成立 一部成立 未成立 言及なし	59 23 58 195	-12.052 -30.725 -1.095 7.586	38.321	8位	0.315	6位	0.087 [**] (p=0.000)	29 21 45 165	-18.126 -31.648 -0.087 7.238	38.895	7位	0.315	6位	0.065 [**] (p=0.001)	47 20 47 171	-11.795 -35.704 -4.082 8.534	44.238	7位	0.385	6位	0.081 [**] (p=0.000)
(4-⑦) 損害賠償	全部済み 一部済み 未済あり なし																					
(4-⑧) 被害者感情	寛容 一部寛容 一部不寛容 言及なし																					
(4-⑨) 自首	あり 言及なし なし	5 330	43.878 -0.882	44.339	7位	0.157	9位	0.052 [**] (p=0.000)	5 255	38.020 -0.745	38.765	8位	0.131	13位	0.048 [**] (p=0.000)							
(4-⑩) 通報	あり 言及なし なし																					
(4-⑪) 再犯可能性	あり(高い) なし(低い) 言及なし	48 7 280	10.795 -18.271 -1.394	29.066	9位	0.149	10位	0.021 [*] (p=0.030)					39 7 239	13.497 -17.736 -1.683	31.233	10位	0.196	9位	0.018 [] (p=0.080)			
(4-⑫) 更生可能性	あり(高い) なし(低い) 言及なし	30 1 304	1.834 -252.379 0.849	254.213	1位	0.380	4位	0.001 [] (p=0.815)	18 1 241	-4.939 -252.175 1.415	253.591	1位	0.380	3位	0.009 [] (p=0.326)	23 1 255	-4.974 -275.583 1.646	277.229	1位	0.481	4位	0.001 [] (p=0.888)
(4-⑬) 高齢	あり 言及なし なし	7 328 32	21.877 -0.483 -13.480	22.140	11位	0.097	16位	0.005 [] (p=0.201)	19 241	-23.736 1.871	25.608	13位	0.186	10位	0.014 [] (p=0.060)	6 279	23.004 -0.495	23.499	12位	0.116	17位	0.009 [] (p=0.110)
(4-⑭) 真相解明の協力	あり 言及なし なし								10 250	28.056 -1.122	29.178	11位	0.150	12位	0.033 [**] (p=0.003)							
(4-⑮) 社会的影響	あり 言及なし なし																					
(4-⑯) 同様の余地	あり 言及なし なし																					
(4-⑰) 不遇	あり 言及なし なし																					
(4-⑱) 身元引受け・ 更生支援体制	あり 言及なし なし	167 168	-3.571 3.550	7.122	16位	0.104	15位	0.000 [] (p=0.742)	126 134	-6.534 6.143	12.677	16位	0.170	11位	0.000 [] (p=0.911)	138 147	-5.288 4.963	10.249	17位	0.164	14位	0.001 [] (p=0.575)
(4-⑲) 執行猶予期間中	あり 言及なし なし																					
(4-⑳) その他の一般情状	あり 言及なし なし																					

注) 該当のないカテゴリーについて計算の過程で除外することになるため、本表には掲載していない。

図表 15 【一般情状】のカテゴリースコア／レンジ／偏相関係数

測モデル式③において選別されなかったことを加味すると、前述のとおり、自首は裁量的減軽事由（刑法 42 条）であるはあるものの、刑期判断に関して言えば、必ずしも被告人に有利な方向に働いていないと解される。

「(4-⑪) 再犯可能性」については、予測モデル式③において、レンジが 31.233 (10 位) で、偏相関係数が 0.196 (9 位) であった [相関比 0.018]。ちなみに、実刑の事例 (260 例) に限定した「変数増減法を組み合わせていない数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」では、レンジが 23.833 (19 位) で、偏相関係数が 0.125 (22 位) であった [相関比 0.014]。サンプルをさらに増やして検証する必要があると思うが、再犯可能性の高低は、刑期判断の基本的な位置づけに関する修正要素として影響を与えていることが裏づけられたものと解される。

「(4-⑬) 高齢」については、予測モデル式③において、レンジが 23.499 (12 位) で、偏相関係数が 0.116 (17 位) であった [相関比 0.009]。ちなみに、実刑の

事例 (260 例) に限定した「変数増減法を組み合わせていない数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」では、レンジが 5.690 (38 位) で、偏相関係数が 0.026 (40 位) であった [相関比 0.005]。これらの結果を見る限り、刑期判断においては直接的に影響を与えていないことが裏づけられたものと解される。

「(4-⑭) 若年」については、予測モデル式②において、レンジが 25.608 (13 位) で、偏相関係数が 0.186 (10 位) であった [相関比 0.014]。ちなみに、求刑が判明している事例 (285 例) を対象とした「変数増減法を組み合わせていない数量化理論第Ⅰ類による予測モデル式」では、レンジが 3.027 (36 位) で、偏相関係数が 0.031 (35 位) であった [相関比 0.020, $p \leq 0.05$]。若年であることは、刑期判断の基本的な位置づけに関する修正要素として影響を与えていることが裏づけられたものと解される。

「(4-⑮) 真相解明の協力」については、予測モデル

式②において、レンジが 29.178（11 位）で、偏相関係数が 0.150（12 位）であった〔相関比 0.033, $p \leq 0.01$ 〕。ちなみに、上記 3-2 の「変数増減法を組み合わせしていない数量化理論第 I 類による予測モデル式」では、レンジが 13.221（25 位）で、偏相関係数が 0.074（31 位）であった〔相関比 0.034, $p \leq 0.01$ 〕。また、求刑が判明している事例（285 例）を対象とした「変数増減法を組み合わせしていない数量化理論第 I 類による予測モデル式」では、レンジが 10.773（29 位）で、偏相関係数が 0.066（32 位）であった〔相関比 0.012〕。被告人に有利な量刑事由として、真相解明の協力が挙げられている場合であっても、偏相関係数や相関比を見る限り、刑期判断には直接的に影響を与えていないと解される。

3.3.3 小括②

3つの予測モデル式を比較検討した結果、以下のことが明らかになった。

①被害者の落ち度については、刑期判断の基本的な位置づけに関する修正要素として影響を与えている。

②犯行後に窃盗などが行われた場合（＜あり＞）には、刑期判断の基本的な位置づけに関する修正要素として、刑期を加重する傾向がある。

③謝罪については、刑期判断に直接関係する量刑因子（アイテム）という位置づけよりも、心情的な面で刑期判断に影響を与えている。

3.4 外れ値事例に関する検討

では、実績値と予測値との間に大きな乖離があった事例を取り上げて、事例検討をしていこう。

3.4.1 標準化残差が -2.0 を下回った事例（実績値が予測値に比べて軽かった事例）

まず、標準化残差が -2.0 を下回った「外れ値事例」（実績値が理論値に比べて軽かった事例）8例について検証する。

(1) さいたま地判平成 29 年 9 月 11 日 LEX/DB25547813

【準強姦，準強姦未遂被告事件】

実績値：60	予測値：140.357
残差：-80.357	標準化残差：-2.381

【事案の概要】

第1 被告人は、平成 28 年 8 月 26 日午後 11 時 56 分頃、東京都大田区 $\alpha \times$ 丁目 \times 番 $\times \times$ 号 $a \times F$ において、B が酒に酔い熟睡していたため抗拒不能であるのに乗じ、同人を姦淫しようとしたが、その目的を遂げなかった。

第2 被告人は、同月 27 日午前 2 時頃から同日午前 7 時頃までの間に、C 方において、同人が泥酔していたため抗拒不能であるのに乗じ、同人を姦淫した。

第3 被告人は、同年 9 月 18 日午前 5 時 5 分頃から同日午前 5 時 19 分頃までの間、前記 $a \times F$ において、D が酒に酔い熟睡していたため抗拒不能であるのに乗じ、同人を姦淫した。

第4 被告人は、同月 22 日午前 6 時 12 分頃、同所において、E が酒に酔い熟睡していたため抗拒不能であるのに乗じ、同人を姦淫しようとしたが、同人が目を覚ましたためその目的を遂げなかった。

【量刑の理由】懲役 5 年

さいたま地方裁判所は、本件の量刑に関し、以下のよう理由を示した。

本件各犯行は、被告人が、知人らと共に飲み会を開催し、参加した被害者らに罰ゲーム等として飲酒させ、熟睡するなどして抗拒不能状態になった被害者らを姦淫し（判示第 2 及び第 3）、又は姦淫しようとした（判示第 1 及び第 4）という準強姦 2 件及び準強姦未遂 2 件からなる事案である。

まず、本件において被告人は、自己の性的欲求に基づいて準強姦又は準強姦未遂の犯行を 4 回にわたり敢行したものであって、この点のみをみても、自己中心のかつ極めて卑劣な各犯行が強い非難に値することは明らかである。その上でさらに具体的にみると、被告人は、被害者らを飲み会に誘った上、知人らと共に罰ゲーム等として被害者らが飲酒を断りづらい状況を作り、アルコール度数の高い酒を飲ませるなどして被害者らを抗拒不能状態にさせ、さらに判示第 1、第 3 及び第 4 の際には

写真や動画を撮影するなどしつつ、各犯行に及んでいる。被害者らのことを全く顧みることなく敢行された以上の各犯行態様は極めて卑劣かつ悪質であって、被害者らが感じた屈辱感等の精神的苦痛も大きく、判示第1の被害者が引き続き厳しい処罰感情を有しているのも当然である。なお、検察官は本件各犯行が計画的で、あらかじめ準強姦の意思があった旨を主張している一方で、弁護人は計画性はなかったと主張しているところ、結局被告人らの目的は性行為をすることにあったのであり、仮にではあるが飲み会に誘われた女性が合意の上で性行為に応じた場合でもその目的は達せられることからすると、当初から絶対に準強姦をするという意図があったとまでは認定できないが、被告人は準強姦の実行行為を繰り返していた以上、特に2回目以降の際には再度準強姦をすることになるかもしれないことを認識しつつ各犯行に及んだと認められるから、その経緯に酌むべき余地がないことには変わりはない。以上の事情等からすると、被告人の刑事責任は重い。

しかしながら他方で、被告人と判示第2、第3及び第4の各被害者との間で、被害弁償金として合計1200万円が支払われて示談が成立し、さらに判示第2及び第3の各被害者が被告人を宥恕し、第4の被害者も厳しい刑事処罰を求めていることは、被告人に有利な方向で考慮すべき事情である。加えて、被告人が罪を認め、医籍登録抹消申請を自ら行い、反省の弁を述べていること、その父親が今後の監督を約束していること等の事情も併せ考慮すれば、本件では主文掲記の刑が相当である。

(求刑 懲役8年)

[予測モデル式からの若干の考察]

予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく、すべての被害者数については、「(3-①)強姦」が<2名>(56.513)、「(3-②)強姦未遂」が<2名>(59.758)、「(3-③)強制わいせつ」が<なし>(-13.951)、「(3-④)強制わいせつ未遂」が<なし>(-1.615)となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関す

る傷害の有無や程度については、「(1-④)被害結果(傷害)」が<なし>(-11.612)となり、その基本スコアは89.093となった。

本件は、「被告人が、知人らと共に飲み会を開催し、参加した被害者らに罰ゲーム等として飲酒させ、熟睡するなどして抗拒不能状態になった被害者らを姦淫し(判示第2及び第3)、又は姦淫しようとした(判示第1及び第4)」という準強姦2件及び準強姦未遂2件からなる事案であり、<飲酒・薬物抗拒不能型>の犯行であるとともに、<連続強姦・強制わいせつ型>の犯行でもある(また、医籍登録者(医師など)による犯行でもある)。

本件は2004年の刑法一部改正(平成16年法律第156号)後の事案であり、したがって、併合罪加重の上限が30年となるところ、求刑が懲役8年であるのに対して、本判決では懲役5年が宣告されている。

予測モデル式では、予測値を140.357と算出した(残差-80.357)。残差が大きくなった原因は、①飲酒状況下であったこと、②医籍登録抹消申請を自ら行っていること、③「被告人と判示第2、第3及び第4の各被害者との間で、被害弁償金として合計1200万円が支払われて示談が成立し、さらに判示第2及び第3の各被害者が被告人を宥恕し、第4の被害者も厳しい刑事処罰を求めていること」などの事情が、予測モデル式のカテゴリースコア以上に高く評価されたものと思われる。その妥当性については議論が必要であろう。よって、本判決に関しては、刑期が顕著に低く、「外れ値事例」として位置づけられる可能性を有しているものと解される。

(2) 横浜地横須賀支判平成26年6月26日 LEX/DB25504295【準強姦、準強姦未遂被告事件】

実績値 : 156	予測値 : 261.994
残差 : -105.994	標準化残差 : -3.140

[事案の概要]

第1 被告人は、睡眠導入作用を有するハルシオンを使用して女性を抗拒不能の状態に陥らせた上、姦淫しようと考え、平成25年7月21日午後5時頃から同日午後10時頃までの間、神奈川県逗子市(以下略)のa号棟b号室(以下「本件部屋」という。)において、A(当時21歳)に対し、料理に混ぜ入れたハルシオンを摂取させ、その

薬理作用により抗拒不能の状態に陥らせて同人を姦淫した。

第2 被告人は、前記第1の日時に本件部屋において、B（当時21歳）に対し、料理に混ぜ入れたハルシオンを摂取させ、その薬理作用により抗拒不能の状態に陥らせた上、同人の下着の中に手指を差入れて陰部を弄ぶなどしたが、同人が処女であったことから姦淫に及ぶことを中止し、その目的を遂げなかった。

第3 被告人は、前記第1の日の午後5時頃から同月22日午前0時頃までの間、本件部屋において、C（当時21歳）に対し、料理に混ぜ入れたハルシオンを摂取させ、その薬理作用により抗拒不能の状態に陥らせて同人を姦淫した。

第4 被告人は、平成25年8月25日午後6時30分頃から同月26日午前4時20分頃までの間、本件部屋において、D（当時24歳）に対し、料理に混ぜ入れたハルシオンを摂取させ、その薬理作用により抗拒不能の状態に陥らせて同人を姦淫した。

第5 被告人は、前記第4の日時に本件部屋において、E（当時24歳）に対し、料理に混ぜ入れたハルシオンを摂取させ、その薬理作用により抗拒不能の状態に陥らせて同人を姦淫した。

第6 被告人は、前記第4の日時に本件部屋において、F（当時23歳）に対し、料理に混ぜ入れたハルシオンを摂取させ、その薬理作用により抗拒不能の状態に陥らせた上、同人の陰部付近に自己の陰茎を押し当ててるなどして姦淫しようとしたが、同人に抵抗されたため、その目的を遂げなかった。

第7 被告人は、平成25年8月26日午後5時30分頃から同月27日午前0時頃までの間、本件部屋において、G（当時25歳）に対し、料理に混ぜ入れたハルシオンを摂取させ、その薬理作用により抗拒不能の状態に陥らせて同人を姦淫した。

【量刑の理由】懲役13年

横浜地方裁判所横須賀支部は、本件の量刑に関し、以下のような理由を示した。

本件は、いずれも20代の年齢である合計7名の女性に対し、それぞれ密かに睡眠導入剤を摂取さ

せ、抵抗不能な状態に陥らせて敢行した準強姦5件及び準強姦未遂2件の事案である。

被告人は、夏場の海水浴場に設けられた海の家で初対面ないしそれに近い間柄の被害者らと3度にわたって順次知り合い、その都度、自分好みの女性やその同伴女性ら2、3名を、当時借りていた近隣のリゾートマンションの一室へその日のうちに招き入れ、医師としての立場を利用してあらかじめ入手していたハルシオンを手料理に混ぜ、遅くともその時点までに生じた犯意の下で、これを被害者らに提供して食べさせ、その薬理作用により抵抗できない状態となった被害者らを姦淫し、あるいは姦淫目的でわいせつ行為に及んでいる。合計7件に及ぶ本件各犯行も、犯行に及んだ機会としては大きく3回に分かれる形で実行されているところ、その時間的間隔は、全体として一月余りであり、特に2回目と3回目の犯行（判示第4ないし第7の各犯行）は連日にわたって立て続けに敢行されている。

以上のとおり、本件は、常習性の高い計画的犯行であり、卑劣で狡猾な手口により被害者らの人格を著しく踏みにじったものである。このような事案の内容は、それ自体が極めて悪質であり、厳しい非難を免れない。加えて、被告人の供述等に照らすと、被告人は、中年の医師であるが、自由人を気取り、別荘やクルーザー等を保有している旨殊更にひけらかす中で、若い女性にもてているとの感覚を失いたくない欲求が異常なまでに強い上、睡眠導入剤を密かに摂取させた女性と初めて性交渉に至った時点の感覚として征服感を抱いた旨供述するなど、いびつで傲慢な女性観を有していることもあって、性欲に対する自制心が極めて乏しいこと、そのため、女性の性的自由や身の安全等を軽視する心境に至りやすく、合意による性交渉が望めない場合には、女性の意に反して性行為に及ぶこともはばからず、これを実現する上での便宜を優先させ、また、一過性前向性健忘により被害届を出されずに済むなどという打算から、飲酒している被害者らに対し、使用上の注意としてアルコールとの併用をできる限り避けることと

されているハルシオンを敢えて服用させていること、その後は、処女であることに気付いた被害者への姦淫行為を自制するような面はあったものの、同一の機会に自室へ連れ込んだ複数の被害者らを相手に、その意識がもうろうとしていることなどに乗じて、ほとんど見境なく性行為に及び、中には被害者の膣内に射精する事例もあったことが認められる。このように本件の犯情としては、独り善がりな医師にあるまじき無責任さも併せ持つ被告人の振る舞いが際立っており、量刑上この点を見過ごすことはできない。

そして、上記のような本件各犯行の性質上、姦淫や姦淫目的でのわいせつ被害を受けた被害者らの中には、被害の実情をおぼろげながらも認識し、記憶している者のほか、被害に遭ったこと自体についての直接的な認識、記憶がない者もいるが、いずれの被害者も、被害の実態が明らかとなるにつれ、一様に深刻な精神的打撃を受け、日常生活の面でも総じて本件被害に端を発する種々の苦痛を被っており、被害者らの両親等が受けた衝撃の大きさも想像に難くない。被害者1名が被害弁償の受入れそのものを拒んでまで被告人の厳重処罰を強く求め、被害弁償に応じた他の被害者らの大半も被告人を宥恕せず、被害弁償を拒絶した者を含む合計4名の被害者は、公判廷で自ら又は書面を通じて意見陳述をし、厳しい処罰感情を示しているが、いずれも無理からぬ対応であるといえる。

そうすると、他方で、判示第2及び第6の各犯行は、いずれも未遂にとどまり、前者については中止犯が成立すること、被告人が、自らの財産を処分したほか、父親からも多額の援助を受け、被害者6名との間で合意ないし示談を成立させ、これに基づき損害賠償として総額2340万円を支払い、うち1名の被害者からは厳重処罰を求める意見を陳述しないとの意向が表明されるに至ったこと、被告人が、事実を全て認め、刑に服する態度を示していること、前科前歴がないこと、自業自得とはいえ、本件により、これまで医師として携わってきた種々の業務から除外されるなど、既に一定の社会的制裁を受け、将来的には医師免許の取消処分

を受けることも想定されること、保釈後の被告人となお生活を共にしている妻が、現時点で成人前後の年代である2人の娘と共に、服役を済ませた被告人を支えて監督していく旨誓っていることなどの被告人にとって有利もしくは酌むべき事情を最大限考慮しても、その刑事責任は重大であり、被告人を主文の刑に処するのが相当である。

(求刑 懲役15年)

〔予測モデル式からの若干の考察〕

予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく、すべての被害者数については、「(3-①)強姦」が<5名>(185.434)、「(3-②)強姦未遂」が<2名>(59.758)、「(3-③)強制わいせつ」が<なし>(-13.951)、「(3-④)強制わいせつ未遂」が<なし>(-1.615)となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④)被害結果(傷害)」が<なし>(-11.612)となり、その基本スコアは218.014となった。

本件は、「いずれも20代の年齢である合計7名の女性に対し、それぞれ密かに睡眠導入剤を摂取させ、抵抗不能な状態に陥らせて敢行した準強姦5件及び準強姦未遂2件」からなる事案であり、<飲酒・薬物抗拒不能型>の犯行であるとともに、<連続強姦・強制わいせつ型>の犯行でもある(また、医師による犯行でもある)。

予測モデル式では、予測値を261.994と算出した(残差-105.994)。残差が大きくなった原因は、前記のさいたま地判平成29年9月11日LEX/DB25547813と同様の傾向が見て取れ、①飲酒や食事の状況下であったこと、②「これまで医師として携わってきた種々の業務から除外されるなど、既に一定の社会的制裁を受け、将来的には医師免許の取消処分を受けることも想定されること」、③「被告人が、自らの財産を処分したほか、父親からも多額の援助を受け、被害者6名との間で合意ないし示談を成立させ、これに基づき損害賠償として総額2340万円を支払い、うち1名の被害者からは厳重処罰を求める意見を陳述しないとの意向が表明されるに至ったこと」などの事情が、予測モデル式のカテゴリースコア以上に高く評価されたものと思われるが、やはり、その妥当性に

については議論が必要であろう。よって、本判決に関しても、刑期が顕著に低く、「外れ値事例」として位置づけられる可能性を有しているものと解される。

(3) 津地判平成 24 年 9 月 7 日 LEX/DB25482770【強制わいせつ致傷、強制わいせつ未遂、強姦、強制わいせつ被告事件】

実績値：90	予測値：159.011
残差：-69.011	標準化残差：-2.045

【事案の概要】

第 1 被告人は、通行中の A（当時 15 歳）を認めるや、同人に強いてわいせつな行為をしようと企て、平成 23 年 9 月 22 日午後 7 時 14 分ころ、三重県四日市市■駐車場北西側路上において、いきなり、その背後から同人の口を塞ぎ、「殺されたくなかったら言うことを聞け。」などと脅迫しながら同人を上記■雑木林内に連れ込み、同人に強いてわいせつな行為をしようとしたが、同人が抵抗したため、その目的を遂げなかった。

第 2 被告人は、通行中の B（当時 17 歳）を認めるや、同人に強いてわいせつな行為をしようと企て、平成 22 年 9 月 15 日午後 7 時ころ、三重県四日市市■雑木林付近の路上において、同人に対し、その背後からいきなり同人の口を塞ぎ、「声出すな、声出したら殺すぞ。」などと脅迫するとともに、同人の左手首を引っ張って同人を上記雑木林内に無理矢理連れ込むなどの暴行を加え、さらに、同所において、同人に対し、「騒いだら殺す。」などと脅迫し、その反抗を抑圧した上、同人の乳房及び陰部を直接触ったり、同人に被告人の陰茎を握らせて手淫させるなどし、もって強いてわいせつな行為をし、その際、上記一連の暴行により、上記 B に全治約 15 日間を要する見込みの左大腿部挫創等の傷害を負わせた。

第 3 被告人は、通行中の C（当時 21 歳）を認めるや、同人に強いてわいせつな行為をしようと企て、平成 23 年 2 月 22 日午後 7 時 52 分ころ、三重県四日市市■公園北側路上において、いきなり、同人の口を塞ぎ、「声出すな、殺すぞ。」などと脅迫しながら同人を上記公園内に連れ込み、その反抗を抑圧した上、同人を上記公園内のベンチに座らせ、同人に接吻し、自己の陰茎を口淫させるなどし、さらに、そのころ、同所において、上記の暴

行・脅迫等により畏怖して反抗抑圧状態にあった同人を強いて姦淫しようと企て、その腕をつかんで引っ張り、同人を上記ベンチ裏に連れ込んで地面に四つんばいにさせて性交し、強いて姦淫した。

第 4 被告人は、通行中の D（当時 15 歳）を認めるや、同人に強いてわいせつな行為をしようと企て、平成 19 年 5 月 18 日午後 7 時 40 分ころ、三重県四日市市■倉庫東側路上において、同人に対し、いきなりその背後から抱き付き、「黙れ。」などと脅迫し、同人の左太もも付近を 2, 3 回足蹴にし、同人を上記倉庫西側へ連れ込むなどの暴行を加えてその反抗を抑圧した上、そのころ、同所において、同人の乳房を直接触り、着衣の上から臀部等を触り、同人に被告人の陰茎を握らせて手淫させるなどし、もって強いてわいせつな行為をした。

第 5 被告人は、通行中の E（当時 30 歳）を認めるや、同人に強いてわいせつな行為をしようと企て、平成 23 年 8 月 25 日午後 9 時 35 分ころ、三重県四日市市■西側路上において、同人に対し、いきなりその背後から口を塞ぎ、「しゃべるな、しゃべったら刺すぞ。」などと脅迫し、同人を上記■に連れ込み、その反抗を抑圧した上、そのころ、同所において、同人に接吻し、同人の乳房を着衣の上からもむなどし、もって強いてわいせつな行為をした。

第 6 被告人は、通行中の F（当時 15 歳）を認めるや、同人に強いてわいせつな行為をしようと企て、平成 23 年 9 月 9 日午後 7 時 25 分ころ、三重県桑名市■路上において、同人に対し、いきなりその背後から口を塞ぎ、「声出すな。」などと脅迫し、同人の腹部を 5 回ほど足蹴にし、同人を上記■路上へ連れて行くなどの暴行を加えてその反抗を抑圧した上、そのころ、同所において、同人に接吻し、同人の陰部を着衣の上から触り、もって強いてわいせつな行為をした。

第 7 被告人は、通行中の G（当時 23 歳）を認めるや、同人に強いてわいせつな行為をしようと企て、平成 22 年 7 月 26 日午後 7 時 30 分ころ、三重県四日市市■遊歩道上において、同人に対し、いきなりその背後から口を塞ぎ、「騒ぐな、殺すぞ。」などと脅迫し、同人を上記■茂み内に連れ込み、その反抗を抑圧した上、そのころ、同所において、同人に接吻し、その乳房を直接触り、被告人の陰茎を握らせて手淫させ、口淫させるなどし、も

って強いてわいせつな行為をした。

【量刑の理由】懲役7年6月

津地方裁判所は、本件の量刑に関し、以下のような理由を示した。

本件は、被告人が、手淫や口淫をさせて自己の性欲を満たすため、学校帰りの女子高生や仕事帰りの女性など通りがかりの被害者らを襲い、口を塞いで脅迫するなどして、人気のないところに連れ込み、手淫や口淫をさせるなどのわいせつな行為を行った各事案である（ただし、うち1件についてはわいせつ行為自体は未遂に終わり、1件についてはその際軽傷を負わせ、うち1件については姦淫するに至っている。）。その犯行態様は被害者らの自尊心、羞恥心を著しく傷つけるもので非常に悪質である。また、被告人は、判示第4及び6の各被害者に対しては脅迫するだけでなく腹部等を蹴るなどの暴行を加えており、犯行態様は乱暴でさらに悪質である。

被告人は、犯行の際、自らの犯行であることが発覚しないように、運転する車を離れた場所に停めた上、目出し帽をかぶるなどの準備をしており、計画的である。

上記のような犯行態様や犯行後の被害者らの精神状態などから明らかなように、強姦された被害者をはじめとして、本件各犯行の被害者らが受けた精神的苦痛は甚大である。被害者らには何ら落ち度はなく、被告人に対し厳罰を求めるのも至極当然である。

本件各犯行の動機は、職場でのストレスや前妻との性交がなかったことによる欲求不満というが、これを性犯罪により発散するというのは論外であって到底酌量の余地はない。

そして、被告人は、約4年4か月のうちに7件もの犯行を繰り返しており、その常習性は顕著である。

一方で、被告人は本件各犯行に際して凶器を使用していない。また本件各犯行はわいせつ目的で犯されたものであり、判示第3の強姦についても当

初はわいせつ目的で犯行に及んでおり強姦目的で被害者を襲ったものではない。そして、判示第1の犯行については未遂にとどまり、判示第2の犯行により被害者に生じたけがの程度は比較的軽い。

また、被告人は、判示第1の罪により逮捕された後には他の判示事実についても自白し、本件各犯行を認め、被告人なりに反省している。被告人は自宅を売却した資金で判示第1及び4の各被害者に対し被害弁償を行い、本件各犯行の被害者らに対し被害弁償の努力をしている。そして被告人には、現在、被告人の帰りを待つ父親及び前妻などの家族がおり、被告人に前科前歴はない。

以上の諸事情を総合考慮し、当裁判所は、主文の刑に処することが相当であると判断した。

（求刑 懲役12年）

【予測モデル式からの若干の考察】

予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく、すべての被害者数については、「(3-①) 強姦」が<1名> (9.134) , 「(3-②) 強姦未遂」が<なし> (-10.387) , 「(3-③) 強制わいせつ」が<5名以上> (69.348) , 「(3-④) 強制わいせつ未遂」が<1名> (28.917) となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④) 被害結果(傷害)」が<なし> (-11.612) となり、その基本スコアは85.400となった。

本件は、「被告人が、手淫や口淫をさせて自己の性欲を満たすため、学校帰りの女子高生や仕事帰りの女性など通りがかりの被害者らを襲い、口を塞いで脅迫するなどして、人気のないところに連れ込み、手淫や口淫をさせるなどのわいせつな行為を行った」もので、「約4年4か月のうちに7件もの犯行を繰り返した事案であり、<連続強姦・強制わいせつ型>の犯行である。本件は2004年の刑法一部改正（平成16年法律第156号）後の事案であり、したがって、併合罪加重の上限が30年となる」ところ、求刑が懲役12年であるのに対して、本判決では懲役7年6月が宣告されている。

予測モデル式では、予測値を159.011と算出した（残差-69.011）。残差が大きくなった原因として考えられる

のは、①「判示第 1 の罪により逮捕された後には他の判示事実についても自白し、本件各犯行を認め、被告人なりに反省している」ことや、②被告人が「自宅を売却した資金で判示第 1 及び 4 の各被害者に対し被害弁償を行い、本件各犯行の被害者らに対し被害弁償の努力をしている」ことなどの事情が、予測モデル式のカテゴリースコア以上に高く評価されたということである。ただ、本判決に関して言えば、前記のさいたま地判平成 29 年 9 月 11 日 LEX/DB25547813、津地判平成 24 年 9 月 7 日 LEX/DB25482770 と比較して、刑期が顕著に低いとは言えず、「外れ値事例」とまでは評価できないものと解される。

(4) 東京地八王子支判平成 19 年 4 月 20 日 LEX/DB28145176【強制わいせつ、強制わいせつ未遂、住居侵入、強姦、強姦未遂（変更後の訴因：強制わいせつ、強制わいせつ未遂、住居侵入、強姦、強姦未遂、強姦致傷）被告事件】

実績値：180	予測値：261.473
残差：-81.473	標準化残差：-2.179

【事案の概要】

被告人は、少年である（下記第 1 の行為当時 16 歳、第 2 ないし第 8 の各行為当時 17 歳、下記第 9 の行為当時 18 歳）。

第 1 被告人は、B（当時 11 歳）が 13 歳未満であることを知りながら、強いて同女にわいせつな行為をしようと企て、平成 17 年 7 月 25 日午後 1 時 50 分ころ、神奈川県相模原市 a×丁目×番××号〇〇南側敷地内において、同女に対し、「言うことを聞かないとぶっ殺す。逃げたら家に行ってぶっ殺すぞ。くわえるかズボンを脱ぐかどっちかにしろ。」などと語気鋭く申し向けて脅迫し、その反抗を抑圧した上、同女をしてパンツを脱がせて陰部を手指で弄び、自己の陰茎を手で握らせるなどし、もって 13 歳未満の女子に対し強いてわいせつな行為をした。

第 2 被告人は、C（当時 11 歳）が 13 歳未満であることを知りながら、強いて同女にわいせつな行為をしようと企て、平成 17 年 10 月 7 日午後 4 時ころ、東京都町田市 b×××番地××先路上において、同女に対し、同女が背負っていたランドセルを手で押しながら、同女を同市 b

×××番地××所在の車庫内に連行した上、そのころ、同所において、同女に対し、その口を手で塞ぎ、「大声出したらナイフで首を切っちゃうよ。」などと申し向けるなどの暴行・脅迫を加えたが、その場を近隣住人に目撃されて逃走したため、その目的を遂げなかった。

第 3 被告人は、D（当時 12 歳）が 13 歳未満であることを知りながら、強いて同女を姦淫しようと企て、平成 17 年 10 月 12 日午後 5 時 32 分ころ、同市 c×丁目×番地〇〇-×××号室〇〇方に、「電話を貸してください。」などと詐言を用いて上記 D に開けさせた同室玄関ドアから侵入し、そのころ、同所において、同女に対し、その両肩を両手で突き飛ばし、所携のカッターナイフ（平成 19 年押第 6 号の 1）の切っ先を同女の頸部に突き付けながら、「静かにしろ。服を脱げ。」などと語気鋭く申し向けるなどの暴行・脅迫を加えてその反抗を抑圧した上、強いて同女を姦淫した。

第 4 被告人は、E（当時 13 歳）を強いて姦淫しようと企て、平成 17 年 11 月 29 日午後 5 時 30 分ころ、同市 d 町×××番地先路上において、同女に対し、その口を右手で塞ぎながら、「騒ぐな。騒ぐと、殺すぞ。窒息するのとバラバラにされるのとどっちがいいか。」などと語気鋭く申し向けて同女を同市 d 町×××番地×〇〇方東側敷地内に連行し、そのころ、同所において、同女に対し、あたかもカッターナイフを所持しているかのように装いながら、「おとなしくしないと殺すぞ。」などと語気鋭く申し向けるなどの暴行・脅迫を加えてその反抗を抑圧した上、同女に口淫させ、全裸にした同女の陰部に自己の陰茎を押し付けるなどして強いて同女を姦淫しようとしたが、自己の陰茎を膣内に挿入することができなかったため、その目的を遂げなかった。

第 5 被告人は、F（当時 8 歳）が 13 歳未満であることを知りながら、強いて同女にわいせつな行為をしようと企て、平成 18 年 2 月 24 日午後 4 時ころ、同市 e×丁目×番×号 f××××号室 G 方に、上記 F が同室玄関ドアを開める際、同玄関ドアノブをつかんで引っ張るなどして無理矢理同玄関ドアから侵入し、そのころ、同所において、同女に対し、「服を脱いで。服を脱がないと殺しちゃうよ。」などと申し向け、同女の腕を引っ張るなどの暴行・脅迫を加えてその反抗を抑圧した上、同女に口淫させ、陰茎を触らせるなどし、もって 13 歳未満の女

子に対し強いてわいせつな行為をした。

第6 被告人は、H（当時9歳）が13歳未満であることを知りながら、強いて同女にわいせつな行為をしようと企て、平成18年4月15日午後4時50分ころ、神奈川県相模原市g町×丁目×番×号〇〇の南側階段1階から2階に至る階段踊り場において、同女に対し、「逃がたり、泣いたりしたら殺すよ。」などと語気鋭く申し向けて脅迫し、その反抗を抑圧した上、同女のパンツを引き下げて陰部を手指で弄び、同女に口淫させるなどし、もって13歳未満の女子に対し強いてわいせつな行為をした。

第7 被告人は、I（当時7歳）が13歳未満であることを知りながら、強いて同女にわいせつな行為をしようと企て、平成18年4月25日午後5時40分ころ、東京都町田市h×丁目×番地所在のi団地××××号棟付近において、「ちょっといい。お父さんとかお母さんいるの。いいから来て。」などと申し向けて同女を同所所在の同団地××××号棟の3階から4階に至る階段踊り場まで連行し、そのころ、同所において、同女に対し、「言うこと聞かないと、お家に帰れなくなるよ。言うことを聞かないと殺しちゃうよ。もうお父さんとかお母さんに会えなくなるよ。」などと申し向けて脅迫し、その反抗を抑圧した上、同女に口淫させ、パンツを脱がせた同女の両脚に陰茎を挟むなどし、もって13歳未満の女子に対し強いてわいせつな行為をした。

第8 被告人は、J（当時12歳）が13歳未満であることを知りながら、強いて同女を姦淫しようと企て、平成18年5月18日午後5時40分ころ、同市j町××番地先路上において、同女に対し、「鍵落としちゃったから取ってもらえる。」などと詐言を用い、背後から同女の身体を抱き上げるなどして同女を同市j町××番地付近の雑木林内に連行し、そのころ、同所において、同女に対し、「服を脱げ。家に帰れないぞ、殺すぞ。」などと語気鋭く申し向けるなどの暴行・脅迫を加えてその反抗を抑圧した上、強いて同女を姦淫した。

第9 被告人は、K（当時14歳）を強いて姦淫しようと企て、平成18年9月2日午後7時20分ころ、同市k町××番地先路上において、同女に対し、背後から同女の頸部を腕で絞め付け、手で口を塞ぐなどしながら、「騒いだら殺すぞ。静かにしろ。」などと語気鋭く申し

向けるなどして同女を同市k町××番地〇〇方農機具置き場内に連行し、そのころ、同所において、同女に対し、「ジャージを脱げ。Tシャツも脱げよ。」などと語気鋭く申し向け、同女のパンツを引き下げるなどの暴行・脅迫を加えてその反抗を抑圧した上、強いて同女を姦淫し、その際、上記姦淫行為に起因する強度な精神的ストレスにより、同女に全治不明の心的外傷後ストレス障害の傷害を負わせた。

【刑事処分を相当と認めた理由及び量刑の理由】懲役5年以上10年以下、カッターナイフ1本没収

東京地方裁判所八王子支部は、本件の量刑に関し、以下のような理由を示した。

1 本件は、少年であった被告人が、16歳から18歳にかけての1年余りの間に、東京都町田市内及び神奈川県相模原市内において、当時7歳から14歳の女兒を殊更に狙って、屋外で敢行した強制わいせつ3件（判示第1、第6、第7）、強制わいせつ未遂（判示第2）、強姦未遂（判示第4）、強姦（判示第8）、強姦致傷（判示第9）各1件、被害者の自宅に侵入した上で敢行した住居侵入、強姦（判示第3）、同様に敢行した住居侵入、強制わいせつ（判示第5）各1件という事案である。

2 (1) 本件各犯行の実行着手時の態様を見るに、住居侵入を伴う強姦（判示第3）及び強制わいせつ（判示第5）の各犯行は、各被害者を見つけて、自宅までつけ、被害者らが自宅に入るか、入ろうとするや、「電話を貸してください。」（判示第3）と申し向けたり、被害者が閉めようとするドアを引き開け、「トイレ貸して。」（判示第5）などと言って、室内に侵入し、被害者が1人だけであることを確認して、強姦等に及んでいるのであり、巧妙かつ卑劣なものである。

その余の各犯行については、路上で見かけた小学生や中学生の女子に対して、「言うとおりにしないと殴るぞ。」（判示第1）、口を手で塞ぎながら「殺すぞ。」（判示第4）、「言うことを聞かないと殺しちゃうよ。」（判示第7）、手で口を塞ぎ、腕で首を絞め付け、抵抗した被害者に「騒いだら

殺すぞ。俺はナイフを持っているんだ。」（判示第 9）などと脅して、人目につかない建物の物陰や団地の階段踊り場、農機具置き場などに連れ込むという粗暴なものであり、また、人の家を尋ねるふりをして、声を掛け、ランドセルを押して人目につかない車庫（判示第 2）や、「一緒に来て、窓を開けてくれないかな。」などと嘘を言って、アパートの階段踊り場（判示第 6）に、「鍵を落としちゃったから取ってもらえる。」などと嘘を言い、身体を抱き上げて雑木林（判示第 8）に連れ込むといった、人を疑うことを知らない女兒の親切心につけ込んだ極めて卑劣で狡猾なものである。

（2）脅迫、暴行態様を見ると、体格、腕力などがはるかに劣る各被害者に対して、「言うことを聞かないとぶっ殺す。」（判示第 1）、口を手で塞ぎながら「大声出したらナイフで首を切っちゃうよ。」（判示第 2）、両肩を突き飛ばし、カッターナイフを首に突き付けながら「静かにしろ。服を脱げ。」（判示第 3）、カッターナイフを持っているかのように装いながら「おとなしくしないと殺すぞ。」（判示第 4）、「服を脱がないと殺しちゃうよ。」（判示第 5）、「逃げたり、泣いたりしたら殺すよ。」（判示第 6）、「言うことを聞かないと殺しちゃうよ。もうお父さんとかお母さんに会えなくなるよ。」（判示第 7）、「服を脱げ。家に帰れないぞ、殺すぞ。」（判示第 8）、「ジャージを脱げ。T シャツも脱げよ。」（判示第 9）などといった強烈かつ凶悪な脅迫文言を用いたり、暴行を加えて被害者に強い恐怖を感じさせ、抵抗できないようにしており、いずれも粗暴なものである。

そして、被告人は、判示第 1、第 5 ないし第 7（強制わいせつ）においては、被害者の陰部を手指で弄び、自己の陰茎を握らせ、更には口淫させるなどし、判示第 3、第 8、第 9（強姦、強姦致傷）においては、被害者に口淫させた上で姦淫し、膣内で射精までし、また、姦淫が未遂に止まった判示第 4 の犯行も、被害者の乳房を弄んだり、口淫させて口内に射精するなどしたものである。

（3）本件各犯行は、ひたすら自己の性欲を満たそ

うという強固な犯意に基づき、被害者の自宅内、民家敷地の物陰、共同住宅の階段踊り場等と場所を選ぶことなく、恐怖におののき、苦痛の叫びをあげるいたいけな女兒らの心情を全く意に介さず、その人格を無視して陵辱の限りを尽くしているものであり、自己本位で人間性の片鱗すら見出すことのできない冷酷で卑劣なものであり、極めて悪質である。

加えて、被告人は、犯行後、「誰かにしゃべったら殺すぞ。」などと強烈な脅迫文言を用いて口止めしたり（判示第 3、第 5、第 6、第 8）、被害者の姿を携帯電話のカメラで撮影して口止めの材料にしたりしており（判示第 4、第 9）、犯行後の情状も極めて悪い。

3（1）本件各犯行により、被害者らが受けた肉体的苦痛には多大なものがある上、被害者らは、最も安全であるべき自宅内や、自宅近くで親のそばを離れた直後、学校帰宅途中等において、何の落ち度もないのに突如として被告人に襲われ、理不尽な仕打ちを受けたことによる精神的苦痛や恐怖感、屈辱感には甚大なものがある。そして、被害者の中には、暗がりを怖がるようになったり、被告人と同年代の男性を見るとおびえたりする者や精神的に不安定になったり、不眠や体調不良を訴えるようになった者や、自宅が犯行現場となったため引っ越しを余儀なくされた者もあり、事件以前のごく普通の日常生活を送ることができなくなった者も多い。特に、判示第 9 の被害者は、本件犯行が原因で、全治不明の心的外傷後ストレス障害になり、人混みを歩けなくなったほか、情緒不安定になって、心身に著しい変調を来すようになり、それまで休むことのなかった学校も欠席や遅刻をするようになるなど、本件による影響は大きく深刻である。

このように、各被害者の肉体的、精神的苦痛は極めて深刻かつ重大である上、親や友人に囲まれながら送っていた平穏な生活を破壊されるなど、生活全般への影響は深刻であり、本件被害が将来に及ぼす影響も計り知れず、本件の結果は余りにも重大である。心に深い傷を負った各被害者が、

被告人に対して、一生社会に戻ることをないよう
厳重な処罰を強く希望しているのも至極当然のこと
といえる。

(2) また、本件が被害者のみならず、その家族に
与えた精神的衝撃は深刻、重大で、日常生活に及
ぼした影響も多大である上、各被害者の親は、最
愛の我が子が受けた酷い仕打ちについて、その将
来に対する不安を覚えるとともに、被告人に対す
る怒りの気持ちを露わにし、被告人に対して峻烈
な処罰感情を抱いている。各被害者の親のなか
には、我が子の訴えによって被害を知り、その事情
聴取に立ち会うなどする過程で被害の深刻さに直
面し、今なお続く苦しみをともにする一方、親と
して我が子を被害に遭わせてしまったことに対す
る自責の念に駆られる者や、被告人の刑が軽くな
ることを懸念して慰謝料の受領を拒絶している者
もあり、慰謝料を受領した者においても、被害感
情が全く癒されておらず、被告人に対して厳罰を
強く希望している。この処罰感情は、本件被害の
内容、性質等からして十分納得できるものである。
そして、6名もの被害者の親が、当公判廷に出廷し
て意見陳述をし、被害直後から現在に至るまでの
被害者の痛々しい様子や被害者を支える家族の苦
悩、被害者の将来に対する不安、被告人に対する
激しい怒りの気持ちや厳罰を望む気持ちを切々と
訴える姿を目の当たりにするとき、改めて本件各
被害の深刻さを感じざるを得ない。

(3) 加えて、女兒を狙って連続して敢行された本
件各犯行が地域社会に及ぼしたであろう不安感や
恐怖感も容易に推測でき、この点も軽視できるも
のではない。

4 被告人は、小学校低学年から中学生くらいの女
子を見ると性的に興奮するというのであり、その
ような性欲の赴くまま、次々と本件各犯行に及ん
だもので、被害者の人格を全く顧みることのない
自己中心的で身勝手な動機には、酌量の余地が微
塵もない。

被告人は、わずか1年余りの間にいたいけな女兒
を狙って9件もの犯行を次々と敢行した上、本件以
外にも多数のわいせつ行為に及んだ旨を供述して

おり、この種事犯の常習性は顕著で、被告人の歪
んだ性格、資質、規範意識や性的嗜好には重大で
相当根深い問題があることも明らかである。

以上の事情によれば、本件各犯行の犯情は極めて
悪く、被告人の刑責は極めて重大というほかない
い。

5 弁護人は、少年法55条に基づく家庭裁判所への
移送を主張しているもので、この点について検討す
るに、前記のとおり、本件各犯行の犯情が極めて
悪質であること、被害者及びその親の処罰感情に
は、慰謝料を受領した者を含め、極めて厳しいも
のがること、本件が地域社会に与えたであろう
悪影響に、被告人の性格、資質等には極めて根深
い問題があること、その年齢などを総合勘案する
と、被告人には、もはや保護処分によるのは相当
でなく、刑事処分をもって臨むほかないというべ
きである。

6 他方で、被告人は、判示第2の犯行を除く各犯
行を認め、反省の情を示した上、被害者に対する
慰謝に努めるとともに、自己の問題点に気づき、
その解決に取り組んでいく旨述べていること、被
告人の親族において、判示第2の被害者に30万円、
第3の被害者に300万円、第5及び第6の各被害
者に100万円ずつをそれぞれ慰謝料として送金する
とともに、判示第1、第4、第7の各被害者に100
万円ずつ、第8及び第9の各被害者に300万円ず
つをそれぞれ遅延損害金とともに供託するなど、
慰謝の努力をしていること、被告人は、本件各犯
行当時16歳から18歳と未熟であり、その生育環
境にも恵まれなかったところなしとしないこと、
被告人には保護処分歴がないこと、被告人の母親
が、当公判廷に出廷し、被告人の問題点を認識し
つつ、社会復帰後の指導、監督を誓っていること
など、酌むべき事情も認められる。

7 検察官は、無期懲役刑を求刑しているところ、
本件各犯行の犯情は極めて悪質であり、被告人の
刑事責任は重大というほかないが、本件に現れた
一切の事実、事情に、前記のとおり酌むべき事
情を併せ考えると、有期懲役刑を選択した場合の
最も重い刑が少年法の規定により懲役5年以上10

年以下の不定期刑にとどまることを考慮しても、無期懲役刑に処するのは重きに失するといわざるを得ないので、有期懲役刑を選択した上で、その不定期刑の上限の刑によることとした。

(求刑 無期懲役, カッターナイフ 1 本没収)

〔予測モデル式からの若干の考察〕

予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく、すべての被害者数については、「(3-①) 強姦」が<3 名> (122.224), 「(3-②) 強姦未遂」が<1 名> (18.143), 「(3-③) 強制わいせつ」が<なし> (-13.951), 「(3-④) 強制わいせつ未遂」が<1 名> (28.917) となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④) 被害結果(傷害)」が<傷害: 全治不明> (-23.387) となり、その基本スコアは 131.946 となった。

本件は、「少年であった被告人が、16 歳から 18 歳にかけての 1 年余りの間に、東京都町田市内及び神奈川県相模原市内において、当時 7 歳から 14 歳の女兒を殊更に狙って、屋外で敢行した強制わいせつ 3 件 (判示第 1, 第 6, 第 7), 強制わいせつ未遂 (判示第 2), 強姦未遂 (判示第 4), 強姦 (判示第 8), 強姦致傷 (判示第 9) 各 1 件、被害者の自宅に侵入した上で敢行した住居侵入、強姦 (判示第 3), 同様に敢行した住居侵入、強制わいせつ (判示第 5) 各 1 件」からなる事案であり、おおむね 10 歳以下の<幼児性愛型>に準じた犯行であり、また、<連続強姦・強制わいせつ型>の犯行でもある(本件は、少年事件である)。本件は 2004 年の刑法一部改正(平成 16 年法律第 156 号)後の事案である。求刑が無期懲役であるのに対して、本判決では、懲役 5 年以上 10 年以下の不定期刑が宣告されている。

予測モデル式では、予測値を 231.710 と算出した(残差-111.710)。残差が大きくなったのは、本件が少年事件であったことが最大の理由であろう。ただ、無期懲役か有期懲役(懲役 5 年以上 10 年以下の不定期刑)が選択できるところ、本判決が有期懲役を選択したのは、①生育環境に恵まれない面があったこと、②「被告人の親族において、判示第 2 の被害者に 30 万円、第 3 の被害者に 300 万円、第 5 及び第 6 の各被害者に 100 万円ずつをそ

れぞれ慰謝料として送金するとともに、判示第 1, 第 4, 第 7 の各被害者に 100 万円ずつ、第 8 及び第 9 の各被害者に 300 万円ずつをそれぞれ遅延損害金とともに供託するなど、慰謝の努力をしていること」などの事情が、予測モデル式のカテゴリースコア以上に高く評価されたということだと仮説立てている。無期懲役については、本分析の対象外としたので、ここではその妥当性を検証し得ないのが残念である。

以上から、本件に関しては、有期懲役という観点からみた場合には、刑期が顕著に低いと言えるものの、「有期懲役刑を選択した場合の最も重い刑が少年法の規定により懲役 5 年以上 10 年以下の不定期刑にとどまること」(当時)ことから、必然的に「外れ値事例」となる事例であったと解される(なお、有期懲役を選択したことの妥当性については、ここでは検証し得ないので、今後の課題としたい)。

(5) 那覇地判平成 15 年 7 月 3 日 LEX/DB28095302 【住居侵入、強盗強姦未遂、強姦未遂、窃盗、強姦致傷、わいせつ目的略取未遂、強姦被告事件】

実績値 : 180	予測値 : 253.558
残差 : -73.558	標準化残差 : -2.179

〔事案の概要〕

(犯行に至る経緯)

被告人は、妻が妊娠中であつた平成 10 年ころに妻と性交できない不満などから女性の下着を盗んだり、のぞき見をしたりし、他人の住居に侵入し水着等を盗んだことで同年 5 月には住居侵入・窃盗罪で懲役 1 年執行猶予 3 年の判決を受けた。しかし、被告人はその後再びのぞき見、下着盗を繰り返すようになり、次第に性的欲求をエスカレートさせ、平成 13 年 2 月ころからは歩行中の女性の胸を触るなど痴漢行為をするようになり、同年 7 月ころには胸を触られた女子高生が驚愕して抵抗しなかったことから、強姦することへの抵抗感を薄めていくと同時に、同年 12 月ころからは家庭では妻と不仲となり妻との性交回数が減少したことから性的不満を募らせていた。

(罪となるべき事実)

第 1 被告人は、平成 14 年 2 月 12 日午後 11 時 40 分ころ、帰宅途中の A (当時 16 歳) を認め、同女を姦淫しよ

うと企て、沖縄県 b 郡 c 町 e 所在のコインランドリーから約 63 メートル東方の路上において、同女に対し、その肩を組んで「タバコをもらおう。」などと話しかけて気を引き、約 75 メートル並んで歩いた後、同町所在の株式会社 K 北西約 50 メートル地点の駐車場出入口にさしかかるや、突如同女の肩を掴んで抱き寄せ、さらにその首に背後から腕を回して締めつけるなどの暴行を加え、「おまえ殺そうな、刺そうな。」などと言って脅迫し、首を締めつけたまま同女を駐車場奥へと連れ込み、これらの暴行脅迫により同女の反抗を抑圧した上、同女を姦淫しようとしたが、同女が足を閉じて抵抗したため、その目的を遂げなかった。

第 2 被告人は、同月 18 日午後 7 時 40 分ころ、帰宅途中の B（当時 15 歳）を認め、同女を姦淫しようと企て、沖縄県 d 市 fL 株式会社先路上において、同女の肩を背後から掴んで抱きかかえ、「殺されなくなったら付き合え。」などと言った上、同女の着用していたネクタイを引っ張り「叫んだな。刺すよ。黙れ。」などと脅迫しながら、同女を同所から約 115 メートル先の砂利道へと連れ込み、同所において、同女に目隠しをして仰向けに押し倒すなどの暴行を加え、これらの暴行脅迫により同女の反抗を抑圧した上、強いて同女を姦淫し、その際、同女に対し、処女膜裂傷及び加療約 1 週間を要する左大腿後面、右大腿後面及び右下腿後面擦過傷の傷害を負わせた。

第 3 被告人は、一人暮らしの女性の居室に侵入して在室の女性を強姦しようと企て、同年 3 月 12 日午前 3 時 10 分ころ、a 市 gC（当時 34 歳）方にベランダ掃き出し窓から侵入し、同女に対し、室内にあった台所用ハサミを突き付け、「声を出すなよ、騒いだら刺すからな。」などと言った上、同女に目隠しをし、その顔面を平手で殴打し、背中を足蹴にするなどの暴行脅迫を加え、その反抗を抑圧して強いて同女を姦淫し、その際、前記暴行により、同女に対し、全治約 19 日間を要する恥骨上部左側切創の傷害を負わせた。

第 4 被告人は、一人暮らしの女性の居室に侵入して在室の女性を強姦しようと企て、同月 30 日午前 2 時 30 分ころ、a 市 hD（当時 19 歳）方に、ベランダ掃き出し窓の施錠を外して侵入し、同所において、同女をベッド上にうつぶせに押さえつけ、その背後から羽交い締めにした

上、所携のプラスドライバー（平成 15 年押第 3 号の 1）をその胸元に突き付け、「静かにしろ、殺すぞ。」などと言い、その顔面等を手拳等で多数回殴打し、さらに同女に目隠しするなどの暴行脅迫を加え、その反抗を抑圧し、強いて同女を姦淫しようとしたが、同女の友人である E が同室を訪れて呼び鈴を鳴らしたことから、犯行の発覚を恐れて同所における姦淫を断念してその目的を遂げず、その際、前記暴行により、同女に加療約 7 日間を要する右顔面打撲傷、右目結膜出血の傷害を負わせた。

第 5 被告人は、さらに、同女を姦淫する目的で同女を略取しようと企て、同日午前 3 時 20 分ころ、前記室内において、前記暴行脅迫により畏怖している同女に対し、その肩を抱きかかえ、「静かにしていないと殺す。」などと言って、同女が騒ぐなどした際にはその生命、身体に危害を加えかねない氣勢を示して脅迫し、同女を屋外に連れ出した上、前記 h 先路上に停めておいた第 2 種原動機付自転車前部座席に乗せて同車を運転疾走させたが、同所から約 80 メートル先の同市 i 先路上において、前記 E の運転する軽四輪乗用自動車に行く手を阻まれ、同女が前記原動機付自転車から降車したため、逮捕を恐れてそのまま逃走し、その目的を遂げなかった。

第 6 被告人は、一人暮らしの女性の居室に侵入して在室の女性を強姦しようと企て、同年 5 月 20 日午後 10 時 20 分ころ、a 市 jF（当時 25 歳）方にベランダ掃き出し窓から侵入し、同女に対し、所携のドライバーを突き付け、「殺されたいか。」などと言った上、その顔面を平手で多数回殴打し、同女に目隠しをするなどの暴行脅迫を加え、その反抗を抑圧して強いて同女を姦淫しようとしたが、自己の陰茎が勃起しなかったため、その目的を遂げなかった。

第 7 被告人は、一人暮らしの女性の居室に侵入して在室の女性を強姦しようと企て、同年同月 26 日午前 3 時ころ、a 市 kG（当時 19 歳）方にベランダ掃き出し窓から侵入し、同女に対し、所携のドライバーを突き付け、「騒ぐな、騒ぐと殺すぞ、刺すぞ。」などと言った上、同女に目隠しするなどの暴行脅迫を加え、その反抗を抑圧し、強いて同女を姦淫した。

第 8 被告人は、一人暮らしの女性を強姦する目的で同年 7 月 9 日午後 10 時 24 分ころ、前記第 7 記載の G 方ベランダに建物の壁をよじ登って侵入した。

第9 被告人は、同月10日午後8時ころ、金品窃取などの目的で、沖縄県b郡c町IH方に侵入し、I所有にかかるカーコンポ1台外5点（時価合計額約10万8,000円相当）を窃取した。

第10 被告人は、一人暮らしの女性の居室に侵入して在室の女性を強姦し、かつ金員を強取しようと企て、同年9月19日午後11時20分ころ、沖縄県b郡c町mJ（当時19歳）方にベランダ掃き出し窓から侵入し、同女に対し、いきなりその腹部を手拳で殴打し、さらに同女に目隠しをして、ベッド上に押し倒し、「黙れ。声を出すな。ちゃんと寝ろ。おまえは殺そうな。殺す。金はあるのか。」などと言いながら、その頭部、顔面等を掌、手拳等で多数回殴打するなどの暴行脅迫を加え、同女の反抗を抑圧して強いて同女を姦淫し、かつ金員を強取しようとしたが、同女に激しく抵抗されるなどしたためいずれもその目的を遂げず、その際、前記暴行により、同女に加療約2週間を要する頭部・顔面打撲、同擦創、頸椎捻挫等の傷害を負わせた。

【量刑の理由】懲役15年、プラスドライバー1本を没収

那覇地方裁判所は、本件の量刑に関し、以下のような理由を示した。

本件は、被告人が、平成14年2月から同年9月の間に住居侵入強盗強姦未遂1件、住居侵入強姦致傷2件、住居侵入強姦1件、住居侵入強姦未遂1件、強姦致傷1件、強姦未遂1件、住居侵入窃盗1件、住居侵入1件、わいせつ目的略取未遂1件を敢行したという事案である。

被告人は、主として自己の性的欲求に対する不満を解消するために本件各犯行を繰り返していったもので、いずれも自己中心的で卑劣な犯行であり、動機に酌量の余地はない。また、金欲しさから金品強取にも及ぶなどそれ自体身勝手な犯行というほかない。被告人は、最初は路上を通行中の被害者を襲っていたが、やがて一人暮らしの女性を狙ってその住居に侵入してその室内で犯行を重ねるようになり、窓の鍵を開けることや脅迫に用いるためのドライバーを用意して携帯し、両手に

靴下をはめて指紋が残らないようにし、タオルなどを頭に巻き、被害者には目隠しするなど手口を計画的かつ巧妙なものへとエスカレートさせた。犯行態様についても被害者の性器に異物を挿入したり、陰毛を剃ったり、ローブで胸部を縛るなど被害者の人格を無視した凌辱の限りを尽くし、抵抗する被害者には手拳で殴打するなど執拗な暴行を加え、最後には金品も要求するまでになっており、悪質極まりない。本件強姦関係の被害者7名のうち3名は姦淫自体について既遂の被害を受け、うち2名を含む4名は傷害の被害を受けており、その余の被害者についてもたまたま難を逃れたというべきものであって、その結果自体真に重大である。もとより被害者らには何らの落ち度もなく、突然襲われた衝撃は大きく、とりわけ自宅で被害を受けた被害者らは転居を余儀なくされ、未だ被害にあったショックから立ち直れない者もいるように、被害者らの受けた身体的、精神的被害も極めて重大であって、被害者らが被告人の厳重処罰を望み、被告人には2度と社会に戻ってきて欲しくないなどと述べていることも心情として十分に理解できるところである。それにもかかわらず、被告人自身は被害者らに対し慰謝の措置も講じていない。さらに、被告人は、前刑の住居侵入・窃盗罪の執行猶予期間満了後1年足らずで本件犯行に至り、本件犯行を繰り返すうち、女性を強いて姦淫すること自体に性的興奮を覚え、機会があればいつでも強姦をしようという気持ちを持つようになり、さらには被害女性の畏怖に乗じて金品を奪取しようと企むなど被告人の犯罪傾向の深化は顕著である。加えて、本件は、a市n地区とc町周辺での連続強姦事件として報道されたことから、周辺地域の女性を恐怖に陥れ、社会に与えた影響も無視できないものといえる。

以上の諸事情に照らすと、被告人の刑事責任は極めて重大である。

しかし他方、被告人は当公判廷で被告人なりに一応の反省の態度を示していること、被告人の姉が一部の被害者らに謝罪するなどしている上、今後の被告人に対する助力を申し出ていること、妻

子があることなど被告人にとって酌むべき事情も認められる。

以上の事情を総合考慮し、主文のとおり刑を定めた。

(求刑 懲役 17 年、主文同旨の没収)

〔予測モデル式からの若干の考察〕

予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく、すべての被害者数については、「(3-①)強姦」が<3 名>(122.224)、「(3-②)強姦未遂」が<4 名>(46.063)、「(3-③)強制わいせつ」が<なし>(-13.951)、「(3-④)強制わいせつ未遂」が<なし>(-1.615)となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④)被害結果(傷害)」が<傷害:全治 1 か月以内>(18.535)となり、その基本スコアは 171.256 となった。

本件は、「平成 14 年 2 月から同年 9 月の間に住居侵入強盗強姦未遂 1 件、住居侵入強姦致傷 2 件、住居侵入強姦 1 件、住居侵入強姦未遂 1 件、強姦致傷 1 件、強姦未遂 1 件、住居侵入窃盗 1 件、住居侵入 1 件、わいせつ目的略取未遂 1 件」からなる事案であり、<連続強姦・強制わいせつ型>の犯行である。本件は 2004 年の刑法一部改正(平成 16 年法律第 156 号)前の事案であり、したがって、併合罪加重の上限が 20 年となるところ、求刑が懲役 17 年であるのに対して、本判決では懲役 15 年が宣告されている。

予測モデル式では、予測値を 253.558 と算出した(残差-73.558)。残差が大きくなったのは、本件が 2004 年の刑法一部改正(平成 16 年法律第 156 号)前の事案であったことが関係しているものと思われる。仮説的に、実績値を 1.5 倍して予測値との残差を再計算してみると、残差は 52.442 になる。これであれば、予測モデル式に照らしてみても、妥当な刑期判断であったと評価することができよう。よって、本判決に関して言えば、2004 年の刑法一部改正(平成 16 年法律第 156 号)前の事案であったことが関係しているのであって、「外れ値事例」とは言えないものと解される。

なお、本件との関係で予測モデル式に対する批判的検討をしておく、「(3-②)強姦未遂」の<4 名>のカテ

ゴリースコアが低すぎることは否めないであろう。サンプルを増やして、予測モデル式をさらに検証することが必要である。

(6) 旭川地判平成 15 年 3 月 27 日 LEX/DB28085563 【強姦致傷、準強姦、強姦、窃盗、住居侵入、準強制わいせつ、強姦未遂、準強姦未遂被告事件】

実績値 : 240	予測値 : 324.554
残差 : -84.554	標準化残差 : -2.505

〔事案の概要〕

第 1 被告人は、平成 10 年 8 月 2 日午前 3 時 48 分ころ、旭川市 a 条 b 丁目の▲号室 A 方において、同方寝室で就寝中の A(当時 22 歳)が熟睡のため抗拒不能の状態にあるのを利用してこれを姦淫しようと企て、無施錠のベランダ窓の網戸を外して、同窓から同方に侵入した上、同所において、同女の陰部付近を手指で弄ぶなどしたが、同女が気づき、隣に就寝中の夫に助けを求めようとしたことなどから、その目的を遂げなかった。

第 2 被告人は、平成 11 年 4 月 14 日午後 9 時 15 分ころ、北海道上川郡 f 町 g 条 h 丁目の路上において、通行中の B(当時 16 歳)を強いて姦淫しようと企て、同女に対し、その口を手で塞ぎ、身体を抱き抱えて同所付近空き地に連れ込み、その場に押し倒すなどの暴行を加え、その反抗を抑圧した上、同女の陰部を手指で弄んだが、同女が悲鳴を上げるなどして抵抗したため、その目的を遂げなかった。

第 3 被告人は、同年 5 月 31 日午後 11 時 40 分ころ、旭川市 a 条 k 丁目の■号室 C 方において、同方寝室で就寝中の D(当時 30 歳)を強いて姦淫しようと企て、無施錠の玄関から同方に侵入し、同所において、同女所有に係るパンティー2枚及びブラジャー1枚(時価合計約 800 円相当)を窃取した上、同女に対し、その口を手で塞ぎ、その顔面を平手で数回殴打するなどの暴行を加え、「おとなしくしろ。」などと脅迫して、その反抗を抑圧した上、同女の陰部を舐め、手指で弄ぶなどしたが、被告人の隙を見て同女が逃走したため、その目的を遂げなかった。

第 4 被告人は、同年 7 月 14 日午後 10 時 50 分ころ、同市 m 条 j 丁目の●号室 E 方において、同方浴室でシャワ

一を浴びていた F（当時 29 歳）を強いて姦淫しようと企て、無施錠の居間窓から同方に侵入し、浴室内の同女に対し、その口を手で塞ぎ、転倒させるなどの暴行を加え、その反抗を抑圧した上、その陰部を手指で弄んだが、同女が被告人の左手指をかむなどして抵抗したため、その目的を遂げず、その際、前記暴行に対する同女の前記抵抗により、同女に対し加療約 97 日間を要する左下顎 1, 2, 3 番及び右下顎 1 番の歯牙脱臼、左下顎 2, 3 番の歯肉裂傷の傷害を負わせた。

第 5 被告人は、同年 9 月 2 日午前 3 時 10 分ころ、同市 o 条 c 丁目の G 方において、同方寝室で就寝中の H（当時 16 歳）を強いて姦淫しようと企て、無施錠の玄関から同方に侵入し、同所において、同女に対し、その身体に馬乗りになり、顔を衣服で覆い、口を手で塞ぐなどの暴行を加え、「静かにしないと殺すぞ。」などと語気鋭く申し向けて脅迫するなどし、その反抗を抑圧した上、強いて同女を姦淫した。

第 6 被告人は、平成 12 年 2 月 16 日午後 9 時 20 分ころ、同市 o 条 k 丁目の路上において、帰宅のため同所付近を徒歩で通行中の I（当時 19 歳）を認めるや、やにわに劣情を催し、同女の背後から接近し、両腕で同女の両肩付近を抱き抱え、その口元付近を手で塞ぎ、同女をその場に転倒させるなどの暴行を加えたほか、「静かにしろ。」などと脅迫したが、引き続き強いて同女を姦淫しようと企て、同女を左脇に抱え込むなどして同市 o 条 k 丁目の p 敷地内に連行し、同所において、同女のパンティーを引き下ろして陰部を舐めるなどした上、「寝ろ。」などと申し向けて同女を同所に仰臥させ、前記一連の暴行及び脅迫により同女の反抗を抑圧して強いて同女を姦淫した。

第 7 被告人は、同年 3 月 9 日午後 3 時ころ、同市 h 条 g 丁目の△号室 J 方において、同方に帰宅した J（当時 18 歳）を強いて姦淫しようと企て、無施錠の玄関から同方に侵入し、同所において、同女に対し、その口を手で塞ぐなどの暴行を加え、その臀部を手で触るなどしたが、同方同居人 K に発見されたため、その目的を遂げなかった。

第 8 被告人は、同年 5 月 31 日午後 9 時 20 分ころ、同市 r 条 i 丁目の歩道上において、歩行中の L（当時 16 歳）を強いて姦淫しようと企て、同女に対し、その口を背後

から手で塞ぎ、腕を引っ張って同所付近に設置された下り階段に同女を引きずり込んで転倒落下させる暴行を加え、その反抗を抑圧した上、同階段踊り場に仰向けに転倒した同女のパンティー等を引き下げてその陰部を手指で弄び、さらに、同女の腕を引いて同市 s 町 t 番地□方敷地内に連行し、佇立した同女のパンティー等を引き下げてその陰部を舐め、手指で弄んだが、被告人の隙を見て同女が逃走したため、その目的を遂げず、その際、前記暴行により、同女に加療約 10 日間を要する頭部外傷、右肘、大腿、下腿及び左膝挫傷並びに右肘及び左膝挫創の傷害を負わせた。

第 9 被告人は、同年 7 月 27 日午前 1 時 35 分ころ、同市 m 条 u 丁目の○号室 N 方において、同方寝室で就寝中の N（当時 21 歳）に対しわいせつな行為をしようと企て、無施錠の洋室窓から同方に侵入し、同所において、同女所有に係るパンティー1 枚及びブラジャー1 枚（時価合計約 1,300 円相当）を窃取した上、同女が睡眠により抗拒不能であることに乗じ、同女の陰部を手指で弄んでわいせつな行為をした。

第 10 被告人は、同年 12 月 20 日午後 7 時 15 分ころ、同市 x 条 b 丁目の歩道橋上において、通行中の O（当時 19 歳）を強いて姦淫しようと企て、同女に対し、その両肩をつかむなどした上、転倒した同女の口を手で塞ぐなどの暴行を加え、その反抗を抑圧した上、同女の陰部を手指で弄ぶなどしたが、同女が抵抗したため、その目的を遂げなかった。

第 11 被告人は、平成 13 年 7 月 15 日午前 2 時ころ、同市 y 条 g 丁目の★号室 P 方において、同方寝室で就寝中の Q（当時 25 歳）に対しわいせつな行為をしようと企て、無施錠の同寝室窓から同方に侵入し、同所において、同女が睡眠により抗拒不能であることに乗じ、同女のパンティーの中に手指を入れて陰部等を弄んでわいせつな行為をした。

第 12 被告人は、同日午前 3 時 15 分ころ、同市 b 条 g 丁目の☆室 R 方において、同方寝室で就寝中の S（当時 19 歳）に対しわいせつな行為をしようと企て、無施錠の玄関から同方に侵入し、同所において、同女が睡眠により抗拒不能であることに乗じ、同女のパンティーの中に手指を入れて陰部を弄び、乳房を手で揉むなどしてわいせつな行為をした。

第 13 被告人は、同月 24 日午前 3 時過ぎころ、同市 h 条 j 丁目の◎号室 T 方において、就寝中の U（当時 23 歳）が熟睡のため抗拒不能の状態にあるのを利用してこれを姦淫しようと企て、無施錠の同方西側寝室窓から同方に侵入し、同所において、同女のジャージズボン及びパンティーを引き下ろしてその陰部に手指を挿入した上、その顔面等にタオルケットを掛けるなどし、さらに、目を覚ました同女が半覚半睡状態の中で被告人を夫の T と錯覚して性交に応じようとしているのに乗じて同女を姦淫し、もって同女の抗拒不能に乗じて同女を姦淫した。

第 14 被告人は、婦女を姦淫するなどの目的で、同年 8 月 15 日午前 0 時 30 分ころ、同市 a 条 b 丁目の●●号室 V 方に、同方居間窓の網戸を取り外して同窓から侵入し、同所において、同人所有に係る現金約 1 万 8,000 円を窃取した。

第 15 被告人は、同日午前 2 時 30 分ころ、同市 a 条 d 丁目の■■号室 W 方において、就寝中の W（当時 20 歳）を強いて姦淫しようと企て、無施錠の同方居間兼台所窓から同方に侵入した上、同所において、同女の頭部を数回殴打しながら、「うるさい、黙れ、静かにしろ。」、「1 人やるのも 2 人やるのも同じだ。」などと脅迫し、ガムテープを同女の口元に貼り付け、さらに同女の両腕を後ろ手に回してその両手首をガムテープで緊縛するなどの暴行を加え、前記一連の暴行及び脅迫により同女の反抗を抑圧して強いて同女を姦淫し、その際、同女に対し、全治まで約 3 日間を要する処女膜全周の擦過傷の傷害を負わせた。

第 16 被告人は、同年 11 月 28 日午後 8 時 50 分ころ、同市 a 条 g 丁目の路上において、帰宅のため同所付近を徒歩で通行中の Y（当時 17 歳）を認めるや、強いて同女を姦淫しようと企て、同女の背後から接近し、右腕で同女の目を覆い、左腕で同女の腹部付近を抱き抱えるなどの暴行を加えながら、「殺されたくなかったらおとなしくしろ。」などと脅迫し、さらに、同女の頭部を右脇に抱え込み、「声出すな。殺されたくなかったらおとなしくしている。」などと脅迫して同女を同市 a 条 g 丁目の Z 方敷地内に連行し、引き続き、同所において、同女に対し、「目を開けるな。目つぶっている。」、「寝ろ。」などと申し向けて同女を同所に仰臥させ、さらに、同女のハーフパンツ及びパンティーを引き下ろして所携のカ

ッターナイフ（旭川地方検察庁平成 14 年領第 8 号の 1）をその左大腿部に押し当てるなどの暴行を加え、前記一連の暴行及び脅迫により同女の反抗を抑圧して強いて同女を姦淫し、その際、同女に対し、全治まで約 4 日間を要する膣入口部左右両側粘膜擦過傷の傷害を負わせた。

第 17 被告人は、同年 12 月 5 日午後 8 時 40 分ころ、同市 h 条 j 丁目の路上において、通行中の AA（当時 17 歳）を強いて姦淫しようと企て、同女に対し、その口を背後から手で塞ぎ、頭髮及び着衣をつかんで同センター敷地内に引きずり込むなどの暴行を加え、所携の前記カッターナイフを突き付けて「騒ぐな。騒いだら殺す。」などと語気鋭く申し向けて脅迫するなどし、その反抗を抑圧した上、強いて同女を姦淫した。

第 18 被告人は、同月 19 日午後 8 時 20 分ころ、同市 f 条 j 丁目の路上において、通行中の BB（当時 17 歳）を強いて姦淫しようと企て、同女に対し、その口を背後から手で塞ぎ、その場に引き倒すなどの暴行を加え、「静かにしろ。」などと語気鋭く申し向けて脅迫するなどし、その反抗を抑圧した上、同女の陰部を手指で弄んだが、同女が抵抗したため、その目的を遂げず、その際、前記暴行により、同女に対し加療約 12 日間を要する頭部打撲等の傷害を負わせた。

【量刑の理由】懲役 20 年、カッターナイフ 1 本を没収
旭川地方裁判所は、本件の量刑に関し、以下のような理由を示した。

本件は、慢性的に性的欲求不満を募らせ、女性全般に対して不信感を抱いていたという被告人が、自己の性欲を充たし、女性に対する征服感等を味わうために、約 3 年 4 か月の間に連続して敢行した、路上等を通行中の女性に対する強姦致傷 3 件、強姦 2 件、強姦未遂 2 件、不法に侵入した女性宅での強姦致傷 2 件、強姦 1 件、強姦未遂 1 件、準強姦 1 件、準強姦未遂 1 件、準強制わいせつ 2 件、不法に侵入した女性宅で下着を窃取した上での強姦未遂 1 件、準強制わいせつ 1 件、強姦等の目的で不法に侵入した居宅で現金を窃取した窃盗 1 件の事案である。

被告人は、幼少時に実母が病死したため、小学

校に入学するころまで施設などで生活した時期を経て実父の再婚により、実父や継母らと生活するようになったが、継母から十分な愛情を注がれていないと感じていたため、継母に甘えることができず、母親といふことで得られるはずの安心感を抱くこともできなかった。被告人は、高校中退後、北海道内において、実父が経営する運送業の手伝いをして稼働していたが、21歳ころに初めて女性と交際し、その後、複数の女性と交際したものの、いずれの女性も被告人以外に交際する男性が出来たことなどが原因で被告人の元を去っていったことなどから、交際相手だった女性らに裏切られた思いがして憤りを感じたのみならず、次第に女性全般に対して不信感を抱くようになった。被告人は、実父の会社が倒産したことなどが原因で平成3年ころに栃木県に引っ越したが、旭川で知り合い交際を続けていた女性と平成4年に結婚した。しかし、結婚後は、妻に性交渉を求めても拒否されることが多くなり、背後に別の男性の影を感じて、妻との性交渉だけでは性欲を満たすことができず、次第に性的欲求不満を募らせるようになった。そして、そのころ、男子トイレの清掃中に入った女子トイレで女性器を覗き見て覚えた興奮を忘れられずに性的欲求不満のはけ口として女子トイレや民家を覗き見することを繰り返すようになった。被告人は、北海道に帰りたいという妻の希望があったことや異母弟のした借金の取立てに追われることに疲れたことなどのことがあって、平成9年8月ころに旭川に転居し、自営で軽貨物の運送業を営み始めたが、依然として妻との性生活には満足できず、仕事上のストレスや不安なども重なって欲求不満状態であったところ、同年11月ころに、女性宅を覗き見した際に在室していた女性を見て、性交したいとの衝動を抑えることができず、無施錠の玄関から侵入して同女を強姦したということがあって、その際に味わった被害女性に対する征服感や女性を襲うスリルなどからくる快感と興奮を忘れることができずにいたものの、冬場は民家の窓等が閉められてしまうことや仕事の疲れなどからしばらくは覗き見などはしないでした。

しかし、平成10年8月2日、性欲の赴くまま、若い女性がいる部屋に侵入して強姦しようなどと考え、女性がいそうな部屋を覗き見して歩くなどした後、判示第1記載のアパートにおいて、女性が全裸であったように見えたことや、同女が就寝中であったことから、被告人を夫と勘違いして性交に応じるのではないかなどと考えて、同女を強姦することにし、無施錠のベランダ窓から侵入し、就寝中の同女にわいせつな行為をするなどして判示第1記載の犯行に及んだ。そして、その後も依然として被告人の性的欲求不満は解消されず、軽トラックに乗って配達の仕事中に若い女性を見かけた際や、仕事を終えて帰宅後に女性宅を物色しに出掛け、標的となる女性を見付けては、性衝動を抑えられずに判示第2ないし第5記載の各犯行に及んだ。

被告人は、妻の男性関係や性交渉を拒むことに対する不信感などから離婚を決意し、平成12年1月に協議離婚した。そして離婚前から交際していた女性も、他に交際する男性ができて被告人の元を去っていったことから、同女らに裏切られたという感情が募り、いっそう女性に対する憎しみや怒りを抱くようになった。そして、その後も性的欲求不満等を満たすために、判示第6ないし第8記載の各犯行に及ぶとともに女性宅を覗き見するなどしていたところ、同年6月に女性宅を覗き見していたことを住人らに発見されて、警察で取調べを受けたが、前記強姦等の余罪について申告せず、被告人の犯行であることも警察に発覚していなかったことなどから、軽犯罪法違反の罪で科料に処せられるに止まった。その後、被告人は、しばらくは覗き見も控えて、いわゆる性風俗業を利用するなどして性欲を処理していたが、次第にそれだけでは性欲を満たすことができなくなって、女性宅で覗き見などをするようになり、標的となる女性を見付けるや性衝動を抑えられず、判示第9ないし第13及び第15ないし第18記載の各犯行に及ぶとともに、姦淫等の目的で侵入した居宅で現金を窃取する判示第14記載の犯行に及んだものである。

一連の犯行は、慢性的に性的欲求不満状態であ

った被告人が、被害女性の人格や性的自由を一顧だにせず、自己の獣欲を満たすとともに、かねて不信感を募らせていた女性を傷つけて自己の意のままに蹂躪し、征服感とスリルを味わいたいという極めて自己中心のかつ欲情的な動機から行ったものである上、窃盗については利欲的でもあり、いずれの犯行動機も酌量の余地は微塵もない。また、犯行態様は、女性宅を覗き見して、標的となる女性を見付けるや、無施錠の玄関や窓から侵入し、女性の頭部を殴打し、ガムテープを口元に貼り付け、両手首をガムテープで緊縛するなどの暴行を加えたり、殺害をほのめかして反抗を抑圧し、あるいは、女性が睡眠中で抗拒不能状態にあることを利用して、姦淫行為やわいせつ行為に及び、さらに、路上等を通行中の女性に背後から近づいて口を手で塞ぎ、暗がりにはきずり込むなどの暴行を加え、カッターナイフを突き付け、騒いだら殺害する旨申し向けて脅迫するなどして姦淫行為やわいせつ行為に及んだものであって、その場の状況を見定めた臨機応変な行動は狡猾かつ悪辣であり、いずれの犯行態様も、卑劣かつ悪質極まりない。また、住居侵入を伴う犯行において、侵入時には、付近の自転車置き場などから持ち出したタオルで鼻から下の顔半分を覆い隠したり、被害者宅の網戸等に指紋が付着しないよう革手袋や軍手をはめるなどし、侵入後、事前に電話器のジャックを抜いて警察への通報を遅らせる工作をしたり、玄関の施錠を解いて逃げ道を確保したりしており、犯行発覚の防止や遅延に向けた準備を整える周到さも窺える。さらに、住居侵入を伴う犯行においては、女性のみ在室している場合のみならず、女性と同室や別室で男性が就寝していることも意に介さずに、姦淫行為やわいせつ行為に及んでいること、屋外での犯行についても、住宅街にある公道上や、歩道橋上など人目に付きやすい場所でも敢行していることなどからすれば、非常に大胆でもある。強姦致傷の被害者は5名に上り、それぞれの傷害の程度は軽いなどとは到底いえない。

本件の性的被害者は17名もの多数に及ぶが、陵辱の限りを尽くされた各被害者の衝撃と恐怖、絶

望感や屈辱感等の精神的苦痛及び肉体的苦痛は察するに余りある。被害者の中には、被害後も些細な物音に過敏に反応して不安感を覚えるなど心身に変調を来す者、睡眠障害に悩まされる者、夜道を一人で歩くことができなくなった者、男性不信に陥った者、被告人の子供を妊娠したのではないかとの不安に心を痛める日々を過ごした者、転居を余儀なくされた者などがおり、各人が様々な形で二次的被害に苦しんでいる。被害者の中には、高校生を含む未成年者が10名も含まれており、それら若い被害者の将来に及ぼす悪影響も憂慮される。被告人は、各被害者に対して何ら慰謝の措置を講じていないのであって、各被害者やその家族が様に激烈な処罰感情を抱いているのも至極当然である。欲望のおもむくままに多数の犯行を重ね、何の落ち度もない被害女性を心身ともに傷つけた被告人の規範意識及び倫理観の欠如は甚だしい。本件一連の犯行は、この種性犯罪の事案としては非常に件数が多く、常習性は顕著である。被告人の刑事責任は極めて重い。

そうすると、被告人は、本件各犯行を全面的に認めて、まことに遅ればせながらではあるが反省の態度を示していること、更生の意欲を有していること、前記の科料前科を除いて前科前歴はないこと、その他被告人の生育歴、稼働歴、年齢、身柄拘束期間等被告人のために酌むべき諸事情を最大限考慮しても、主文掲記の刑を科すのを相当と認める。

(求刑 懲役20年、没収)

[予測モデル式からの若干の考察]

予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく、すべての被害者数については、「(3-①)強姦」が<5名以上>(185.434)、「(3-②)強姦未遂」が<5名以上>(5.283)、「(3-③)強制わいせつ」が<3名>(32.959)、「(3-④)強制わいせつ未遂」が<なし>(-1.615)となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④)被害結果(傷害)」が<傷害：全治2週間以内>(11.886)

となり、その基本スコアは 233.947 となった。

本件は、「慢性的に性的欲求不満を募らせ、女性全般に対して不信感を抱いていたという被告人が、自己の性欲を充たし、女性に対する征服感等を味わうために、約3年4か月の間に連続して敢行した、路上等を通行中の女性に対する強姦致傷3件、強姦2件、強姦未遂2件、不法に侵入した女性宅での強姦致傷2件、強姦1件、強姦未遂1件、準強姦1件、準強姦未遂1件、準強制わいせつ2件、不法に侵入した女性宅で下着を窃取した上での強姦未遂1件、準強制わいせつ1件、強姦等の目的で不法に侵入した居宅で現金を窃取した窃盗1件」からなる事案であり、17名もの被害者がいる＜連続強姦・強制わいせつ型＞の犯行である。本件は2004年の刑法一部改正（平成16年法律第156号）前の事案であり、したがって、併合罪加重の上限が20年となるところ、求刑が懲役20年であるのに対して、本判決では懲役20年が宣告されている。当時の有期刑の上限の判決ということになる。

予測モデル式では、予測値を 324.554 と算出した（残差-84.554）。残差が大きくなったのは、本件が2004年の刑法一部改正（平成16年法律第156号）前の事案であったことが関係しているものと思われる。仮説的に、実績値を1.5倍して予測値との残差を再計算してみると、残差は 35.446 になる。よって、本判決に関して言えば、前記的那覇地判平成15年7月3日 LEX/DB28095302 と同様に、2004年の刑法一部改正（平成16年法律第156号）前の事案であったことが関係しているのであって、「外れ値事例」とは言えないものと解される。

なお、本件との関係で予測モデル式に対する批判的検討をしておくと、やはり、「(3-②) 強姦未遂」の＜5名以上＞のカテゴリースコアが低すぎることは否めないであろう。サンプルを増やして、予測モデル式をさらに検証することが必要である。

(7) 岡山地判平成15年3月12日 LEX/DB28085414【道路交通法違反、強姦致傷、監禁被告事件】

実績値：48	予測値：146.511
残差：-98.511	標準化残差：-2.918

【事案の概要】

第1 被告人は、平成12年5月15日午前8時23分こ

ろ、道路標識によりその最高速度が80キロメートル毎時と指定されている兵庫県赤穂市A所在の山陽自動車道上り87.9キロポスト付近道路において、その最高速度を77キロメートル超える157キロメートル毎時の速度で普通乗用自動車を運転して進行した。

第2 被告人は、同月24日午前1時30分ころ、岡山県玉野市B町所在の甲方2階乙の居室において、強いて同女を姦淫しようと企て、いきなり同居室の電気を消した上、同女に対し、「騒ぐな。」、「殺すぞ。」と語気鋭く申し向けて脅迫するとともに、その上に馬乗りとなり、その口を手でふさぐなどの暴行を加え、その反抗を抑圧して強いて同女を姦淫し、その際、前記姦淫により、同女に対し、加療約1週間を要する陰唇後連部皮内傷の傷害を負わせた。

第3 被告人は、同年6月11日午前5時22分ころ、道路標識によりその最高速度が80キロメートル毎時と指定されている前記第1記載の場所付近の道路において、その最高速度を55キロメートル超える135キロメートル毎時の速度で普通乗用自動車を運転して進行した。

第4 被告人は、車で走行中の女性に因縁を付け、自動車内に監禁し、人目につかない場所まで連行して強いて姦淫しようと企て、同年8月30日午前1時30分ころ、岡山市D所在の丙方付近路上において、丁が運転する普通乗用自動車（軽四）の進路をふさぐように自己の運転する自動車を停めて、同女の運転する自動車を停車させ、同女に対し、「なんちゅう運転しようるんなら。」などと因縁を付け、同女が運転席の窓ガラスを開けるや、同車のドアロックを開錠し、無理矢理同女を同車の助手席に押しやって運転席に乗り込み、直ちに同所から同車を発進させて疾走し、同日午前2時ころ、同市E所在の株式会社F店南東約800メートル先のG山山中の路上まで同女を連行し、同所に停車した同車内において、同女に対し、「殺しちゃらあ。」などと怒号して脅迫するとともに、その首を両手で締め付けたり、車外に逃げ出した同女の髪をつかんでその顔面を路面に打ち付けたり、仰向けにした同女の上半身の上に座り、体重をかけて尻で押さえつけたり、同女を仰向けに押し倒して覆い被さるなどの暴行を加え、同所付近路上において、その反抗を抑圧して強いて同女を姦淫し、その際、前記暴行により、同女に加療約1週間を要する頸部・顔面擦過創、右肋

骨・右肩打撲等の傷害を負わせるとともに、その後、さらに、同車を同市 H 所在の I 店前まで疾走させ、同日午前 2 時 40 分ころ、同所において、同女が隙を見て同車から逃げ出すまでの間、同女を同車内又は同車の周辺から脱出することを困難にして同女を不法に監禁した。

〔量刑の理由〕 懲役 4 年

岡山地方裁判所は、本件の量刑に関し、以下のような理由を示した。

本件は、強姦致傷 1 件、強姦致傷と監禁 1 件、道路交通法違反（速度制限違反）2 件の事案である。

まず、量刑上最も重い判示第 4 の罪についてみるに、被告人は、面識のない被害者に対し、何の落ち度もないにもかかわらず因縁を付け、突然、同女の車に無理矢理乗り込み、同車を勝手に運転して疾走させて同女を監禁し、深夜、人気のない山中に連れ込み、同女の顔面を地面に打ち付けたり、意識がもうろうとするほど首を締め付けたりし、下半身の着衣を脱がされたまま必死で逃げようとしていた被害者を追いかけて姦淫し、膣内で射精に及んだもので、自らの欲望の赴くまま、ほしいままに敢行した犯行の態様は粗暴かつ執拗である。被害者は、判示の頸部・顔面擦過傷等の傷害を負った上、精神的にも深く傷つき、被告人の現在の状況を知ってもなお、激しい処罰感情を有している。しかるに、被害弁償はなく、その見込みもない。

判示第 2 の罪についても、被告人は、深夜、面識のない被害者の居室内で、就寝中の同女に対し襲いかかり、陰茎をくわえさせたり、乳首をかんだり、陰部に指を挿入した後、姦淫に及んで膣内で射精しており、犯行態様は悪質である。これにより、被害者は加療約 1 週間を要する判示傷害を負っており、その精神に与えた衝撃も大きく、同女も被告人の現状を知ってもなお、厳重な処罰を望んでいる。しかるに、被害弁償も、その見込みもないことは同様である。

判示第 1 及び第 3 の速度制限違反についても、制限速度を毎時 55 キロないし 77 キロ超過するもの

である上、常習的に敢行していたことも窺われる。

これらに加え、被告人には前記累犯前科を含む前科が 8 犯あり、そのうち懲役前科が 7 犯、粗暴犯の前科が 4 犯あることからすると、被告人の犯情は悪く、その刑責は重いといわざるをえない。

しかしながら、被告人は、判示第 4 の罪を敢行した後、自動車で逃走中、自損事故を起こし、自動車が大破して自らも頭部に重傷を負って生死の境をさまよい、後に一命を取りとめたものの、判示第 2 及び第 4 の各犯行の記憶を全く失っているほか、知能程度が一時は 6 歳ないし 7 歳程度まで低下し、後遺症である低血圧症や突然の意識障害に見舞われることもあり、両親の生活援助が不可欠の状況になっており、その性格は別人のように変化して穏やかとなり、今後、犯行以前のような粗暴で犯罪傾向の高い人格、行動に戻ることはなくなっている。そして、母親が公判廷に出頭し、今後の監護と援助を約束している。

以上の点、ことに被告人の現在の心身の状況等を考慮し、被告人に対しては、主文の刑に止めるのが相当であると判断した。

（求刑 掲載なし）

〔予測モデル式からの若干の考察〕

予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく、すべての被害者数については、「(3-①) 強姦」が<2 名> (56.513) , 「(3-②) 強姦未遂」が<なし> (-10.387) , 「(3-③) 強制わいせつ」が<なし> (-13.951) , 「(3-④) 強制わいせつ未遂」が<なし> (-1.615) となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④) 被害結果（傷害）」が<傷害：全治 2 週間以内> (11.886) となり、その基本スコアは 42.446 となった。

本件は、「強姦致傷 1 件、強姦致傷と監禁 1 件、道路交通法違反（速度制限違反）2 件」からなる事案である。本件は 2004 年の刑法一部改正（平成 16 年法律第 156 号）前の事案であり、したがって、併合罪加重の上限が 20 年となるところ、本判決では懲役 4 年が宣告されている。

予測モデル式では、予測値を 146.511 と算出した（残

差-98.511)。残差が大きくなった理由として、まずは、本件が2004年の刑法一部改正（平成16年法律第156号）前の事案であったことが関係しているということを仮説立てた。実績値を1.5倍して予測値との残差を再計算してみたところ、残差は-74.511になる。この数値でも、標準化残差は-2.0を下回ることになるので、本件は、刑期が顕著に低い「外れ値事例」という位置づけになろう。

さて、本判決がなぜこのような顕著に低い量刑を行ったのかを推察してみると、再犯可能性の低さと身元引受け体制について、予測モデル式で算出したカテゴリースコアよりも高いスコアで評価したということが伺える。本判決の量刑理由において、「被告人は、判示第4の罪を敢行した後、自動車で逃走中、自損事故を起こし、自動車が大破して自らも頭部に重傷を負って生死の境をさまよい、後に一命を取りとめたものの、判示第2及び第4の各犯行の記憶を全く失っているほか、知能程度が一時は6歳ないし7歳程度まで低下し、後遺症である低血圧症や突然の意識障害に見舞われることもあり、両親の生活援助が不可欠の状況になっており、その性格は別人のように変化して穏やかとなり、今後、犯行以前のような粗暴で犯罪傾向の高い人格、行動に戻ることはなくなっている。そして、母親が公判廷に出頭し、今後の監護と援助を約束している」と言及されている。本判決では、判示第2・第4の各被害者に対して、「被害弁償はなく、その見込みもない」ことや、両被害者は激しい処罰感情を有していることなどを指摘しているが、これらを勘案した場合、〔筆者の推測が正しいという前提に立った上で〕逃走中による事故が原因で生じた人格の変容による再犯可能性の低さととのバランスが果てしてとれているのかどうかは再考の余地があるように思われる。その意味でも、本判決はやはり、「外れ値事例」の1つとして見るべきであると解される。

（8）岡山地判平成14年10月23日LEX/DB28085177【強姦，同未遂，銃砲刀剣類所持等取締法違反，強姦致傷，強制わいせつ致傷，暴行被告事件】

実績値：120	予測値：231.710
残差：-111.710	標準化残差：-3.309

〔事案の概要〕

第1 被告人は、自転車で通行中のA（当時20歳）を認めるや、劣情を催し、強いて同女を姦淫しようと企て、平成13年5月5日午後11時45分ころ、岡山県倉敷市a町b番地所在の同女方玄関前において、「自動販売機所に行って話しようや。」などと誘い、同女がこれを断って同女方玄関に向けて歩き始めるや、両手で後ろから同女の両腕付け根を鷲掴みにして押しやるなどして、同女を同所から同市a町c番地付近歩道上に連れだし、同所において、同女に対し、その背後から、左腕を同女の首に巻き付け、右手に所持したナイフを同女の顔面に突き付け、「これ、何か分かる。わい、さっき人を殺してきたんじゃ。もう殺したくねえけえ。」「言うことをきいたら殺さんから。黙って言うことをきけ。」などと語気鋭く申し向けて脅迫し、さらに、同女を同所から同市a町b番地所在のB方南側空地に連行した上、同所において、同女に対し、「ナイフがなくても、人は殺せるんじゃ。」などと語気鋭く申し向けて脅迫し、その反抗を抑圧し、強いて同女を姦淫した。

第2 被告人は、帰宅途中のC（当時23歳）を認めるや、劣情を催し、強いて同女を姦淫しようと企て、平成10年7月10日午後10時25分ころ、同市a町c番地所在の同女方西側駐車場において、同女に対し、所携の前記第1記載のナイフを同女ののど元に突き付け、「静かにせえ。大きな声を出したら、刺すぞ。」「大きな声をしたら、顔に一生残る傷をつけてやる。」「僕は前の女も刺してやったんじゃ。」などと語気鋭く申し向けて脅迫し、同女を同所から同市a町d番地所在の畑内に設置されたテント内に連行した上、同所において、その反抗を抑圧して、強いて同女を姦淫しようとして同女の陰部に陰茎を押し当てる等したが、陰茎が勃起しなかったため、その目的を遂げなかった。

第3 被告人は、自転車で帰宅途中のD（当時16歳）を認めるや、劣情を催し、強いて同女を姦淫しようと企て、平成13年7月22日午後8時55分ころ、同市a町e番地東側路上において、同女に対し、所携の果物ナイフ（平成14年押第11号の1、刃体の長さ約12センチメートル）を同女ののど元に突き付け、「言うことをきかんと、殺すぞ。人1人殺しとんじゃ。」などと語気鋭く申し向けて脅迫し、同女を同所から同市a町f番地所在の珈琲館「E」北側駐車場に連行した上、同所において、その反

抗を抑圧して、強いて同女を姦淫した。

第4 被告人は、業務その他正当な理由による場合でないのに、前記第3記載の日時場所において、刃体の長さ約12センチメートルの前記第3記載の果物ナイフ1本を携帯した。

第5 被告人は、軽四乗用自動車を運転して帰宅途中のF（当時20歳）を認めるや、劣情を催し、強いて同女を姦淫しようと企て、平成13年6月23日午前1時45分ころ、同市g町h番i号所在のGハイツ駐車場において、前記車両から降車した同女に対し、その背後から、左手を同女の首に巻き付け、右手に所持した前記第1記載のナイフを同女の首筋に突き付け、「黙れ、声を出すな。声を出したら殺すぞ。1人、人を殺しとるけえ、殺すのは怖くねえんじゃ。」などと語気鋭く申し向けて脅迫し、さらに、同女に前記車両を運転させて同所から同市j丁目k番l号所在のH小学校校庭に連行した上、同所に駐車させた前記車両内において、同女に対し、前記ナイフを首筋に突き付け、「声を出したら、殺す。」などと語気鋭く申し向けて脅迫し、その反抗を抑圧して、強いて同女を姦淫した。

第6 被告人は、帰宅途中のI（当時26歳）を認めるや、劣情を催し、強いて同女を姦淫しようと企て、平成11年3月11日午後8時10分ころ、同市m丁目n番o号所在のパチンコJ南側駐車場において、同女が同所に駐車した軽四乗用自動車の運転席に乗り込んだ直後に同車両助手席に乗り込み、同女に対し、所携の前記第1記載のナイフをその首筋等に突き付けるなどして、「抵抗しとったら、顔に一生残る傷を負うた奴がおるんじゃ。」などと抵抗したら顔に一生残る傷を与えかねない氣勢を示して語気鋭く申し向けて脅迫し、その反抗を抑圧して、「開けえ。」と足を開くよう命じるなどした上、同女の陰部に陰茎を入れようとするなどして、強いて同女を姦淫しようとしたが、同女が抵抗したため、その目的を遂げず、前記のナイフを突き付けた際、同ナイフを取上げようとした同女に対し、同ナイフを振り回す等して、同女に対し、全治約3日間を要する右第1指切創及び右上腕打撲の傷害を負わせた。

第7 被告人は、軽四乗用自動車を運転して帰宅途中のK（当時28歳）を認めるや、劣情を催し、強いて同女を姦淫しようと企て、平成12年8月21日午前1時ころ、同

市p丁目q番r号所在のL駐車場において、同所に駐車した同車両の運転席から降車して後部座席で寝ていた子供（当時2歳8か月）を抱えようとした同女に対し、所携の前記第1記載のナイフを同女の胸に突き付け、「言うことをきけ。子供を殺すぞ。」などと語気鋭く申し向けて脅迫し、その反抗を抑圧した上、強いて同女を姦淫した。

第8 被告人は、帰宅途中のM（当時20歳）を認めるや、劣情を催し、強いて同女にわいせつな行為をしようとして、平成12年8月6日午後9時25分ころ、同市s町t番u号所在のN東側駐車場において、同女が同所に駐車した普通乗用自動車の運転席に乗り込んだ後、同車の運転席ドアを開け、同女に対し、所携の前記第1記載のナイフを同女が着用していた衣服の左襟部分に突き付ける等して、「静かにせえ。」、「刑務所から出てきたんじゃ。」などと語気鋭く申し向けて脅迫し、強いて同女にわいせつな行為をしようとしたが、同女が抵抗したため、その目的を遂げず、その際、抵抗した同女に対し、加療約2週間を要する右示指切創、屈筋腱損傷等の傷害を負わせた。

第9 被告人は、平成13年6月7日午後11時5分ころ、同市v町w番x号所在のO駐車場に駐車中の普通乗用自動車内において、P（当時24歳）に対し、手で同女の口を塞ぐなどの暴行を加えた

【量刑の理由】懲役10年、果物ナイフ1本を没収
岡山地方裁判所は、本件の量刑に関し、以下のような理由を示した。

本件は、強姦（未遂）致傷1件、強制わいせつ致傷1件、強姦既遂4件、強姦未遂1件、女性に対する暴行1件及び果物ナイフの不法携帯1件の事案である。

被告人は、いずれも夜間、面識のない女性を無差別に狙って、約3年の間に連続して各犯行を敢行したものであるが、いずれの被害者についても落ち度は認められない。被告人は、判示第1ないし第3、判示第5ないし第8の各犯行においては、ナイフを使用しており、ことに、判示第6の犯行では、被害者にナイフで全治約3日を要する切創等を、判

示第8の犯行では、加療約2週間を要する切創等をそれぞれ負わせたほか、判示第1、第2、第5及び第6の各犯行では被害者が着用していた下着の一部をナイフで切断して脱がせるなどしており、いずれの被害者に対しても多大な恐怖感を与えた。また、被告人は、判示第1、第2及び第5ないし第8の各犯行で使用されたナイフを、常時、使用車両内に備え付けていたこと及び判示第3の犯行に際しては、予め自宅から果物ナイフを用意して犯行に赴いたことも認められる。これらの点のほか、各犯行について見れば、陰部に指を挿入したり、口淫させたりした上、口内で射精したこと（判示第6）、全裸にして口淫させた上、口内で射精したこと、（判示第2）、自動車に同乗していた被害者の子供を殺す旨脅迫する等して、全裸にし、口淫させた上、膣内で射精したこと（判示第7）、16歳の被害者を襲い、口淫させた上、下半身を裸にして、膣内に射精したこと（判示第3）、ナイフを突き付けられて脅える被害者に車を運転させて人気のない深夜の小学校校庭に連行した上、全裸にして姦淫したほか、肛門に陰茎を挿入し、直腸内で射精したこと（判示第5）、被害者を全裸にして、口淫させた上、腹部に射精したこと（判示第1）、被害者の親切心を利用して駅まで車で送ることを承諾させ、その隙について暴行に及んだこと（判示第9）などの事実が認められ、犯行態様はいずれも悪質である。被害者らの心身に及ぼした悪影響も深刻であり、事件の強い恐怖感や、被告人が再度、つけ狙ってくることにに対する恐れ等から、死にたいと思ったり（判示第1の被害者）、勤務先を辞めざるを得なくなったり（判示第1及び第3の被害者）、勤務時間の変更を強いられたり（判示第2）、家族にも被害事実を話せなかったり（判示第2、第5の被害者）、妊娠の不安から落ち着かない日を過ごし、被害状況が夢に出てきてうなされ、一時、実家に避難することを余儀なくされたりする（判示第7の被害者）等しており、いずれの被害者も厳重な処罰を望んでいる。しかるに被害弁償については、いずれの被害者に対してもなされていない。

以上からすると、犯情は著しく悪く、被告人の

刑責は相当に重いといわざるをえない。

他方、被告人には前科がないこと、各犯行について認めており、各被害者に対する謝罪文を作成する等、一連の犯行を被告人なりに反省していると認められること、実母が被害者のうち2名に対して謝罪しており、更生への協力も約束していること等被告人に有利に斟酌すべき事情も認められる。

以上の点を考慮して、主文の刑が相当であると判断した。

（求刑 掲載なし）

〔予測モデル式からの若干の考察〕

予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく、すべての被害者数については、「(3-①)強姦」が<4名> (70.517)、「(3-②)強姦未遂」が<2名> (59.758)、「(3-③)強制わいせつ」が<1名> (5.298)、「(3-④)強制わいせつ未遂」が<なし> (-1.615)となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、被害「(1-④)結果(傷害)」が<傷害：全治2週間以内> (11.886)となり、その基本スコアは145.844となった。

本件は、「強姦（未遂）致傷1件、強制わいせつ致傷1件、強姦既遂4件、強姦未遂1件、女性に対する暴行1件及び果物ナイフの不法携帯1件」からなる事案であり、「いずれも夜間、面識のない女性を無差別に狙って、約3年の間に連続して各犯行を敢行したもので」、<連続強姦・強制わいせつ型>の犯行である。本件は2004年の刑法一部改正（平成16年法律第156号）前の事案であり、したがって、併合罪加重の上限が20年となるところ、本判決では懲役10年が宣告されている。

予測モデル式では、予測値を228.145と算出した（残差-108.145）。残差が大きくなった理由として、まずは、本件が2004年の刑法一部改正（平成16年法律第156号）前の事案であったことが関係しているということを仮説立てた。実績値を1.5倍して予測値との残差を再計算してみたところ、残差は-48.145になる。これによれば、標準化残差は-2.0を下回ることになるので、刑期が顕著に低いとまでは言えないものの、刑期が低いという評価には変わりがない。なお、本件は、強姦既遂の被害者が<4名

>であるが、そのカテゴリースコアは 70.517 であり、<3名> (122.224) , <5名> (185.434) のそれと比べると、カテゴリースコアが顕著に低い。<4名>に該当する5件の事例のうち、その1つが本事例であることから、実績値（説明変数）の低さがカテゴリースコアに影響したものと解される。もしそれを予測モデル式に織り込んでみた場合、本件はやはり刑期が顕著に低いというべきであって、よって、本件は「外れ値事例」という位置づけになろう。

3.4.2. 標準化残差が2.0を上回った事例（実績値が予測値に比べて重かった事例）

次に、標準化残差-2.0を上回った「外れ値事例」（実績値が予測値に比べて重かった事例）12例について検証する。

(1) 福岡地久留米支判平成 29 年 1 月 24 日 LEX/DB 25545065【逮捕監禁致傷、暴行、強要、強姦、児童福祉法違反被告事件】

実績値：120	予測値：52.301
残差：67.699	標準化残差：2.006

【事案の概要】

第1 被告人は、平成 27 年 2 月 21 日午後 10 時 27 分頃から同日午後 10 時 50 分頃までの間に、福岡市α区β×丁目×番×号 P2 内の回転中の観覧車バスダーゴンドラ内において、内縁の妻である P3（以下「P3」という。）の実子であり、被告人から虐待を受けていたことから被告人を畏怖していた旧姓 P4（当時 16 歳。以下「A 女」という。）が満 18 歳に満たない児童であることを知りながら、A 女に対し、「なめろ。」と語気鋭く申し向け、この要求に応じなければ A 女の身体等にいかなる危害を加えかねない氣勢を暗に示して脅迫し、強いて自己の陰茎を口淫させ、さらに、「下を脱いで、後ろを向け。」と語気鋭く申し向けて前同様に脅迫し、その反抗を抑圧して姦淫し、もって強いて A 女を姦淫するとともに児童に淫行させる行為をした。

第2 被告人は、平成 27 年 6 月上旬頃、福岡県久留米市γ町×番地×P5×棟××号の当時の被告人及び P3 方において、A 女が暗い所で電灯を点けないで金魚に餌をやったことなどに腹を立て、被告人から虐待を

受けていたことから被告人を畏怖しており、飼育していた多数匹の金魚を被告人が殺したことから、その死骸を埋葬しようとしていた A 女に対し、「そんなことしないでいいから、責任持って全部食べろ。」「お前が食べなかったら、お母さんに代わりに食べさせる。」「お醤油を持ってこようか。」「お腹すいたつたやろ。」旨申し向け、A 女に多数匹の金魚の死骸を食べることを要求し、この要求に応じなければ A 女の身体等にいかなる危害を加えかねない氣勢を暗に示して脅迫し、A 女をしてその旨畏怖させ、よって、その頃、同所において、A 女に多数匹の金魚の死骸を食べさせ、もって A 女に義務のないことを行わせた。

第3 被告人は、P3 と共謀の上、平成 27 年 6 月 11 日夜頃から同月 12 日午前 4 時 54 分頃までの間、前記被告人及び P3 方において、A 女が冷蔵庫の中の唐揚げや揚げ餃子を黙ってつまみ食いしたことなどに腹を立て、被告人及び P3 から虐待を受けていたことから両名を畏怖していた A 女に対し、被告人が「そんなに食べたいなら、もう好きなだけ食べさせてやる。箸は使っちゃいけない。まだ食べたいんやろう。早く食べるように。喉渴いたやろう。飲んでいいよ。おかわりしていいよ。ついでやらないかと。冷蔵庫の中に卵が入ってるから、それを全部食べていいよ。早くして。冷蔵庫にアイスが入ってるから、それも全部食べていいよ。いいから早く持ってきて。アイスも持ってこられないのか。溶けるから早く食べて。お前の触ったものは食べたくない。」旨申し向け、A 女に多数の生卵、多量のアイスクリーム等の多量の食物を食べるとともに、同所に設置されていた金魚飼育用の水槽内の水を飲むことを要求し、この要求に応じなければ A 女の身体等にいかなる危害を加えかねない氣勢を暗に示して脅迫し、A 女をしてその旨畏怖させ、よって、その頃、同所において、A 女に前記食物を食べ、前記水槽内の水を飲ませ、さらに、前記食物を嘔吐した A 女に対し、被告人が「吐いちゃ駄目って言ったやろ。何で我慢できないのか。もったいないから全部食べて。自分たちの分のご飯も食べてるんだから。吐いたものは責任持って全部飲んでね。」旨、P3 が「早くせんね。全部飲まないと終わらないよ。」旨それぞれ申し向け、A 女が嘔吐した嘔吐物を食べるよう要求し、この要求に応じなければ A 女の身体等にいかなる危害を加えかねない氣勢を暗

に示して脅迫し、A 女をしてその旨畏怖させ、よって、その頃、同所において、A 女に前記嘔吐物を食べさせ、もって A 女に義務のないことを行わせた。

第 4 被告人は、平成 27 年 8 月 15 日の朝頃、福岡県久留米市 δ × 丁目 × × 番 × 所在の藤光公園付近路上に駐車中の自動車内において、アルバイトからの帰りが遅かったことについて説教する最中に A 女が居眠りをしたことなどに腹を立て、A 女に対し、平手で A 女の顔面を数回殴打する暴行を加えた。

第 5 被告人は、P3 と共謀の上、平成 27 年 8 月 15 日頃から同月 29 日頃までの間に、前記被告人及び P3 方において、アルバイトからの帰りが遅かったことについて A 女が迷惑をかけた、嘘をついたなどと腹を立て、A 女に対し、被告人が平手で A 女の顔面を多数回殴打し、P3 が A 女の舌をペンチで挟んで引っ張った上、被告人が A 女の舌に火の付いたタバコの先端を数回押しつける暴行を加えた。

第 6 被告人は、P3 と共謀の上、平成 27 年 8 月下旬頃から同年 9 月上旬頃までの間の日の夜からその翌日の朝までの間、前記被告人及び P3 方の A 女が使用する居室において、A 女がアルバイト先で賄いを食べたことなどに腹を立て、A 女に対し、被告人が、A 女の両手首を荷造りロープで二段ベッドの柵に縛り付け、P3 が、同居室入口に置いた椅子に座って A 女を監視するなどし、A 女が同居室から脱出することを困難にさせて A 女を不法に逮捕監禁し、よって、A 女に同年 10 月下旬頃までの加療を要する右尺骨茎状突起骨折、両前腕圧挫傷の傷害を負わせた。

第 7 被告人は、P3 と共謀の上、前記第 6 の日時場所において、A 女が居眠りをしたことなどに腹を立て、A 女に対し、被告人が、平手で A 女の顔面を数回殴打する暴行を加えた。

第 8 被告人は、P3 と共謀の上、平成 27 年 9 月 13 日午後 6 時頃から同日午後 10 時頃までの間に、前記被告人及び P3 方において、A 女的生活態度などに腹を立て、A 女に対し、被告人が、平手で A 女の顔面を多数回殴打する暴行を加えた。

【量刑の理由】懲役 10 年

福岡地方裁判所久留米支部は、本件の量刑に関し、以

下のような理由を示した。

本件は、被告人が、単独で又は交際相手である P3 と共謀して、P3 の実子である当時 16 歳の A 女に対し、〔1〕観覧車のゴンドラ内で強いて陰茎を口淫させ、その反抗を抑圧して姦淫したという強姦及び児童福祉法違反（判示第 1）、〔2〕金魚の死骸約 60 匹を無理やり食べさせた強要（判示第 2）、〔3〕生卵約 10 個、アイスクリーム約 700g、金魚の水槽内の生臭い水 2 杯、床に広がった A 女の嘔吐物等を無理やり飲食させた強要（判示第 3）、〔4〕自動車内で顔面を平手で数回殴打した暴行（判示第 4）、〔5〕顔面を平手で多数回殴打し、舌をペンチで挟んで引っ張った上、舌に火の付いたタバコの先端を数回押しつけた暴行（判示第 5）、〔6〕両手首をロープで二段ベッドの柵に縛り付け、脱出できないように監視するなどして逮捕監禁し、よって右尺骨茎状突起骨折等の傷害を負わせた逮捕監禁致傷（判示第 6）、〔7〕顔面を平手で数回殴打した暴行（判示第 7）、〔8〕別の機会に、顔面を平手で多数回殴打した暴行（判示第 8）の事案である。

被告人は、平成 25 年 2 月頃から P3 及び A 女らと同居し始めたが、被告人は、A 女らに対し、生活態度が悪いなどと因縁をつけて長時間にわたって正座をさせて罵倒し顔面等を殴打する、性交や口淫を強いるなどの虐待行為に及ぶようになった。P3 も、被告人から非難されたり暴力を振るわれたりする一方で、被告人に追従して A 女らを非難していた。そして、A 女以外の 2 人の子らが順に家を出て別居するにつれ、被告人と P3 の虐待行為は A 女に集中し、全裸姿でベランダで夜通し正座させる、ズボンのベルト通しにロープを通して縛り付けた状態でトイレに丸 1 日監禁する、毎日往復 20km 余りのジョギングと低カロリー食を強いるなど、激しさを増していった。本件各犯行は、そのような状況において、常習的な虐待行為の一環として行われたものである。

本件各犯行の態様は、いずれも A 女の人格を無視した卑劣極まりないものである。被告人は、実

行行為の殆どを自ら行ったほか、被告人に依存する態度を見せる P3 に具体的に指図するなどして、本件各犯行を主導した。犯行動機にも酌量すべき点はない。A 女は、本件各犯行により、多大な肉体的苦痛を被ったほか、心にも深い傷を負っており、その結果は誠に重大であって、被告人に対する処罰感情が強いのも当然である。被告人は、本件各犯行をいずれも否認し続けており、A 女に対する慰謝の措置を何も講じていない。したがって、被告人の刑事責任は極めて重い。

そうすると、被告人に前科前歴がないこと等を考慮しても、相当長期間の服役は免れない。よって、主文のとおり判決する。

(求刑 懲役 14 年)

〔予測モデル式からの若干の考察〕

予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく、すべての被害者数については、「(3-①) 強姦」が<1 名> (9.134)、「(3-②) 強姦未遂」が<なし> (-10.387)、「(3-③) 強制わいせつ」が<なし> (-13.951)、「(3-④) 強制わいせつ未遂」が<なし> (-1.615) となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④) 被害結果(傷害)」が<なし> (-11.612) となり、その基本スコアは-28.431 となった。

本件は、「被告人が、単独で又は交際相手である P3 と共謀して、P3 の実子である当時 16 歳の A 女に対し、〔1〕観覧車のゴンドラ内で強いて陰茎を口淫させ、その反抗を抑圧して姦淫したという強姦及び児童福祉法違反(判示第 1)」、〔2〕金魚の死骸約 60 匹を無理やり食べさせた強要(判示第 2)」、〔3〕生卵約 10 個、アイスクリーム約 700g、金魚の水槽内の生臭い水 2 杯、床に広がった A 女の嘔吐物等を無理やり飲食させた強要(判示第 3)」、〔4〕自動車内で顔面を平手で数回殴打した暴行(判示第 4)」、〔5〕顔面を平手で多数回殴打し、舌をペンチで挟んで引っ張った上、舌に火の付いたたばこの先端を数回押しつけた暴行(判示第 5)」、〔6〕両手首をロープで二段ベッドの柵に縛り付け、脱出できないように監視するなどして逮捕監禁し、よって右尺骨茎状突起骨

折等の傷害を負わせた逮捕監禁致傷(判示第 6)」、〔7〕顔面を平手で数回殴打した暴行(判示第 7)」、〔8〕別の機会に、顔面を平手で多数回殴打した暴行(判示第 8)の事案」であり、<性的虐待型>の犯行である。本件は 2004 年の刑法一部改正(平成 16 年法律第 156 号)後の事案であり、したがって、併合罪加重の上限が 30 年となるところ、求刑が懲役 14 年であるのに対して、本判決では懲役 10 年が宣告されている。

予測モデル式では、予測値を 52.301 と算出した(残差 67.699)。残差が大きくなった原因は、判示第 2 から第 8 までの身体的虐待に関して、予測モデル式で全く加味されていないことである。よって、予測モデル式の改良を要することであり、本判決に関して言えば、「外れ値事例」とは言えないものと解される。

(2) 千葉地判平成 24 年 8 月 28 日 LEX/DB25482765 【住居侵入、強制わいせつ致傷、強姦致傷、強姦未遂、強制わいせつ未遂被告事件】

実績値 : 360	予測値 : 231.247
残差 : 128.753	標準化残差 : 3.814

〔事案の概要〕

第 1 被告人は、徒歩で帰宅途中の被害者 A (当時 15 歳) を認めるや、強いて同女を姦淫しようと企て、平成 22 年 12 月 19 日午後 6 時 38 分頃から同日午後 6 時 57 分頃までの間、千葉県松戸市所在のマンション A 南側路上において、同女に対し、その背後から口を手で塞ぐなどの暴行を加えながら、「おとなしくしろ」などと言って脅迫し、同女を同所から同マンションに連れ込み、同マンション 1 階北西側出入口等において、同女に対し、「スカートとパンツを脱げ。上も脱げ」などと言って脅迫し、同女を全裸にしてその反抗を抑圧した上、同女を同所から同マンション北東側敷地内に連れ出し、同所において、同女に対し、自己の陰茎を口淫させるなどし、その顔面を平手で数回殴る暴行を加え、引き続き、同女を同所からその南西に位置する同市所在のマンション A' 敷地内に連れ込み、同所において、同女に対し、その顔面を平手で数回殴る暴行を加えて、その陰部及び肛門に手指を挿入して弄ぶなどし、強いて同女を姦淫しようとしたが、同女の陰部に自己の陰茎を挿入できなかったため、その

目的を遂げなかった。

第2 被告人は、通行中の女兒被害者 B（当時 11 歳）を認めるや、同女兒が 13 歳未満であることを知りながら、同女兒にわいせつな行為をしようと企て、平成 23 年 2 月 25 日午後 7 時 14 分頃、同女兒に追従して、千葉市中央区所在の同女兒らが居住するマンション B に、1 階南西側出入口から侵入し、その頃から同日午後 7 時 16 分頃までの間、同マンション 1 階エレベーター前から同マンション 5 階北側外階段に至るまでの間において、同女兒に対し、手に持ったドライバーを突き付け、その背後からその口を手で塞ぐ暴行を加えながら、「お前、暴れたら殴るぞ。早く上と下の服を全部脱げ。脱がなければ殺すぞ」などと言って脅迫してその反抗を抑圧し、同女兒に強いてわいせつな行為をしようとしたが、同女兒の母親に発見されたため、その目的を遂げなかった。

第3 被告人は、徒歩で帰宅途中の被害者 C（当時 18 歳）を認めるや、強いて同女を姦淫しようと企て、平成 23 年 2 月 27 日午後 4 時 10 分頃、同女に追従して、千葉県柏市所在の同女らが居住するマンション C に同女が解錠した同マンション 1 階南西側オートロック式出入口から侵入し、同日午後 4 時 20 分頃、同マンション 7 階●●号室前通路において、同女に対し、柄の長いライターを点火して突き付け、「パンツ脱げ。言うこと聞かなかったらお前の顔焼いちゃうよ。騒いだら殺すよ」などと言って脅迫し、同女の下半身を裸にして同所から同マンション 8 階東側開放廊下に連れ出し、引き続き、同所において、同女に対し、「全部脱げ」などと言って脅迫し、同女を全裸にしてその反抗を抑圧し、その陰部に手指を挿入して弄ぶなどした上、強いて同女を姦淫しようとしたが、同女の陰部に自己の陰茎を挿入できなかったため、その目的を遂げず、さらに、同女の顔面を拳骨で数回殴り、同女の陰部に両手指を挿入して左右に引っ張り、手に持った目玉クリップで同女の両乳首及び両まぶたをつかんで引っ張るなどの暴行を加え、その際、前記暴行により、同女に全治約 2 週間を要する外陰部裂傷等及び全治約 1 週間を要する顔面打撲、顔面擦過傷、胸部擦過傷の傷害を負わせた。

第4 被告人は、通行中の女兒被害者 D（当時 11 歳）を認めるや、同女兒が 13 歳未満であることを知りながら、同女兒にわいせつな行為をしようと企て、平成 23 年 3 月

23 日午後 6 時 20 分頃、同女兒に追従して、千葉県松戸市所在の同女兒らが居住するマンション D1 階出入口から同マンション内に侵入してエレベーターに乗り込み、その頃、同マンション 7 階に停止したエレベーター内において、同女兒に対し、背後からその口を手で塞いだ上、エレベーターを降りて同女兒を同マンション 10 階から 11 階に至る階段踊り場に連れ出し、引き続き、同所において、同女兒に対し、手に持ったカッターナイフを示し、「写真撮るから服を全部脱げ。俺の仲間はいっぱいいるから、言うこと聞かないと、家に火をつけて家族殺すぞ」、「壁側を向いて、床に手をつけ」などと言って脅迫してその反抗を抑圧し、全裸になった同女兒の陰部に手指を挿入して弄ぶなどし、さらに、「絶対に親に言うなよ。言ったらこうなるからな。お腹に力入れろ」などと言って、同女兒の腹部を拳骨で 2 回殴り、土下座させた同女兒の頭部を足で踏みつけるなどし、もって同女兒に対し、強いてわいせつな行為をし、その際、同女兒に全治約 1 週間を要する右小陰唇擦過傷の傷害を負わせた。

第5 被告人は、通行中の女兒被害者 E（当時 11 歳）を認めるや、同女兒が 13 歳未満であることを知りながら、同女兒を強いて姦淫しようと企て、平成 23 年 6 月 13 日午後 6 時頃、千葉縣市川市所在のマンション E の一室当時の被害者 E の母親方前通路において、同女兒に対し、手に持った鍵を突き付け、その背後からその口を手で塞ぐ暴行を加えながら、「おとなしくしろ。騒いだら目に鍵をぶっ刺すぞ」などと言って脅迫し、前記被害者 E の母親方にその玄関ドアから侵入し、その頃から同日午後 6 時 30 分頃までの間、同所において、同女兒に対し、「服を全部脱げ」などと言って脅迫し、同女兒を全裸にしてその反抗を抑圧した上、自己の陰茎を口淫させ、さらに、その陰部及び肛門に手指を挿入して弄ぶなどの暴行を加え、同女兒を強いて姦淫し、その際、前記暴行により、同女兒に全治約 4 日間を要する膣内等損傷に起因する陰部出血の傷害を負わせた。

第6 被告人は、未成年の女性に強いてわいせつな行為をする目的で、平成 23 年 6 月 22 日午後 5 時 21 分頃、F が居住する千葉県松戸市所在のマンション F1 階に、その北西側出入口から侵入した。

第7 被告人は、未成年の女性に強いてわいせつな行為をする目的で、平成 23 年 7 月 1 日午後 6 時頃、G が居住

する千葉市所在の G 団地 1 階に、その南東側出入口から侵入した。

〔量刑の理由〕 懲役 30 年

千葉地方裁判所は、本件の量刑に関し、以下のような理由を示した。

判示第 1 ないし第 5 の事案は、若年で大人しそうな女性を物色して付け狙い、軍手やカッターナイフ等の凶器を準備するなどして行われた無差別かつ計画的な犯行であり、その動機及び経緯に酌量の余地はもとよりない。被告人は、凶器を用いるなどして強度の暴行や脅迫を加え、被害者らを人気のない場所に連れ込んで追い詰めた上、判示第 1、第 3 ないし第 5 の犯行においては、姦淫のほか、自己の陰茎を口淫させたり、肛門を舐めさせるなど、醜悪かつ執拗なわいせつ行為をも強いている。これらの犯行は、被害者らの人格を踏みにじり、その苦痛を全く顧みない、卑劣かつ嗜虐的な態様のものであり、極めて悪質といえる。とりわけ、判示第 3 の犯行においては、被害者に相当な出血を伴う傷害を負わせた後にも、平然と陵辱を継続するなど、犯行の執拗さ、卑劣さが顕著である。また、判示第 1 の犯行では当時 15 歳、しかも、判示第 2、第 4 及び第 5 の犯行では、年端もいかない当時 11 歳の被害者らに対して容赦のない暴行・脅迫等を加え、最後の 1 件で姦淫まで既遂に至らしめた点も非道というほかなく、量刑上重視すべきである。その上、被告人は、犯行の発覚を防ぐため、なおも暴行や脅迫を行い、全裸の写真を撮影し、名前や通学先等を聞き出すなど、被害者に更なる苦痛や不安を与える形で念入りに口止めをしており、犯行後の情状も極めて悪い。

被害者らは、本来安全であるはずの自宅内又はその付近で性的被害に遭い、多大な恐怖感、屈辱感を味わったばかりか、その後も一人で出歩けなくなり、中には転居まで余儀なくされた者もいる。未成年の被害者らが受けた心の傷は計り知れず、将来にわたっての影響も懸念される。被害者らの被った肉体的苦痛はもちろんのこと、精神的苦痛

も甚大というほかない。被害者らの処罰感情が厳しいのも当然のこととして理解されるところであり、その将来を案ずる母親らの心痛にもまた深いものがある。

被告人は、同種の事件で 3 回服役したにもかかわらず、前刑出所のわずか半年後、短期間のうちに、上記 5 件の犯行のほか、同様の事件に発展する可能性を含む住居侵入 2 件の犯行を繰り返している。被告人の常習性は明らかであるばかりか、本件には、以前にも増して、女性に対して苦痛・恐怖を与えること自体に快感を覚えるという性癖が色濃く現れていることなどを併せて考慮すると、被告人の犯罪性向がますます深化していることもうかがわれ、将来における再犯のおそれも否定しがたい。

以上の諸事情、特に、同種前科を有しながら態様が極めて悪質な犯行を繰り返し、その被害者が 11 歳 3 名を含む若年の女性であることに照らすと、被告人が事実を認めて捜査に協力したことなど、被告人にとって多少なりとも有利な事情を十分に考慮しても、被告人の刑事責任は極めて重大である。同種事案の量刑傾向を踏まえて検討してみても、検察官の求刑どおり、有期懲役刑の上限をもって臨むことはやむを得ないと判断した。

(求刑 懲役 30 年)

〔予測モデル式からの若干の考察〕

予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく、すべての被害者数については、「(3-①) 強姦」が<1 名> (9.134) , 「(3-②) 強姦未遂」が<2 名> (59.758) , 「(3-③) 強制わいせつ」が<1 名> (5.298) , 「(3-④) 強制わいせつ未遂」が<1 名> (28.917) となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④) 被害結果(傷害)」が<傷害: 全治 2 週間以内> (11.886) となり、その基本スコアは 114.993 となった。

本件 5 件は、「若年で大人しそうな女性を物色して付け狙い、軍手やカッターナイフ等の凶器を準備するなどして行われた無差別かつ計画的な犯行」で、特に「判示第 1 の犯行では当時 15 歳、しかも、判示第 2、第 4 及び

第5の犯行では、年端もいかない当時11歳の被害者らに対して容赦のない暴行・脅迫等を加え、最後の1件で姦淫まで既遂に至らしめた」ものである。おおむね10歳以下の＜幼児性愛型＞に準じた犯行であり、また、＜連続強姦・強制わいせつ型＞の犯行として捉えることができるであろう。本件は2004年の刑法一部改正（平成16年法律第156号）後の事案であり、したがって、併合罪加重の上限が30年となるところ、求刑が懲役30年であるのに対して、本判決では懲役30年が宣告されている。

予測モデル式では、予測値を231.247と算出した（残差128.753）。残差が大きくなった原因は、予測モデル式での量刑因子（アイテム）に犯行類型（社会的類型／刑事学的類型）が設定されていないことだと考えている。本判決の理由において、「未成年の被害者ら」、「被害者が11歳3名を含む若年の女性であること」などのように、被害者の年齢に関する記述が散見されることから、それが刑期判断に強く影響を与えているものと解される。よって、予測モデル式の改良を要することであり、本判決に関して言えば、「外れ値事例」とは言えないものと解される。

（3）大阪地堺支判平成24年8月2日LEX/DB25482751

【住居侵入、強姦、わいせつ略取、強姦未遂、強盗強姦未遂、準強制わいせつ致傷、強盗未遂、強盗致傷、強制わいせつ未遂、強姦致傷被告事件】

実績値：348	予測値：257.271
残差：90.729	標準化残差：2.688

【事案の概要】

第1 被告人は、強姦の目的で、平成17年7月29日午前4時30分頃、大阪府岸和田市内のマンションのA方の無施錠の玄関ドアから室内に侵入し、その頃から午前5時頃までの間、就寝中のA（当時23歳）が目覚めると、左手に持ったタオルでその口をふさぎ、右手に持った包丁を突き付けながら、「騒いだら殺すぞ」などと言って脅迫し、タオルを口に押し込んで、抵抗することができないようにした上、履いていた短パンと下着を脱がせるなどして数回にわたりAを強姦したが、その際の暴行により、Aに全治2週間を要する外陰部打撲傷及び膣壁内出血等の傷害を負わせた【〔1〕事件】。

第2 被告人は、通行中の女性の後を付け、すきをねらってその居宅に入り込み強姦しようと考え、物色中に認めたBの後を付けたところ、Bが自転車に乗ろうとしたため予定を変え、人気のない場所までBを連れて行き、強姦しようとした。そこで、被告人は、平成18年4月8日午前零時20分頃、大阪府泉南郡＜以下略＞内の駐輪場において、B（当時21歳）の背後から左肩をつかみ、右手に持ったカッターナイフをBの右頬に押し当てた上、「大声を出したら、切るぞ」などと言って脅迫し、そこから同町内の診療所北側通路まで約208mにわたり連行して、わいせつ目的でBを略取した。

次いで、被告人は、同日（平成18年4月8日）午前零時30分頃から午前1時35分頃までの間、前記診療所北側通路において、Bの体を建物の壁に押し付けると、その正面からカッターナイフをBの左頬に突き付け、その口にマフラーを巻き付けてふさぐなどすると、Bが履いていたズボンを下ろし、カッターナイフでパンティーを切り裂いた。そして、被告人は、自分の陰茎を出すと、これに気付いたBが強く抵抗したため、その顔面を殴り付けるなどし、「殴られるか、本番するんか、どっちがええんや」などと言って脅迫した上、その場にBをあおむけに押し倒し、懸命に閉じていた両膝を開かせようとするなどして抵抗することができないようにし、Bを強姦しようとしたが、Bがなおも抵抗を続けたのであきらめ、口淫をさせ射精したにとどまった【〔2〕事件】。

第3 被告人は、正当な理由がないのに、平成18年4月21日午後10時20分頃、大阪府泉南郡＜以下略＞内のマンションのC方の無施錠の玄関ドアから室内に侵入した。被告人は、その頃から午後11時頃までの間、同室内において、C（当時19歳）の口を左手でふさぎ、右手に持ったカッターナイフを見せ付けて「騒ぐな」と脅すと、持参した手錠をCの両手に掛け、ロープで上半身を縛り上げる暴行を加えて、「強盗や」などと言い、抵抗することができないようにして、Cが差し出した同人所有の現金3万円を強取した。そして、被告人は、室内にあったタオルを使い、更にCに猿ぐつわをかませて、履いていたズボンを脱がせようとしながら「1回やらせろ」などと言い、あおむけになっていたCに馬乗りになるなどし、右手に持ったカッターナイフをその顔の辺りに近付け、「目をやるぞ」などと言って脅迫し、強姦しようとした

が、C に抵抗されたため、口淫をさせて射精したにとどまった。【〔3〕事件】

第4 被告人は、強姦の目的で、平成20年3月14日午後10時頃、大阪府泉南郡<以下略>内のマンションのD 方の無施錠のベランダ掃出し窓から室内に侵入して、就寝中のD（当時24歳）に馬乗りになり、D が目を覚まして大声を上げると、「静かにしろ」などと怒鳴ってその口にタオルを押し込み、抵抗するD の腹部や太もも等を平手で殴ったほか、「暴れたらまた痛い目に遭うぞ」などと言って脅迫し、D を抵抗することができないようにして、口淫をさせた後、D を強姦した【〔4〕事件】。

第5 被告人は、窃盗の目的で、平成21年8月31日午後10時10分頃、大阪府泉佐野市内のマンションのE 方の無施錠の玄関ドアから室内に侵入した。

そして、被告人は、手提げかばんに入っていた財布からE 所有の現金2万5000円を抜き取って盗み、E が入浴している間に逃げ出そうとしたところ、浴室から出てきたE（当時32歳）に発見され、大声を出された。そこで、被告人は、逮捕を免れるため、右手に持った刃物を見せながら「騒いだら刺すぞ」などと言って脅迫した上、左手でE の口をふさぐ暴行を加え、その勢いでE の左肩及び左背部等を浴室洗面台等に打ち付けさせて、E に全治約10日間を要する右下口唇裂創及び左肩・左背部点状皮下出血等の傷害を負わせた。

次いで、被告人は、E が直前の暴行脅迫によりおびえていることを利用し、強いてわいせつな行為をしようと考え、E 方室内において、右手に刃物を持ち、自分のズボンのチャックを下げながら「ちんぽしゃぶれ」などと言って口淫をさせようとしたが、E に騒がれて逃げ出したため、失敗した【〔5〕事件】。

第6 被告人は、強姦の目的で、平成21年11月3日午前3時20分頃、大阪府泉南郡<以下略>内のマンションのF 方の無施錠のベランダ窓から室内に侵入した後、F が生理中にみえたため強姦はあきらめたものの、熟睡し抗拒不能の状態にあることを利用してわいせつな行為をしようと考え、その頃から午前3時29分頃までの間、F（当時20歳）のズボンを下げ、右手でその臀部等を触るなどしたが、これに気付いて目を覚ましたF が悲鳴を上げたことから、左手でその口をふさぐ暴行を加え、よって、F に通院加療約7日間を要する上口唇挫創の傷害を

負わせた【〔6〕事件】。

第7 被告人は、強姦の目的で、平成22年1月25日午後11時30分頃、大阪府泉佐野市内のマンションのG 方の無施錠の玄関ドアから室内に侵入し、その頃から午後11時45分頃までの間、就寝中のG（当時23歳）に馬乗りになり、目を覚ましたG の口を左手でふさいで、右手に持った刃物をその左頬付近に突き付けながら、「騒いだら殺すぞ」と言って脅迫し、持参した手錠をG の両手に掛けた上、タオルを口に押し込むなどの暴行を加えて、G を抵抗することができないようにし、口淫をさせた後、G を強姦した【〔7〕事件】。

第8 被告人は、現金を強取する目的で、平成22年4月10日午後10時13分頃、大阪府泉佐野市内のマンションのH 方の玄関ドアから、帰宅したH のすぐ後について室内に侵入すると、正面からH（当時32歳）を押し倒し、あおむけに倒れたH の口を左手でふさいで、右手に持ったナイフを突き付けながら、悪いことしないから金を出せ、静かにしとけなどと言って、抵抗することができないようにし、現金を強取しようとしたが、H が大声で助けを求めるなどしたことで、発覚を恐れ逃走したため、失敗した【〔8〕事件】。

第9 被告人は、強姦の目的で、平成22年6月12日午前1時45分頃、大阪府泉佐野市内のマンションのI 方の無施錠のベランダ側掃出し窓から室内に侵入し、その頃から午前1時55分頃までの間、I（当時25歳）が入浴していたユニットバス内に入り込んで、「騒ぐな、殺すぞ。言うこと聞け」、「言うことを聞かな、刺すぞ」などと言って脅迫し、右手に持ったナイフをI の顔付近に突き付けるなどして、I を抵抗することができないようにし、口淫をさせた後、I を強姦した【〔9〕事件】。

第10 被告人は、現金を強取する目的で、平成22年7月5日午後8時46分頃、大阪府泉南郡<以下略>内のマンションのJ 方の無施錠の玄関ドアから室内に侵入し、J（当時19歳）の背後から左手でその口をふさぎ、さらに、タオルをその口内に押し込んで、持参した手錠をJ の両手に掛け、「お金出せ」と言って、抵抗することができないようにし、現金を強取しようとしたが、たまたま友人が訪ねてきた際、すきを見てJ が外に逃げ出したため、失敗した【〔10〕事件】。

第11 被告人は、現金を強取する目的で、平成22年10

月 23 日午後 9 時 50 分頃、大阪府泉南郡<以下略>内のマンションの K 方の無施錠の玄関ドアから入ろうとした際、K が外の様子を不審に思い、玄関ドアを開けたことを機に室内に侵入し、K（当時 20 歳）の正面から右手でその口をふさいで、「しゃべるな。殺すぞ」と強い口調で言い、抵抗することができないようにして、K から現金を強取しようとしたが、そのときに K の交際相手の男性が訪ねてきたことから、発覚を恐れ逃走したため、失敗した【〔11〕事件】。

〔量刑の理由〕懲役 29 年

大阪地方裁判所堺支部は、本件の量刑に関し、以下の理由を示した。

1 本件は、被告人が、平成 17 年 7 月から平成 22 年 10 月までの約 5 年間に、限られた地域内において、一人暮らしの若い女性方に侵入して敢行した性犯罪を主体とする犯行 10 件（強姦致傷 1 件、強盗強姦未遂 1 件、強姦 3 件、強盗致傷・強制わいせつ未遂 1 件、準強制わいせつ致傷 1 件及び強盗未遂 3 件）と、通行中の女性に対するわいせつ略取・強姦未遂 1 件の事案である。

2 今回の犯行の主要部分は性犯罪事案にあるところ、被告人は、女性が一人暮らしをしていそうなワンルームマンション等の建物にあらかじめあたりを付けておき、犯行時には、侵入や脅迫のための小道具（目出し帽、刃物、手袋、手錠等）を携え、1 軒ごとに玄関等の施錠の有無を確かめて敢行しており、計画的犯行といえる。

また、被告人は、とりわけ性犯罪事案において、就寝中や入浴中の被害者に襲いかかると、騒がれないよう口をふさいだり、刃物を突き付けたりし、さらには、持参した手錠を被害者の手に掛け、ロープで縛り上げ、あるいはタオル等で猿ぐつわをかませるなどして、抵抗感なく被害者を強姦するなどし、併せて又はその代わりとして口淫までさせ、自己の欲情を満たしている。このような被告人の犯行手口は、おおむね共通しており、手慣れたものといえ、性犯罪に関する常習性が強く認められる上（〔2〕事件は、被害者が自転車に乗ろう

としたため、急きょ路上で襲うこととしたものにはすぎない。）、多くの犯行で、被害者の身分証明書やその裸体等を携帯電話機で撮影し、氏名や住所が分かっている、通報すれば写真をネットに流すなどと言って口止めまでしているのもあって、これらを併せると、被告人の犯行態様は、総じて、非常に卑劣かつ悪質なものである。各犯行動機は、自己の性欲を満たし、あるいは、だんじり祭りに関係する費用や遊興費を捻出しようとする身勝手なもので酌むべき点はなく、遵法精神も著しく欠如している。

被告人は、合計 11 名の一人暮らしの女性を襲い、性的、財産的被害を与えている。被害者らは、肉体的苦痛はもとより、精神的に生涯残り得る、多大な苦痛を受けたのであり、一部の被害者が受けた傷害や財産的被害の程度も決して軽くはない。また、私生活で影響を受けたり、転居や転職を余儀なくされたりした被害者は多いし、中には、性的被害を受けたことをいまだに親に告げることができず、悲痛な思いを抱えている者もいる。このように、被告人が犯した犯行により生じた被害結果は重大といわざるを得ず、被害者らの非常に厳しい被害感情や処罰についての心情も重く受け止める必要がある。

3 したがって、被告人は、被害者らに謝罪文の送付や被害弁償金の一部の支払を申し出たこと（ただし、これを受領した被害者は一部にとどまる。受領額は合計 55 万円）、被告人は各犯行を行ったことを認め、被告人なりに反省の弁を述べ、実母や将来の結婚を約した交際相手の女性の支えの下、更生への態度を示していることを考慮しても、今回の一連の犯行に対する被告人の刑事責任は非常に重く、有期懲役刑のほぼ上限の刑を科すことで、その責任を厳しく自覚させるのが相当と判断した。

（求刑 不明）

〔予測モデル式からの若干の考察〕

予測モデルが導き出した性犯罪の刑期判断基準に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく、すべて

の被害者数については、「(3-①) 強姦」が<4 名> (70.517) , 「(3-②) 強姦未遂」が<2 名> (59.758) , 「(3-③) 強制わいせつ」が<1 名> (5.298) , 「(3-④) 強制わいせつ未遂」が<1 名> (28.917) となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④) 被害結果(傷害)」が<傷害: 全治 2 週間以内> (11.886) となり、その基本スコアは 176.376 となった。

本件は、「平成 17 年 7 月から平成 22 年 10 月までの約 5 年間に、限られた地域内において、一人暮らしの若い女性方に侵入して敢行した性犯罪を主体とする犯行 10 件(強姦致傷 1 件、強盗強姦未遂 1 件、強姦 3 件、強盗致傷・強制わいせつ未遂 1 件、準強制わいせつ致傷 1 件及び強盗未遂 3 件)と、通行中の女性に対するわいせつ略取・強姦未遂 1 件の事案」であり、<連続強姦・強制わいせつ型>の犯行である。本件は 2004 年の刑法一部改正(平成 16 年法律第 156 号)後の事案であり、したがって、併合罪加重の上限が 30 年となるところ、本判決では懲役 29 年が宣告されている(求刑は不明)。

予測モデル式では、予測値を 257.271 と算出した(残差 90.729)。残差が大きくなった原因として考えられるのは、1 つには、「(3-①) 強姦」・<4 名>のカテゴリースコアの低さが影響したことである。この点については、さらに検証することが必要であろう。また、もう 1 つ考えられるのは、財産的被害の程度の大きさである。本判決では、「被害者らは、肉体的苦痛はもとより、精神的に生涯残り得る、多大な苦痛を受けたのであり、一部の被害者が受けた傷害や財産的被害の程度も決して軽くはない。」と言及しており、予測モデル式では考慮できていないものと思われる。この点も、予測モデル式の改良が必要なところであろう。よって、本判決に関して言えば、「外れ値事例」とは言えないものと解される。

(4) 神戸地判平成 24 年 7 月 19 日 LEX/DB25482507【強姦未遂、児童買春、児童ポルノに係る行為等の処罰及び児童の保護等に関する法律違反、窃盗、強制わいせつ、強姦被告事件】

実績値 : 240	予測値 : 159.703
残差 : 80.297	標準化残差 : 2.379

【事案の概要】

第 1 被告人は、A(当時 6 歳)に対して強いてわいせつな行為をし、その状況を携帯電話機のカメラ機能を使用して撮影し、その画像を記録しようと企て、

1 平成 22 年 5 月 5 日午後零時 5 分頃から同日午後零時 15 分頃までの間、神戸市 a1 区 b1c1 丁目 d1 番地の e1B 林内において、前記 A が 13 歳未満であることを知りながら、同女兒に対し、着用していた衣服を脱がせて全裸にさせた上、同女兒の陰部を手指で弄ぶなどし、もって 13 歳未満の女子に対しわいせつな行為をした。

2 前記日時、場所において、同女兒が 18 歳に満たない児童であることを知りながら、同女兒をして、全裸で陰部を露出した姿態等を取らせ、携帯電話機のカメラ機能を使用して静止画を撮影し、その静止画データを同携帯電話機に装着した電磁的記録媒体であるマイクロ SD カードに記録させ、もって他人が児童の性器等を触る行為に係る児童の姿態であって性欲を興奮させ又は刺激するもの及び衣服の全部又は一部を着けない児童の姿態であって性欲を興奮させ又は刺激するものを視覚により認識することができる方法により描写した情報を記録した電磁的記録媒体である児童ポルノを製造した。

第 2 被告人は、C(当時 4 歳)に対して強いてわいせつな行為をし、その状況を携帯電話機のカメラ機能を使用して撮影し、その画像を記録しようと企て、

1 前記第 1 の日時、場所において、前記 C が 13 歳未満であることを知りながら、同女兒に対し、着用していた衣服を脱がせて全裸にさせた上、同女兒の陰部を手指で弄ぶなどし、もって 13 歳未満の女子に対しわいせつな行為をした。

2 前記日時、場所において、同女兒が 18 歳に満たない児童であることを知りながら、同女兒をして、全裸で陰部を露出した姿態等を取らせ、携帯電話機のカメラ機能を使用して静止画を撮影し、その静止画データを同携帯電話機に装着した電磁的記録媒体であるマイクロ SD カードに記録させ、もって他人が児童の性器等を触る行為に係る児童の姿態であって性欲を興奮させ又は刺激するもの及び衣服の全部又は一部を着けない児童の姿態であって性欲を興奮させ又は刺激するものを視覚により認識することができる方法により描写した情報を記録した電磁的記録媒体である児童ポルノを製造した。

第3 被告人は、D（当時7歳）に対して強いてわいせつな行為をし、その状況を携帯電話機のカメラ機能を使用して撮影し、その画像を記録しようと企て、

1 平成22年5月14日午後5時35分頃から同日午後5時45分頃までの間、神戸市f1区g1通h1丁目i1番E公園敷地内において、前記Dが13歳未満であることを知りながら、同女児に対し、着用していた衣服を脱がせて全裸にさせた上、同女児の陰部を手指で弄ぶなどし、もって13歳未満の女子に対しわいせつな行為をした。

2 前記日時、場所において、同女児が18歳に満たない児童であることを知りながら、同女児をして、全裸で両足を広げる姿勢等を取らせ、携帯電話機のカメラ機能を使用して静止画を撮影し、その静止画データを同携帯電話機に装着した電磁的記録媒体であるマイクロSDカードに記録させ、もって衣服の全部又は一部を着けない児童の姿態であって性欲を興奮させ又は刺激するものを視覚により認識することができる方法により描写した情報を記録した電磁的記録媒体である児童ポルノを製造した。

第4 被告人は、F（当時8歳）に対して強いてわいせつな行為をし、その際、陰部を露出した姿勢等を携帯電話機のカメラ機能を使用して撮影し、その画像を記録しようと企て、

1 平成22年5月29日午後4時50分頃から同日午後5時20分頃までの間、神戸市j1区k1町××丁目m1番所在のG公園北西側通路及びその周辺において、前記Fが13歳未満であることを知りながら、同女児に対し、背後から左手で同女児の口をふさいだ上、右手に持ったカッターナイフの刃先をその顔面に近づけ、「エッチしょ。嫌やったら殺す。寝ころべ。パンツ脱げ。」と言うなどの脅迫を加え、その反抗を抑圧した上、そのパンツを脱がせ、その陰部を性具及び手指で弄び、同女児に自己の陰茎を口淫させるなどし、もって13歳未満の女子に対し強いてわいせつな行為をした。

2 前記日時、場所において、同女児が18歳に満たない児童であることを知りながら、同女児をして、下半身に下着を着けず陰部を露出した姿勢を取らせ、これを携帯電話機のカメラ機能を使用して撮影し、その静止画像データを同携帯電話機内蔵の電磁的記録媒体に記録させた上、同年12月14日ころ、同市a1区n1町olp1番地のq1Hr1-s1号の被告人方において、前記静止画像デー

タを、赤外線送信の方法で、同携帯電話機から別の携帯電話機に送信し、これを受信した携帯電話機に装着したマイクロSDカードに複製して記録させ、もって衣服の全部又は一部を着けない児童の姿態であって性欲を興奮させ又は刺激するものを視覚により認識することができる方法により描写した情報を記録した電磁的記録媒体である児童ポルノを製造した。

第5 被告人は、前記A（当時6歳）を強姦し、その状況をデジタルカメラ及び携帯電話機のカメラ機能を使用して撮影し、その画像を記録しようと企て、

1 平成22年6月17日午後4時5分頃から同日午後5時頃までの間、神戸市a1区b1c1丁目t1番u1号I高等学校敷地内クラブハウス床下の空きスペースにおいて、前記Aが13歳未満であることを知りながら、同女児に対し、その陰部を手指で弄び、同女児に自己の陰茎を口淫させるなどした上、同女児を姦淫し、もって13歳未満の女子を強姦した。

2 前記日時、場所において、同女児が18歳に満たない児童であることを知りながら、同女児をして、全裸で陰部を露出した姿勢、前記1の各姿勢等を取らせ、これをデジタルカメラ及び携帯電話機のカメラ機能を使用し、静止画又は動画を撮影し、その静止画データ及び動画データを同デジタルカメラ及び同携帯電話機に装着した電磁的記録媒体である各マイクロSDカードに記録させ、もって児童を相手方とする性交又は性交類似行為に係る児童の姿態、他人が児童の性器等を触る行為に係る児童の姿態又は児童が他人の性器等を触る行為に係る児童の姿態であって性欲を興奮させ又は刺激するもの及び衣服の全部又は一部を着けない児童の姿態であって性欲を興奮させ又は刺激するものを視覚により認識することができる方法により描写した情報を記録した電磁的記録媒体である児童ポルノを製造した。

第6 被告人は、前記A（当時6歳）を強姦し、その状況をデジタルカメラ及び携帯電話機のカメラ機能を使用して撮影し、その画像を記録しようと企て、

1 平成22年6月24日午後2時55分頃から同日午後4時頃までの間、神戸市a1区b1c1丁目v1番J団地w1-x1号室において、前記Aが13歳未満であることを知りながら、同女児に対し、その陰部を手指で弄んだ上、同女児を姦淫しようとしたが、同女児の身体が未発達の

ため、膣内に陰茎を挿入できず、姦淫の目的を遂げなかった。

2 前記日時、場所において、同女児が 18 歳に満たない児童であることを知りながら、同女児をして、全裸で陰部を露出した姿態、前記 1 の各姿態等を取らせ、これをデジタルカメラ及び携帯電話機のカメラ機能を使用して動画を撮影し、その動画データを同デジタルカメラ及び同携帯電話機に装着した電磁的記録媒体である各マイクロ SD カードに記録させ、もって児童を相手方とする性交又は性交類似行為に係る児童の姿態、他人が児童の性器等を触る行為に係る児童の姿態又は児童が他人の性器等を触る行為に係る児童の姿態であって性欲を興奮させ又は刺激するもの及び衣服の全部又は一部を着けない児童の姿態であって性欲を興奮させ又は刺激するものを視覚により認識することができる方法により描写した情報を記録した電磁的記録媒体である児童ポルノを製造した。第 7 被告人は、K（当時 5 歳）を強姦し、その状況をデジタルカメラ等で撮影してその画像を記録しようとして、

1 平成 22 年 10 月 4 日午後 3 時頃から同日午後 4 時頃までの間、神戸市 j1 区 y1z1 丁目 a2 番地 L 団地 b2 棟 c2 号室 M 方において、前記 K が 13 歳未満であることを知りながら、同女児に対し、そのパンツを脱がせ、その陰部を性具等で弄び、同女児に自己の陰茎を口淫させた上、その陰部に陰茎を数回にわたり押し当てて同女児を姦淫しようとしたが、同女児の身体が未発達のため、膣内に陰茎を挿入できず、姦淫の目的を遂げなかった。

2 前記日時、場所において、同女児が 18 歳に満たない児童であることを知りながら、同女児をして、下半身に下着を着けず陰部を露出した姿態、前記 1 の各姿態等を取らせ、これをデジタルカメラのカメラ機能及び動画撮影機能を使用して撮影し、その静止画及び動画を同デジタルカメラに装着した電磁的記録媒体であるマイクロ SD カードに記録させ、もって児童を相手方とする性交又は性交類似行為に係る児童の姿態、他人が児童の性器等を触る行為に係る児童の姿態又は児童が他人の性器等を触る行為に係る児童の姿態であって性欲を興奮させ又は刺激するもの及び衣服の全部又は一部を着けない児童の姿態であって性欲を興奮させ又は刺激するものを視覚により認識することができる方法により描写した情報を記録した電磁的記録媒体である児童ポルノを製造した。

第 8 被告人は、平成 23 年 9 月 4 日午後零時 9 分頃、神戸市 a1 区 d2e2 丁目 f2 番 g2 号所在の Nh2 店において、同店店長 O が管理し、店内に陳列していた整髪料 1 個（販売価格 893 円相当）を窃取した。

【量刑の理由】懲役 20 年

神戸地方裁判所は、本件の量刑に関し、以下のような理由を示した。

判示第 1 ないし第 7 の犯行は、いずれも 4 歳から 8 歳の女児（計 5 名）に対し、強姦（1 件）、強姦未遂（2 件）、強制わいせつ（4 件）を敢行するとともに、それらの状況を撮影した児童ポルノを製造したものである。無警戒な上、大人に対して抵抗する力を持たない幼児に対する陵虐であり、卑劣さが際立っている。また、被害者らは、まさに人格形成のさなかにあっただけに、各犯行が被害者らの心身に与えた打撃が大きいことはもちろん、今後の成長に及ぼす悪影響も計り知れない。こうしたことから、本件各犯行は性犯罪の中でも特に悪質かつ重大な類型に属する。

個々の犯行態様をみても、強姦に至った判示第 5 の 1 の犯行の重大性はいうに及ばないが、その他の犯行についても、性具を用いて未発達の陰部を弄んだり、口淫を強いるなど、その陵辱はかなり酷い。それらの状況を撮影して作った児童ポルノも正視に耐えないものである。更に、被害者に対して、「裸の写真をばらまく」などと言って口止めを図ったことまでである。

被告人は、このような悪質な犯行を 7 回にわたって繰り返したのであり、もとより悪質な少女に対する同種事犯の中でも、まれにみる悪逆ぶりである。各保護者の処罰感情は当然ながら峻烈であるが、現時点では金銭的な賠償の目処すら立っていない。

これらの事情に照らすと、本件は、性犯罪の一般的な量刑傾向に照らして相当に重い刑を科すべきであって、被告人なりに反省の言葉を述べていることを考慮しても、主文のとおり厳刑を科すことが相当であると判断した。

(求刑 懲役 25 年)

〔予測モデル式からの若干の考察〕

予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく、すべての被害者数については、「(3-①) 強姦」が<1名> (9.134) , 「(3-②) 強姦未遂」が<2名> (59.758) , 「(3-③) 強制わいせつ」が<4名> (18.414) , 「(3-④) 強制わいせつ未遂」が<なし> (-1.615) となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④) 被害結果(傷害)」が<なし> (-11.612) となり、その基本スコアは 74.079 となった。

本件は、「いずれも 4 歳から 8 歳の女儿(計 5 名)に対し、強姦(1 件)、強姦未遂(2 件)、強制わいせつ(4 件)を敢行するとともに、それらの状況を撮影した児童ポルノを製造した」事案であり、おおむね 10 歳以下の<幼児性愛型>の犯行であり、また、<連続強姦・強制わいせつ型>の犯行でもある。本件は 2004 年の刑法一部改正(平成 16 年法律第 156 号)後の事案であり、したがって、併合罪加重の上限が 30 年となる、求刑が懲役 25 年であるのに対して、本判決では懲役 20 年が宣告されている。

予測モデル式では、予測値を 159.703 と算出した(残差 80.297)。残差が大きくなった原因の 1 つは、前記の千葉地判平成 24 年 8 月 28 日 LEX/DB25482765 と同様に、予測モデル式での量刑因子(アイテム)に犯行類型(社会的類型/刑事学的類型)が設定されていないことである。また、もう 1 つは、予測モデル式において、児童買春、児童ポルノに係る行為等の処罰及び児童の保護等に関する法律違反に関する設定がなされていないことである。この点についても改良が必要であろう。よって、予測モデル式の改良を要することであり、本判決に関し言えば、「外れ値事例」とは言えないものと解される。

(5) 山形地判平成 24 年 7 月 12 日 LEX/DB25482584 【わいせつ略取、集団強姦致傷、強姦致傷、わいせつ略取未遂、強姦未遂、窃盗被告事件】

実績値：192	予測値：109.191
残差：82.809	標準化残差：2.453

〔事案の概要〕

第 1 被告人は、徒歩で帰宅中の被害者 A(当時 17 歳)を略取して強姦しようとした上、平成 17 年 10 月 16 日午前 0 時 25 分頃、山形市内の路上において、同女に対し、その背後から抱きついた上、同女の体を引っ張って転倒させ、更に同女の口を塞ぐなどして、被告人使用の普通乗用自動車後部座席に同女を連れ込んだ上、同車を発進させ、もってわいせつの目的で同女を略取し、引き続き、同日午前 0 時 45 分頃、山形県内に駐車した同車内において、同女に対し、その両手首をガムテープで縛る暴行を加えて、その反抗を抑圧して強いて同女を姦淫し、その際、上記一連の暴行により、同女に対し、全治約 1 週間を要する右背部及び右腰部擦過傷の傷害を負わせた。

第 2 被告人は、徒歩で帰宅中の被害者 B(当時 17 歳)を略取して強姦しようとした上、平成 23 年 5 月 28 日午後 8 時 35 分頃、山形市内の踏切東側路上において、被告人が、同女を同所付近に停車中の P2 使用の普通乗用自動車に連れ込むため、その腕をつかみ、体を引っ張って転倒させるなどの暴行を加えて、もってわいせつの目的で同女を略取し、その反抗を抑圧して強いて同女を姦淫しようとしたが、同女が激しく抵抗したため、いずれの目的も遂げなかった。

第 3 被告人は、女性を略取し、共同して強姦しようとした上、前記 P2 と共謀の上、同年 6 月 25 日午後 9 時頃、山形市内の路上において、自転車で帰宅中の被害者 C(当時 16 歳)を認めるや、同女に対し、それぞれその上半身及び下半身を両手で抱きかかえるなどして、P2 使用の普通乗用自動車後部座席に押し込んだ上、P2 が同車を発進させ、もってわいせつの目的で同女を略取し、引き続き、同車内において、被告人が同女に対し、カッターナイフを示して「騒ぐな。」などと言って脅迫しながら走行し、同日午後 9 時 20 分頃、山形市内に駐車した同車内において、同女に対し、P2 がその両足を押さえつけ、被告人がその両手首をガムテープで縛り、目隠しをするなどの暴行を加えて、その反抗を抑圧し、被告人が同女の下着を引き下ろして強姦しようとしたが、同女が生理中であったためその目的を遂げず、その際、上記一連の暴行により、同女に対し、通院加療約 9 日間を要する頸椎捻挫の傷害を負わせた。

第 4 被告人は、同日午後 9 時頃から同日午後 10 時 10 分

頃までの間、山形市内の路上から同市内又はその周辺を経て、同市内所在の施設北方約 300 メートル先路上に至るまでの前記 P2 が運転する普通乗用自動車内において、前記被害者 C 所有の現金 4 万 2,000 円を盗んだ。

第 5 被告人は、同年 8 月 30 日午後 6 時 30 分頃から同日午後 7 時頃までの間、山形県天童市所在の P3 方東側駐車場において、同所に干してあった P4 所有の T シャツ等 2 点（時価合計約 1,500 円相当）を盗んだ。

〔量刑の理由〕懲役 16 年

山形地方裁判所は、本件の量刑に関し、以下のような理由を示した。

被告人は、夜間 1 人で帰宅中の被害者らを襲い、車に連れ込んだ被害者のうち、被害者 C については、その胸付近にカッターナイフを示して脅迫するなどした上、キスをする、乳首をなめる、口淫をさせて口内で射精するなどのわいせつ行為に及び、被害者 A についてはガムテープで両手首を縛った上、姦淫行為にまで及んだ。被告人は、女性を人気がない場所まで連れ去って強姦するため、車、ガムテープ、軍手等をあらかじめ準備しており、いずれの犯行も計画的で悪質である。しかも、被害者 B に対し車に連れ込もうとして暴行を加えたり、被害者 C に対しわいせつな行為に及んだりしているのは被告人のみであり、果たした役割は大きい。被害者らは、夜道を 1 人で歩けなくなるなど本件各犯行により味わった恐怖心は大きく、とりわけ上記の被害を受けた被害者 A 及び C の被った精神的苦痛は計り知れず、結果は重大である。被害者 C に対する姦淫行為は未遂に終わっているが、それはたまたま被害者 C が生理中であったためであり、未遂の点を重視することはできない。これらの被害結果からして、何ら落ち度のない被害者やその家族が被告人の厳罰を希望しているのも当然である。被告人は、20 歳の頃見たアダルトビデオの影響で強姦に興味を持ったことなどから被害者 A に対する犯行に及び、その約 6 年後にはインターネットで知り合った P2 の誘いが契機になったとはいえ、そのような興味を持ち続けたこと

などからまたしても被害者 B 及び C に対する犯行に及んでおり、このような女性の気持ちを省みない身勝手な動機は強く非難されるべきである。そして、これらの犯行が地域社会に与えた不安感も看過できない。

以上によれば、被告人の刑事責任は重い。

他方、被告人には、次のような有利に斟酌すべき事情もある。被告人は、被害者 A に対して被害弁償金 130 万円、判示第 5 の被害者に示談金 3 万円を支払い、また、P2 と共に被害弁償金として、被害者 B に対して 50 万円を支払い、被害者 C に対して 130 万円の支払を申し出るなどしている。被告人は事実を認め、反省の言葉を述べ、被告人の元妻も出廷し、社会復帰後の被告人の更生に協力すると述べている。被害者 A 及び C のけがの程度は、幸いにも重いものではなかった。

これらの事情も考慮し、主文のと通りの刑を科すこととした。

（求刑 懲役 18 年）

〔予測モデル式からの若干の考察〕

予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく、すべての被害者数については、「(3-①) 強姦」が<1名> (9.134) , 「(3-②) 強姦未遂」が<2名> (59.758) , 「(3-③) 強制わいせつ」が<なし> (-13.951) , 「(3-④) 強制わいせつ未遂」が<なし> (-1.615) となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④) 被害結果(傷害)」が<傷害: 全治 2 週間以内> (11.886) となり、その基本スコアは 65.212 となった。

本件は、2005 年に行ったわいせつ略取・強姦致傷(判示第 1) , その 6 年半後の 2011 年に行ったわいせつ略取未遂・強姦未遂(判示第 2) , わいせつ略取・集団強姦致傷(判示第 3) からなる事案である。最も重い判示第 3 の罪など 2011 年の犯行を中心に捉えるならば、<集団強姦・強制わいせつ型>の犯行に位置づけられる。本件は 2004 年の刑法一部改正(平成 16 年法律第 156 号)後の事案であり、したがって、併合罪加重の上限が 30 年となる、求刑が懲役 18 年であるのに対して、本判決で

は懲役 16 年が宣告されている。

予測モデル式では、予測値を 109.191 と算出した（残差 82.809）。その原因として考えられることの 1 つは、予測モデル式に犯行類型（社会的類型／刑事学的類型）が設定されていないことである。集団強姦罪や集団強姦致死傷罪について、集団犯罪をより重く処罰するべきであるという社会的風潮が形成されたことや、強姦罪は強制わいせつ罪に比べて共犯形態の割合が高いことから、2004 年の刑法一部改正（平成 16 年法律第 156 号）で新設されたものである〔なお、同条文は、2017 年の性刑法の抜本的改正により廃止された〕。法定刑については、強姦罪や強姦致死傷罪の法定刑の下限と比べて、それぞれ 1 年ずつ加重され、集団強姦罪が懲役 4 年以上、集団強姦致死傷罪が懲役 6 年以上に重罰化されたという背景がある。予測モデル式では、共犯関係は、変数増減法による量刑因子（アイテム）の選別から漏れ、また、変数増減法を組み合わせない形での数量化理論第 I 類による予測モデル式〔前記 2.2.3 (1)〕においても、共同正犯ということでは加重される傾向は確認されなかった。だが、犯行類型（社会的類型／刑事学的類型）として＜集団強姦・強制わいせつ型＞を考えた場合には、違いが生じる可能性がある。したがって、予測モデル式での量刑因子（アイテム）において、犯行類型（社会的類型／刑事学的類型）を設定するよう改良する必要があるだろう。

だが、残差が大きくなった原因として、もう 1 つの可能性を捨てきれないのである。それは、本件が＜集団強姦・強制わいせつ型＞でも「外れ値事例」（異常値）ではないかということである。それを検証するため、後述する「3.5 犯行類型別にみた量刑傾向」を引くと、＜集団強姦・強制わいせつ型＞（N=39）の標準化残差の平均値は-0.04 で、中央値が 0.54（最大値が 2.45、最小値が-0.76）であった。本件の標準化残差は最大値の 2.45 であり、仮に本件を除くと、バラツキ具合は小さくなる。したがって、本件は、標準化残差が突出して大きくなった「外れ値事例」であることが見て取れるのである。

以上のとおり、犯行類型（社会的類型／刑事学的類型）を予測モデル式での量刑因子（アイテム）に設定するよう改良する必要があるものの、本件については、標準化残差が突出して大きくなった「外れ値事例」とであると解される。

（6）東京地立川支判平成 24 年 3 月 1 日 LEX/DB25480580

【住居侵入、強姦致傷、強盗被告事件】

実績値：276	予測値：203.832
残差：72.168	標準化残差：2.138

【事案の概要】

第 1 被告人は、強姦の目的で、平成 17 年 3 月 3 日午後 11 時頃、東京都武蔵野市 A 方に玄関ドアから侵入し、同所において、同人（当時 23 歳）に対し、その顔面をげん骨で殴り、「抵抗したら殺すぞ。」「今まで人を殺したことがあるから、1 人殺すくらい何てことはない。」「おとなしくしていれば殺さない。」などと語気強く言い、その両手を後ろ手にマフラーで縛るなどの暴行脅迫を加え、その反抗を抑圧して同人と性交し、その際、前記暴行により、同人に全治約 17 日間を要する左眼球打撲、左眼結膜下出血の傷害を負わせ、さらに、その頃、同所において、同人が前記暴行脅迫により抵抗できない状態にあるのに乗じて、同人から金品を強奪しようと考え、同人所有又は管理の現金約 9000 円及び財布等 9 点在中のショルダーバッグ 1 個、ハンドバッグ 1 個及び携帯電話機 1 個（時価合計約 1 万 2000 円相当）を強取した（第 1 事件）。

第 2 被告人は、強姦の目的で、同月 24 日午後 11 時頃、東京都武蔵野市 B 方に玄関ドアから侵入し、同所において、同人（当時 31 歳）を押し倒して、その口を右手で塞ぎ、その首を左手で絞め、「静かにしろ。殺すぞ。」「俺は前科者だ。」などと語気強く言い、その両手を後ろ手にガムテープで縛り、同人が着用していた下着等をはさみで切って、その両足をビニール紐で縛るなどの暴行脅迫を加え、その反抗を抑圧して同人と性交し、その際、同人に全治約 1 週間を要する会陰部・膣壁損傷の傷害を負わせ、さらに、その頃、同所において、同人が前記暴行脅迫により抵抗できない状態にあるのに乗じて、同人から金品を強奪しようと考え、同人所有又は管理の現金約 2 万円及びキャッシュカード等 4 点在中の財布 1 個（時価合計約 1000 円相当）を強取した（第 2 事件）。

第 3 被告人は、東日本大震災の余震で停電が発生したことから、盛岡市■所在のマンション■の玄関のオートロックが解除されたことに乗じ、強姦の目的で、平成 23 年 4 月 8 日午前零時 50 分ころ、同マンション C 方に出入口

ドアから侵入し、同所において、同人（当時 19 歳）に対し、その口を塞ぎ、「大声を出すな。」と言った上、同人をベッド上に押し倒し、その両手を後ろ手にマフラーで縛り、さらに、同人が叫び声を上げるや、その頭部をげん骨で殴り、「大声を出すな。」「殺すぞ。」「俺は、人を 1 人殺しているんだぞ。」と言い、同人の下着等を無理矢理脱がせるなどの暴行脅迫を加え、その反抗を抑圧して同人と性交し、その際、同人に全治約 1 週間を要する膣壁裂傷の傷害を負わせた（第 3 事件）。

〔量刑の理由〕 懲役 23 年

東京地方裁判所立川支部は、本件の量刑に関し、以下のような理由を示した。

1 被告人は、平成 17 年 3 月から平成 23 年 4 月にかけて、3 回にわたり、見ず知らずの女性方に押し入った上での強姦致傷を繰り返したもので、うち 2 件では強盗にも及んでいる。そのいずれの犯行態様も悪質で、それぞれ重大な結果を生じさせている。より具体的には、以下の点を指摘できる。

（1）被告人は、いずれの事件でも、被害者らの両手を後ろ手に縛り、目隠しをして、犯人がちゅうちょなく犯罪を犯す人間で、抵抗すれば殺されると思い込ませるような強烈な脅し文句を使っている。また、被害者らの頭部（第 3 事件）や顔面（第 1 事件）をげん骨で強打し、首を絞め、着衣を切り裂き、足を縛ったり（第 2 事件）もしている。

（2）被告人は、被害者らの精神的・肉体的苦痛を何ら意に介さず、性欲の赴くままに陵辱をし、被害者 3 名ともに妊娠の危険にもさらしている。

（3）いずれの事件においても、被告人の強姦意思は強かったといえるが、とりわけ第 3 事件では、被告人は、相当な戸数のドアを下の階から順次ノックし、一人で部屋にいる女性を捜し回った挙げ句に犯行に及んでおり、強姦への意欲が極めて強固であった。また、当時、日本全土が東日本大震災という災厄に苦しみ悲しんでいる最中に、その余震による停電を利用したという卑劣な態度は、被告人の社会的なモラルの欠落を思わせるだけでなく、その性癖にかなりの問題があることを物語

っている。

（4）被害者らの被害は、各判示のものに止まらない。第 3 事件の被害者は PTSD の診断を受けており、第 1、第 2 事件の被害者も、被害から約 7 年が経とうとしているのに、依然として不安や辛い気持ちが続いており、これは一生消えることはないと公判廷で証言した。これらのことは、被害者らが受けた恐怖や屈辱感などの精神的苦痛がいかに大きいかを如実に示すものである。また、第 1、第 2 事件の強盗被害も軽視できない。被害者らがいずれも被告人の厳重処罰を求めていることは、当然である。

2 被告人は、以上にみたとおりの重大な犯罪を繰り返したものであるが、その公判廷での供述態度等に照らすと、その原因であろう自己のゆがんだ性癖と正面から向き合い、これを改善していこうとする真しな態度が見受けられない。犯行の全部（判示第 1 の犯行）又は一部（判示第 2 及び第 3 の各犯行）について不合理な弁解をしつつ、被告人は一応の反省の弁を述べるが、それはいかにも表面的であって、心から発せられたとみるのは困難である。そうである以上、被告人の再犯可能性は高いといわざるを得ない。

3 以上の検討によれば、被告人の刑事責任は誠に重大である。これまで被告人に刑事処罰を受けた経験がなく、実兄が社会復帰後の支援を約束したことなど被告人に有利に解すべき事情を考えても、重い刑を科すべきである。しかし、当裁判所としては、被告人に何とか更生してもらい、社会において被害者らに具体的な償いをしてもらいたいと切に考え、更生の芽を摘まない刑との視点を加味し、主文のとおり懲役刑を科すべきと判断した。

（求刑 懲役 25 年）

〔予測モデル式からの若干の考察〕

予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく、すべての被害者数については、「(3-①) 強姦」が < 3 名 > (122.224)、「(3-②) 強姦未遂」が < なし > (-10.387)、「(3-③) 強制わいせつ」が < な

し> (-13.951) , 「(3-④) 強制わいせつ未遂」がくなし> (-1.615) となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④) 被害結果(傷害)」が<傷害: 全治 2 週間以内> (11.886) となり、その基本スコアは 108.157 となった。

本件は、「平成 17 年 3 月から平成 23 年 4 月にかけて、3 回にわたり、見ず知らずの女性方に押し入った上での強姦致傷を繰り返した」事案であり、<連続強姦・強制わいせつ型>の犯行である。本件は 2004 年の刑法一部改正(平成 16 年法律第 156 号)後の事案であり、したがって、併合罪加重の上限が 30 年となるところ、求刑が懲役 25 年であるのに対して、本判決では懲役 23 年が宣告されている。

予測モデル式では、予測値を 203.832 と算出した(残差 72.168)。残差が大きくなった原因として考えられるのは、予測モデル式に 2 件の強盗が織り込まれていないことである。本判決は、「第 1, 第 2 事件の強盗被害も軽視できない」と言及しており、少なからず考慮されているものと思われる。予測モデル式の「(2) 犯行後の行為」に関し、改良が必要であろう。よって、予測モデル式の改良を要することであり、本判決に関して言えば、「外れ値事例」とは言えないものと解される。

(7) 富山地判平成 24 年 1 月 19 日 LEX/DB25482650【強制わいせつ, 傷害, 準強姦, 強制わいせつ幫助, 準強姦幫助被告事件】 ※被告人 A についてののみ

実績値: 156	予測値: 73.119
残差: 82.881	標準化残差: 2.455

【事案の概要】 ※被告人 A についてののみ

第 1 被告人 A (以下「被告人 A」という。)は、平成 23 年 4 月 29 日午後 3 時頃、富山市所在の cd 店駐車場に駐車した普通乗用自動車内において、E (当時 15 歳) に対し、その頭部を平手で 1 回叩いて同車ドアガラスに打ち付けさせた上、持っていたプラスチック製のコップで同女の左大腿部を 1 回殴打する暴行を加え、よって、同女に全治約 2 週間に要する額上部打撲、左大腿部打撲の傷害を負わせた。

第 2 被告人 A は、交際相手の被告人 B (以下「被告人 B」という。)の長女である E (平成 7 年 9 月 23 日生)

に対し、同女が中学 2 年生の頃から性的虐待を繰り返すとともに、日常生活の上のささいなことを理由に暴行脅迫を加えるなどしていたものであるところ、被告人 A による性的虐待や暴行脅迫による恐怖心から、同女が同被告人に対して恒常的に抗拒不能の状態に陥っていることに乗じて、同女を姦淫しようと企て、

(1) 平成 23 年 6 月 8 日午後 7 時 47 分頃から同月 9 日午前 10 時 42 分頃までの間、富山市 f ホテル〇〇〇〇号室において、同女(当時 15 歳)を姦淫し、もって同女を強姦した。

(2) 同月 9 日午後 2 時 46 分頃から同月 10 日午前 8 時 57 分頃までの間、富山市 g ホテル〇〇〇〇号室において、同女を姦淫し、もって同女を強姦した。

第 3 被告人 A は、H (当時 10 歳) が 13 歳未満であることを知りながら、同女にわいせつな行為をしようと企て、平成 23 年 6 月 25 日午後 10 時 40 分頃、富山市 J ホテル〇〇〇号室において、同女に対し、露出させた自己の陰茎をなめさせるなどし、もって 13 歳未満の女子に対し、わいせつな行為をした。

【量刑の理由】 懲役 13 年 ※被告人 A についてののみ

富山地方裁判所は、本件の量刑に関し、以下のような理由を示した。

1 本件は、被告人 A による傷害 1 件(判示第 1 の犯行)、準強姦 2 件(判示第 2 の犯行)、強制わいせつ 1 件(判示第 3 の犯行)並びに被告人 B による準強姦幫助 2 件(<省略>)及び強制わいせつ幫助 1 件(<省略>)から成る事案である。

2 被告人 A の各犯行についてみると、まず、傷害の犯行について、その暴行態様は、自動車内において、E の頭部を叩いてドアガラスに打ち付けたり、コップで大腿部を殴打したりしたもので悪質であり、被害結果も軽くない。

次に、準強姦の各犯行についてみると、被告人 A は、被告人 B の夫死亡後、平成 21 年 4 月頃から被告人 B 方で生活するようになり、同年夏頃から、被告人 B の長女である E に対して、性的虐待や暴行脅迫を加えるなどしていたところ、判示第 2 のとおり、同被害者が、被告人 A に対する恐怖心から

抵抗できない状態にあることに乗じて、同被害者を姦淫し、さらに、その翌日も、同様に姦淫したものであり、その各犯行は極めて卑劣である。また、被告人 A の供述によっても平成 23 年 3 月頃から同被害者を姦淫するようになったというのであるから、本件各準強姦は常習的な犯行である。

さらに、強制わいせつの犯行についてみると、被告人 A は、被告人 B の次女で、当時わずか 10 歳であった H に対し、判示第 3 のとおり、口淫させるなどのわいせつな行為を行ったもので、この犯行もまた卑劣で悪質である。加えて、被告人 A は、数年前から同被害者に対し、同様の行為を重ねてきたことを認めており、本件強制わいせつの常習性は顕著である。

そして、本件各準強姦及び本件強制わいせつをした動機についてみると、被告人 A の指示に対し被告人 B が拒絶しなかったという事情はあるものの、被告人 A がそのような状況を利用して、欲望のままに自己の性欲を満足させたいという不埒な思いから、まだ幼い被害者らに対して性的行為に及んだものであり、自己中心的であって、酌むべき事情はない。加えて、被告人 A は、本件傷害の犯行後に E が児童相談所に保護されたことを知ったにもかかわらず、その約 1 か月後には、本件各準強姦の犯行に及び、さらに、その約半月後には、H に対して本件強制わいせつの犯行に及んでいることに照らすと、被害者らに性的行為をすることに対する被告人 A の欲望の強さは相当なもので、その倫理観や抵抗感の欠如には甚だしいものがある。その上、準強姦の被害者である E にあっては被害当時 15 歳、強制わいせつの被害者である H にあっては被害当時 10 歳といずれも相当に未熟な年齢であって、各被害者が受けた精神的苦痛は計り知れず、今後の心身の成長に多大な悪影響を与えることも懸念されるなど、被害結果は重大というほかない。被害者らの被害感情も強い。それにもかかわらず、被告人 A から被害者らに対する慰謝の措置は何ら講じられていない。

以上によれば、被告人 A の刑事責任は相当に重大である。

3 次に、被告人 B の各犯行についてみると、・・・＜省略＞・・・被害者らが受けた精神的苦痛もまた少なくない。

以上によれば、被告人 B の刑事責任もまた重い。

4 しかしながら、他方で、被告人両名は、本件各犯行を認め、反省の弁を述べている。

加えて、被告人 A にあっては、二度と被告人 B 及び被害者らに近づかない旨述べていること、被告人 A の母親が公判廷で被告人 A の身元を引き受け、立ち直りに協力していく旨述べていること、被告人 A にこれまで前科がないことなど、酌むべき事情も認められる。

さらに、被告人 B においては、今後被告人 A と関わらない旨誓っていること、被害者らが被告人 B と一緒に生活することを望んでいること、被告人 B のその余の子らもまた被告人 B の帰りを待っていること、被告人 B にこれまで前科がないことなど、酌むべき事情も認められる。

5 そこで、これらの事情を総合考慮し、被告人両名に対し、それぞれ主文の各懲役刑を科することとした。

(求刑 被告人 A につき懲役 18 年)

〔予測モデル式からの若干の考察〕

予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく、すべての被害者数については、「(3-①) 強姦」が<1 名> (9.134) , 「(3-②) 強姦未遂」が<なし> (-10.387) , 「(3-③) 強制わいせつ」が<1 名> (5.298) , 「(3-④) 強制わいせつ未遂」が<なし> (-1.615) となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④) 被害結果(傷害)」が<なし> (-11.612) となり、その基本スコアは 9.182 となった。

本件は、被告人 A に関し、約 2 か月間で「傷害 1 件(判示第 1 の犯行) , 準強姦 2 件(判示第 2 の 1 の各犯行) , 強制わいせつ 1 件(判示第 3 の 1 の犯行)」からなる事案であり、＜連続強姦・強制わいせつ型＞の犯行である。第 2 の犯行については、＜性的虐待型＞の犯行であり、第 2・第 3 の犯行については、おおむね 10 歳以

下の＜幼児性愛型＞に準じた犯行とも位置づけられる。本件は 2004 年の刑法一部改正（平成 16 年法律第 156 号）後の事案であり、したがって、併合罪加重の上限が 30 年となるところ、求刑が懲役 18 年であるのに対して、本判決では懲役 13 年が宣告されている。

予測モデル式では、予測値を 73.119 と算出した（残差 82.881）。その原因は、前記の千葉地判平成 24 年 8 月 28 日 LEX/DB25482765 や、神戸地判平成 24 年 7 月 19 日 LEX/DB25482507 と同様に、予測モデル式での量刑因子（アイテム）に犯行類型（社会的類型／刑事学的類型）が設定されていないことにありと考えている。よって、予測モデル式の改良を要することであり、本判決に関して言えば、「外れ値事例」とは言えないものと解される。

なお、本件に関して付記しておくが、公訴事実では、前記判示第 3 の犯行に加えて、「被告人 A は、H（平成 12 年〇月〇〇日生、当時 10 歳）が 13 歳未満であることを知りながら、同女にわいせつな行為をしようと企て、平成 23 年 6 月 24 日午後 11 時 40 分頃、富山市＜以下略＞J ホテル■■■号室において、同女に対し、露出させた自己の陰茎をなめさせるなどし、もって 13 歳未満の女子に対し、わいせつな行為をした」ことも挙げられていたが、富山地方裁判所は、「H は、上記検察官調書作成時において 10 歳 11 か月とまだ幼い年齢であったこと、関係証拠によれば、そもそも、捜査機関において、H は告訴するということがよく理解できないために、N〔祖母（本括弧内は筆者による）〕に働きかけて、同人が同年 7 月 18 日に告訴状を作成したという経緯があったものであり、しかも、結局、H に告訴状を作成させたり通常形式の告訴調書（刑訴法 241 条 2 項、犯罪捜査規範 64 条 1 項）を作成したりしていないものと認められることなどに照らすと、H が告訴能力を有していたことには相当な疑問が残」として、同公訴事実の強制わいせつについての公訴は、その提起時に告訴を欠き、手続が公訴提起の規定に違反したため無効であるとして、刑訴法 338 条 4 号により棄却した。これに対して、検察側が控訴したところ、控訴審である名古屋高等裁判所金沢支部は、「被害者による告訴は、犯罪被害にあった事実を捜査機関に申告して、犯人の処罰を求める行為であって、親告罪の告訴を有効になすためには、告訴能力が必要とされているところ、捜査機関に対し、自己の犯罪被害事

実を理解し、これを申告して犯人の処罰を求める意思を形成する能力があれば足りると解するのが相当である。本件では、告訴当時 10 歳 11 か月の小学 5 年生であり、普通の学業成績を上げる知的能力を有した被害者が、検察官に対し、被害状況を具体的に申告した上で、その犯人として被告人を特定し、その処罰を求める意思を申告していたのであるから、告訴能力としてはこれを備えているというべきである。」として、刑事訴訟法 398 条により本件を原裁判所である富山地方裁判所に差し戻した（名古屋高裁金沢支平成 24 年 7 月 3 日高刑速（平 24）号 201 頁）。したがって、差戻第一審において量刑が変更されたものと推察されるが、ただ、筆者はその判決書を得られていなかったため、本分析においては第一審判決を用いた次第である。

（8）高松地判平成 23 年 3 月 30 日 LEX/DB25500360【住居侵入、強盗強姦（変更後の訴因 強姦）、強姦、邸宅侵入、暴行、強姦致傷、強姦未遂被告事件】

実績値：288	予測値：214.442
残差：73.558	標準化残差：2.179

〔事案の概要〕

第 1 被告人は、通行中の V（当時 19 歳）を認めて、同女を強姦しようと企て、〇月〇日午後 11 時 50 分ころ、■■所在のアパートにある同女方まで同女を追尾し、同女が玄関ドアを開けて入ろうとしたのに乗じて、覆面をかぶり、同玄関ドアから押し入って同女方居室内に侵入し、そのころから〇月〇日午前 2 時 20 分ころまでの間、同室内において、同女に対し、「静かにせえ。お金だけ欲しい。叫ぶな。ナイフ持ってるよ。」「金出せ。」「警察には言うなよ。」「信じようと思っても、信じられん。エッチさせてもらう。写真も撮らせてもらう。そうしたら警察に言わんやろ。」などと申し向けて脅迫し、同女の両手首をひもで緊縛するなどの暴行を加え、その反抗を抑圧した上、デジタルカメラで撮影しながら、強いて同女の乳房及び陰部をもてあそんだり、同女に自己の陰茎をなめさせ、さらに、強いて同女を姦淫した。

第 2 被告人は、以前に自宅まで追尾した V（当時 22 歳）を強姦しようと企て、■■午後 9 時 23 分ころ、■■所在の同女方アパートで同女を待ち伏せ、帰宅した同女が同女方

居室内に玄関ドアを開けて入ろうとしたのに乗じて、覆面をかぶり、同玄関ドアから押し入って同女方居室内に侵入した上、同女に対し、その口を手で覆うなどの暴行を加え、その反抗を抑圧して強いて同女を姦淫しようとしたが、同女が玄関ドアを開けて逃げようとするなどしたため、その目的を遂げなかった。

第3 被告人は、通行中のV（当時29歳）を認めて、後日同女を強姦するために同女の居住地を調べる目的で、
■午前1時15分ころ、■が看守する■所在の同女方マンションまで同女を追尾し、同マンション1階屋内駐車場西側出入り口から同駐車場内及び同マンション屋外駐車場内に侵入したところ、同屋外駐車場にある通用口から前記マンション建物内に入ろうとした同女に追尾を気付かれたと感じ、同女が声を上げて助けを呼ぶのを防ぐため、同女に対し、その口を手で覆うなどの暴行を加えた。
第4 被告人は、通行中のV（当時21歳）を認めて、同女を強姦しようと企て、■午後10時35分ころ、■が看守する■所在の同女方アパートまで同女を追尾し、同アパート外階段から同アパート2階共有廊下に侵入した上、さらに、同女とともに同女方居室内に押し入り同室内で強姦すべく、覆面をかぶった上、玄関ドアを開けて同女方居室内に入ろうとした同女に対し、その口を手で覆うなどの暴行を加え、その反抗を抑圧して強いて同女を姦淫しようとしたが、同女が大声を上げて抵抗したため、その目的を遂げず、その際、前記暴行により、同女に全治数日間を要する頸部擦過傷の傷害を負わせた。

第5 被告人は、通行中のV（当時22歳）を認めて、同女を強姦しようと企て、■午後11時10分ころ、■所在の同女方まで同女を追尾し、同女が玄関ドアを開けて入ろうとしたのに乗じて、覆面をかぶり、同玄関ドアから押し入って同女方居室内に侵入した上、同女に対し、その口を手で覆うなどの暴行を加え、その反抗を抑圧して強いて同女を姦淫しようとしたが、同女が大声を上げるなどして抵抗したため、その目的を遂げず、その際、前記暴行によって同女が転倒するなどしたことにより、同女に全治1か月間を要する頸椎椎間板ヘルニア並びに首の左側及び左膝内側の擦過傷の傷害を負わせた。

第6 被告人は、強姦の目的で、■午前6時45分ころ、■所在のアパートにあるV（当時22歳）方に無施錠の玄関ドアから侵入し、そのころから同日午前8時15分ころ

までの間、同所において、同女に対し、包丁を示し、「静かにせえ。金を出して。」「お前警察に通報するやろ。警察に言われたら困るから、写真撮る。エッチの写真を撮る。」「お前本当にしつこいの。エッチしたらすぐ帰るわ。エッチするんか、殺されるんか、どっちがええ。」などと申し向けて脅迫し、その反抗を抑圧した上、デジタルカメラで撮影しながら、強いて同女に自己の陰茎をなめさせ、さらに、強いて同女を姦淫した。

【量刑の理由】懲役24年

松山地方裁判所は、本件の量刑に関し、以下のような理由を示した。

1 本件は、被告人が約9か月の間に、合計6人の女性を次々と襲ったという連続強姦致傷等の事件であり、被告人を相当長期の実刑に処すべき事案である。当裁判所は、具体的な量刑にあたり、
〔1〕被害結果と〔2〕犯行態様を特に重視した。

すなわち、〔1〕被害者らは、いずれも全く落ち度がないのに、自室あるいはその付近で被告人に突如襲われて強い恐怖を感じ、大きな精神的ショックを受け、男性に対する嫌悪感を感じてしまう、あるいは一人で家にいられないといった状況に陥り、今なおその痛みや影響に苦しみ続けている。とりわけ、強姦された被害者VとVについては、いずれも「人生がめちゃくちゃになった」と述べており、その心の傷は、一生消え去ることのない深いものであると認めた。また、被害者VとVが、本件によって傷害を負った点も考慮しなければならない。本件による被害結果を全体としてみると、非常に重大であるというべきである。

また、〔2〕被告人は、来日後、わいせつDVDの影響を受けて、そこに出てくるような過激な性行為がしたいと思うようになり、その願望をかなえるため、何度もかよわくて強姦できそうな日本人女性を物色して、その自宅までついていくなどし、被害者が逃げ場のないような状況下で強姦に及ぼうとした。そして、姦淫に成功した事件では、たまたま被害現場にあったものとはいえ包丁を用いて脅迫に及ぶことがあったり、更に被害申告を

妨げるため、わいせつ行為に及んでいる状況をデジタルカメラで撮影したりしている。本件は、通り魔的で、極めて卑劣かつ悪質な態様でなされた犯行というべきである。加えて、被告人は、事前に覆面を用意するほか、強姦できそうな女性宅をリスト化するなどしており、緻密とはいえないまでも周到に準備された計画的犯行であることも考慮すべきである。

以上から、当裁判所は、本件における被告人の刑事責任は非常に重く、処断刑の中で相当重い刑、具体的には懲役 25 年程度の刑に処するのが相当であると判断した。

2 これを前提に、弁論での指摘も踏まえて、事案の内容以外の情状として被告人の反省状況や再犯のおそれについて検討したところ、そもそも、本件事案の内容や結果の重大性等からすると、こうした事情を量刑上大きく考慮することは適切ではない上、（ア）被告人は、公判において、一応の反省の弁を述べているものの、中国人であるということや言葉の壁を考慮してもなお、犯した罪の重大性、被害者の痛みや苦しみにについての十分な認識がみられない。被告人の反省は被害者に向けられたものではなく、未だ自身がしたことについての後悔にとどまっていると認められる。また、（イ）その反省状況からすると、再犯のおそれについては、現段階ではあるといわざるを得ない。したがって、これらの事情は量刑上それほど考慮しないこととしたものである。

3 そして、当裁判所は、具体的な刑期として、被告人が本件の重大性、被害者の痛みや苦しみをきちんと認識して、これらを真しに受けとめながら、罪を償うための期間として懲役 24 年に処するのが相当であると判断したものである。

（求刑 懲役 25 年）

〔予測モデル式からの若干の考察〕

予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく、すべての被害者数については、「(3-①) 強姦」が<2名> (56.513) , 「(3-②) 強姦未遂」が<

4名> (46.063) , 「(3-③) 強制わいせつ」が<なし> (-13.951) , 「(3-④) 強制わいせつ未遂」が<なし> (-1.615) となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④) 被害結果(傷害)」が<傷害: 全治 1 か月以内> (18.535) となり、その基本スコアは 105.545 となった。

本件は、住居侵入・強姦既遂 2 件（判示第 1, 第 6 の犯行）、住居侵入・強姦既遂 1 件（判示第 2 の犯行）、住居侵入・暴行 1 件（判示第 3 の犯行）、住居侵入・強姦致傷 2 件（判示第 4, 第 5 の犯行）からなる事案であり、「約 9 か月の間に、合計 6 人の女性を次々と襲った」という<連続強姦・強制わいせつ型>の犯行である。本件は 2004 年の刑法一部改正（平成 16 年法律第 156 号）後の事案であり、したがって、併合罪加重の上限が 30 年となるところ、求刑が懲役 25 年であるのに対して、本判決では懲役 24 年が宣告されている。

予測モデル式では、予測値を 214.442 と算出した（残差 73.558）。残差が大きくなった原因として考えられるのは、1 つには、「(3-②) 強姦未遂」・<4 名>のカテゴリースコアの低さが影響したことである。<2 名> (59.758) , <3 名> (89.948) のカテゴリースコアに対して、<4 名>は 46.063 で、<5 名>は 5.283 であった。おおむね比例する傾向は確認されるものの、<4 名>及び<5 名>のカテゴリースコアは低いことはすでに確認したとおりである。

だが、本件に関しては、被告人側が事実誤認及び量刑不当を理由に控訴したが、控訴裁判所である高松高等裁判所は、量刑不当を認め、懲役 18 年の破棄自判をした（高松高判平成 23 年 10 月 11 日 LEX/DB 25500361）。量刑不当に関する高松地方裁判所の判断理由は、以下のとおりである。

1 論旨は、被告人を懲役 24 年に処した原判決の量刑は、重過ぎて不当である、というのである。そこで、記録を調査し、当審における事実取調べの結果をも併せ検討する。

2 本件は、被告人が、学生等として本邦で暮らす中で、わいせつ DVD を見て日本の女性と性交したなどとの思いを募らせ、〔1〕平成 22 年 1 月、被害女性を認めて追尾し、その帰宅に乗じて同女

方に侵入した上、暴行・脅迫を加えて強姦した、

〔2〕同年2月、強姦の目的で、被害女性の帰宅に乗じて同女方に侵入し、口を手で覆うなどの暴行を加えたが、同女が逃走しようとするなどして未遂に終わった、〔3〕同年3月、被害女性を認め、後日強姦する下調べの目的で追尾して同女方マンション駐車場に侵入し、そこで同女に気付かれたと感じ、その口を手で覆うなどの暴行を加えた、

〔4〕同年6月、強姦の目的で、被害女性を追尾して同女方アパート共有廊下に侵入した上、居室内に入ろうとした同女の口を覆うなどの暴行を加えたが、抵抗され未遂に終わり、その際、同女に傷害を負わせた、〔5〕〔4〕の翌日、強姦の目的で、被害女性の帰宅に乗じて同女方に侵入し、手で口を覆うなどの暴行を加えたが、抵抗され未遂に終わり、その際、同女に傷害を負わせた、〔6〕同年10月、強姦の目的で、被害女性方に無施錠の玄関ドアから侵入し、その場にあった包丁を示すなどして脅迫した上、強姦したという事案である（以下、上記番号に従って各事件を「〔1〕事件」、「〔2〕事件」などと呼ぶ。）。

本件の動機に酌量の余地はなく、被告人の規範意識は、女性の人格をかえりみないゆがんだ性的思考に基づき著しく鈍麻しており、原判決が指摘するように、被告人を相当長期の懲役刑に処すべき事案であることは明らかである。そこでどの程度の刑に処すべきかを検討する。

3 原判決は、その「量刑の理由」において、まず、本件の被害結果を特に重視したとしている。そして、その内容として、被害者らは、全く落ち度がないのに、自室又はその付近で被告人に突如襲われて強い恐怖を感じ、大きな精神的ショックを受け、今なおその痛みや影響に苦しんでいること、強姦された被害者の心の傷は一生消えない深いものであること、強姦致傷の被害者が本件によって傷害を負っていることから、被害結果が全体として非常に重大である旨を指摘している。

たしかに、いずれの被害女性も突如被害に遭い、それぞれに恐怖や精神的苦痛を味わったことは疑いがなく、それらは量刑上適正に考慮されるべき

である。しかしながら、量刑するにあたり被害結果として第一に検討すべきである、主たる保護法益の侵害の有無・程度を具体的にみると、弁護人がその旨指摘するように、〔1〕及び〔6〕事件の2件については自宅の奥まで被告人が押し入って実際に強姦にまで至っているものの、〔2〕、〔4〕及び〔5〕事件については、被害女性らが抵抗した結果であるとはいえ、いずれも玄関付近で口を覆われるなどしたところで未遂に終わり、姦淫はもとより、何らのわいせつ被害にも至っていない。

〔4〕及び〔5〕事件においては、各被害女性らが負っているが、〔4〕事件についてはけがの程度そのものは軽い。さらに、〔3〕事件については、後記の犯行態様からして、被害女性が負った肉体的苦痛は重いものとはいえ、これに伴う精神的苦痛を考慮するにしても、自ずと限界があるといわざるを得ない。これらの事情は、この種事案における本件犯行の位置付けを低くするものとして、基本的に考慮しなければならない量刑事情であるが、原判決はこれらの点に全く言及していない。また、これらの点を考慮したことをうかがわせる説示も見受けられないのであって、結論として、原判決は、本件被害結果につき重すぎる評価をしたものといわざるを得ない。

4 また、原判決は、本件の犯行態様も特に重視したとしている。具体的には、被告人が、か弱くて強姦できそうな女性を物色し、強姦できそうな女性宅をリスト化するなどした上、事前に覆面を用意し、女性の自宅までついて行くなどして被害者が逃げ場のないような状況で強姦に及んだもので、本件が通り魔的かつ周到に準備された計画的犯行であり、また、強姦に成功した事件では、包丁を用いて脅迫に及ぶなど極めて卑劣かつ悪質な態様でなされた犯行であるという点を指摘している。

しかしながら、一方で、次のような事情も認められる。すなわち、〔3〕事件は、一連の犯行の中で行われた強姦の下調べという悪質な目的に端を発するものとはいえ、邸宅侵入・暴行罪という、それ自体は罪質が重いとはいえない犯行である。しかも、暴行については被告人が被害女性に気付

かれたと思ってとっさに起こした衝動的な犯行である上に、主たる暴行の内容も手で被害女性の口を覆ったというもので、殴る蹴るといった強い有形力を伴うものではない。また、〔2〕、〔4〕及び〔5〕事件についても、被告人がした暴行の程度という観点で見れば、それ自体は強度なものとまではいえず、もとより被告人に傷害の故意は認められない。これらの事情も、やはり本件の悪質さを総体として低くする事情として考慮しないわけにはいかないが、原判決はこれらの点についても全く言及しておらず、犯行態様に関する原判決の評価もまた、基本的かつ必要な事情の考慮を欠いているというほかない。

5 そして、原判決は、本件を「合計 6 人の女性を次々と襲った強姦致傷等の事件」とであると総括しているが、とりわけ、これまで見てきた〔3〕事件の態様・結果等に照らせば、これをも一括りにして合計 6 人の女性を次々と「襲った」と評するのは適切さを欠いており、この点からしても、原判決は本件につき実際以上に厳しい見方をしたものと言わざるを得ない。

6 以上のとおり、本件において、〔3〕事件は、邸宅侵入・暴行事件であり、その態様・結果が重いとはいえず、〔2〕、〔4〕及び〔5〕事件は、幸いにして、強姦の犯行が初期段階で失敗に終わり、被害女性の性的自由の侵害という重大な結果は生じていない。これらの事情はこの種事案における本件犯行の位置付けを低める方向へと働く基本的事情である。しかしながら、原判決は、少なくともこれらの事情を過小に評価し、その結果、被告人を懲役 24 年に処することとしたとの疑いを抱かざるを得ない。そして、これら基本的量刑事情を前提に、さらに、当審の事実取調べにおける被告人の供述も踏まえた被告人の反省状況や、被告人に前科がなく、初めて服役することとなることなど被告人のために酌むべき事情を総合考慮した上で、処断刑の上限・下限を踏まえ、同種事案のうちより重い又は軽い事案との刑の均衡（その際、刑法 181 条 2 項の刑の幅は強姦致傷罪のみならず強姦致死罪をも含んだそれであることにも留意す

る必要がある。）、さらには殺人等の異種の罪の刑との均衡にも配慮し、本件犯行に見合った刑を考えると、原判決の量刑は、これが裁判員裁判により量定された刑であるとしても、法が予定する合理的な刑の裁量の幅を超え、不当に重いといわざるを得ない。論旨は理由がある。

7 よって、刑事訴訟法 397 条 1 項、381 条により原判決を破棄し、同法 400 条ただし書により更に判決する。

以上のように「懲役 18 年」（月換算で 216 月）としたならば、予測値である 205.660 に近くなる（残差 10.34）。だが、ここで少し立ち止まって考えなければならないのは、量刑変更の必要性及び妥当性である。量刑審査のあり方に関しては、「国民の視点、感覚、健全な社会常識などを反映させる同制度の趣旨にかんがみれば、よほど不合理であることが明らかな場合を除いては、第一審の裁判員裁判の判断を尊重することがその基本的な姿勢である」¹⁹⁾と理解されているところ、それに沿って考えてみると、果てして、上記判断理由の 3、4、5 に関する評価が「国民の視点、感覚、健全な社会常識」により近いものであるのか、そして、原判決がよほど不合理であったとまで評価できるのか、破棄自判して「懲役 18 年」とすることが必要であったのかが検証されなければならない。最高裁判所は、従来の量刑傾向を前提としないことについては、具体的・説得的な根拠が示されていないとの立場に立っている（最一小判平 26・7・24 刑集 68 巻 6 号 925 頁）。確かに、予測モデル式では、予測値は、控訴審である高松高等裁判所が示した「懲役 18 年」に近似し、第一審の高松地方裁判所が示した「懲役 24 年」は、標準化残差 2.0 を上回る「外れ値事例」（異常値）と判定する（よって、求刑の「懲役 25 年」も重すぎると判定することになる）のだが、やはり「不合理」とまで判定できるのかは、差し戻して検証するべきであったと考える²⁰⁾。

よって、予測モデル式の改良を要する面があるものの、本判決に関して言えば、「外れ値事例」として位置づけられる可能性を残しているものと解される。

(9) 福岡地判平成 23 年 3 月 17 日 LEX/DB25471160【児童買春、児童ポルノに係る行為等の処罰及び児童の保護等に関する法律違反、強姦、児童福祉法違反被告事件】

実績値 : 216	予測値 : 130.511
残差 : 85.489	標準化残差 : 2.533

【事案の概要】

第1 被告人は、A（当時9歳ないし10歳）が18歳に満たない児童であることを知りながら、

1 平成19年4月26日ころ、福岡市<以下略>の被告人方において、同児童をして、衣服の一部を着けないで胸部や陰部を露出させる姿態をとらせた上、これらの姿態をビデオカメラで撮影し、その動画画像をビデオテープに記録させ、もって衣服の一部を着けない児童の姿態であって性欲を興奮させ又は刺激するものを視覚により認識することができる方法により描写した児童ポルノであるビデオテープ1本を製造した。

2 同年7月19日ころ、前記被告人方において、同児童をして、他人の性器を口淫及び手淫させる姿態をそれぞれとらせた上、これらの姿態をビデオカメラで撮影し、その動画画像をビデオテープに記録させ、もって児童が他人の性器等を触る行為に係る児童の姿態であって性欲を興奮させ又は刺激するものを視覚により認識することができる方法により描写した児童ポルノであるビデオテープ1本を製造した。

3 平成20年3月2日ころ、前記被告人方において、同児童をして、被告人の陰茎を口淫させる姿態、他人の性器を手淫させる姿態、衣服の一部を着けないで性器等を露出させる姿態をそれぞれとらせた上、これらの姿態をビデオカメラで撮影し、その動画画像をビデオテープに記録させ、もって児童が他人の性器等を触る行為に係る児童の姿態及び衣服の一部を着けない児童の姿態であって性欲を興奮させ又は刺激するもの、並びに、児童を相手方とする性交類似行為に係る児童の姿態を視覚により認識することができる方法により描写した児童ポルノであるビデオテープ1本を製造した。

4 同年7月8日ころ、前記被告人方において、同児童をして、他人の性器を手淫させる姿態、他人から性器を手淫される姿態、全裸の姿態、衣服の全部又は一部を着けないで性器等を露出させる姿態をそれぞれとらせた上、

これらの姿態をビデオカメラで撮影し、その動画画像をビデオテープに記録させ、もって他人が児童の性器等を触る行為又は児童が他人の性器等を触る行為に係る児童の姿態及び衣服の全部又は一部を着けない児童の姿態であって性欲を興奮させ又は刺激するものを視覚により認識することができる方法により、描写した児童ポルノであるビデオテープ1本を製造した。

5 同年11月30日ころ、前記被告人方において、同児童をして、被告人の陰茎を口淫させる姿態、他人から性器を手淫される姿態をそれぞれとらせた上、これらの姿態をビデオカメラで撮影し、その動画画像をビデオテープに記録させ、もって児童を相手方とする性交類似行為に係る児童の姿態及び他人が児童の性器等を触る行為に係る児童の姿態であって性欲を興奮させ又は刺激するものを視覚により認識することができる方法により描写した児童ポルノであるビデオテープ1本を製造した。

第2 被告人は、自己が経営する英会話教室の当時の生徒であったB（当時11歳）が13歳未満であることを知りながら、平成16年10月25日ころ、前記被告人方において、同女を姦淫した。

第3 被告人は、自己が経営する英会話教室の当時の生徒であったC（当時12歳）が13歳未満であることを知りながら、平成15年6月5日、前記被告人方において、同女を姦淫した。

第4 被告人は、前記C（当時13歳）が満18歳に満たない児童であることを知りながら、平成16年9月21日、前記被告人方において、英会話教室の教師の立場を利用するなどして、同教室の当時の生徒であった同児童に被告人を相手方に性交させ、もって児童に淫行をさせる行為をした。

第5 被告人は、D（当時13歳）が18歳に満たない児童であることを知りながら、

1 平成20年10月20日ころ、前記被告人方において、同児童をして、被告人と性交する姿態、他人から性器を手淫される姿態をそれぞれとらせた上、これらの姿態をビデオカメラで撮影し、その動画画像をビデオテープに記録させ、もって児童を相手方とする性交に係る児童の姿態及び他人が児童の性器等を触る児童の姿態であって性欲を興奮させ又は刺激するものを視覚により認識することができる方法により、前記ビデオテープに描写し、

当該児童に係る児童ポルノを製造した。

2 同年 12 月 1 日ころ、前記被告人方において、同児童をして、被告人と性交する姿態、他人から性器を手淫される姿態をそれぞれとらせた上、これらの姿態をビデオカメラで撮影し、その動画画像をビデオテープに記録させ、もって児童を相手方とする性交に係る児童の姿態及び他人が児童の性器等を触る児童の姿態であって性欲を興奮させ又は刺激するものを視覚により認識することができる方法により、前記ビデオテープに描写し、当該児童に係る児童ポルノを製造した。

3 平成 21 年 1 月 29 日ころ、前記被告人方において、同児童をして、被告人と性交する姿態をとらせた上、その姿態をビデオカメラで撮影し、その動画画像をビデオテープに記録させ、もって児童を相手方とする性交に係る姿態を視覚により認識することができる方法により、前記ビデオテープに描写し、当該児童に係る児童ポルノを製造した。

第 6 被告人は、E（当時 16 歳）が 18 歳に満たない児童であることを知りながら、

1 平成 20 年 5 月 5 日ころ、前記被告人方において、同児童をして、被告人と性交する姿態、衣服の一部を着けないで性器等を露出させる姿態をそれぞれとらせた上、これらの姿態をビデオカメラで撮影し、その動画画像をビデオテープに記録させ、もって児童を相手方とする性交に係る児童の姿態及び衣服の一部を着けない児童の姿態であって性欲を興奮させ又は刺激するものを視覚により認識することができる方法により、前記ビデオテープに描写し、当該児童に係る児童ポルノを製造した。

2 平成 21 年 1 月 22 日ころ、前記被告人方において、前記児童をして、被告人と性交する姿態をとらせた上、その姿態をビデオカメラで撮影し、その動画画像をビデオテープに記録させ、もって児童を相手方とする性交に係る児童の姿態を視覚により認識することができる方法により、前記ビデオテープに描写し、当該児童に係る児童ポルノを製造した。

第 7 被告人は、別表記載のとおり、F（当時 15 歳）ほか 9 名がいずれも 18 歳に満たない児童であることを知りながら、平成 19 年 7 月 1 日ころから平成 21 年 4 月 9 日ころまでの間、いずれも前記被告人方において、前記 F ほか 9 名の児童らをして、被告人と性交する姿態、他人

から性器を手淫される姿態及び他人の性器を口淫させる姿態をそれぞれとらせた上、それらの姿態をビデオカメラで撮影し、その動画画像をそれぞれビデオテープに記録させ、もって児童を相手方とする性交に係る姿態及び他人が児童の性器等を触る行為又は児童が他人の性器等を触る行為に係る児童の姿態であって性欲を興奮させ又は刺激するものを視覚により認識することができる方法により、それぞれビデオテープに描写し、当該児童に係る児童ポルノをそれぞれ製造した。

〔量刑の理由〕懲役 18 年

福岡地方裁判所は、本件の量刑に関し、以下のような理由を示した。

本件は、被告人が、当時 11 歳及び 12 歳の女子 2 名を姦淫した強姦 2 件（判示第 2, 3）、当時 13 歳の児童に被告人と性交させ、淫行をさせた児童福祉法違反 1 件（判示第 4）、及び、当時 9 歳ないし 16 歳の児童 13 名に対し、合計 28 回にわたって、性交、性交類似行為等の姿態をとらせてビデオ撮影し、児童ポルノを製造した児童買春、児童ポルノに係る行為等の処罰及び児童の保護等に関する法律違反からなる事案である。

まず、判示第 2 ないし第 4 の各強姦及び児童福祉法違反についてみるに、被告人は、いずれの児童に対しても、主催していた精神開発クラスや英会話教室の活動を通じて、児童らの保護者等から全幅の信頼を得ていたことを背景に、性行為等の意義を十分に理解することが困難な幼い年齢である小学生のころから、人格形成のための勉強会と称して自宅に招き、性交や性交類似行為を繰り返していた中で、本件各犯行に及んだのであり、本件の行為態様自体から高い常習性が認められて悪質さは顕著である。しかも、被告人は、児童らに対し、勉強会で行われている内容を親に対しても口外してはならない、他人が知れば被告人等が逮捕されるなど言って口止めし、犯行の発覚を防ぐなどしている。判示第 3、第 4 の被害に係る児童は、その影響で、外傷後ストレス障害及び大うつ病性障害等の精神障害を発症しており、その症状には

極めて深刻なものがあり、判示第2の児童も、現在においてもなお生活に重大な支障が生じているのであって、本件犯行が児童らに与えた精神的な悪影響は計り知れず、各被害者が峻烈な被害感情を有するのは当然であり、被害結果は誠に重大である。

次に、判示児童ポルノ製造行為についても、判示第2ないし第4と同様に、児童らの保護者等から全幅の信頼を得ていたことを背景に、多数の女兒を自宅に招き、長期間、多数回にわたり、児童による性交や性交類似行為等の姿態をとらせて多数の児童ポルノを作成し、多数の児童ポルノを流出する危険を創出したのであって、常習的に敢行された本件の性的搾取、性的虐待は極めて重大で悪質である。各児童の年齢、とらされた姿態等にかんがみれば、児童らに与えた有害性は深刻といえる。被告人は、判示第2ないし第4で指摘したとおり、児童らに対し、口止めし、その結果、被害を拡大させている。確かに、本件児童ポルノ製造の被害者の一部は、被告人の処罰を望んでいないが、一般的に児童を性の対象とする風潮を抑制しようとする法の趣旨に加え、本件が、上記のように、被告人が児童やその保護者等に強い影響力を有していたことを背景に敢行された事案であること、児童に対する性的虐待の心身に対する悪影響は、成熟した人間関係を形成できるようになるにつれて顕在化する可能性があることが指摘されていること等に照らせば、これを量刑上過度に重視することはできない。

なお、被告人は、本件各行為について、児童から求められたからしたとか、児童らの人格形成のためにしたなどと述べるが、被告人が自己の性的満足を得るためにもしていたことは否定できない上、被告人と児童らとの関係、児童らの年齢等にかんがみれば、被告人が主導して児童らを性的に搾取していたことは論を俟たないのであって、被告人の行為はおよそ正当視し得る余地はない。

被告人の刑事責任は、極めて重い。

そうすると、被告人は、当公判廷において、判示の各行為について概ね罪を認め、被害児童らに

対し、謝罪の弁を述べるなど、被告人なりの反省の態度を示していること、前科、前歴がないことなど、その他被告人の年齢、体調等被告人に酌むべき事情を考慮しても、被告人は主文の刑を免れない。

(求刑 懲役 20 年)

[予測モデル式からの若干の考察]

予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく、すべての被害者数については、「(3-①)強姦」が<2名> (56.513)、「(3-②)強姦未遂」が<なし> (-10.387)、「(3-③)強制わいせつ」が<なし> (-13.951)、「(3-④)強制わいせつ未遂」が<なし> (-1.615)となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④)被害結果(傷害)」が<なし> (-11.612)となり、その基本スコアは18.948となった。

本件は、「当時11歳及び12歳の女子2名を姦淫した強姦2件(判示第2, 3)、当時13歳の児童に被告人と性交させ、淫行をさせた児童福祉法違反1件(判示第4)、及び、当時9歳ないし16歳の児童13名に対し、合計28回にわたって、性交、性交類似行為等の姿態をとらせてビデオ撮影し、児童ポルノを製造した児童買春、児童ポルノに係る行為等の処罰及び児童の保護等に関する法律違反からなる事案」であり、おおむね10歳以下の<幼児性愛型>に準じた犯行であり、また、<連続強姦・強制わいせつ型>の犯行でもある。本件は2004年の刑法一部改正(平成16年法律第156号)後の事案であり、したがって、併合罪加重の上限が30年となるところ、求刑が懲役20年であるのに対して、本判決では懲役18年が宣告されている。

予測モデル式では、予測値を130.511と算出した(残差85.489)。残差が大きくなったのは、いくつかの原因が考えられる。1つには、前記の千葉地判平成24年8月28日LEX/DB25482765と同様に、予測モデル式での量刑因子(アイテム)において、児童買春、児童ポルノに係る行為等の処罰及び児童の保護等に関する法律違反に関する設定がなされていないことである。本件では、「当時9歳ないし16歳の児童13名に対し、合計28回に

わたって、性交、性交類似行為等の姿態をとらせてビデオ撮影し、児童ポルノを製造」しており、本判決は、「常習的に敢行された本件の性的搾取、性的虐待は極めて重大で悪質である」と評価する。

2 つには、予測モデル式での量刑因子（アイテム）において、児童淫行罪（児童福祉法違反）の被害者数が設定されていないことである。本判決では、「当時 13 歳の児童に被告人と性交させ、淫行をさせた児童福祉法違反 1 件（判示第 4）」についても、「当時 11 歳及び 12 歳の女子 2 名を姦淫した強姦 2 件（判示第 2, 3）」と同列に言及しており、設定が必要であると思われる。

3 つには、前記の千葉地判平成 24 年 8 月 28 日 LEX/DB25482765、神戸地判平成 24 年 7 月 19 日 LEX/DB25482507、富山地判平成 24 年 1 月 19 日 LEX/DB25482650 と同様に、予測モデル式での量刑因子（アイテム）に犯行類型（社会的類型／刑事学的類型）が設定されていないことが原因と考えられる。

いずれにしても、予測モデル式の改良を要することであり、本判決に関して言えば、「外れ値事例」とは言えないものと解される。

（10）神戸地判平成 21 年 12 月 10 日 LEX/DB25442060

【強姦、児童買春、児童ポルノに係る行為等の処罰及び児童の保護等に関する法律違反、強要被告事件】

実績値：168	予測値：68.276
残差：99.724	標準化残差：2.954

【事案の概要】

本件は、被告人が、養女であった A に対して長期間にわたり虐待を加え同児童を極度に畏怖させていたものである。

第1 被告人は、同児童を強要して児童ポルノを製造しようと企て、平成 19 年 5 月 2 日午後 8 時 41 分ころから同日午後 9 時 23 分ころまでの間、神戸市 a 区 b 町居住 c 番地の d 所在の県営 B 住宅 e 号室の当時の被告人方（以下「被告人方」という。）において、同児童（当時 12 歳）が 18 歳に満たない者であることを知りながら、上記のとおり同児童が極度に畏怖しているのに乗じて、別表番号 1 ないし 5 のとおり、同児童に対し、「胸寄せろ。」などと申し向けて脅迫し、同児童をして、これに応じなければ

自己の自由、身体等にいかなる危害を加えられるかもしれない旨さらに畏怖させ、よって、同児童をして、その両乳房、陰部を露出させた姿態等をとらせ、これを所携の携帯電話機内蔵のデジタルカメラにより撮影させ、同携帯電話機に装着されたマイクロ SD カード（神戸地方検察庁平成 20 年領第 1336 号符号 2-2）に画像データ 5 ファイルを保存して記録し、もって、同児童に義務なきことを行わせるとともに、児童ポルノを製造した。

第2 被告人は、同児童を強要して児童ポルノを製造しようと企て、平成 19 年 5 月 11 日午前 10 時 32 分ころから同日午前 10 時 37 分ころまでの間、被告人方において、同児童（当時 12 歳）が 18 歳に満たない者であることを知りながら、上記のとおり同児童が極度に畏怖しているのに乗じて、別表番号 6 ないし 11 のとおり、同児童に対し、「服をまくり上げろ。」などと申し向けて脅迫し、同児童をして、前同様にさらに畏怖させ、よって、同児童をして、その乳房を露出させた姿態、同児童の陰部に被告人の陰茎を挿入している姿態等をとらせ、これを所携の携帯電話機内蔵のデジタルカメラにより撮影し、上記マイクロ SD カードに画像データ 6 ファイルを保存して記録し、もって、同児童に義務なきことを行わせるとともに、児童ポルノを製造した。

第3 被告人は、同児童を強姦しようと企て、平成 19 年 5 月 11 日、被告人方において、同児童（当時 12 歳）が 13 歳未満であることを知りながら、上記のとおり同児童が極度に畏怖しているのに乗じて、着衣を脱ぐよう申し向けて脅迫し、その反抗を抑圧した上、強いて同児童を姦淫した。

第4 被告人は、同児童を強要して児童ポルノを製造しようと企て、平成 19 年 6 月 11 日ころ、同児童（当時 12 歳）が 18 歳に満たない者であることを知りながら、上記のとおり同児童が極度に畏怖しているのに乗じて、同児童に対し、電子メールにより、「何か挟んで撮れ。」などと申し向けて脅迫し、同児童をして、これに応じなければ自己の自由、身体等にいかなる危害を加えられるかもしれない旨さらに畏怖させ、よって、同児童をして、同日午後零時 46 分ころから同日午後 5 時 35 分ころまでの間、別表番号 12 ないし 22 のとおり、被告人方において、全裸で両乳房の間や陰部に物を挟んだ姿態等をとらせ、これを同児童の携帯電話機内蔵のデジタルカメラで

撮影させ、そのころ、その画像を被告人の携帯電話機に送信させ、上記マイクロ SD カードに上記画像データ 11 ファイルを保存して記録し、もって、同児童に義務なきことを行わせるとともに、児童ポルノを製造した。

第5 被告人は、同児童を強要して児童ポルノを製造しようとして、平成 19 年 7 月 19 日ころ、同児童（当時 13 歳）が 18 歳に満たない者であることを知りながら、上記のとおり同児童が極度に畏怖しているのに乗じて、同児童に対し、電子メールにより、「キュウリをなめている写真を撮れ。」などと申し向けて脅迫し、同児童をして、前同様にさらに畏怖させ、よって、同児童をして、同日午前 11 時 13 分ころから同日午前 11 時 44 分ころまでの間、別表番号 23 ないし 25 のとおり、被告人方において、露出した両乳房になすびを挟んだ姿態等をとらせ、これを同児童の携帯電話機内蔵のデジタルカメラで撮影させ、そのころ、その画像データを被告人の携帯電話機に送信させ、上記マイクロ SD カードに上記画像データ 3 ファイルを保存して記録し、もって、同児童に義務なきことを行わせるとともに、児童ポルノを製造した。

第6 被告人は、同児童を強要して児童ポルノを製造しようとして、平成 19 年 7 月 19 日午後 8 時 32 分ころから同日午後 8 時 33 分ころまでの間、被告人方において、同児童（当時 13 歳）が 18 歳に満たない者であることを知りながら、上記のとおり同児童が極度に畏怖しているのに乗じて、別表番号 26 ないし 29 のとおり、同児童に対し、「なめろ。」などと申し向けて脅迫し、同児童をして、前同様にさらに畏怖させ、よって、同児童に被告人の陰茎をなめたり、咥えたりする姿態等をとらせ、これを所持の携帯電話機内蔵のデジタルカメラにより撮影し、上記マイクロ SD カードに画像データ 4 ファイルを保存して記録し、もって、同児童に義務なきことを行わせるとともに、児童ポルノを製造した。

第7 被告人は、同児童を強姦しようとして、平成 19 年 7 月 19 日午後 8 時 30 分ころから同日午後 8 時 50 分ころまでの間、被告人方において、同児童（当時 13 歳）が上記のとおり極度に畏怖しているのに乗じて、同児童に対し、「脱げ。」などと申し向けて脅迫し、その反抗を抑圧した上、強いて同児童を姦淫した。

〔量刑の理由〕懲役 14 年、マイクロ SD カード 1 枚を

没収

神戸地方裁判所は、本件の量刑に関し、以下のような理由を示した。

本件は、被告人が、当時 12 歳から 13 歳であった被告人の養女を二度にわたって姦淫したという強姦 2 件（判示第 3 及び第 7）と、同女を脅して胸部や陰部を露出させたりしてひわいな姿態をとらせ、その姿態を撮影した画像データを記憶媒体に保存して児童ポルノを製造したという児童買春、児童ポルノに係る行為等の処罰及び児童の保護等に関する法律違反並びに強要各 5 件（判示第 1、第 2 及び第 4 ないし第 6）からなる事案である。

被告人は、日常的に暴力を振るわれたり、兄姉が虐待されているのを見たりしていたことにより、被告人を極度に畏怖してその指示に服従せざるを得ない状態であった被害者に対し、同女が小学校 5 年生になったころから日常的に性交渉を強いた末に本件各犯行に及んだのであって、自らの性欲の赴くままに敢行された本件各犯行の自己中心的な動機に酌量の余地は全くない。

また、本件各犯行の態様についてみると、被告人は、父親として被害者を保護・監督すべき立場にありながら、これを省みず、被害者の恐怖心やその保護者という絶対的に優位な地位を利用し、成長途上にある被害者の身体を欲望のはけ口として利用するかのようにして同女を強姦するとともに、同女に指示して胸部や陰部を露出させたりしてみだらな姿態をとらせ、それらを撮影するなどして児童ポルノを製造していたのであって、いずれも被害者の人格を全く無視した卑劣かつ身勝手な犯行であり、犯情は極めて悪質である。

被害者は、本件各被害当時、思春期に入ってもない年頃であったところ、あろうことか保護者であるはずの養父から強姦されるという記憶からぬぐい去り難い過酷な体験を負わされ、同居する実母にすら相談できずに小さな心を痛めていたのであって、本件各犯行により生じた精神的、肉体的苦痛は計り知れず、今なお、希死念慮があり何度もしストカットをしたりして精神的に極めて不

安定な状態が続いているなど被害者に与えた悪影響も相当深刻である。また、被害者のひわいな姿態ばかりか、強姦の様子をも撮影し、経年による劣化のない電磁的記録として保存していた児童ポルノの犯行結果も軽視できず、このような卑劣極まりない被害を受けた被害者の処罰感情が厳しいのは当然のことであるし、被害者と同居していながら同女が性的虐待を受けていることに気付いてやれなかった母親が、その後悔とともに、「被告人を極刑にしてほしい。」と厳罰を望んでいるのも十分に理解できるところである。

これに対し、被告人は、被害者に対する慰藉の措置を何ら講じていないばかりか、被害者が性交渉を誘ってきたのであり、合意の上での性交であったなどと被害者を侮蔑するような不合理な弁解をして自己保身に終始しており、このような被告人に真摯な反省は全くみられない。

以上に加え、以前にも 16 歳の少女に対してみだらな性行為に及んだという条例違反の前科を有する被告人の小児性愛的な性的偏向も否定できず、これらの事情に照らすと、被告人の刑事責任は極めて重大である。

そうすると、養子である被害者と性交渉をもったこと自体は反省していると供述していることや、被告人の母親が公判廷において社会復帰後の被告人の監督を誓約していること、被告人は、上記前科も含めて懲役前科 3 犯を有するものの、最終前科の刑執行終了から既に 10 年近くが経過していることなど、被告人のために酌むべき事情を十分考慮しても、被告人に対しては、主文の刑をもって臨むのが相当であると考えた。

(求刑 懲役 18 年、マイクロ SD カードの没収)

[予測モデル式からの若干の考察]

予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく、すべての被害者数については、「(3-①) 強姦」が<1 名> (9.134) , 「(3-②) 強姦未遂」が<なし> (-10.387) , 「(3-③) 強制わいせつ」が<なし> (-13.951) , 「(3-④) 強制わいせつ未遂」が<なし>

> (-1.615) となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④) 被害結果(傷害)」が<なし> (-11.612) となり、その基本スコアは-28.431 となった。

本件は、量刑理由の冒頭で、「当時 12 歳から 13 歳であった被告人の養女を二度にわたって姦淫したという強姦 2 件(判示第 3 及び第 7) と、同女を脅して胸部や陰部を露出させたりしてひわいな姿態をとらせ、その姿態を撮影した画像データを記憶媒体に保存して児童ポルノを製造したという児童買春、児童ポルノに係る行為等の処罰及び児童の保護等に関する法律違反並びに強要各 5 件(判示第 1, 第 2 及び第 4 ないし第 6) からなる事案」であり、<性的虐待型>の犯行である。本件は 2004 年の刑法一部改正(平成 16 年法律第 156 号)後の事案であり、したがって、併合罪加重の上限が 30 年となるところ、求刑が懲役 18 年であるのに対して、本判決では懲役 14 年が宣告されている。

被告人は、「以前にも 16 歳の少女に対してみだらな性行為に及んだという条例違反の前科を有する」とのことであり、裁判所は「被告人の小児性愛的な性的偏向」を指摘している。したがって、本件は、前記の千葉地判平成 24 年 8 月 28 日 LEX/DB25482765、神戸地判平成 24 年 7 月 19 日 LEX/DB25482507、富山地判平成 24 年 1 月 19 日 LEX/DB25482650 と同様に、おおむね 10 歳以下の<幼児性愛型>に準じた犯行とも位置づけられる。実績値と予測値の間に大きな差が生じたが、予測モデル式での量刑因子(アイテム)に犯行類型(社会的類型/刑事学的類型)が設定されていないことに考えている。量刑因子(アイテム)の設定に修正が必要であろう。

また、本件は、同じ被害者を 2 度にわたって強姦している(もっとも、性的虐待であることから、より多くの被害が潜在している可能性が高い)が、予測モデル式では、<1 名> (9.134) としかカウントしていない。仮に<2 名> (56.513) とカウントすれば、47.379pt が加算され、残差は 52.345 になる。この場合、標準化残差は 2.0 を下回ることになるが、やはり本件の宣告刑(実績値)との間に比較的大きな乖離が生じる。その理由として考えられるのは、1 つには、予測モデル式での量刑因子(アイテム)に犯行類型(社会的類型/刑事学的類型)が設定されていないことである。だが、もう 1 つは、前記の

神戸地判平成24年7月19日 LEX/DB25482507, 福岡地判平成23年3月17日 LEX/DB25471160と同様に, 児童買春, 児童ポルノに係る行為等の処罰及び児童の保護等に関する法律違反が, 本予測モデルに組み込まれていないことである。本判決は, 「被害者のひわいな姿態ばかりか, 強姦の様子をも撮影し, 経年による劣化のない電磁的記録として保存していた児童ポルノの犯行結果も軽視」できないと評価しており, 刑期判断においても重要であると思われる。

いずれにしても, 予測モデル式の改良を要することであり, 本判決に関して言えば, 「外れ値事例」とは言えないものと解される。

(11) 広島地判平成21年9月14日 LEX/DB25441784【強制わいせつ, 強姦未遂, 強姦, 児童福祉法違反事件】

実績値 : 360	予測値 : 284.202
残差 : 75.798	標準化残差 : 2.246

[事案の概要]

被告人は, 広島県●●市のA小学校の教諭であった。

第1 被告人は, 同校の女子児童であるBが13歳未満であることを知りながら, 同女を姦淫しようとして, 平成13年11月21日から平成15年3月1日までの間, 前後6回にわたり, 同校内ほか2か所において, 同女を姦淫した。

第2 被告人は, 同校の女子児童であるCが満18歳に満たない児童であることを知りながら, 平成14年2月14日から同年3月26日までの間, 前後6回にわたり, 同校内教室ほか数か所において, 上記Cをして, 自己の陰茎を手淫または口淫させるなど, 自己を相手方として性交類似行為をさせ, もって, 児童に淫行をさせる行為をした。

第3 被告人は, 同校の女子児童であるDが13歳未満であることを知りながら, 同女を姦淫しようとして, 平成14年5月7日から同年7月24日までの間, 前後2回にわたり, 同校内において, 同女を姦淫した。

第4 被告人は, 同校の女子児童であるEが13歳未満であることを知りながら, 同女を姦淫しようとして, 平成14年6月2日から平成15年1月18日までの間, 前後3回にわたり, 同校内ほか1か所において, 同女を姦淫し

た。

第5 被告人は, 同校の女子児童であるFが満18歳に満たない児童であることを知りながら, 平成14年9月21日から同年12月26日までの間, 前後6回にわたり, 同校内において, 上記Fをして, 別表5記載のとおり, 自己の陰茎を手淫または口淫させるなど, 自己を相手方として性交類似行為をさせ, もって, 児童に淫行をさせる行為をした。

第6 被告人は, 同校の女子児童であるGが満18歳に満たない児童であることを知りながら, 平成15年2月1日午前11時44分ころから同日午前11時47分ころまでの間, 同校内において, 上記Gをして, 別表6記載のとおり, 自己の陰茎を口淫させるなど, 自己を相手方として性交類似行為をさせ, もって, 児童に淫行をさせる行為をした。

第7 被告人は, 同校の女子児童であるHが13歳未満であることを知りながら, 同女を姦淫し, または, 同女に対しわいせつな行為をしようとして,

1 平成15年9月27日から平成18年3月21日までの間, 前後6回にわたり, 同校宿直室ほか数か所において, 同女の着衣を脱がせてその乳房を舐めるなどし, もって13歳に満たない女子に対し, わいせつな行為をした。

2 平成16年9月18日から平成18年7月15日までの間, 前後19回にわたり, 同校内ほか数か所において, 同女を姦淫した。

第8 被告人は, 同校の女子児童であるIが13歳未満であることを知りながら, 同女を姦淫し, または, 同女に対しわいせつな行為をしようとして,

1 平成15年11月29日から平成16年7月17日までの間, 前後4回にわたり, 別表8-1記載のとおり, 同校内において, 同女の着衣を脱がせてその陰部を舐めるなどしたほか, その陰部等を所持のビデオカメラ等で撮影するなどし, もって13歳に満たない女子に対し, わいせつな行為をした。

2 平成16年5月29日午後4時42分ころ, 同校内において, 同女を同所の床面に仰向けに寝かせてその上に覆い被さるなどし, 同女を姦淫しようとしたが, 同女の陰部に自己の陰茎を挿入できなかったため, その目的を遂げなかった。

第9 被告人は, 同校の女子児童であるJが13歳未満で

あることを知りながら、同女を姦淫し、または、同女に対しわいせつな行為をしようと企て、

1 平成15年11月29日から平成18年4月8日までの間、前後13回にわたり、同校内ほか数か所において、同女の着衣を脱がせてその陰部を舐めるなどしたほか、その陰部等を所携のビデオカメラ等で撮影するなどし、もって13歳に満たない女子に対し、わいせつな行為をした。

2 平成16年2月11日から平成17年10月19日までの間、前後10回にわたり、同校内ほか数か所において、自己の陰茎を同女の陰部付近に押し当てるなどして同女を姦淫しようとしたが、同女の陰部に自己の陰茎を挿入できなかったため、その目的を遂げなかった。

3 平成16年5月7日から平成17年12月17日までの間、前後16回にわたり、同校内ほか数か所において、同女を姦淫した。

第10 被告人は、同校の女子児童であるKが13歳未満であることを知りながら、同女に対しわいせつな行為をしようと企て、平成16年10月2日から同年11月6日までの間、前後2回にわたり、同校内において、同女の着衣を脱がせてその陰部を舐めるなどし、もって13歳に満たない女子に対し、わいせつな行為をした。

〔量刑の理由〕懲役30年

広島地方裁判所は、本件の量刑に関し、以下のような理由を示した。

1 本件は、小学校教師であった被告人が、約4年8か月の間に、その勤務先の女子児童であった計10名の13歳未満の少女に対し、多数回にわたりわいせつ行為等を行ったという、強姦46件、強姦未遂11件、強制わいせつ25件、児童福祉法違反（児童に淫行させる行為）13件からなる事案である。

2 被告人は、勤務先の小学校で、目に留まった女子児童に声をかけ、初めは指導上の必要などといった虚言を弄して女子児童の身体に触るようになり、その反応を確かめながら徐々にわいせつ行為の度合いを高めていき、自らが教師という被害児童に対して絶対的に優位な立場にあることを利用し、意のままに被害児童の身体をもてあそび続け

るために、あらゆる手段を用いて、わいせつ行為等を繰り返していたものである。

被告人による個々のわいせつ行為等の態様は、ビデオ映像等によって明らかになっているところであるが、被告人は、勤務先の小学校の校舎内で、まだ授業時間中であつたり、室外から他の児童の声が聞こえるような状況下でわいせつ行為等に及ぶなどしており、犯行の大胆さは常軌を逸している。具体的な行為態様も、父と子ほど年の離れ、被害児童らよりもはるかに体格も大きい被告人が、肉体的にも精神的にも未成熟な女子児童らに対して、判示のように、あらかじめ用意しておいた性具を用いたわいせつ行為を行ったり、手淫・口淫を強いたりした挙げ句、姦淫行為にまで及んでいる。さらに、被告人は、自らこれらの行為をビデオカメラで撮影していたばかりか、あろうことか、被害児童らにも撮影させることすらしており、まさに陵辱の限りを尽くしているといっても過言ではない。

そればかりでなく、犯行状況を撮影したビデオ映像等によれば、被告人は、被害児童らに行為に応じさせようとして、被告人のわいせつ行為等に応じる度合いが他の児童のそれと比較して少ないなどと言って自己否定を強い、被害児童が被告人の要求に応じれば他の児童は被告人にわいせつ行為等をされずに済むなどと、あたかも被害児童のせいでの児童まで苦しまなければならないような言い方をして自責の念を抱かせ、被害児童が嫌がって抵抗するのに対し、やると決めたのだから応じ続けなければならないとか、当該行為ができないのならば他の行為を行わなければならないなどといった詭弁を弄するなどの言動が多々あったことが認められる。被告人は、このような言動を通じて被害児童らの心理に強い影響を与え、抵抗や反論ができないように仕向けたのであり、被害児童らが抵抗の意欲を削がれ、精神的に被告人の望むわいせつ行為等に応じざるをえない状況に追い込まれたことは明らかである。さらに狡猾なことに、被告人は、被害児童らに対し、明示的に口止めをしたり、わいせつ行為等の状況を撮影した

写真をばらまくなどと脅迫したりすることがあったほか、同時に複数の児童に対してわいせつ行為等に及ぶことで、被害児童らに同じ秘密を共有させて犯行の発覚を防ぐとともに羞恥心を緩めさせるなどし、自らの要求に応じない児童に対しては、部活動や勉強を教えないとか、授業等の際に無視すると言うなどしており、結局、被告人は、被害児童らの人格の尊厳や健やかな成長といったことにはおよそ関心がなく、自己の一時の快楽を追求するため、多くの悪辣かつ残酷なやり方で被害児童らの心を手玉にとり、被害児童らの抵抗など気にも留めず、一方的に容赦なく、鬼畜にも劣る浅ましい蛮行を繰り返したものにほかならず、被告人には、被害児童らの成長についての教師としての使命感どころか、幼い児童らを慈しみ育てたいと願う温かな人間性も、全く欠落しているというほかない。

なお、被告人は、当公判廷などにおいて、被害児童らが嫌だといえればそれ以上のことは行わなかったとか、行為に応じると約束したのだからそのまま続けてもいいと思ったなどと述べるが、もとよりわいせつ行為に応じるという約束自体およそ不条理かつ反倫理的なものであることは明白である上、上記ビデオ映像によれば、被害児童らが明確に拒否の態度を示しているのに、自らの欲望を満たすために様々な言辞を重ねて執拗に犯行を継続している状況が容易に見て取れ、それでもなお被害児童らが勇気を振り絞り被告人の要求に応じなかったときに限って、ようやくそれ以上の行為に及ぶことを渋々断念したことがわずかに認められる程度に過ぎず、要するに被告人の弁解は単なる詭弁以外のなにものでもないものであって、全面的に排斥すべきものであり、これを前提とした弁護人の主張も全く採用できない。そして、公判廷に至ってすら、同様の筋違いの言い訳を弄して刑責を軽減しようと見苦しくあがく被告人の態度からは、本件各犯行の重大性についての認識やそれに伴う慚愧の念など全く見出すことはできない。

以上要するに、被告人は、教師という立場を最大限に悪用し、幼い被害児童らの未成熟な心理に

徹底的につけこんで、神聖たるべき学校教育の現場に、自らの意のままに性的快楽を追求できる私的空間を作り上げ、常習的にわいせつ行為等を行っては悦に入っていたものであって、その卑劣さ、反社会性、残忍で冷酷な犯行態様など、いずれの面においても比類なきほどに悪質というべきである。

3 また、いうまでもなく、本件犯行による結果はこの上なく甚大である。

被告人は、上記のとおり、起訴されているだけでも 10 人もの被害児童らに対し、合計 95 件のわいせつ行為等の犯行に及んでいるところ、被害児童らはいずれも当時 9 歳ないし 12 歳の幼い少女たちばかりであり、被告人によって、未成熟な身体には不相応で過酷なわいせつ行為に応じさせられただけでなく、中には多数回の姦淫行為まで余儀なくされた者も複数いるのであって、その肉体的苦痛がいかばかりであったか、想像することすら困難である。

そして、被害児童らに与えた精神的打撃は、それ以上に重大である。被害児童らは、学校内における保護者として、本来であれば全幅の信頼を寄せ、指導を仰ぐことができるはずの教師である被告人から、上記のとおり、抵抗することもできず、長期間、多数回のわいせつ行為等の被害に遭い続けてきたもので、それ自体、被害児童らにとって耐え難い出来事であったことは想像に難くない。しかも、被害児童らは、当初は、行為の意味すら十分に理解することもなく、言われるがまま、求められるがままに、わいせつ行為等に応じてきたものであって、行為の意味を十分に理解するに至ったときに被害児童らが受けるであろう衝撃の大きさや、本件被害の経験が被害児童らの健やかな成長に多大なる悪影響を及ぼすであろうことに思いを致すと、被害児童らが誠に哀れでならない。実際に、被害児童らの中には、現在心療内科に通院している者もあり、同女らの心は今なお蝕まれ続けている。さらに、被害児童らは、被告人から口止めをされるなどしたことから、一様に、本件被害を親に告白することすらできず、わずかに他

の被害児童との間でその経験を分かち合っていたにすぎなかったものであって、年端もいかない同女らが、その未成熟な心で受け止めるには余りにも大きな精神的打撃を、しかも、誰にも相談できぬまま、胸中ひそかに押しとどめるほかなかったことが、どれほど辛く苦しいものであったか、その心痛や絶望感の大きさもまた、筆舌に尽くしがたいというべきである。その心中の苦悩は、例えば、被害児童の一人が、被告人による被害から解放された後も、親にもいえない秘密を持ってしまった良心の呵責に苛まれて悩み苦しみ続けた挙げ句、本件犯行に起因すると思われるトラウマ反応を示すに至って、ようやく本件被害を外部に打ち明けられたことにより本件一連の犯行が発覚するに至ったことなどにも如実に表れている。

目を転じて被害児童らの親らについてみると、安心して学校に預けたはずの我が子が、あろうことか、教師である被告人から、繰り返し、理不尽で屈辱的なわいせつ行為等の標的にされていたことを知った衝撃やその心痛は察するに余りあり、慈しみ育ててきた我が子が被害を受けたことが、自らが被害を受けた以上の苦痛をもたらしたであろうことは容易に推察される。現に、被害児童の親の中には、愛娘の受けた被害に気づけなかったことを悔いて自らを責め続けている者もいるのである。

被害児童やその家族らが、本件の記憶を背負って、今後の人生を生きていかなければならないことを思うと、本件の被害は余りにも重く、残酷すぎるものといわなければならない。にもかかわらず、被告人からは、現時点において慰謝の措置は何ら講じられていないのであって、被害児童の母親らの意見陳述などからも明らかなように、被害児童やその親らの処罰感情が峻烈を極めているのも当然至極である。

さらに付言すれば、小学校教師であった被告人が、その勤務先の多数の女子児童に対し、長期間にわたり、極めて多数回のわいせつ行為等を繰り返してきたことは、周辺地域の教育界にとどまらず、全国的にも相当な衝撃をもって受けとめられ、

本件に起因して多数の教育関係者らが処分を受けたほか、学校に子息を預ける親たちの教師に対する信用も根底から覆されたのであり、その回復は決して容易に成し遂げられるものではなく、本件犯行による社会的影響もまた極めて大きいものがある。

4 被告人は、その生育環境等に特段の問題なく成長して高等教育を受けていたところ、遅くとも大学生のころから少女を性の対象として見るようになり、小学校教師になって2年目に勤務先の女子児童に対するわいせつ行為に及んだのを皮切りに、婚姻し、一子をもうけた後もなお、女子児童らに対するわいせつ行為等を継続し、本件犯行時に至ったものである。

被告人は、要するに、勤務先の小学校の女子児童らを性の対象と見、自らの欲求を満たすため、上記のような種々の手段を講じて、同女らを自らの性的快楽の対象に仕立て上げる行為を繰り返してきたものであって、いうまでもないことであるが、犯行に至る経緯や動機において酌むべき事情など絶無である。かえって、被告人は、小学校教師になった後ですら、自らの性的欲求を適切に制御できず、あろうことか被害児童らを自らを慰める道具のように扱って、その将来に与える影響を一顧だにせず、その人格を蹂躪する、まさしく人道にもとる行為を常習的に継続してきたものというほかなく、倫理意識は欠落しており、その犯行態度は徹底的に非難されなければならない。

なお、弁護人は、被告人に対する犯罪心理鑑定の結果を踏まえ、その有するアスペルガー症候群的な性格傾向が犯行の一因であるなどと指摘するが、それが被告人の刑責を多少とも減じるものとはいえない。

以上によれば、被告人の刑事責任は、非常に重大である。

5 他方、被告人は、基本的には本件各犯行を認め、残りの生涯をかけて償いを続け、少しずつでも慰謝料の支払いに努力していきたいなどと反省と謝罪の弁を述べていること、被告人の更生に助力する親族らもいるようであることのほか、被告人が、

事案の性質上当然のこととはいえ、本件審理のため長期間身柄を拘束されるとともに、小学校教職員を懲戒免職処分となって教員免許も剥奪されており、一定の事実上の制裁を受けているとも評価できること、被告人には前科前歴がないことなど、被告人にとって酌むべき事情も認められる。

しかしながら、被告人は、上記のとおり、長期間にわたって、極めて多数回にわたる蛮行に及び、多数の被害児童らの人生の歯車を大きく狂わせているのであって、その責任は余りに重大であり、これらの事情をもって、被告人に対する刑責を大幅に軽減させるものと評価することなど到底できない。

以上のような本件事案全体の犯情及びその他の事情に徴すると、有期懲役刑を超える刑を選択する余地のない現行法の枠内では、被告人に対しては、その最高刑をもって臨むほかはない。

(求刑 懲役 30 年)

〔予測モデル式からの若干の考察〕

予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく、すべての被害者数については、「(3-①) 強姦」が<5 名> (185.434) , 「(3-②) 強姦未遂」が<なし> (-10.387) , 「(3-③) 強制わいせつ」が<3 名> (32.959) , 「(3-④) 強制わいせつ未遂」が<なし> (-1.615) となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④) 被害結果(傷害)」が<なし> (-11.612) となり、その基本スコアは 194.779 となった。

本件は、「小学校教師であった被告人が、約 4 年 8 か月の間に、その勤務先の女子児童であった計 10 名の 13 歳未満の少女に対し、多数回にわたりわいせつ行為等を行ったという、強姦 46 件、強姦未遂 11 件、強制わいせつ 25 件、児童福祉法違反(児童に淫行させる行為) 13 件からなる事案」で、おおむね 10 歳以下の<幼児性愛型>に準じた犯行であり、<連続強姦・強制わいせつ型>の犯行でもある。本件は 2004 年の刑法一部改正(平成 16 年法律第 156 号)施行の前後にまたがる事案であるが、犯情が最も重い事案が施行後のものであったと推察され、

その結果、併合罪加重の上限が 30 年となり、求刑が懲役 30 年であるのに対して、本判決では懲役 30 年が宣告されたものと思われる。

予測モデル式では、予測値を 284.202 と算出した(残差 75.798)。残差が大きくなった原因として考えられるのは、1 つには、予測モデル式での量刑因子(アイテム)において、児童淫行罪(児童福祉法違反)の被害者数が設定されていないことである。児童淫行罪は 13 件もあり、刑期判断においても少なからず影響をあたえているものと推察される。

また、もう 1 つには、予測モデル式での量刑因子(アイテム)に犯行類型(社会的類型/刑事学的類型)が設定されていないことである。前記の千葉地判平成 24 年 8 月 28 日 LEX/DB25482765, 神戸地判平成 24 年 7 月 19 日 LEX/DB25482507, 富山地判平成 24 年 1 月 19 日 LEX/DB25482650, 神戸地判平成 21 年 12 月 10 日 LEX/DB25442060 と同様に、おおむね 10 歳以下の<幼児性愛型>に準じた犯行である。これらの事案に共通するように、犯行類型(社会的類型/刑事学的類型)が大きな影響をあたえているものと思われる。

よって、予測モデル式の改良を要することであり、本判決に関して言えば、「外れ値事例」とは言えないものと解される。

(12) 大阪地判平成 18 年 3 月 22 日 LEX/DB28115239 【住居侵入、強姦、強姦致傷、強姦未遂、傷害被告事件】

実績値 : 360	予測値 : 270.003
残差 : 89.997	標準化残差 : 2.407

〔事案の概要〕

第 1 被告人は、帰宅途中の A(当時 19 歳)を認めるや、強いて同女を姦淫しようと企て、平成 16 年 3 月 29 日午前 0 時 10 分ころ、大阪府(以下略)▲▲号室の同女方前までその跡をつけ、帰宅して玄関ドアを開めようとした同女に対し、矢庭にその口を手で塞いで後方に押し倒し、「声を出すな。」などと申し向けながら、その顔面等を手拳で数回殴打する暴行を加えて、同室内に侵入し、同所において、そのころから同日午前 2 時ころまでの間、同女に対し、「俺が何しに來たか分かってるやろ。俺は、今日、やりたいんや。」などと申し向けてその反抗を抑

押し、同女を裸にして、その口をガムテープで塞ぎ、両手首を後手にしてタオルで緊縛しながら、乳房を揉むなどし、さらに、自己の陰茎を口淫させ、同女に自慰行為をさせるなどした上、強いて同女を姦淫した。

第2 被告人は、帰宅途中の B（当時 26 歳）を認め、強いて同女を姦淫しようと企て、同年 5 月 22 日午前 3 時 10 分ころ、大阪市〈以下略〉●●号室の当時の同女方前まで跡をつけ、帰宅して玄関ドアを開けた同女に対し、矢庭にその口を塞いで押し倒しながら、同室内に侵入し、そのころ、同所において、同女に対し、顔面を手拳で数回殴打するなどの暴行を加え、その反抗を抑圧して同女を姦淫しようとしたが、同室内に男性がいるものと誤解して同所から逃走したため、その目的を遂げず、その際、上記暴行により、同女に約 5 日間の通院加療を要する顔面打撲、左肘部擦過傷の傷害を負わせた。

第3 被告人は、帰宅途中の C（当時 27 歳）を認め、強いて同女を姦淫しようと企て、同日午前 4 時ころ、大阪市〈以下略〉■■号室の当時の同女方前まで跡をつけ、帰宅して玄関ドアを閉めようとした同女に対し、矢庭にその口を手で塞いで押し倒しながら、同室内に侵入し、そのころから同日午前 4 時 40 分ころまでの間、同所において、同女に対し、「声を出すな。出したら殺すぞ。」などと申し向けながら、顔面を手拳で数回殴打し、頸部を手で絞め、所携のけん銃型ライターを真正けん銃のように装って右頬に突き付け、「これ、何か分かるか。偽もんちゃうぞ。」などと申し向けるなどの暴行、脅迫を加えてその反抗を抑圧し、同女を裸にして、ストッキングで両手首を後ろ手に緊縛した上、パンティーを押し込むなどして口を塞ぎながら、その乳房や陰部を弄び、さらに、自己の陰茎を口淫させるなどした上、強いて同女を姦淫し、その際、上記暴行により、同女に全治約 1 ないし 2 週間を要する左眼瞼皮下出血、左手皮下出血、外陰部擦過傷等の傷害を負わせた。

第4 被告人は、帰宅途中の D（当時 21 歳）を認めるや、強いて同女を姦淫しようと企て、同年 6 月 30 日午前 1 時ころ、大阪市〈以下略〉△△号室の当時の同女方前まで跡をつけ、帰宅して玄関ドアを閉めようとした同女に対し、矢庭にその口を左手で塞いで後頭部等を壁に打ち付けるなどしながら、同室内に侵入し、そのころから同日午前 4 時ころまでの間、同所において、同女に対し、右

手で首を絞めながら、「大人しくしろ。」などと申し向け、カッターナイフの刃を頸部に突き付けながら、「騒いだら切る。」などと申し向けてその反抗を抑圧し、同女を裸にして自己の陰茎を口淫させ、首にロープを巻き付け、両手首を後手にして手錠で緊縛しながら、ピンクローターで陰部を弄ぶなどした上、強いて同女を姦淫した。

第5 被告人は、帰宅途中の E（当時 22 歳）を認めるや、強いて同女を姦淫しようと企て、同年 8 月 31 日午前 2 時 16 分ころ、大阪市〈以下略〉○○号室の当時の同女方前まで跡をつけ、帰宅して玄関ドアを閉めようとした同女に対し、矢庭にその顔面を右手拳で 1 回殴打し、同女を転倒させながら同室内に侵入し、そのころ、同所において、同女に馬乗りになり、その顔面を右手拳で多数回殴打する暴行を加え、その反抗を抑圧して同女を姦淫しようとしたが、上記暴行により同女が出血したことに驚愕して逃走したため、その目的を遂げず、その際、上記暴行により、同女に約 9 日間の通院加療を要する前頭部挫創、左頬骨打撲・挫傷、鼻骨打撲、左下顎打撲・挫傷の傷害を負わせた。

第6 被告人は、帰宅途中の F（当時 21 歳）を認めて同女を姦淫しようと企て、同年 9 月 5 日午前 3 時ころ、大阪市〈以下略〉□□号室の当時の同女方前まで跡をつけ、帰宅して玄関ドアを閉めようとした同女に対し、矢庭にその口を手で塞ぎ、髪の毛を引っ張るなどの暴行を加えながら、同室内に侵入した上、同室内において、同女に対し、「抵抗したりしたらどうなるか分かってるやろな。明日から外歩けんような体にしたる。髪の毛とか眉毛とかも全部剃って外出られんようにしたるぞ。」などと申し向けてその反抗を抑圧し、あらかじめ準備したバイブレーター等を膣内に挿入してその姿をビデオ撮影し、自己の陰茎を口淫させるなどした上、強いて同女を姦淫した。

第7 被告人は、帰宅途中の G（当時 20 歳）を認め、強いて同女を姦淫しようと企て、同月 12 日午前 2 時 23 分ころ、大阪市〈以下略〉▲△号室の当時の同女方前まで同女の跡をつけ、帰宅して玄関ドアを閉めようとした同女に対し、矢庭に両肩を両手で突いて、同女を後方に転倒させて同室内に侵入し、そのころ、同所において、同女に対し、馬乗りになって口を手で塞ぎながら、「静か

にしろ。」などと申し向けるとともに、顔面を手拳及び平手で多数回殴打し、陰部を下着の上から撫でるなどの暴行、脅迫を加え、その反抗を抑圧して同女を姦淫しようとしたが、同女が大声を出すなどして抵抗したため、その目的を遂げず、その際、上記暴行により、同女に加療約1週間を要する顔面打撲等の傷害を負わせた。

第8 被告人は、帰宅途中のH（当時23歳）を認め、強いて同女を姦淫しようと企て、同月21日午後10時30分ころ、大阪市〈以下略〉●○号室の当時の同女方前まで同女の跡をつけ、帰宅して玄関ドアを開めようとした同女に対し、矢庭に口を手で塞ぎ、髪の毛を掴みながら、同室内に侵入し、そのころから同日午後11時30分ころまでの間、同所において、同女に対し、仰向けに押し倒して馬乗りになり、顔面を手拳で数回殴打し、「騒いだら殺すぞ。」などと申し向けるなどの暴行、脅迫を加えてその反抗を抑圧し、手錠で両手首を後ろ手に緊縛した上、同所にあった包丁でブラジャーの肩紐を切断するなどして同女を裸にし、さらに、所携のロープで同女の身体を緊縛して、所携のゴム製陰茎型玩具を膣内に挿入し、自己の陰茎を口淫させるなどした上、強いて同女を姦淫した。

第9 被告人は、帰宅途中のI（当時22歳）を認めて同女を姦淫しようと企て、同年10月13日午前0時27分ころ、大阪市〈以下略〉■□号室の当時の同女方前まで跡をつけ、同女が帰宅して玄関ドアを開けた隙に、同室内に侵入し、同所において、同女に対し、胸部付近を両手で押して同女を転倒させ、顔面を手拳で数回殴打するなどの暴行を加え、髪を所携の鋏で切る仕草をしながら、「これの意味わかるやろ。やることやったらすぐ帰る。馬鹿な真似はするな。」などと申し向けてその反抗を抑圧した上、同女を全裸にして、ビニール紐で両手を縛り、目隠しをし、さらに洗濯ばさみで舌を挟むなどしてその姿をビデオ撮影し、自己の陰茎を口淫させるなどした上、強いて同女を姦淫し、その際、上記暴行により同女に加療約1週間を要する頭部外傷、顔面打撲、外傷性頸部症候群等の傷害を負わせた。

第10 被告人は、帰宅途中のJ（当時19歳）を認めるや、強いて同女を姦淫しようと企て、同月17日午前4時30分ころ、大阪市〈以下略〉△▲号室の当時の同女方前までその跡をつけ、帰宅して玄関ドアを開めようとした

同女に対し、矢庭に右手で目隠しして、「静かにしろ。」などと申し向けるとともに、右頭部を手拳で数回殴打して、同女を転倒させながら同室内に侵入し、そのころから同日午前4時40分ころまでの間、同所において、同女に対し、右頭部等を手拳で数回殴打し、「うるさい。とにかく黙れ。」などと申し向けるなどの暴行、脅迫を加えて、その反抗を抑圧し、同女を裸にして、自己の陰茎を口淫させるなどした上、強いて同女を姦淫し、その際、上記暴行により、同女に約2週間の安静加療を要する右肩、前額、左膝打撲傷等の傷害を負わせた。

第11 被告人は、帰宅途中のK（当時35歳）を認めるや、強いて同女を姦淫しようと企て、同月24日午前5時ころ、同女らが居住する大阪市〈以下略〉内に、同女が同マンション入口に設置されたオートロックドアの施錠を解いた隙に同ドアから侵入した上、同マンション○●号室の当時の同女方前通路まで同女の跡をつけ、同所において、帰宅して玄関ドアを開めようとした同女に対し、矢庭にその上半身を手で掴み、腹部を手拳で殴打して、通路上に押し倒し、同女に馬乗りになりながら、腹部を手拳で殴打するなどの暴行を加え、その反抗を抑圧して同女を姦淫しようとしたが、同女が大声を上げるなどして抵抗したため、その目的を遂げず、その際、上記暴行により、同女に全治約14日間を要する左頬部擦過傷、腹部、両下肢、両肘部打撲傷の傷害を負わせた。

第12 被告人は、帰宅途中のL（当時22歳）を認めるや、強いて同女を姦淫しようと企て、同年11月14日午後10時30分ころ、大阪市〈以下略〉□■号室の当時の同女方前まで同女の跡をつけ、帰宅して玄関ドアを開めようとした同女に対し、矢庭にその口を手で塞ぎ、その顔面を手拳で多数回殴打するなどの暴行を加えながら、同室内に侵入し、同所において、そのころから同月15日午前1時ころまでの間、同女に対し、「黙って言うことを聞いたら、殺さへん。」などと申し向けてその反抗を抑圧し、同女を裸にして、両手をロープで緊縛しながら陰部を弄ぶなどし、さらに、あらかじめ準備したバイブレーターをその陰部にあてがい、自己の陰茎を口淫させながら、その姿をビデオ撮影するなどした上、強いて同女を姦淫し、その際、上記暴行により、同女に約3週間の通院加療を要する右上眼瞼皮下血腫、右上眼瞼腫脹及び右眼結膜下出血の傷害を負わせた。

第 13 被告人は、帰宅途中の M（当時 20 歳）を認めるや、強いて同女を姦淫しようと企て、平成 17 年 1 月 10 日午前 2 時 55 分ころ、同女らが居住する大阪市〈以下略〉内に、同女が同マンション入口に設置されたオートロックドアの施錠を解いた隙に同ドアから侵入した上、

1 同マンション▲○号室の当時の同女方前通路まで同女の跡をつけ、同所において、同女に対し、矢庭に背後からその口を手で塞ぎ、髪の毛を掴んで通路上に押し倒すなどの暴行を加え、その反抗を抑圧して同女を姦淫しようとしたが、同女が所携の防犯ブザーを鳴らすなどしたため、その目的を遂げなかった。

2 上記 M を姦淫することができなかったことなどに立腹し、1 記載の日時ころ、同記載の通路において、同女に対し、その顔面を手拳で 1 回殴打する暴行を加え、よって、同女に全治約 19 日間を要する鼻骨骨折の傷害を負わせた。

第 14 被告人は、帰宅途中の N（当時 24 歳）を認めて同女を姦淫しようと企て、同年 1 月 11 日午前 0 時 20 分ころ、大阪市〈以下略〉●□号室の当時の同女方前まで跡をつけ、同女が帰宅して玄関ドアを開けた隙に、同室内に侵入し、同所において、同女に対し、左肩付近を両手で押して同女を転倒させ、顔面を手拳で多数回殴打するなどの暴行を加え、口を手で塞ぎながら、「静かにしろ。悪いこと考えるなよ。」などと申し向けてその反抗を抑圧した上、あらかじめ準備していたロープで両手などを縛り、目隠しをし、その姿をビデオ撮影し、さらに、プラスチック製ボールを口に押し込んだり、自己の陰茎を口淫させるなどした上、強いて同女を姦淫し、その際、上記暴行により同女に全治約 1 週間を要する両腕・両手首擦過傷等の傷害を負わせた。

〔法令の適用〕

大阪地方裁判所は、本件について、以下のとおり法令を適用した。

被告人の判示第 1、第 4、第 6 及び第 8 の各所為のうち、住居侵入の点はいずれも刑法 130 条前段に、強姦の点はいずれも行為時においては平成 16 年法律第 156 号による改正前の刑法 177 条前段（刑の長期は同法 12 条 1 項による。）に、裁判時にお

いてはその改正後の刑法 177 条前段（刑の長期は同法 12 条 1 項による。）に、判示第 2、第 5、第 7 及び第 11 の各所為のうち、住居侵入の点はいずれも刑法 130 条前段に、強姦致傷の点はいずれも行為時においては上記改正前の刑法 181 条（179 条、177 条前段）（刑の長期は同法 12 条 1 項による。）に、裁判時においてはその改正後の刑法 181 条 2 項（179 条、177 条前段）（刑の長期は同法 12 条 1 項による。）に、判示第 3、第 9、第 10 及び第 12 の各所為のうち住居侵入の点はいずれも刑法 130 条前段に、強姦致傷の点はいずれも行為時においては上記改正前の刑法 181 条（177 条前段）（刑の長期は同法 12 条 1 項による。）に、裁判時においてはその改正後の刑法 181 条 2 項（177 条前段）（刑の長期は同法 12 条 1 項による。）に、判示第 13 の所為のうち、住居侵入の点は刑法 130 条前段に、強姦未遂の点は刑法 179 条、177 条前段に、傷害の点は刑法 204 条に、判示第 14 の所為のうち、住居侵入の点は刑法 130 条前段に、強姦致傷の点は刑法 181 条 2 項（177 条前段）にそれぞれ該当するところ、判示第 1 ないし第 12 の強姦及び強姦致傷については犯罪後の法令によって刑の変更があったときに当たるから同法 6 条、10 条により軽い行為時法の刑によることとし、判示第 1、第 4、第 6 及び第 8 の各住居侵入と各強姦との間並びに判示第 2、第 3、第 5、第 7、第 9 ないし第 12 及び第 14 の各住居侵入と各強姦致傷との間にはそれぞれ手段結果の関係があるので、同法 54 条 1 項後段、10 条により 1 罪としていずれも重い強姦又は強姦致傷罪の刑で、判示第 13 の住居侵入と強姦未遂及び傷害との間にはそれぞれ手段結果の関係があるので、同法 54 条 1 項後段、10 条により結局以上を 1 罪として重い強姦未遂罪の刑で、各処断することとし、判示第 2、第 3、第 5、第 7、第 9 ないし第 12 及び第 14 の各罪について所定刑中有期懲役刑を選択し、以上は同法 45 条前段の併合罪であるから、同法 47 条本文、10 条により法定の加重をすることとなるが、平成 16 年法律第 156 号の施行前に犯したものと施行後に犯したのものがある場合で、これらの罪のうち同法の施行後に犯したもののみについて同

法による改正後の14条の規定により処断することとした場合の刑が、これらの罪全てについてその改正前の刑法14条の規定を適用して処断することとした場合の刑より重い刑となるときであるから、平成16年法律第156号附則4条ただし書により、同法施行後に犯したもののうち重い判示第14の罪の刑に法定の加重をした刑期の範囲内で被告人を懲役30年に処し、刑法21条を適用して未決勾留日数中300日をその刑に算入することとする。

〔量刑の理由〕懲役30年

大阪地方裁判所は、本件の量刑に関し、以下のような理由を示した。

本件は、被告人が、通行中の女性の跡をつけて、その住居に侵入した上で敢行した、住居侵入・強姦既遂4件（判示第1、第4、第6、第8）、住居侵入・強姦致傷9件（判示第2、第3、第5、第7、第9、第10ないし第12、第14。うち姦淫の点につき既遂が5件、未遂が4件である。）及び住居侵入・強姦未遂・傷害1件（判示第13）の事案である。

まず、各犯行の態様をみると、被告人は、夜間に自分好みの女性を探して、その跡をつけ、住人を装ってマンション内まで入り込み、一緒にエレベーターに乗り込むなどしてその居住する場所を確認した上、自己は同一階で降りることはせずに女性を油断させ、階段を利用してその居住階に駆けつけ、女性が居室玄関ドアを開けてこれを閉める直前に無理やりドアを開けて居室内に侵入するという手口で各犯行に及んだもので、極めて巧妙な犯行である。そして、部屋の中に侵入した後は、いきなり被害女性の顔面を続けざまに殴打したり、「殺すぞ。」と申し向けるなどの強烈な暴行・脅迫を加えて抵抗する気力を失わせ、姦淫既遂事案にあっては、そのほとんどにおいて数十分から数時間という長時間にわたり、ガムテープで口を塞ぐ、両手首を後ろ手に緊縛する、カーテンレールに縛り付ける、首にロープを巻き付けて四つん這いに歩かせる、バイブレーター等を陰部に挿入し、

あるいは被害女性自らにこれをさせる、口淫させるなど陵辱の限りを尽くし、しかもこうした状況をビデオ撮影した事案も少なくない。また、女性が少しでも自己の意に添わない行動を取れば、更に殴りつけ、あるいはその姿勢を示し、被害女性の人格、尊厳を完全に無視し、動物や性玩具のように扱う行為を執ように続け、長時間にわたり被害女性に筆舌に尽くしがたい屈辱を与え続けた挙げ句に姦淫し、また、妊娠していることから被害女性が行方を止めてくれるよう乞うのも意に介さず姦淫した事案までなのであって、そこには人間性の片鱗すら見出し難く、被告人の敢行した本件各犯行は、個々の犯行の内容においても、犯行の総数においても、この種事犯の中でも稀に見る卑劣で悪辣極まりない犯行である。

合計14名の被害者らは、姦淫が既遂に至った9名の者はもちろん、未遂に止まった者についても、最も安心のできるはずの自己の居室若しくは居住するマンション内に侵入された上、いきなり顔面を殴打するなどの暴行を加えられたもので、その肉体的、精神的苦痛は甚大であるところ、具体的には、被害者らは、再び襲われるのではないかという恐怖と不安に苛まれ、事件後長期間経ってもなお、夜間に一人になることができない、エレベーターに乗ることができない、男性と目が合ったりするだけで不安を感じる、人混みでパニックになるなど、日常生活を送る上でも困難な状況に置かれており、捜査官に対し、「事件を思い出すと、あのときの恐怖と屈辱感がよみがえり、死ぬほど辛く、今事件のことを話すだけでも涙が出てきそうになります。……体も精神もぼろぼろにされ、私の人生までめっちゃくちゃにされました。（甲43）」、「今でも1人で夜歩くのも怖く、また知らない男の人を見ると体が震え、大きな怒鳴り声を聞くと全身がびくつとします。（甲66）」、「（事件以来）電車に乗っていて過呼吸になり、手が固まって動かなくなり、意識がなくなってしまう状態に何度か陥りました。……私の苦しみは一生続きます。今回の事件後、寝ることも食べることもできませんでした。（甲76）」などと一様

に苦しい胸のうちを述べ、およそ1年若しくはそれ以上経った公判廷における意見陳述においても、「私の人生を壊した分、人生をかけてきちんと償ってほしい。」、「二度と顔をみたくもないし、声も聞きたくない。」、「怒りや悲しみや喜びや、そういった感情さえも表に出ないほど、強いショックを受けた。」、「悔しくて辛くて怖くて毎晩不眠に悩まされる日々でした」、「どう罰しても、決して納得したりはできません。」などと癒えぬ思いを述べているのである。このように、被告人の犯行は、被害女性らを身体的にはもちろん、それ以上に精神的に深く傷つけ、しかも被害の性質上、被害女性らのなかには、その被害内容を肉親や交際相手にすら打ち明けることができず、一人思い悩まねばならない状況に追い込まれている者も含まれており、被害女性らは一様にその精神の安定を失い、その回復には相当の時間を要すると思われる。このように、被告人の犯行は、被害女性らの幸福であるはずの人生を、苦痛に耐える日々に変えてしまったのであり、本件の結果は誠に重大というほかはない。しかるに、被告人から、被害者らに対しては、十分な被害弁償すらままならない状況にあるのであって、上記の犯行態様自体から、格別落度がないことが明らかな被害者らが一様に、被告人を一生刑務所に入れておいて欲しいなどと峻厳な処罰感情を表明しているのは至極当然のことである。

被告人は、本件各犯行の際には飲酒をしており、自己の性的興奮を満たすために犯行を行った、罪悪感を感じながらも止めることができなかったなどと供述しているが、自己の歪んだ性的欲望の赴くままに、被害者が受ける屈辱感や絶望感を一顧だにせず、その人格を無視して行動したことは身勝手としか言いようがなく、その動機に酌量の余地は全くない。のみならず、被告人が少年時代から性的な加虐行為に関心を有し、また当初はいわゆるSMクラブに通うようになったものの、相手の女性が芝居をしている、仕事でやっているのが分かり面白くないなどとして、嫌がっている女性に対してこの種の行為をしたいとの気持ちが昂進して

本件犯行につながっていった経緯、前述した本件各犯行の内容及び態様、1年弱の間に14件もの事件を累行していること、姦淫目的を達せられなかったとしてその直後にさらなる犯行を敢行している事案も含まれていることなどに照らせば、本件は被告人の深刻な性格、性癖の問題性に根ざすものであることが懸念される。以上によれば、被告人の刑事責任は誠に重大であり、本件において、検察官が無期懲役刑を求刑することにも、十分な理由があるようにも思われる。

しかしながら、他方において、被告人がいずれの犯行についてもこれを認めて被害者に対する反省の気持ちを手紙に綴るなど被告人なりに反省の態度を示していること、余罪も含め自ら積極的に犯行を供述するなどし、これが本件各犯行の早期の解明に寄与し、被害者らに更なる精神的苦痛や、負担を負わせることを回避させたということも認められ、この点については一定の評価がなされるべきであること、これまで前科・前歴がないこと、被告人が謝罪の気持ちを示すために謝罪文を作成し、謝罪金の支払を申し出ているところ、被害者14名のうち7名が手紙を受領してくれ、また謝罪金については5名に対して各2万円を送金できたこと、仕事には真面目に取り組んでいたことが窺われること、実弟がその監督を誓っていること、雇用主が出所できた際には再雇用する意思がある旨述べていることなど被告人に有利に考慮すべき事情も認められる。

ところで、本件は平成16年法律第156号による改正刑法施行の前後にまたがる事案であるが、無期懲役刑に処する場合と有期懲役刑に処する場合との較差があまりに大きいとの指摘がされてきたことをも背景として上記法律により刑法が改正され、有期懲役刑の上限が20年から30年に上げられたことで、改正前であれば無期懲役刑を選択していた事案の一部についても、事案の実態に即した、より適正な科刑の可能性があり得ることを念頭に慎重に刑を量定すべきことが要請されるとともに、上記改正前よりも相当長期間の矯正教化が可能となったことをも踏まえて考えると、被告

人に矯正の可能性が全くないとまではいえないと思われる。上記の被告人のために考慮すべき諸事情にこの点も併せ考慮すると、本件につき無期懲役刑を選択することにはなお躊躇を感じざるを得ない。そこで、被告人には、有期懲役刑の上限である懲役 30 年の刑をもって臨むのが相当であると考えた。

(求刑 掲載なし)

[予測モデル式からの若干の考察]

予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく、すべての被害者数については、「(3-①) 強姦」が<5 名以上> (185.434), 「(3-②) 強姦未遂」が<5 名以上> (5.283), 「(3-③) 強制わいせつ」が<なし> (-13.951), 「(3-④) 強制わいせつ未遂」が<なし> (-1.615) となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、被害結果(傷害) (1-④) が<傷害: 全治 2 週間以内> (11.886) となり、その基本スコアは 187.037 となった。

本件は、「通行中の女性の跡をつけて、その住居に侵入した上で敢行した、住居侵入・強姦既遂 4 件(判示第 1, 第 4, 第 6, 第 8), 住居侵入・強姦致傷 9 件(判示第 2, 第 3, 第 5, 第 7, 第 9, 第 10 ないし第 12, 第 14。うち姦淫の点につき既遂が 5 件、未遂が 4 件である。) 及び住居侵入・強姦未遂・傷害 1 件(判示第 13)」からなる事案であり、「1 年弱の間に 14 件もの事件を累行」したもので、<連続強姦・強制わいせつ型>の犯行に位置づけられる。本件は 2004 年の刑法一部改正(平成 16 年法律第 156 号)前後にまたがる事案であるが、上記の「法令の適用」で示されているとおり、併合罪加重の上限が 30 年となるところ、本判決では懲役 30 年が宣告されている。

予測モデル式では、予測値を 256.689 と算出した(残差 103.311)。残差が大きくなった原因は、高松地判平成 23 年 3 月 30 日 LEX/DB25500360 とほぼ同様に、強姦未遂の<5 名以上>のカテゴリースコアの低さが影響したことであると思われる。<2 名> (59.758), <3 名> (89.948) のカテゴリースコアに対して、<4 名>は 46.063 で、<5 名>は 5.283 であった。おおむね比例す

る傾向は確認されるものの、<4 名>及び<5 名>のカテゴリースコアは低いことはすでに確認したとおりである。サンプル数を増やして再度検証することが必要であろう。よって、予測モデル式の改良を要することであり、本判決に関して言えば、「外れ値事例」とは言えないものと解される。

なお、本判決では、2004 年の刑法一部改正(平成 16 年法律第 156 号)によって、有期懲役刑の上限が 20 年から 30 年に引上げられたことで、改正前であれば無期懲役刑を選択していた事案の一部についても、事案の実態に即した、より適正な科刑の可能性があり得ることを念頭に置いた慎重な刑の量定が要請されること、また、上記改正前よりも相当長期間の矯正教化が可能となったことなどを背景に、被告人に矯正可能性が全くないとまでは言えないことから、有期刑を選択した旨述べている。無期懲役については、本分析の対象外としたので、ここではその妥当性を検証し得ないのが残念である。もっとも、予測値は実績値よりも低いことから、有期刑が妥当であるという一応の仮説は立てることはできよう。

3.4.3 小括③

外れ値事例に関して事例検討をした結果、予測モデル式において、以下の改良点があることが分かった。

❶ 量刑因子(アイテム)において、犯行類型(社会的類型/刑事学的類型)、児童淫行罪(児童福祉法違反)の被害者数を設定する。

❷ 予測モデル式において、性犯罪以外の身体的被害や財産的被害、児童買春、児童ポルノに係る行為等の処罰及び児童の保護等に関する法律違反を組み込む。

❸ 「(3-①) 強姦」の<4 名>のカテゴリースコア及び「(3-②) 強姦未遂」の<4 名>・<5 名>のカテゴリースコアについて再検証を要する。

他方で、量刑評価において、示談の成立、再犯可能性の低さなどが通常の計測値よりも高く評価されていると推察される事案が散見されたことから、その正当性や妥当性については、今後、規範的な観点からも検証していく必要があるだろう。

3.5. 犯行類型別にみた量刑傾向

前記「3-4. 外れ値事例に関する検討」の結果、予測モデル式においても、量刑因子（アイテム）に犯行類型（社会的類型／刑事学的類型）を設定する必要性が見えてきた。すなわち、犯行類型別の量刑傾向があることが統計上明らかになったと言えよう。以下では、予測モデル式から算出した標準化残差を用いて、犯行類型別の量刑傾向について分析していきたいと思う。

3.5.1. 方法

対象とした全 335 件を以下の犯行類型に分類して、本予測モデル式から算出した各サンプルの標準化残差の平均値や中央値を犯行類型別に計算して、それらを比較検討した。

本稿では、以下のような 14 の犯行類型を設定した。

①＜連続強姦・強制わいせつ型＞

被告人（加害者）が、複数の被害者に対して一定期間のうちに犯行に及んだものである。

②＜拉致・連行犯行型＞

被告人（加害者）が、被害者を建物に連れ去ったり、車で監禁したような形で犯行に及んだものである。

③＜面識ない者犯行型＞

被告人（加害者）が、面識のない被害者に対して犯行に及んだものである（なお、本犯行類型については、分類の都合上、1 人の被害者の事案に限定している）。

④＜飲酒・薬物抗拒不能型＞

被告人（加害者）が、飲酒状況下などで被害者に対して犯行に及んだものである。

⑤＜集団強姦・強制わいせつ型＞

複数の被告人（加害者）が、1 人ないし複数の被害者に対して犯行に及んだものである。

⑥＜勤務先関係者犯行型＞

被告人（加害者）が、勤務先関係者である被害者に対して犯行に及んだものである。

⑦＜性的虐待型＞

親ないし親族である被告人（加害者）が、子、孫、甥、姪となる被害者に対して犯行に及んだものである。

⑧＜教師・指導者犯行型＞

教師や指導者である被告人（加害者）が、その立場

を利用して、教え子である被害者に対して犯行に及んだものである。

⑨＜幼児性愛型＞

被告人（加害者）が、おおむね 10 歳以下（また、それに準じるみなされる年齢）の被害者に対して犯行に及んだものである。

⑩＜配偶者・交際相手犯行型＞

被告人（加害者）が、配偶者や交際相手（元配偶者・交際相手を含む）である被害者に対して犯行に及んだものである。

⑪＜対知的障害者犯行型＞

被告人（加害者）が、知的障害を有する被害者に対して犯行に及んだものである。

⑫＜友人・知人犯行型＞

被告人（加害者）が、友人・知人関係である被害者に対して犯行に及んだものである。

⑬＜SNS 犯行型＞

被告人（加害者）が、SNS を利用して、あまり面識ない被害者に対して犯行に及んだものである。

⑭＜その他犯行型＞

上記の犯行類型に分類できなかった犯行類型である。

なお、複数の犯行類型に該当する事例もあることから、その特徴から、最大で 2 つの犯行類型に分類することとした。

3.5.2. 結果

図表 15 は、犯行類型別に、標準化残差の平均値、中央値などをまとめたものである。全体の標準化残差の平均値が 0.00 で、中央値が -0.08 であるので、それらを基準に、①全体の標準化残差に近似する犯行類型、②標準化残差の平均値 and/or 中央値が 0.3 以上の犯行類型、③標準化残差の平均値 and/or 中央値が -0.3 以下の犯行類型に分類した。

①については、＜面識ない者犯行型＞（平均値：-0.02、中央値：-0.02）、＜連続強姦・強制わいせつ型＞（平均値：-0.02、中央値：-0.03）、＜集団強姦・強制わいせつ型＞（平均値：-0.04、中央値：-0.23）、＜勤務先関係者犯行型＞（平均値：-0.06、中央値：-0.07）、＜拉致・連行犯行型＞（平均値：-0.07、中央値：-0.21）、＜その他

	N	平均値	標準偏差	中央値	最大値	最小値
② 性的虐待型	14	0.85	1.16	1.04	2.95	-0.96
教師・指導者犯行型	23	0.49	0.85	0.43	2.53	-0.92
① 幼児性愛型	36	0.27	0.94	0.14	2.46	-1.37
面識ない者犯行型	56	-0.02	0.49	-0.02	1.15	-1.35
連続強姦・強制わいせつ型	94	-0.02	1.38	-0.03	3.81	-3.31
③ 集団強姦・強制わいせつ型	39	-0.04	0.54	-0.23	2.45	-0.76
勤務先関係者犯行型	17	-0.06	0.39	-0.07	0.71	-0.67
拉致・連行犯行型	45	-0.07	0.77	-0.21	1.61	-2.92
その他犯行型	8	-0.16	0.60	-0.19	0.85	-1.02
② 飲酒・薬物抗拒不能型	8	-0.23	0.32	-0.24	0.28	-0.78
SNS犯行型	5	-0.21	0.47	-0.42	0.71	-0.53
③ 友人・知人犯行型	26	-0.29	0.43	-0.37	0.81	-0.96
対知的障害者犯行型	3	-0.32	0.73	-0.78	0.71	-0.90
配偶者・交際相手犯行型	11	-0.63	0.75	-0.94	0.68	-1.56
全 体	335	0.00	0.94	-0.08	3.81	-3.31

図表 16 犯行類型別に見た標準化残差の
平均値／中央値

犯行型＞（平均値：-0.16，中央値：-0.19），＜飲酒・薬物抗拒不能型＞（平均値：-0.23，中央値：-0.24），＜幼児性愛型＞（平均値：0.27，中央値：0.14）が該当する。

②については，＜性的虐待型＞（平均値：0.85，中央値：1.04），＜教師・指導者犯行型＞（平均値：0.49，中央値：0.43）が該当する。

③については，＜配偶者・交際相手犯行型＞（平均値：-0.63，中央値：-0.94），＜対知的障害者犯行型＞（平均値：-0.32，中央値：-0.78），＜友人・知人犯行型＞（平均値：-0.29，中央値：-0.37），＜SNS 犯行型＞（平均値：-0.21，中央値：-0.42），が該当する。

これらから見えてくるのは，本予測モデルが導き出した性犯罪の刑期判断基準が，基本的に，①を中心にして組み立てられているという傾向である。そして，それに対して，②の＜性的虐待型＞，＜教師・指導者犯行型＞については，刑期が比較的重くなる傾向にあり，他方で，③の＜配偶者・交際相手犯行型＞，＜対知的障害者犯行型＞，＜友人・知人犯行型＞，＜SNS 犯行型＞については，刑期が比較的軽くなる傾向にあるということである。では，犯行類型ごとにもう少し詳細に確認していこう。

（1）連続強姦・強制わいせつ型

＜連続強姦・強制わいせつ型＞は，平均値が-0.02，標準偏差が 1.38，中央値が-0.03，最大値が 3.81，最小値が-3.31であった〔図表 17，図表 18〕。①標準化残差が 0.5 以上の事例と，②標準化残差が-0.5 以下の事例に分類してみると，①は 30 例，②は 31 例であった。予測モデル

式では，強姦，強姦未遂，強制わいせつ，強制わいせつ未遂などのすべての被害者数に正比例する傾向があることから，多くの被害者が生じる＜連続強姦・強制わいせつ型＞が基準の中核に位置することは当然の帰結と言えるのかもしれない。

併合罪加重の上限が 30 年に引き上げられる 2004 年の刑法一部改正（平成 16 年法律第 156 号）以前に②が集中するのは想定範囲内であったが，他方で，判決年が 2010 年前後に①が増加している傾向が見て取れる。すなわち，重罰化傾向にあると解される。バラツキが比較的大きかったのは，そのようなことが反映された結果であると思われる。

（2）拉致・連行犯行型

＜拉致・連行犯行型＞は，平均値が-0.07，標準偏差が 0.77，中央値が-0.21，最大値が 1.61，最小値が-2.92 であった〔図表 19〕。①標準化残差が 0.5 以上の事例と，②標準化残差が-0.5 以下の事例に分類してみると，①は 10 例，②は 11 例であった。類型的には，全体の標準化残差の平均値（0.00），中央（-0.08）に比較的近似し，バラツキ具合も＜連続強姦・強制わいせつ型＞に比べると小さい。したがって，＜拉致・連行犯行型＞も，＜連続強姦・強制わいせつ型＞と同様に，予測モデル式の中核に位置する犯行類型であると言える。

＜拉致・連行犯行型＞については，判決年が 2015 年以降に①が集中する傾向にあり，同年以降，重罰化傾向にあると見ることもできよう。

（3）面識ない者犯行型

＜面識ない者犯行型＞は，平均値が-0.02，標準偏差が 0.49，中央値が-0.02，最大値が 1.15，最小値が-1.35 であった〔図表 20〕。①標準化残差が 0.5 以上の事例と，②標準化残差が-0.5 以下の事例に分類してみると，①は 10 例，②は 10 例であった。類型的には，＜拉致・連行犯行型＞と同様に，全体の標準化残差の平均値（0.00），中央（-0.08）に最も近似的なもの 1 つであり，バラツキ具合も＜連続強姦・強制わいせつ型＞に比べると小さい。したがって，＜面識ない者犯行型＞も，＜連続強姦・強制わいせつ型＞や＜拉致・連行犯行型＞と同様に，予測モデル式の中核に位置する犯行類型であると言える。

判例番号	判決年	宣告刑	すべての性犯罪の被害者数				犯情が最も重い性犯罪被害結果(傷害)	犯行類型1	犯行類型2	実績値	サンプルスコア	残差	標準化残差
			強姦	強姦未遂	強制わいせつ	強制わいせつ未遂							
1	LEX/DB25562159	懲役15年	2名	なし	5名以上	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型		180	191.670	-11.670	-0.35
2	LEX/DB25561930	懲役23年	5名以上	1名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		276	282.198	-6.198	-0.18
3	LEX/DB25561383	懲役18年	2名	なし	5名以上	1名	なし	連続強姦・強制わいせつ型		216	191.166	24.834	0.74
4	LEX/DB25560647	懲役21年	3名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		252	204.884	47.136	1.40
5	LEX/DB25562240	懲役15年	2名	なし	1名	1名	傷害: 全治不明	連続強姦・強制わいせつ型		180	153.899	26.101	0.77
6	LEX/DB25562243	懲役4年	なし	なし	1名	1名	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		48	86.804	-38.804	-1.15
7	LEX/DB25560375	懲役3年6月	なし	なし	3名	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		42	45.612	-3.612	-0.11
8	LEX/DB25547813	2017 懲役5年	2名	2名	なし	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型		60	140.357	-80.357	-2.38
9	LEX/DB25546892	2017 懲役25年	5名以上	1名	なし	なし	傷害: 全治不明	連続強姦・強制わいせつ型		300	246.925	53.075	1.57
10	LEX/DB25560468	2017 懲役3年	なし	なし	5名以上	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		36	94.190	-58.190	-1.72
11	LEX/DB25544801	2016 懲役30年	5名以上	2名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		360	332.282	27.718	0.82
12	LEX/DB25560485	2016 懲役8年	なし	3名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		96	144.878	-48.878	-1.45
13	LEX/DB25542949	2016 懲役13年	2名	なし	3名	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型		156	111.023	44.977	1.33
14	LEX/DB25542246	2016 懲役5年6月	なし	1名	1名	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型		66	61.303	4.697	0.14
15	LEX/DB25542107	2016 懲役17年	2名	なし	5名以上	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型		204	191.833	12.167	0.36
16	LEX/DB25545089	2016 懲役3年6月	なし	なし	5名以上	なし	なし	教師・指導者犯行型	連続強姦・強制わいせつ型	102	98.824	5.176	0.15
17	LEX/DB25542014	2015 懲役20年	2名	1名	5名以上	なし	傷害: 全治不明	連続強姦・強制わいせつ型		240	208.426	31.574	0.94
18	LEX/DB25541874	2015 懲役11年	1名	1名	3名	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型		132	128.973	3.027	0.08
19	LEX/DB25540742	2015 懲役13年	2名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型	拉致・連行犯行型	156	131.889	24.131	0.71
20	LEX/DB25540484 [被告人A]	2015 懲役12年	1名	なし	なし	1名	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		144	129.664	14.336	0.42
21	LEX/DB25540484 [被告人B]	2015 懲役10年	1名	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		120	103.738	16.262	0.48
22	LEX/DB25540837	2015 懲役4年	なし	なし	2名	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		48	20.367	27.633	0.82
23	LEX/DB25447301	2015 懲役4年	なし	なし	1名	2名	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		48	22.261	25.739	0.76
24	LEX/DB25541464	2015 懲役3年	なし	なし	2名	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		36	58.688	-22.688	-0.67
25	LEX/DB25505260	2014 懲役23年	5名以上	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		276	288.074	7.926	0.23
26	LEX/DB25505569	2014 懲役4年6月	1名	なし	1名	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型	拉致・連行犯行型	54	80.403	-26.403	-0.78
27	LEX/DB25504295	2014 懲役13年	5名以上	2名	なし	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型		156	261.994	-105.994	-3.14
28	LEX/DB25504193	2014 懲役3年6月	1名	1名	1名	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型		78	101.648	-23.648	-0.70
29	LEX/DB25504150	2014 懲役7年	2名	なし	なし	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型		84	99.843	-15.843	-0.47
30	LEX/DB25504625	2014 懲役7年	なし	なし	5名以上	1名	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		84	131.084	-47.084	-1.39
31	LEX/DB25504092	2014 懲役13年	なし	なし	5名以上	1名	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		156	165.497	-9.497	-0.28
32	LEX/DB25504089	2014 懲役4年	なし	なし	2名	1名	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		48	64.838	-16.838	-0.50
33	LEX/DB25502396	2013 懲役8年	なし	1名	なし	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型	拉致・連行犯行型	72	60.057	11.943	0.35
34	LEX/DB25501587	2013 懲役25年	2名	2名	5名以上	2名	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		300	310.121	-10.121	-0.30
35	LEX/DB25482770	2012 懲役7年6月	1名	なし	5名以上	1名	なし	連続強姦・強制わいせつ型		90	159.011	-69.011	-2.04
36	LEX/DB25482765	2012 懲役30年	1名	2名	1名	1名	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		360	231.247	128.753	3.81
37	LEX/DB25482751	2012 懲役29年	4名	2名	1名	1名	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		348	257.271	90.729	2.69
38	LEX/DB25482357	2012 懲役11年	1名	1名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型	拉致・連行犯行型	132	125.208	6.792	0.20
39	LEX/DB25482507	2012 懲役20年	1名	1名	4名	1名	なし	連続強姦・強制わいせつ型	幼児性愛型	240	159.703	80.297	2.38
40	LEX/DB25482584	2012 懲役16年	1名	2名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型	集団強姦・強制わいせつ型	192	109.191	82.809	2.45
41	LEX/DB25482295	2012 懲役8年	1名	なし	なし	1名	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		96	66.353	29.647	0.88
42	LEX/DB25482195	2012 懲役3年	なし	2名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型	拉致・連行犯行型	96	69.009	26.991	0.80
43	LEX/DB25482088	2012 懲役16年	2名	なし	2名	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		192	142.193	49.807	1.48
44	LEX/DB25481752	2012 懲役20年	3名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		240	182.677	57.323	1.70
45	LEX/DB25481701	2012 懲役3年6月	なし	1名	1名	1名	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		102	122.158	-20.158	-0.60
46	LEX/DB25481189	2012 懲役8年	なし	2名	1名	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型		72	76.149	-4.149	-0.12
47	LEX/DB25481847	2012 懲役26年	3名	3名	なし	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型		312	274.416	37.584	1.11
48	LEX/DB25480813	2012 懲役22年	3名	2名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		264	278.744	-14.744	-0.44
49	LEX/DB25480580	2012 懲役23年	3名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		276	203.832	72.168	2.14
50	LEX/DB25483484	2012 懲役3年 執行猶予5年	なし	なし	2名	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		36	24.137	11.863	0.35

注1) 判例番号については、便宜上、LEX/DBインターネットから収集した判例は8ケタの数字だけに省略し、裁判所ホームページの裁判例情報から収集した判例は地裁名と判決年月日だけに省略した。
 注2) 標準化残差が0.5以上の場合にはセルをオレンジ色に、-0.5以下の場合にはセルを青色に塗りつぶしている。

図表 17 <連続強姦・強制わいせつ型>の標準化残差の平均値／中央値（その1）

判例番号	判決年	宣告刑	すべての性犯罪の被害者数				犯情が最も重い性犯罪被害結果(傷害)	犯行類型1	犯行類型2	実績値	サンプルスコア	残差	標準化残差
			強姦	強姦未遂	強制わいせつ	強制わいせつ未遂							
51	LEX/DB25482687	懲役4年	なし	なし	3名以上	3名	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		48	90.338	-42.338	-1.25
52	LEX/DB25482708	懲役3年 執行猶予5年	なし	なし	1名	1名	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		36	43.158	-7.158	-0.21
53	LEX/DB25482150	懲役4年6月	なし	なし	1名	1名	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		54	67.157	-13.157	-0.39
54	LEX/DB25481694	懲役2年6月	なし	なし	2名	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		30	39.040	-9.040	-0.27
55	LEX/DB25481761	懲役3年 執行猶予5年	なし	なし	3名	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		36	57.801	-21.801	-0.65
56	LEX/DB25481096	懲役7年	なし	なし	2名	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		84	77.998	6.002	0.18
57	LEX/DB25480380 (判示第17ないし第71の罪)	懲役24年	2名	3名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		288	276.706	11.294	0.33
58	LEX/DB25480380 (判示第82ないし第113の罪)	懲役26年	2名	2名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		312	246.516	65.484	1.94
59	LEX/DB25500360	懲役24年	2名	4名	なし	なし	傷害: 全治1か月以内	連続強姦・強制わいせつ型		288	214.442	73.558	2.18
60	LEX/DB25484217	懲役14年	なし	1名	5名以上	3名	なし	連続強姦・強制わいせつ型		168	128.787	39.213	1.16
61	LEX/DB25470995	懲役7年	2名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型	拉致・連行犯行型	84	132.032	-48.032	-1.42
62	LEX/DB25441784	懲役30年	5名以上	なし	3名	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型	教師・指導者犯行型	360	284.202	75.798	2.25
63	LEX/DB25463005	懲役4年6月	なし	2名	なし	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型		54	88.737	-34.737	-1.03
64	LEX/DB25470376	懲役3年 執行猶予4年	なし	なし	なし	2名	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		36	7.917	28.083	0.83
65	名古屋地判平成21年12月8日 裁判所ウェブサイト	懲役5年以上10年以下	4名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		120	139.936	-19.936	-0.59
66	LEX/DB25441721	懲役5年以上10年以下	4名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		120	125.0329	-5.033	-0.15
67	LEX/DB28145241	懲役18年	3名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		216	185.101	30.899	0.92
68	LEX/DB28145176	懲役5年以上10年以下	3名	1名	4名	1名	傷害: 全治不明	幼児性愛型	連続強姦・強制わいせつ型	120	231.7098	-111.710	-3.31
69	LEX/DB28135057	懲役17年	3名	2名	なし	なし	傷害: 全治1か月以内	連続強姦・強制わいせつ型		204	228.932	-24.932	-0.74
70	LEX/DB28115335	懲役17年	3名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		204	178.969	25.031	0.74
71	LEX/DB28115239	懲役30年	5名以上	5名以上	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		360	256.689	103.311	3.06
72	LEX/DB28135110	懲役20年	5名以上	なし	なし	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型		240	283.149	-43.149	-1.28
73	LEX/DB28135151	懲役7年	なし	2名	なし	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型		84	67.857	16.143	0.48
74	LEX/DB28115074	懲役19年	1名	1名	5名以上	3名	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型	幼児性愛型	228	224.875	3.125	0.09
75	LEX/DB28115130	懲役10年	3名	2名	5名以上	1名	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		120	120.000	0.000	0.00
76	LEX/DB25410615	懲役2年6月 執行猶予4年	なし	なし	1名	1名	なし	連続強姦・強制わいせつ型		30	36.537	-6.537	-0.19
77	LEX/DB28105457	懲役8年	なし	なし	4名	なし	傷害: 全治2週間以内	教師・指導者犯行型	連続強姦・強制わいせつ型	96	60.697	35.303	1.05
78	LEX/DB25410558	懲役20年	1名	2名	3名	なし	傷害: 全治2週間以内	幼児性愛型	連続強姦・強制わいせつ型	240	228.376	11.624	0.34
79	LEX/DB28095302	懲役15年	3名	4名	なし	なし	傷害: 全治1か月以内	連続強姦・強制わいせつ型		180	253.558	-73.558	-2.18
80	LEX/DB28085563	懲役20年	5名以上	5名以上	3名	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		240	324.554	-84.554	-2.50
81	LEX/DB28085414	懲役4年	2名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型	拉致・連行犯行型	48	146.511	-98.511	-2.92
82	LEX/DB28085177	懲役10年	4名	2名	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		120	228.145	-108.145	-3.20
83	LEX/DB28085148	懲役12年	4名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		144	101.615	42.385	1.26
84	LEX/DB28085055	懲役15年	5名以上	5名以上	なし	なし	傷害: 全治不明	連続強姦・強制わいせつ型		180	207.933	-27.933	-0.83
85	LEX/DB28075599	懲役12年	2名	5名以上	なし	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型		144	134.823	9.177	0.27
86	LEX/DB28085227	懲役3年	なし	なし	3名	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型		36	60.435	-24.435	-0.72
87	LEX/DB28075619	懲役7年	なし	なし	5名以上	なし	なし	幼児性愛型	連続強姦・強制わいせつ型	84	101.892	-17.892	-0.53
88	LEX/DB28075118	懲役16年	3名	1名	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型	幼児性愛型	192	238.237	-46.237	-1.37
89	LEX/DB28055331	懲役9年	1名	なし	5名以上	2名	なし	連続強姦・強制わいせつ型		108	110.117	-2.117	-0.06
90	LEX/DB25420443	懲役3年	2名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		36	92.211	-56.211	-1.67
91	LEX/DB27826651	懲役6年	1名	1名	2名	2名	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		72	113.584	-41.584	-1.23
92	LEX/DB28135008	懲役4年6月	1名	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型		54	99.618	-45.618	-1.35
93	LEX/DB28135010	懲役2年	1名	なし	なし	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型		24	28.604	-2.604	-0.08
94	LEX/DB27922038	懲役5年6月	2名	2名	なし	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型		66	133.073	-67.073	-1.99

注1) 判例番号については、便宜上、LEX/DB-インターネットから収集した判例は8ケタの数字だけに省略し、裁判所ホームページの裁判例情報から収集した判例は地裁名と判決年月日だけに省略した。
 注2) 標準化残差が0.5以上の場合にはセルをオレンジ色に、-0.5以下の場合にはセルを青色に塗りつぶしている。

平均	-0.02
標準偏差	1.38
中央値	-0.03
最大値	3.81
最小値	-3.31

図表 18 <連続強姦・強制わいせつ型>の標準化残差の平均値／中央値（その2）

判例番号	判決年	宣告刑	すべての性犯罪の被害者数				犯罪が最も重い性犯罪被害結果(傷害)	犯行類型 ¹	犯行類型 ²	実績値	サンプルスコア	残差	標準化残差
			強姦	強姦未遂	強制わいせつ	強制わいせつ未遂							
1	LEX/DB25562172	2018 懲役4年	1名	なし	なし	なし	なし	拉致・連行犯行型		48	17.345	30.655	0.91
2	LEX/DB25543120	2016 懲役10年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型		120	84.632	35.348	1.05
3	LEX/DB25541269	2015 懲役12年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治1か月以内	拉致・連行犯行型		144	89.733	54.267	1.61
4	LEX/DB25540835	2015 懲役3年	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治不明	拉致・連行犯行型		36	23.159	12.841	0.38
5	LEX/DB25540742	2015 懲役13年	2名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型	拉致・連行犯行型	158	131.889	24.131	0.71
6	LEX/DB25540834	2015 懲役7年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型	集団強姦・強制わいせつ型	84	109.613	-25.613	-0.78
7	LEX/DB25540399	2015 懲役10年	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型		120	98.197	21.803	0.65
8	LEX/DB25506308	2015 懲役11年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型		132	93.801	38.199	1.13
9	LEX/DB25503555	2014 懲役8年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型		96	109.776	-13.776	-0.41
10	LEX/DB25503559	2014 懲役4年6月	1名	なし	1名	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型	拉致・連行犯行型	54	80.403	-26.403	-0.78
11	LEX/DB25505067	2014 懲役6年6月	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型	集団強姦・強制わいせつ型	78	90.530	-12.530	-0.37
12	LEX/DB25505513	2014 懲役10年	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治3か月以内	拉致・連行犯行型		120	93.541	26.459	0.78
13	LEX/DB25504723	2014 懲役7年6月	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型	集団強姦・強制わいせつ型	90	97.127	-7.127	-0.21
14	LEX/DB25503850	2014 懲役8年	なし	1名	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型		72	97.153	-25.153	-0.75
15	LEX/DB25541931	2014 懲役4年	1名	なし	なし	なし	なし	拉致・連行犯行型		48	88.276	-20.276	-0.60
16	LEX/DB25502396	2013 懲役8年	なし	1名	なし	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型	拉致・連行犯行型	72	60.057	11.943	0.35
17	LEX/DB25483142	2012 懲役3年6月	1名	1名	なし	なし	なし	拉致・連行犯行型		42	71.058	-29.058	-0.86
18	LEX/DB25483493	2012 懲役2年4月	なし	1名	なし	なし	なし	拉致・連行犯行型		28	38.118	-8.118	-0.24
19	LEX/DB25483068	2012 懲役10年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型		120	133.461	-13.461	-0.40
20	LEX/DB25482973	2012 懲役4年6月	なし	1名	なし	なし	なし	拉致・連行犯行型		54	42.055	11.945	0.35
21	LEX/DB25482412	2012 懲役3年 執行猶予5年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型		36	61.676	-25.676	-0.78
22	LEX/DB25482357	2012 懲役11年	1名	1名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型	拉致・連行犯行型	132	125.208	6.792	0.20
23	LEX/DB25482581	2012 懲役7年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型		84	71.841	12.159	0.36
24	LEX/DB25482195	2012 懲役8年	なし	2名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型	拉致・連行犯行型	96	69.009	26.991	0.80
25	LEX/DB25482249	2012 懲役6年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型	集団強姦・強制わいせつ型	72	77.368	-5.368	-0.16
26	LEX/DB25481801	2012 懲役8年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型		96	84.489	11.511	0.34
27	LEX/DB25481105	2012 懲役4年6月	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型		54	72.363	-18.363	-0.54
28	LEX/DB25444355	2011 懲役6年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型		72	76.871	-4.871	-0.14
29	LEX/DB25470995	2010 懲役7年	2名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型	拉致・連行犯行型	84	132.032	-49.032	-1.42
30	LEX/DB25460274 (被告人A)	2009 懲役3年 執行猶予5年	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型	集団強姦・強制わいせつ型	36	46.068	-10.068	-0.30
31	LEX/DB25460274 (被告人B)	2009 懲役3年 執行猶予5年	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型	集団強姦・強制わいせつ型	36	53.189	-17.189	-0.51
32	LEX/DB25460274 (被告人C)	2009 懲役3年 執行猶予5年	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型	集団強姦・強制わいせつ型	36	46.068	-10.068	-0.30
33	LEX/DB25460274 (被告人D)	2009 懲役3年 執行猶予5年	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型	集団強姦・強制わいせつ型	36	46.068	-10.068	-0.30
34	LEX/DB25460280	2009 懲役9年10月	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治3か月以内	拉致・連行犯行型		118	134.542	-16.542	-0.49
35	LEX/DB25440723	2009 懲役8年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型	集団強姦・強制わいせつ型	108	84.489	23.511	0.70
36	LEX/DB25440371	2008 懲役4年	1名	なし	なし	なし	なし	拉致・連行犯行型		48	44.682	3.318	0.10
37	名古屋地判平成20年3月11日 裁判所ウェブサイト	2008 懲役4年	1名	なし	なし	なし	なし	拉致・連行犯行型		48	44.682	3.318	0.10
38	LEX/DB28115164	2006 懲役4年6月	1名	なし	なし	なし	なし	拉致・連行犯行型		54	46.251	7.749	0.23
39	LEX/DB25420727	2006 懲役10年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治1か月以内	拉致・連行犯行型		120	87.516	32.484	0.96
40	LEX/DB25410566	2004 懲役2年	なし	なし	1名	なし	なし	拉致・連行犯行型		24	32.774	-8.774	-0.26
41	LEX/DB28085414	2003 懲役4年	2名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型	拉致・連行犯行型	48	146.511	-98.511	-2.92
42	LEX/DB2808546	2003 懲役7年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型		84	111.321	-27.321	-0.81
43	LEX/DB28085279	2002 懲役3年	なし	1名	なし	なし	なし	拉致・連行犯行型		36	34.933	1.067	0.03
44	LEX/DB28075306	2001 懲役4年6月	1名	なし	なし	なし	なし	拉致・連行犯行型		54	60.991	-6.991	-0.21
45	LEX/DB28025279	1997 懲役2年 執行猶予3年	1名	なし	なし	なし	なし	拉致・連行犯行型		24	34.222	-10.222	-0.30

注1) 判例番号については、便宜上、LEX/DBインターネットから収集した判例は8ケタの数字だけに省略し、裁判所ホームページの裁判例情報から収集した判例は地裁名と判決年月日だけに省略した。
注2) 標準化残差が0.5以上の場合にはセルをオレンジ色に、-0.5以下の場合にはセルを青色に塗りつぶしている。

平均	-0.07
標準偏差	0.77
中央値	-0.21
最大値	1.61
最小値	-2.92

図表 19 <拉致・連行犯行型>の標準化残差の平均値／中央値

判例番号	判決年	宣告刑	すべての性犯罪の被害者数				犯情が最も重い性犯罪被害結果(傷害)	犯行類型1	犯行類型2	実績値	サンプルスコア	残差	標準化残差
			強姦	強姦未遂	強制わいせつ	強制わいせつ未遂							
1	LEX/DB25563060	2019 懲役3年 執行猶予4年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		36	49.150	-13.150	-0.39
2	LEX/DB25561976	2018 懲役2年 執行猶予3年	なし	なし	1名	なし	なし	面識ない者犯行型		24	44.963	-20.963	-0.62
3	LEX/DB25561469	2018 懲役2年 執行猶予4年	なし	なし	1名	なし	なし	面識ない者犯行型		24	6.005	17.995	0.53
4	LEX/DB25560470	2017 懲役3年 執行猶予5年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		36	30.687	5.313	0.16
5	LEX/DB25562221	2017 懲役3年 執行猶予4年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		36	16.854	19.146	0.57
6	LEX/DB25544751	2016 懲役3年 執行猶予5年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		36	36.624	-0.624	-0.02
7	LEX/DB25560488	2016 懲役3年 執行猶予5年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		36	48.813	-12.813	-0.38
8	LEX/DB25543652	2016 懲役3年 執行猶予5年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		36	36.787	-0.787	-0.02
9	LEX/DB25544201	2016 懲役2年6月 執行猶予3年	なし	なし	1名	なし	なし	面識ない者犯行型		30	32.774	-2.774	-0.08
10	LEX/DB25544236	2016 懲役3年 執行猶予5年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		36	49.150	-13.150	-0.39
11	LEX/DB25560478	2015 懲役8年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		96	77.368	18.632	0.55
12	LEX/DB25541398 〔被告人A〕	2015 懲役7年	1名	なし	なし	なし	なし	面識ない者犯行型		84	60.991	23.009	0.68
13	LEX/DB25541398 〔被告人B〕	2015 懲役4年	1名	なし	なし	なし	なし	面識ない者犯行型		48	60.991	-12.991	-0.38
14	LEX/DB25540397	2015 懲役3年 執行猶予5年	なし	1名	なし	なし	なし	面識ない者犯行型		36	15.285	20.715	0.61
15	LEX/DB25560475	2015 懲役3年6月	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治6か月以内	面識ない者犯行型		42	61.694	-19.694	-0.58
16	LEX/DB25504337	2014 懲役5年	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		60	58.431	1.569	0.05
17	LEX/DB25505285	2014 懲役3年 執行猶予5年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		36	34.247	1.753	0.05
18	LEX/DB25505045	2014 懲役2年6月	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		30	36.624	-6.624	-0.20
19	LEX/DB25560348	2014 懲役3年 執行猶予5年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		36	29.503	6.497	0.19
20	LEX/DB25562954	2014 懲役3年 執行猶予5年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		36	-2.889	38.889	1.15
21	LEX/DB25504182	2014 懲役8年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		72	61.339	10.661	0.32
22	LEX/DB25504413	2013 懲役8年	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		72	72.837	-0.837	-0.02
23	LEX/DB25503266	2013 懲役5年6月	1名	なし	なし	なし	なし	面識ない者犯行型		66	68.276	-2.276	-0.07
24	LEX/DB25445790	2012 懲役4年	1名	なし	なし	なし	なし	面識ない者犯行型		48	63.361	-15.361	-0.46
25	LEX/DB25483062	2012 懲役3年 執行猶予5年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		36	62.248	-26.248	-0.78
26	LEX/DB25482974	2012 懲役8年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		96	84.652	11.348	0.34
27	LEX/DB25482099	2012 懲役5年	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治6か月以内	面識ない者犯行型		60	65.038	-5.038	-0.15
28	LEX/DB25481099	2012 懲役3年 執行猶予5年	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		36	27.319	8.681	0.26
29	LEX/DB25483206	2012 懲役4年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		48	49.150	-1.150	-0.03
30	LEX/DB25483117	2012 懲役3年 執行猶予5年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		36	56.272	-20.272	-0.60
31	LEX/DB25482683	2012 懲役3年 執行猶予4年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		36	21.721	14.279	0.42
32	LEX/DB25482149	2012 懲役4年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		48	47.581	0.419	0.01
33	LEX/DB25483397	2012 懲役8年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		96	74.413	21.587	0.64
34	LEX/DB25483118 〔判示第4頁、第5頁〕	2012 懲役9年6月	1名	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		114	111.294	2.741	0.08
35	LEX/DB25470407	2011 懲役8年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		108	89.557	18.443	0.55
36	LEX/DB25442308	2010 懲役5年	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		60	45.782	14.218	0.42
37	LEX/DB25441769	2010 懲役9年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		108	114.681	-6.681	-0.20
38	LEX/DB25442644	2010 懲役8年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		96	67.291	28.709	0.85
39	LEX/DB25460272	2009 懲役3年 執行猶予5年	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		36	39.508	-3.508	-0.10
40	LEX/DB25460275	2009 懲役3年 執行猶予5年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治1か月以内	面識ない者犯行型		36	36.152	-0.152	0.00
41	LEX/DB25481144	2008 懲役2年 執行猶予4年	なし	なし	1名	なし	なし	面識ない者犯行型		24	24.083	-0.083	0.00
42	LEX/DB28115334	2006 懲役2年6月	なし	1名	なし	なし	なし	面識ない者犯行型		30	47.694	-17.694	-0.52
43	LEX/DB25450534	2006 懲役1年10月	なし	なし	1名	なし	なし	面識ない者犯行型		22	46.223	-24.223	-0.72
44	LEX/DB28145347	2006 懲役3年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		36	42.453	-6.453	-0.19
45	LEX/DB28115236	2006 懲役3年	なし	なし	なし	1名	傷害: 全治1か月以内	面識ない者犯行型		36	65.515	-29.515	-0.87
46	LEX/DB28105478	2004 懲役4年10月	1名	なし	なし	なし	なし	面識ない者犯行型		58	87.823	-29.823	-0.88
47	LEX/DB28085292	2003 懲役3年6月	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治不明	面識ない者犯行型		42	42.096	-0.096	0.00
48	LEX/DB28085462	2003 懲役7年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	面識ない者犯行型		84	102.631	-18.631	-0.55
49	LEX/DB28085444	2002 懲役2年6月	なし	1名	なし	なし	なし	面識ない者犯行型		30	34.933	-4.933	-0.15
50	LEX/DB25410502	2002 懲役3年 執行猶予5年	1名	なし	なし	なし	なし	面識ない者犯行型		36	1.686	34.314	1.02
51	LEX/DB28135228	2002 懲役1年6月 執行猶予3年	なし	なし	なし	1名	なし	面識ない者犯行型		18	17.288	0.712	0.02
52	LEX/DB28075658	2002 懲役2年 執行猶予5年	なし	なし	1名	なし	なし	面識ない者犯行型		24	25.652	-1.652	-0.05
53	LEX/DB28075502	2002 懲役2年 執行猶予3年	なし	なし	1名	なし	なし	面識ない者犯行型		24	13.126	10.874	0.32
54	LEX/DB28031591	1997 懲役4年6月	2名	なし	なし	なし	なし	面識ない者犯行型		54	99.680	-45.680	-1.35
55	LEX/DB28019011	1992 懲役1年6月 執行猶予3年	なし	1名	なし	なし	なし	面識ない者犯行型		18	7.504	10.496	0.31
56	LEX/DB27921156	1989 懲役2年 執行猶予4年	なし	1名	なし	なし	なし	面識ない者犯行型		24	31.706	-7.706	-0.23

注1) 判例番号については、便宜上、LEX/DB-インターネットから収集した判例は8ケタの数字だけに省略し、裁判所ホームページの裁判例情報から収集した判例は地裁名と判決年月日だけに省略した。
 注2) 標準化残差が0.5以上の場合にはセルをオレンジ色に、-0.5以下の場合にはセルを青色に塗りつぶしている。

平均	-0.02
標準偏差	0.49
中央値	-0.02
最大値	1.15
最小値	-1.35

図表 20 <面識ない者犯行型>の標準化残差の平均値／中央値

＜面識ない者犯行型＞については、＜拉致・連行犯行型＞と同様に、判決年が2015年以降に①が増えている傾向にあり、同年以降、重罰化傾向にあると見ることもできよう。

(4) 飲酒・薬物抗拒不能型

＜飲酒・薬物抗拒不能型＞は、平均値が-0.23、標準偏差が0.32、中央値が-0.24、最大値が0.28、最小値が-0.78であった〔図表21〕。①標準化残差が0.5以上の事例と、②標準化残差が-0.5以下の事例に分類してみると、①は0例、②は1例であった。類型的には、全体の標準化残差の平均値(0.00)、中央(-0.08)からマイナス方向に少し離れ、③標準化残差の平均値 and/or 中央値が-0.3以下の犯行類型に比較的近く、バラツキ具合も小さい。また、＜飲酒・薬物抗拒不能型＞については、標準化残差がマイナスとなる事例が比較的多いことが見て取れる。予測モデル式においても、飲酒状況下での犯行は、刑期を若干軽減することが確認されていることから、＜飲酒・薬物抗拒不能型＞については、＜拉致・連行犯行型＞や＜面識ない者犯行型＞に比べると、その位置づけとして、刑期が低くなる傾向にあるものと解される。

(5) 集団強姦・強制わいせつ型

＜集団強姦・強制わいせつ型＞は、平均値が-0.04、標準偏差が0.54、中央値が-0.23、最大値が2.45、最小値が-0.76であった〔図表22〕。①標準化残差が0.5以上の事例と、②標準化残差が-0.5以下の事例に分類してみると、①は5例、②は2例であった。類型的には、＜拉致・連行犯行型＞、＜面識ない者犯行型＞などと同様に、全体の標準化残差の平均値(0.00)、中央(-0.08)にわりと近似し、バラツキ具合も＜連続強姦・強制わいせつ型＞に比べると小さい(なお、上記3.4.2(5)で確認した【山形地判平成24年7月12日LEX/DB25482584】は、同類型の他の事例と比較しても、外れ値(異常値)であったことがここでは見て取れる)。したがって、＜集団強姦・強制わいせつ型＞も、＜連続強姦・強制わいせつ型＞、＜拉致・連行犯行型＞、＜面識ない者犯行型＞と同様に、予測モデル式の中核に位置する犯行類型であると言える。

＜集団強姦・強制わいせつ型＞についても、標準化残

差がマイナスとなる事例が比較的多い。集団強姦罪などについて、集団犯罪をより重く処罰するべきであるという社会的風潮が形成されたことなどから、2004年の刑法一部改正(平成16年法律第156号)で、強姦罪などの法定刑の下限と比べて1年重罰化されたのであるが、宣告刑に関して言えば、その差は見取れないということになる。したがって、＜集団強姦・強制わいせつ型＞についても、＜拉致・連行犯行型＞や＜面識ない者犯行型＞に比べると、その位置づけとして、刑期が低くなる傾向にあるものと解される。

(6) 勤務先関係者犯行型

＜勤務先関係者犯行型＞は、平均値が-0.06、標準偏差が0.39、中央値が-0.07、最大値が0.71、最小値が-0.67であった〔図表23〕。①標準化残差が0.5以上の事例と、②標準化残差が-0.5以下の事例に分類してみると、①は2例、②は2例であった。類型的には、＜拉致・連行犯行型＞、＜面識ない者犯行型＞、＜集団強姦・強制わいせつ型＞などと同様に、全体の標準化残差の平均値(0.00)、中央(-0.08)にわりと近似し、バラツキ具合は最も小さい。したがって、＜勤務先関係者犯行型＞も、＜連続強姦・強制わいせつ型＞、＜拉致・連行犯行型＞、＜面識ない者犯行型＞と同様に、予測モデル式の中核に位置する犯行類型であると言える。

(7) 性的虐待型

＜性的虐待型＞は、平均値が0.85、標準偏差が1.16、中央値が1.04、最大値が2.95、最小値が-0.96であった〔図表24〕。①標準化残差が0.5以上の事例と、②標準化残差が-0.5以下の事例に分類してみると、①は9例、②は2例であった。類型的には、全体の標準化残差の平均値(0.00)、中央(-0.08)からプラス方向に最も離れており、また、2004年の刑法一部改正(平成16年法律第156号)以降においても①の事例が顕著に多いことから、＜性的虐待型＞は、刑期が加重される傾向にあるものと解される。

(8) 教師・指導者犯行型

＜教師・指導者犯行型＞は、平均値が0.49、標準偏差が0.85、中央値が0.43、最大値が2.53、最小値が-0.92

判例番号	判決年	宣告刑	すべての性犯罪の被害者数				犯情が最も重い性犯罪被害結果(傷害)	犯行類型1	犯行類型2	実績値	サンプルスコア	残差	標準化残差
			強姦	強姦未遂	強制わいせつ	強制わいせつ未遂							
1	LEX/DB25546120	懲役4年	1名	なし	なし	なし	なし	飲酒・薬物抗拒不能型	集団強姦・強制わいせつ型	48	48.506	-0.506	-0.01
2	LEX/DB25545837	懲役3年	1名	なし	なし	なし	なし	飲酒・薬物抗拒不能型	集団強姦・強制わいせつ型	36	49.690	-13.690	-0.41
3	LEX/DB25545636	懲役3年 執行猶予6年	1名	なし	なし	なし	なし	飲酒・薬物抗拒不能型	友人・知人犯行型	36	49.690	-13.690	-0.41
4	LEX/DB25543534	懲役2年6月	1名	なし	なし	なし	なし	飲酒・薬物抗拒不能型		30	45.179	-15.179	-0.45
5	LEX/DB25480585	懲役3年6月	1名	なし	なし	なし	なし	飲酒・薬物抗拒不能型	友人・知人犯行型	42	68.276	-26.276	-0.78
6	LEX/DB28135355 [被告人A]	懲役2年6月	1名	なし	なし	なし	なし	飲酒・薬物抗拒不能型	集団強姦・強制わいせつ型	30	32.531	-2.531	-0.07
7	LEX/DB28135355 [被告人B]	懲役3年6月	1名	なし	なし	なし	なし	飲酒・薬物抗拒不能型	集団強姦・強制わいせつ型	42	32.531	9.469	0.28
8	LEX/DB28105003	懲役14年	3名	なし	なし	なし	なし	飲酒・薬物抗拒不能型	集団強姦・強制わいせつ型	168	166.960	1.040	0.03

注1) 判例番号については、便宜上、LEX/DB-インターネットから収集した判例は8ケタの数字だけに省略し、裁判所ホームページの裁判例情報から収集した判例は地裁名と判決年月日だけに省略した。
注2) 標準化残差が0.5以上の場合はセルをオレンジ色に、-0.5以下の場合にはセルを青色に塗りつぶしている。

平均	-0.23
標準偏差	0.32
中央値	-0.24
最大値	0.28
最小値	-0.78

図表 21 <飲酒・薬物抗拒不能型>の標準化残差の平均値／中央値

判例番号	判決年	宣告刑	すべての性犯罪の被害者数				犯情が最も重い性犯罪被害結果(傷害)	犯行類型1	犯行類型2	実績値	サンプルスコア	残差	標準化残差
			強姦	強姦未遂	強制わいせつ	強制わいせつ未遂							
1	LEX/DB25546120	懲役4年	1名	なし	なし	なし	なし	飲酒・薬物抗拒不能型	集団強姦・強制わいせつ型	48	48.506	-0.506	-0.01
2	LEX/DB25545837	懲役3年	1名	なし	なし	なし	なし	飲酒・薬物抗拒不能型	集団強姦・強制わいせつ型	36	49.690	-13.690	-0.41
3	LEX/DB25544426	懲役2年 執行猶予4年	なし	なし	1名	なし	なし	集団強姦・強制わいせつ型		24	28.367	-4.367	-0.13
4	LEX/DB25541086 [被告人A]	懲役3年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	集団強姦・強制わいせつ型		108	84.489	23.511	0.70
5	LEX/DB25540834	懲役7年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型	集団強姦・強制わいせつ型	84	109.613	-25.613	-0.78
6	LEX/DB25541086	懲役5年以上8年以下	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	集団強姦・強制わいせつ型		96	69.58617	26.414	0.78
7	LEX/DB25505067	懲役8年6月	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型	集団強姦・強制わいせつ型	78	90.530	-12.530	-0.37
8	LEX/DB25504723	懲役7年6月	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型	集団強姦・強制わいせつ型	90	97.127	-7.127	-0.21
9	LEX/DB25482584	懲役16年	1名	2名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型	集団強姦・強制わいせつ型	192	109.191	82.809	2.45
10	LEX/DB25482249	懲役8年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型	集団強姦・強制わいせつ型	72	77.368	-5.368	-0.16
11	LEX/DB25482153	懲役4年	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	集団強姦・強制わいせつ型	友人・知人犯行型	48	35.271	12.729	0.38
12	LEX/DB25483118 [被告人A] (強姦未遂・強姦の罪)	懲役11年	1名	1名	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	集団強姦・強制わいせつ型		132	139.789	-7.789	-0.23
13	LEX/DB25460274 [被告人A]	懲役3年	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型	集団強姦・強制わいせつ型	36	46.068	-10.068	-0.30
14	LEX/DB25460274 [被告人B]	懲役3年 執行猶予5年	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型	集団強姦・強制わいせつ型	36	53.189	-17.189	-0.51
15	LEX/DB25460274 [被告人C]	懲役3年 執行猶予5年	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型	集団強姦・強制わいせつ型	36	46.068	-10.068	-0.30
16	LEX/DB25460274 [被告人D]	懲役3年 執行猶予5年	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型	集団強姦・強制わいせつ型	36	46.068	-10.068	-0.30
17	LEX/DB25440723	懲役9年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	拉致・連行犯行型	集団強姦・強制わいせつ型	108	84.489	23.511	0.70
18	LEX/DB25421075	懲役2年6月 執行猶予4年	なし	1名	なし	なし	なし	集団強姦・強制わいせつ型	友人・知人犯行型	30	27.151	2.849	0.08
19	LEX/DB28135355 [被告人A]	懲役2年6月	1名	なし	なし	なし	なし	飲酒・薬物抗拒不能型	集団強姦・強制わいせつ型	30	32.531	-2.531	-0.07
20	LEX/DB28135355 [被告人B]	懲役3年6月	1名	なし	なし	なし	なし	飲酒・薬物抗拒不能型	集団強姦・強制わいせつ型	42	32.531	9.469	0.28
21	LEX/DB25450070 [被告人A]	懲役2年	なし	1名	なし	なし	なし	集団強姦・強制わいせつ型		24	34.436	-10.436	-0.31
22	LEX/DB25450070 [被告人B]	懲役2年	なし	1名	なし	なし	なし	集団強姦・強制わいせつ型		24	34.436	-10.436	-0.31
23	LEX/DB25450070 [被告人C]	懲役2年	なし	1名	なし	なし	なし	集団強姦・強制わいせつ型		24	34.436	-10.436	-0.31
24	LEX/DB25450070 [被告人D]	懲役2年	なし	1名	なし	なし	なし	集団強姦・強制わいせつ型		24	34.436	-10.436	-0.31
25	LEX/DB28105003	懲役14年	3名	なし	なし	なし	なし	飲酒・薬物抗拒不能型	集団強姦・強制わいせつ型	168	166.960	1.040	0.03
26	LEX/DB28075476 [被告人A]	懲役3年6月	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	集団強姦・強制わいせつ型	友人・知人犯行型	42	57.720	-15.720	-0.47
27	LEX/DB28075476 [被告人B]	懲役4年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	集団強姦・強制わいせつ型	友人・知人犯行型	48	57.720	-9.720	-0.29
28	LEX/DB28075476 [被告人C]	懲役3年6月	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	集団強姦・強制わいせつ型	友人・知人犯行型	42	57.720	-15.720	-0.47
29	LEX/DB28075649	懲役2年 執行猶予4年	1名	なし	なし	なし	なし	集団強姦・強制わいせつ型	友人・知人犯行型	36	44.543	-8.543	-0.25
30	LEX/DB28075764	懲役2年 執行猶予4年	なし	1名	なし	なし	なし	集団強姦・強制わいせつ型	友人・知人犯行型	24	31.706	-7.706	-0.23
31	LEX/DB28065280	懲役3年 執行猶予4年	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治3か月以内	集団強姦・強制わいせつ型	友人・知人犯行型	36	45.917	-9.917	-0.29
32	LEX/DB28065206	懲役3年6月	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	集団強姦・強制わいせつ型		42	42.817	-0.817	-0.02
33	LEX/DB28015158 [被告人A]	懲役7年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	集団強姦・強制わいせつ型		84	91.774	-7.774	-0.23
34	LEX/DB28015158 [被告人B]	懲役7年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	集団強姦・強制わいせつ型		84	91.774	-7.774	-0.23
35	LEX/DB28015158 [被告人C]	懲役7年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	集団強姦・強制わいせつ型		84	91.774	-7.774	-0.23
36	LEX/DB28025103 [被告人A]	懲役2年	なし	なし	1名	なし	なし	集団強姦・強制わいせつ型		24	6.005	17.995	0.53
37	LEX/DB28025103 [被告人B]	懲役1年	なし	なし	1名	なし	なし	集団強姦・強制わいせつ型		12	6.005	5.995	0.18
38	LEX/DB28019013	懲役2年 執行猶予4年 懲役1年6月 執行猶予5年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	集団強姦・強制わいせつ型		36	51.732	-15.732	-0.47
39	LEX/DB28019013	懲役2年 執行猶予5年	なし	1名	なし	なし	なし	集団強姦・強制わいせつ型		18	2.013	15.987	0.47

注1) 判例番号については、便宜上、LEX/DB-インターネットから収集した判例は8ケタの数字だけに省略し、裁判所ホームページの裁判例情報から収集した判例は地裁名と判決年月日だけに省略した。
注2) 標準化残差が0.5以上の場合はセルをオレンジ色に、-0.5以下の場合にはセルを青色に塗りつぶしている。

平均	-0.04
標準偏差	0.54
中央値	-0.23
最大値	2.45
最小値	-0.78

図表 22 <集団強姦・強制わいせつ型>の標準化残差の平均値／中央値

判例番号	判決年	宣告刑	すべての性犯罪の被害者数				犯情が最も重い性犯罪被害結果(傷害)	犯行類型1	犯行類型2	実績値	サンプルスコア	残差	標準化残差
			強姦	強姦未遂	強制わいせつ	強制わいせつ未遂							
1 LEX/DB25561948 [被告人A]	2018	懲役1年6月 執行猶予3年	なし	なし	1名	なし	なし	勤務先関係者犯行型		18	25.652	-7.652	-0.23
2 LEX/DB25561948 [被告人B]	2018	懲役1年6月 執行猶予3年	なし	なし	1名	なし	なし	勤務先関係者犯行型		18	25.652	-7.652	-0.23
3 LEX/DB25547038	2017	懲役5年	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	勤務先関係者犯行型		60	74.022	-14.022	-0.42
4 LEX/DB25546109	2017	懲役4年	1名	なし	なし	なし	なし	勤務先関係者犯行型		48	48.343	-0.343	-0.01
5 LEX/DB25505734	2015	懲役2年	なし	なし	1名	なし	なし	勤務先関係者犯行型		24	16.962	7.038	0.21
6 LEX/DB25504890	2014	懲役10月 執行猶予2年	なし	なし	1名	なし	なし	勤務先関係者犯行型		10	32.774	-22.774	-0.67
7 LEX/DB25483210	2012	懲役2年	なし	1名	なし	なし	なし	勤務先関係者犯行型		24	26.242	-2.242	-0.07
8 LEX/DB25483393	2012	懲役13年	2名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	勤務先関係者犯行型		156	131.869	24.131	0.71
9 LEX/DB25473565	2010	懲役4年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	勤務先関係者犯行型		48	47.581	0.419	0.01
10 LEX/DB28145220	2007	懲役2年6月 執行猶予3年	なし	1名	なし	なし	なし	勤務先関係者犯行型		30	11.339	18.661	0.55
11 LEX/DB28105230	2005	懲役3年4月	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	勤務先関係者犯行型		40	49.740	-9.740	-0.29
12 LEX/DB25410659	2005	懲役1年	なし	なし	1名	なし	なし	勤務先関係者犯行型		12	11.434	0.566	0.02
13 LEX/DB28115376	2005	懲役1年10月 執行猶予3年	なし	なし	1名	なし	なし	勤務先関係者犯行型		22	6.005	15.995	0.47
14 LEX/DB28105104	2004	懲役1年 執行猶予3年	なし	1名	なし	なし	なし	勤務先関係者犯行型		12	24.422	-12.422	-0.37
15 LEX/DB25410588	2004	懲役1年 執行猶予3年	なし	なし	1名	なし	なし	勤務先関係者犯行型		12	32.774	-20.774	-0.62
16 LEX/DB28085728	2003	懲役1年 執行猶予3年	なし	なし	1名	なし	なし	勤務先関係者犯行型		12	24.083	-12.083	-0.36
17 LEX/DB28045193	1999	懲役2年	なし	1名	なし	なし	なし	勤務先関係者犯行型		24	15.285	8.715	0.26

注1) 判例番号については、便宜上、LEX/DBインターネットから収集した判例は8ケタの数字だけに省略し、裁判所ホームページの裁判情報から収集した判例は地裁名と判決年月日だけに省略した。
注2) 標準化残差が0.5以上の場合にはセルをオレンジ色に、-0.5以下の場合にはセルを青色に塗りつぶしている。

平均	-0.08
標準偏差	0.39
中央値	-0.07
最大値	0.71
最小値	-0.67

図表 23 <勤務先関係者犯行型>の標準化残差の平均値／中央値

判例番号	判決年	宣告刑	すべての性犯罪の被害者数				犯情が最も重い性犯罪被害結果(傷害)	犯行類型1	犯行類型2	実績値	サンプルスコア	残差	標準化残差
			強姦	強姦未遂	強制わいせつ	強制わいせつ未遂							
1 LEX/DB25545065	2017	懲役10年	1名	なし	なし	なし	なし	性的虐待型		120	52.301	67.699	2.01
2 LEX/DB25505512	2014	懲役10年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	性的虐待型		120	84.489	35.511	1.05
3 LEX/DB25506190	2014	懲役1年6月	なし	なし	1名	なし	なし	性的虐待型		18	32.774	-14.774	-0.44
4 LEX/DB25504574	2014	懲役7年	なし	なし	1名	なし	なし	性的虐待型		84	32.774	51.226	1.52
5 LEX/DB25483049	2012	懲役3年 執行猶予5年	なし	1名	なし	なし	なし	性的虐待型		36	18.056	17.944	0.53
6 LEX/DB25482650 [被告人A]	2012	懲役13年	1名	なし	1名	なし	なし	性的虐待型	幼児性愛型	156	73.119	82.881	2.46
7 LEX/DB25482650 [被告人B]	2012	懲役4年	1名	なし	1名	なし	なし	性的虐待型		48	80.240	-32.240	-0.96
8 LEX/DB25444428	2011	懲役9年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	性的虐待型		108	111.321	-3.321	-0.10
9 LEX/DB25480451	2011	懲役1年6月	なし	なし	1名	なし	なし	性的虐待型		18	44.963	-26.963	-0.80
10 LEX/DB25470356	2010	懲役11年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	性的虐待型		132	83.103	48.897	1.45
11 LEX/DB25442060	2009	懲役14年	1名	なし	なし	なし	なし	性的虐待型		168	68.276	99.724	2.95
12 LEX/DB25542341	2008	懲役12年	1名	なし	1名	なし	なし	性的虐待型		144	102.380	41.620	1.23
13 LEX/DB28095087	2003	懲役8年	1名	なし	なし	なし	なし	性的虐待型		96	60.991	35.009	1.04
14 LEX/DB28075626	2002	懲役5年	1名	なし	なし	なし	なし	性的虐待型		60	60.991	-0.991	-0.03

注1) 判例番号については、便宜上、LEX/DBインターネットから収集した判例は8ケタの数字だけに省略し、裁判所ホームページの裁判情報から収集した判例は地裁名と判決年月日だけに省略した。
注2) 標準化残差が0.5以上の場合にはセルをオレンジ色に、-0.5以下の場合にはセルを青色に塗りつぶしている。

平均	0.85
標準偏差	1.16
中央値	1.04
最大値	2.95
最小値	-0.98

図表 24 <性的虐待型>の標準化残差の平均値／中央値

であった〔図表 25〕。❶標準化残差が 0.5 以上の事例と、❷標準化残差が-0.5 以下の事例に分類してみると、❶は 10 例、❷は 2 例であった。典型的には、＜性的虐待型＞と同様に、全体の標準化残差の平均値（0.00）、中央（-0.08）からプラス方向に離れており、また、2004 年の刑法一部改正（平成 16 年法律第 156 号）以降においても❶の事例が顕著に多いことから、＜教師・指導者犯行型＞も、典型的に刑期が加重される傾向にあるものと解される。

（9）幼児性愛型

＜幼児性愛型＞は、平均値が 0.27、標準偏差が 0.94、中央値が 0.14、最大値が 2.46、最小値が-1.37 であった〔図表 26〕。❶標準化残差が 0.5 以上の事例と、❷標準化残差が-0.5 以下の事例に分類してみると、❶は 13 例、❷は 8 例であった（なお、❷のうち 1 例については、2004 年の刑法一部改正（平成 16 年法律第 156 号）前の事案（併合罪加重の上限が 20 年）であることが影響したものと考えられる）。典型的には、全体の標準化残差の平均値（0.00）、中央（-0.08）からプラス方向に少し離

判例番号	判決年	宣告刑	すべての性犯罪の被害者数				犯情が最も重い性犯罪被害結果(被害)	犯行類型1	犯行類型2	実績値	サンプルスコア	残差	標準化残差
			強姦	強姦未遂	強制わいせつ	強制わいせつ未遂							
1	LEX/DB25560152	2018 懲役4年	なし	なし	5名以上	なし	なし	教師・指導者犯行型	幼児性愛型	48	51.382	-3.382	-0.10
2	LEX/DB25548411	2017 懲役15年	なし	なし	5名以上	なし	なし	教師・指導者犯行型	幼児性愛型	180	136.590	43.410	1.29
3	LEX/DB254449057	2017 懲役15年	なし	なし	5名以上	なし	なし	教師・指導者犯行型	幼児性愛型	180	121.948	58.052	1.72
4	LEX/DB25547040	2017 懲役10年	なし	なし	5名以上	なし	なし	教師・指導者犯行型	幼児性愛型	120	134.042	-14.042	-0.42
5	LEX/DB25545635	2017 懲役1年6月 執行猶予3年	なし	なし	1名	なし	なし	教師・指導者犯行型		18	0.640	17.360	0.51
6	LEX/DB25544984	2016 懲役7年	1名	なし	なし	なし	なし	教師・指導者犯行型		84	60.991	23.009	0.68
7	LEX/DB25544857	2016 懲役7年	なし	なし	5名以上	なし	なし	教師・指導者犯行型	幼児性愛型	84	51.382	32.618	0.97
8	LEX/DB25543211	2016 懲役1年2月 執行猶予3年	なし	なし	1名	なし	なし	教師・指導者犯行型		14	13.126	0.874	0.03
9	LEX/DB25542684	2016 懲役11年	なし	なし	5名以上	なし	なし	教師・指導者犯行型	幼児性愛型	132	96.824	35.176	1.04
10	LEX/DB25545089	2016 懲役8年6月	なし	なし	5名以上	なし	なし	教師・指導者犯行型	連続強姦・強制わいせつ型	102	96.824	5.176	0.15
11	LEX/DB25505117	2014 懲役3年 執行猶予5年	なし	1名	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	教師・指導者犯行型		36	58.032	-22.032	-0.65
12	LEX/DB25504086	2014 懲役5年	なし	1名	1名	なし	なし	教師・指導者犯行型		60	45.491	14.509	0.43
13	LEX/DB25502639	2013 懲役5年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治不明	教師・指導者犯行型		60	43.853	16.147	0.48
14	LEX/DB25502130	2013 懲役2年2月 執行猶予3年	なし	なし	2名	なし	なし	教師・指導者犯行型		26	33.621	-7.621	-0.23
15	LEX/DB25500971	2013 懲役3年6月	なし	なし	4名	なし	なし	教師・指導者犯行型		42	45.890	-3.890	-0.12
16	LEX/DB25483144	2012 懲役2年4月	なし	なし	1名	なし	なし	教師・指導者犯行型	幼児性愛型	28	37.841	-9.841	-0.29
17	LEX/DB25482514	2012 懲役3年6月	なし	なし	1名	なし	なし	教師・指導者犯行型	幼児性愛型	42	24.083	17.917	0.53
18	LEX/DB25471160	2011 懲役18年	2名	なし	なし	なし	なし	教師・指導者犯行型		216	130.511	85.489	2.53
19	LEX/DB25441784	2009 懲役30年	5名以上	なし	3名	なし	なし	連続強姦・強制わいせつ型	教師・指導者犯行型	360	284.202	75.798	2.25
20	LEX/DB28115256	2008 懲役2年 執行猶予5年	なし	なし	1名	なし	なし	教師・指導者犯行型	幼児性愛型	24	54.914	-30.914	-0.92
21	LEX/DB28105457	2004 懲役3年	なし	なし	4名	なし	傷害: 全治2週間以内	教師・指導者犯行型	連続強姦・強制わいせつ型	96	60.697	35.303	1.05
22	LEX/DB28085402	2003 懲役2年6月 執行猶予3年	なし	なし	1名	なし	なし	教師・指導者犯行型		30	25.652	4.348	0.13
23	LEX/DB28075585	2001 懲役2年	なし	なし	1名	なし	なし	教師・指導者犯行型	幼児性愛型	24	16.962	7.038	0.21

注1) 判例番号については、便宜上、LEX/DB/インターネットから収集した判例は8ケタの数字だけに省略し、裁判所ホームページの裁判情報から収集した判例は地裁名と判決年月日だけに省略した。
注2) 標準化残差が0.5以上の場合はセルをオレンジ色に、-0.5以下の場合はセルを青色に塗りつぶしている。

平均	0.48
標準偏差	0.35
中央値	0.43
最大値	2.53
最小値	-0.92

図表 25 ＜教師・指導者犯行型＞の標準化残差の平均値／中央値

れ、③標準化残差の平均値 and/or 中央値が 0.3 以上の犯行類型に比較的近い（ただ、多少のバラツキ具合が見られる）。また、2004 年の刑法一部改正（平成 16 年法律第 156 号）以降においても①の事例が顕著に多いことから、＜幼児性愛型＞については、＜性的虐待型＞、＜教師・指導者犯行型＞と同様に、類型的に刑期が加重される傾向にあるものと解される。

（10）配偶者・交際相手犯行型

＜配偶者・交際相手犯行型＞は、平均値が-0.63、標準偏差が 0.75、中央値が-0.94、最大値が 0.68、最小値が-1.56 であった〔図表 27〕。①標準化残差が 0.5 以上の事例と、②標準化残差が-0.5 以下の事例に分類してみると、①は 1 例、②は 7 例であった。類型的には、全体の標準化残差の平均値（0.00）、中央（-0.08）からマイナス方向に最も離れており、また、2004 年の刑法一部改正（平成 16 年法律第 156 号）以降においても②の事例が顕著に多いことから、＜配偶者・交際相手犯行型＞は、類型的に刑期が軽減される傾向にあるものと解される。

（11）対知的障害者犯行型

＜対知的障害者犯行型＞は、平均値が-0.32、標準偏差が 0.73、中央値が-0.78、最大値が 0.71、最小値が-0.90 であった〔図表 28〕。①標準化残差が 0.5 以上の事例と、②標準化残差が-0.5 以下の事例に分類してみると、①は 1 例、②は 2 例であった。該当事例がわずか 3 例であり、バラツキも多少あるので、そのことに留意し、慎重に分析することが前提であるが、類型的には、＜配偶者・交際相手犯行型＞と同様に、全体の標準化残差の平均値（0.00）、中央（-0.08）からマイナス方向に離れていることから、＜対知的障害者犯行型＞も、類型的に刑期が軽減される傾向にあるものと解される。

（12）友人・知人犯行型

＜友人・知人犯行型＞は、平均値が-0.29、標準偏差が 0.43、中央値が-0.37、最大値が 0.81、最小値が-0.96 であった〔図表 29〕。①標準化残差が 0.5 以上の事例と、②標準化残差が-0.5 以下の事例に分類してみると、①は 2 例、②は 6 例であった。①の事例はいずれも執行猶予に

判例番号	判決年	宣告刑	すべての性犯罪の被害者数				犯情が最も重い性犯罪被害結果(傷害)	犯行類型1	犯行類型2	実績値	サンプルスコア	残差	標準化残差
			強姦	強姦未遂	強制わいせつ	強制わいせつ未遂							
1	LEX/DB25563152	2019 懲役3年6月	1名	なし	なし	なし	なし	幼児性愛型		42	34222	7.778	0.23
2	LEX/DB25564141	2019 懲役11年	1名	なし	3名	なし	なし	幼児性愛型		132	133.025	-1.025	-0.03
3	LEX/DB25561082	2018 懲役5年	2名	なし	なし	なし	なし	幼児性愛型		60	84.692	-24.692	-0.73
4	LEX/DB25560152	2018 懲役4年	なし	なし	5名以上	なし	なし	教師・指導者犯行型	幼児性愛型	48	51.382	-3.382	-0.10
5	LEX/DB25549411	2017 懲役15年	なし	なし	5名以上	なし	なし	教師・指導者犯行型	幼児性愛型	180	136.590	43.410	1.29
6	LEX/DB25449057	2017 懲役15年	なし	なし	5名以上	なし	なし	教師・指導者犯行型	幼児性愛型	180	121.948	58.052	1.72
7	LEX/DB25547124	2017 懲役5年	なし	なし	2名	なし	なし	幼児性愛型		60	16.179	43.821	1.30
8	LEX/DB25547040	2017 懲役10年	なし	なし	5名以上	なし	なし	教師・指導者犯行型	幼児性愛型	120	134.042	-14.042	-0.42
9	LEX/DB25546811	2017 懲役3年	なし	なし	2名	なし	なし	幼児性愛型		36	40.666	-4.666	-0.14
10	LEX/DB25547886	2017 懲役2年6月執行猶予3年	なし	なし	1名	なし	なし	幼児性愛型		30	40.058	-10.058	-0.30
11	LEX/DB25543870	2016 懲役3年執行猶予5年	1名	なし	1名	なし	なし	幼児性愛型		36	53.471	-17.471	-0.52
12	LEX/DB25448250	2016 懲役2年6月執行猶予3年	なし	なし	2名	なし	傷害:全治2週間以内	幼児性愛型		30	69.308	-39.308	-1.16
13	LEX/DB25544857	2016 懲役7年	なし	なし	5名以上	なし	なし	教師・指導者犯行型	幼児性愛型	84	51.382	32.618	0.97
14	LEX/DB25542684	2016 懲役11年	なし	なし	5名以上	なし	なし	教師・指導者犯行型	幼児性愛型	132	96.824	35.176	1.04
15	LEX/DB25542007	2015 懲役7年	2名	なし	なし	なし	なし	幼児性愛型		84	108.534	-24.534	-0.73
16	LEX/DB25540836	2015 懲役3年執行猶予5年	なし	1名	なし	なし	なし	幼児性愛型		36	33.364	2.636	0.08
17	LEX/DB25540508	2015 懲役14年	なし	1名	なし	なし	傷害:全治2週間以内	幼児性愛型		168	105.319	62.681	1.86
18	LEX/DB25504326	2014 懲役2年4月	なし	なし	1名	なし	なし	幼児性愛型		28	-12.669	40.669	1.20
19	LEX/DB25504339	2014 懲役11年	なし	なし	なし	1名	傷害:全治6か月以内	幼児性愛型		132	107.268	24.732	0.73
20	LEX/DB25446354	2014 懲役5年6月	なし	なし	2名	なし	傷害:全治2週間以内	幼児性愛型		66	43.785	22.215	0.66
21	LEX/DB25482507	2012 懲役20年	1名	1名	4名	1名	なし	連続強姦・強制わいせつ型	幼児性愛型	240	159.703	80.297	2.38
22	LEX/DB25482258	2012 懲役4年6月	1名	なし	なし	なし	なし	幼児性愛型		54	34.222	19.778	0.59
23	LEX/DB25482650 (被告人A)	2012 懲役13年	1名	なし	1名	なし	なし	性的虐待型	幼児性愛型	156	73.119	82.881	2.46
24	LEX/DB25483144	2012 懲役2年4月	なし	なし	1名	なし	なし	教師・指導者犯行型	幼児性愛型	28	37.841	-9.841	-0.29
25	LEX/DB25481691	2012 懲役5年6月	なし	なし	1名	なし	傷害:全治2週間以内	幼児性愛型		66	49.150	16.850	0.50
26	LEX/DB25482514	2012 懲役3年6月	なし	なし	1名	なし	なし	教師・指導者犯行型	幼児性愛型	42	24.083	17.917	0.53
27	LEX/DB25464057	2010 懲役6年6月	1名	なし	なし	なし	なし	幼児性愛型		78	61.154	16.846	0.50
28	LEX/DB25460279	2008 懲役8年	1名	なし	なし	なし	傷害:全治2週間以内	幼児性愛型		96	89.557	6.443	0.19
29	LEX/DB28115074	2005 懲役12年	1名	1名	5名以上	3名	傷害:全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型	幼児性愛型	228	224.875	3.125	0.09
30	LEX/DB28115256	2005 懲役2年執行猶予5年	なし	なし	1名	なし	なし	教師・指導者犯行型	幼児性愛型	24	54.914	-30.914	-0.92
31	LEX/DB28095169	2002 懲役2年6月執行猶予5年	なし	なし	1名	なし	なし	幼児性愛型		30	32.774	-2.774	-0.08
32	LEX/DB28075118	2001 懲役16年	3名	1名	1名	なし	傷害:全治2週間以内	連続強姦・強制わいせつ型	幼児性愛型	192	238.237	-46.237	-1.37
33	LEX/DB28075585	2001 懲役2年	なし	なし	1名	なし	なし	教師・指導者犯行型	幼児性愛型	24	16.962	7.038	0.21
34	LEX/DB28055348	1999 懲役2年6月	なし	なし	2名	なし	なし	幼児性愛型		30	49.596	-19.596	-0.58
35	LEX/DB28025223	1996 懲役1年6月執行猶予3年	なし	なし	1名	なし	なし	幼児性愛型		18	32.774	-14.774	-0.44
36	LEX/DB28025162	1996 懲役2年6月	なし	なし	1名	1名	なし	幼児性愛型		30	63.306	-33.306	-0.99

注1) 判例番号については、便宜上、LEX/DBインターネットから収集した判例は8ケタの数字だけに省略し、裁判所ホームページの裁判情報から収集した判例は地裁名と判決年月日だけに省略した。
 注2) 標準化残差が0.5以上の場合にはセルをオレンジ色に、-0.5以下の場合にはセルを青色に塗りつぶしている。

平均	0.27
標準偏差	0.94
中央値	0.14
最大値	2.46
最小値	-1.37

図表 26 <幼児性愛型>の標準化残差の平均値／中央値

判例番号	判決年	宣告刑	すべての性犯罪の被害者数				犯情が最も重い性犯罪被害結果(傷害)	犯行類型1	犯行類型2	実績値	サンプルスコア	残差	標準化残差
			強姦	強姦未遂	強制わいせつ	強制わいせつ未遂							
1	LEX/DB25546828	2017 懲役7年	1名	なし	なし	なし	なし	配偶者・交際相手犯行型		84	60.991	23.009	0.68
2	LEX/DB25506249	2015 懲役4年	1名	なし	なし	なし	なし	配偶者・交際相手犯行型		48	78.994	-30.994	-0.92
3	LEX/DB25560351	2014 懲役3年	なし	なし	1名	なし	傷害:全治2週間以内	配偶者・交際相手犯行型		36	21.598	14.402	0.43
4	LEX/DB25540695	2014 懲役3年執行猶予5年	なし	なし	1名	なし	なし	配偶者・交際相手犯行型		36	33.958	2.042	0.06
5	LEX/DB25445946	2013 懲役3年	1名	なし	なし	なし	なし	配偶者・交際相手犯行型		36	81.110	-45.110	-1.34
6	LEX/DB25502254	2012 懲役4年6月	1名	なし	なし	なし	傷害:全治2週間以内	配偶者・交際相手犯行型		54	85.837	-31.837	-0.94
7	LEX/DB25481712	2012 懲役5年	1名	なし	なし	なし	なし	配偶者・交際相手犯行型		60	112.615	-52.615	-1.56
8	LEX/DB28095416	2004 懲役2年6月	1名	なし	なし	なし	なし	配偶者・交際相手犯行型		30	27.547	2.453	0.07
9	LEX/DB28085167	2002 懲役3年	1名	なし	なし	なし	傷害:全治2週間以内	配偶者・交際相手犯行型		36	77.368	-41.368	-1.23
10	LEX/DB28085062	2002 懲役2年8月	1名	なし	なし	なし	なし	配偶者・交際相手犯行型		32	64.490	-32.490	-0.96
11	神戸地判平成14年11月22日 裁判所ウェブサイト	2002 懲役3年6月	1名	なし	なし	なし	傷害:全治2週間以内	配偶者・交際相手犯行型		42	84.489	-42.489	-1.26

注1) 判例番号については、便宜上、LEX/DBインターネットから収集した判例は8ケタの数字だけに省略し、裁判所ホームページの裁判情報から収集した判例は地裁名と判決年月日だけに省略した。
 注2) 標準化残差が0.5以上の場合にはセルをオレンジ色に、-0.5以下の場合にはセルを青色に塗りつぶしている。

平均	-0.63
標準偏差	0.75
中央値	-0.94
最大値	0.68
最小値	-1.56

図表 27 <配偶者・交際相手犯行型>の標準化残差の平均値／中央値

判例番号	判決年	宣告刑	すべての性犯罪の被害者数				犯情が最も重い性犯罪被害結果(傷害)	犯行類型1	犯行類型2	実績値	サンプルスコア	残差	標準化残差
			強姦	強姦未遂	強制わいせつ	強制わいせつ未遂							
1	LEX/DB25482424	2012 懲役5年	なし	1名	なし	なし	なし	幼児性愛型	対知的障害者犯行型	60	35.944	24.056	0.71
2	LEX/DB28085215	2004 懲役4年6月	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	対知的障害者犯行型		54	84.489	-30.489	-0.90
3	LEX/DB28075323	2001 懲役3年6月	1名	なし	なし	なし	なし	対知的障害者犯行型		42	68.276	-26.276	-0.78

注1) 判例番号については、便宜上、LEX/DB-インターネットから収集した判例は8ケタの数字だけに省略し、裁判所ホームページの裁判情報から収集した判例は地裁名と判決年月日だけに省略した。
 注2) 標準化残差が0.5以上の場合にはセルをオレンジ色に、-0.5以下の場合にはセルを青色に塗りつぶしている。

平均	-0.32
標準偏差	0.73
中央値	-0.78
最大値	0.71
最小値	-0.80

図表 28 <対知的障害者犯行型>の標準化残差の平均値／中央値

判例番号	判決年	宣告刑	すべての性犯罪の被害者数				犯情が最も重い性犯罪被害結果(傷害)	犯行類型1	犯行類型2	実績値	サンプルスコア	残差	標準化残差
			強姦	強姦未遂	強制わいせつ	強制わいせつ未遂							
1	LEX/DB25549584	2018 懲役1年6月 執行猶予3年	なし	なし	1名	なし	なし	友人・知人犯行型		18	21.310	-3.310	-0.10
2	LEX/DB25545636	2017 懲役3年 執行猶予5年	1名	なし	なし	なし	なし	飲酒・薬物抗拒不能型	友人・知人犯行型	36	49.690	-13.690	-0.41
3	LEX/DB25546826	2017 懲役3年6月	1名	なし	なし	なし	なし	友人・知人犯行型		42	48.343	-6.343	-0.19
4	LEX/DB25543554	2016 懲役4年	1名	なし	なし	なし	なし	SNS犯行型	友人・知人犯行型	48	59.585	-11.585	-0.34
5	LEX/DB25542791	2016 懲役3年6月	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治1か月以内	友人・知人犯行型		42	59.716	-17.716	-0.52
6	LEX/DB25540417	2015 懲役3年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治1か月以内	友人・知人犯行型		36	50.436	-14.436	-0.43
7	LEX/DB25505335	2014 懲役3年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	友人・知人犯行型		36	68.461	-32.461	-0.96
8	LEX/DB25482153	2012 懲役4年	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	集団強姦・強制わいせつ型	友人・知人犯行型	48	35.271	12.729	0.38
9	LEX/DB25481703	2012 懲役4年	1名	なし	1名	なし	なし	友人・知人犯行型		48	71.550	-23.550	-0.70
10	LEX/DB25480585	2012 懲役3年6月	1名	なし	なし	なし	なし	飲酒・薬物抗拒不能型	友人・知人犯行型	42	68.276	-26.276	-0.78
11	LEX/DB25483121	2012 懲役4年6月	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	友人・知人犯行型		54	70.454	-16.454	-0.48
12	LEX/DB25482572	2012 懲役2年	なし	なし	1名	なし	なし	友人・知人犯行型		24	40.058	-16.058	-0.48
13	LEX/DB25442168	2010 懲役3年 執行猶予3年	なし	なし	1名	なし	傷害: 全治2週間以内	友人・知人犯行型		36	8.679	27.321	0.81
14	LEX/DB25421075	2007 懲役2年6月 執行猶予4年	なし	1名	なし	なし	なし	集団強姦・強制わいせつ型	友人・知人犯行型	30	27.151	2.849	0.08
15	LEX/DB28115350	2006 懲役3年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	友人・知人犯行型		72	104.200	-32.200	-0.95
16	LEX/DB28135384	2003 懲役3年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	友人・知人犯行型		36	52.193	-16.193	-0.48
17	LEX/DB28085644	2003 懲役1年8月 執行猶予4年	なし	なし	1名	なし	なし	友人・知人犯行型		20	-1.131	21.131	0.63
18	LEX/DB28075476 (被告人A)	2002 懲役3年6月	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	集団強姦・強制わいせつ型	友人・知人犯行型	42	57.720	-15.720	-0.47
19	LEX/DB28075476 (被告人B)	2002 懲役4年	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	集団強姦・強制わいせつ型	友人・知人犯行型	48	57.720	-9.720	-0.29
20	LEX/DB28075476 (被告人C)	2002 懲役3年6月	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	集団強姦・強制わいせつ型	友人・知人犯行型	42	57.720	-15.720	-0.47
21	LEX/DB28075624	2002 懲役3年6月	1名	なし	なし	なし	なし	友人・知人犯行型		30	52.301	-22.301	-0.66
22	LEX/DB28075649	2001 懲役3年 執行猶予5年	1名	なし	なし	なし	なし	集団強姦・強制わいせつ型	友人・知人犯行型	36	44.543	-8.543	-0.25
23	LEX/DB28075764	2001 懲役2年 執行猶予4年	なし	1名	なし	なし	なし	集団強姦・強制わいせつ型	友人・知人犯行型	24	31.706	-7.706	-0.23
24	LEX/DB28085280	2000 懲役3年 執行猶予4年	なし	1名	なし	なし	傷害: 全治3か月以内	集団強姦・強制わいせつ型	友人・知人犯行型	36	45.917	-9.917	-0.29
25	LEX/DB28045204	1998 懲役2年6月	1名	なし	なし	なし	傷害: 全治2週間以内	友人・知人犯行型		30	40.088	-10.088	-0.30
26	LEX/DB28021157	1996 懲役3年	1名	なし	なし	なし	なし	友人・知人犯行型		72	60.991	11.009	0.33

注1) 判例番号については、便宜上、LEX/DB-インターネットから収集した判例は8ケタの数字だけに省略し、裁判所ホームページの裁判情報から収集した判例は地裁名と判決年月日だけに省略した。
 注2) 標準化残差が0.5以上の場合にはセルをオレンジ色に、-0.5以下の場合にはセルを青色に塗りつぶしている。

平均	-0.28
標準偏差	0.43
中央値	-0.37
最大値	0.81
最小値	-0.96

図表 29 <友人・知人犯行型>の標準化残差の平均値／中央値

判例番号	判決年	宣告刑	すべての性犯罪の被害者数				犯情が最も重い性犯罪被害結果(傷害)	犯行類型1	犯行類型2	実績値	サンプルスコア	残差	標準化残差
			強姦	強姦未遂	強制わいせつ	強制わいせつ未遂							
1	LEX/DB25560505	2018 懲役3年6月	1名	なし	なし	なし	なし	SNS犯行型		78	53.870	24.130	0.71
2	LEX/DB25549836	2017 懲役4年6月	1名	なし	なし	なし	なし	SNS犯行型		54	68.276	-14.276	-0.42
3	LEX/DB25543554	2016 懲役4年	1名	なし	なし	なし	なし	SNS犯行型	友人・知人犯行型	48	59.585	-11.585	-0.34
4	LEX/DB25482971	2016 懲役3年 執行猶予5年	1名	なし	なし	なし	なし	SNS犯行型		36	52.301	-16.301	-0.48
5	LEX/DB28085280	2002 懲役3年 執行猶予4年	1名	なし	なし	なし	なし	SNS犯行型		36	53.870	-17.870	-0.53

注1) 判例番号については、便宜上、LEX/DB-インターネットから収集した判例は8ケタの数字だけに省略し、裁判所ホームページの裁判情報から収集した判例は地裁名と判決年月日だけに省略した。
 注2) 標準化残差が0.5以上の場合にはセルをオレンジ色に、-0.5以下の場合にはセルを青色に塗りつぶしている。

平均	-0.21
標準偏差	0.47
中央値	-0.42
最大値	0.71
最小値	-0.53

図表 30 <SNS 犯行型>の標準化残差の平均値／中央値

判例番号	判決年	宣告刑	すべての性犯罪の被害者数				犯情が最も重い性犯罪被害結果(傷害)	犯行類型1	犯行類型2	実績値	サンプルスコア	残差	標準化残差
			強姦	強姦未遂	強制わいせつ	強制わいせつ未遂							
1	LEX/DB25561436	2018 懲役4年	1名	なし	なし	なし	なし	その他犯行型		48	60.991	-12.991	-0.38
2	LEX/DB25549148	2017 懲役2年	なし	なし	1名	なし	なし	その他犯行型		24	24.083	-0.083	0.00
3	LEX/DB25544980	2016 懲役5年	1名	なし	なし	なし	なし	その他犯行型		60	41.344	18.656	0.55
4	LEX/DB25544647	2016 懲役2年 執行猶予5年	なし	なし	1名	なし	なし	その他犯行型		24	-4.629	28.629	0.85
5	LEX/DB25504435	2014 懲役2年	なし	なし	1名	なし	傷害:全治2週間以内	その他犯行型		24	58.265	-34.265	-1.02
6	LEX/DB25482354	2012 懲役2年6月 執行猶予4年	なし	なし	1名	なし	傷害:全治2週間以内	その他犯行型		30	29.503	0.497	0.01
7	LEX/DB25460033	2009 懲役3年6月 執行猶予3年	なし	なし	なし	1名	なし	その他犯行型		18	35.367	-17.367	-0.51
8	LEX/DB29095258	2003 懲役3年6月	1名	なし	なし	なし	なし	その他犯行型		42	68.482	-26.482	-0.78

注1) 判例番号については、便宜上、LEX/DB-インターネットから収集した判例は8ケタの数字だけに省略し、裁判所ホームページの裁判情報から収集した判例は地裁名と判決年月日だけに省略した。

注2) 標準化残差が0.5以上の場合にはセルをオレンジ色に、-0.5以下の場合にはセルを青色に塗りつぶしている。

平均	-0.16
標準偏差	0.60
中央値	-0.19
最大値	0.85
最小値	-1.02

図表 31 <その他犯行型>の標準化残差の平均値／中央値

付された事例であり、また、❷の事例も多く、それ以外にも標準化残差がマイナスとなる事例が比較的多いことから、<配偶者・交際相手犯行型>、<対知的障害者犯行型>と同様に、類型的に刑期が軽減される傾向にあるものと解される。

(13) SNS 犯行型

<SNS 犯行型>は、平均値が-0.21、標準偏差が 0.47、中央値が-0.42、最大値が 0.71、最小値が-0.53 であった〔図表 30〕。❶標準化残差が 0.5 以上の事例と、❷標準化残差が-0.5 以下の事例に分類してみると、❶は 1 例、❷は 1 例であった。類型的には、平均値が-0.3 を下回っていないが、標準化残差がマイナスとなる事例が比較的多いことから、<配偶者・交際相手犯行型>、<対知的障害者犯行型>、<友人・知人犯行型>と同様に、類型的に刑期が軽減される傾向にあるものと解される。

(14) その他犯行型

<その他犯行型>は、平均値が-0.16、標準偏差が 0.60、中央値が-0.19、最大値が 0.85、最小値が-1.02 であった〔図表 31〕。❶標準化残差が 0.5 以上の事例と、❷標準化残差が-0.5 以下の事例に分類してみると、❶は 2 例、❷は 3 例であった。

3.5.3. 小括④

ここでの分析の結果、以下のことが見えてきた。

❶現在の実務の刑期判断基準は、<連続強姦・強制わいせつ型>、<拉致・連行犯行型>、<面識

ない者犯行型>、<勤務先関係者犯行型>を中心に組み立てられている（標準値となっている）。<飲酒・薬物抗拒不能型>、<集団強姦・強制わいせつ型>については、これらの犯行類型に比べると、刑期が若干低くなる傾向にある。

❷<性的虐待型>、<教師・指導者犯行型>、<幼児性愛型>については、類型的に刑期が加重される傾向がある。

❸<配偶者・交際相手犯行型>、<対知的障害者犯行型>、<友人・知人犯行型>、<SNS 犯行型>については、類型的に刑期が軽減される傾向にある。

若干のコメントを付しておく、前掲 3.2.2 (1)において「<交際相手> (-14.391)、<元配偶者・元交際相手> (-22.082) による犯行については、刑期が軽減される傾向が示された。被害者と加害者の関係は、刑期判断に直接関係する量刑因子（アイテム）という位置づけよりも、意識的ではない形で刑期判断に影響を与えているものと推察される」と言及したが、ここでの分析の結果から、類型的に、はっきりと刑期が軽減されている傾向が裏づけられた。ところで、このような差が生じることが果たして社会一般の法感情と適合するのかは改めて検証されなければならないと思われる。もし社会一般の法感情と適合しないのであれば（すなわち、過度なバイアスとして捉えられるのであれば）、社会の意識に適合した立法政策が必要であると言えよう。

また他方で、<性的虐待型>、<教師・指導者犯行型>については、刑期が重く評価されているが、これらに

ついても同様なことが言え、もし仮に社会一般の法感情と適合するのであれば、重く評価されることを処罰規定（法定刑）で明示することも必要であろう。

3.6. 量刑傾向に関する平成年間での経年変化

前記「3-5. 犯行類型別にみた量刑傾向」の分析の結果、予測モデル式の中核に位置する犯罪類型である＜連続強姦・強制わいせつ型＞が、2010 年前後において重罰化傾向にあることが分かり、また、同じく中核に位置する＜拉致・連行犯行型＞や＜面識ない者犯行型＞については、2015 年以降に重罰化傾向にあることが見えてきた。そこで、以下では、全体的な量刑傾向として、平成年間での経年変化について分析してみたいと思う。

3.6.1. 方法

対象とした全 335 件の判決年をもとに、2002 年から 2016 年までの 15 年をそれぞれ判別点に設定して、予測モデル式から算出した各サンプルの標準化残差について、判別点＜以前＞と＜以降＞の平均値や中央値などを計算して、それらの比較検討を行った。

3.6.2. 結果

判決年の度数分布は、図表 32 に示したとおりである。最頻値は、＜2012 年＞である。

図表 33 は、2002 年から 2016 年までの 15 年の判別点＜以前＞と＜以降＞の平均値や中央値（それらのレンジ）などを示したものである。この結果について、（1）刑法の一部改正によって強姦罪の法定刑の下限の引き上げ、集団強姦罪の新設、併合罪加重の上限を 30 年に引き上げた 2004 年（平成 16 年）、（2）女性に対する暴力に関する専門調査会で性暴力／性犯罪が重点的に議論されるようになった 2011 年（平成 23 年）、（3）法務省の性犯罪の罰則に関する検討会が開催された 2014 年（平成 26 年）を基準に、（1）2002 年から 2004 年まで、（2）2005 年から 2013 年まで、（3）2014 年から 2016 年まで、という形で 3 つの期間に区分し分析していこう〔専門調査会や検討会等での検討内容について、図表 34 参照〕。

（1）2002 年-2004 年

＜2002 年-2004 年＞の経年変化を見ると、＜以降

判決年		合計	
西 暦	和 暦	N	%
2019 年	平成 31 年	3	0.9
2018 年	平成 30 年	17	5.1
2017 年	平成 29 年	22	6.6
2016 年	平成 28 年	24	7.2
2015 年	平成 27 年	26	7.8
2014 年	平成 26 年	33	9.9
2013 年	平成 25 年	8	2.4
2012 年	平成 24 年	62	18.5
2011 年	平成 23 年	8	2.4
2010 年	平成 22 年	9	2.7
2009 年	平成 21 年	17	5.1
2008 年	平成 20 年	4	1.2
2007 年	平成 19 年	3	0.9
2006 年	平成 18 年	12	3.6
2005 年	平成 17 年	12	3.6
2004 年	平成 16 年	10	3.0
2003 年	平成 15 年	12	3.6
2002 年	平成 14 年	22	6.6
2001 年	平成 13 年	6	1.8
2000 年	平成 12 年	1	0.3
1999 年	平成 11 年	3	0.9
1998 年	平成 10 年	2	0.6
1997 年	平成 9 年	2	0.6
1996 年	平成 8 年	6	1.8
1995 年	平成 7 年	0	0.0
1994 年	平成 6 年	2	0.6
1993 年	平成 5 年	2	0.6
1992 年	平成 4 年	5	1.5
1991 年	平成 3 年	0	0.0
1990 年	平成 2 年	1	0.3
1989 年	平成 元年	1	0.3
合 計		335	100.0

図表 32 判決年の分布状況

＞の平均値や中央値はいずれも上昇している。したがって、＜2002 年-2004 年＞は、緩やかな重罰化にあったものと解される。なお、＜以前＞については、法定刑が重罰化される前であることから、低下することは想定されるところであり、結果を分析するにあたって外して考えている。

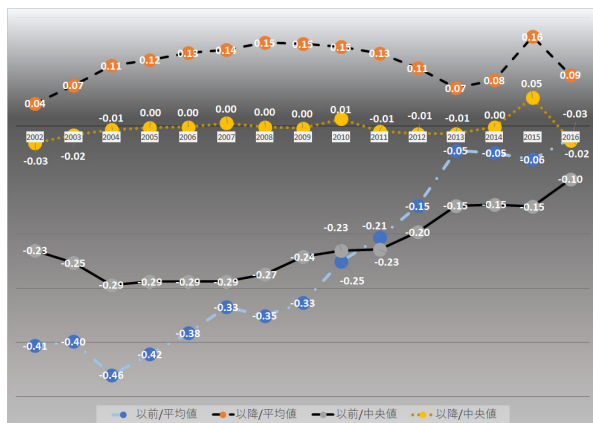
（2）2005 年-2013 年

＜2005 年-2013 年＞の経年変化を見ると、＜以降＞の平均値や中央値はほぼ横ばいであるのに対して、＜以降＞の平均値や中央値はいずれも上昇しており、2005 年の時点で＜以降＞と＜以前＞の平均値のレンジが 0.54（中央値のレンジは 0.28）であったのに対して、2013 年の時点で＜以降＞と＜以前＞の平均値のレンジが 0.12（中央値のレンジは 0.13）となっている。したがって、＜2005 年-2013 年＞においても、緩やかな重罰化にあったものと解される。

（3）2014 年-2016 年

＜2014 年-2016 年＞の経年変化を見ると、平均値や中央値が、＜2005 年-2013 年＞に比べると若干上昇し

		N	平均値	標準偏差	中央値	最大値	最小値
			レンジ		レンジ		
2002年	2002年以降	304	0.04				
判別	2002年以前	31	-0.41	0.45	0.96	-0.03	3.81
2003年	2003年以降	282	0.07		0.65	-0.23	0.53
判別	2003年以前	53	-0.40	0.47	0.95	-0.02	3.81
2004年	2004年以降	270	0.11		0.75	-0.25	1.26
判別	2004年以前	85	-0.46	0.57	0.93	-0.01	3.81
2005年	2005年以降	260	0.12		0.85	-0.29	1.26
判別	2005年以前	75	-0.42	0.54	0.94	0.00	3.81
2006年	2006年以降	248	0.13		0.83	-0.29	1.26
判別	2006年以前	87	-0.38	0.52	0.95	0.00	3.81
2007年	2007年以降	236	0.14		0.78	-0.29	1.26
判別	2007年以前	99	-0.33	0.47	0.94	0.00	3.81
2008年	2008年以降	233	0.15		0.85	-0.29	3.06
判別	2008年以前	102	-0.35	0.50	0.92	0.00	3.81
2009年	2009年以降	229	0.15		0.89	-0.27	3.06
判別	2009年以前	106	-0.33	0.48	0.93	0.00	3.81
2010年	2010年以降	212	0.15		0.88	-0.24	3.06
判別	2010年以前	123	-0.25	0.40	0.92	0.01	3.81
2011年	2011年以降	203	0.13		0.93	-0.23	3.06
判別	2011年以前	132	-0.21	0.34	0.92	-0.01	3.81
2012年	2012年以降	195	0.11		0.93	-0.23	3.06
判別	2012年以前	140	-0.15	0.25	0.90	-0.01	3.81
2013年	2013年以降	133	0.07		0.98	-0.20	3.06
判別	2013年以前	202	-0.05	0.12	0.81	-0.01	2.01
2014年	2014年以降	125	0.08		1.01	-0.15	3.81
判別	2014年以前	210	-0.05	0.13	0.83	0.00	2.01
2015年	2015年以降	92	0.16		1.00	-0.15	3.81
判別	2015年以前	243	-0.06	0.23	0.79	0.05	2.01
2016年	2016年以降	66	0.09		0.98	-0.15	3.81
判別	2016年以前	269	-0.02	0.12	0.81	-0.03	2.01
合計		335	0.00		0.94	-0.08	3.81



図表 33 判決年別に見た標準化残差の平均値／中央値
(2002 年～2016 年)

ていることが見て取れる。したがって、＜2014 年-2016 年＞においても、2005 年から 2013 年までの期間に比べるとさらに緩やかであるものの、緩やかな重罰化にあったものと解される。

3.6.3. 小括⑤

以上から、平成年間での量刑傾向については、緩やかな重罰化傾向にあったことが確認された。強姦罪の法定刑の下限の引き上げ、集団強姦罪の新設、併合罪加重の上限を 30 年に引き上げた 2004 年（平成 16 年）の刑法の一部改正においても、また、性犯罪規定の抜本的見直し

開催日	主な議事
第55回	2011年5月31日 ヒアリング ○産婦人科医療の現場における性暴力被害者支援 ○女性に対する暴力被害者支援における地域の関係機関の連携と課題
第56回	2011年6月17日 ヒアリング ○加害者更生と予防教育
第57回	2011年8月12日 ヒアリング ○性暴力被害者を相談しやすい体制へ向けメディア戦略 ○女性に対する暴力をめぐる国際的動向
第58回	2011年10月5日 ヒアリング ○警察における性犯罪被害者支援 ○民間支援団体における性暴力被害者への総合的支援
第59回	2011年10月31日 ヒアリング ○精神科診療及び心理臨床施設における性暴力被害者支援 ○男女共同参画センターにおける性暴力の相談 ○犯罪被害者等相談窓口における性犯罪被害者支援
第60回	2011年11月28日 ヒアリング ○性暴力被害当事者からの報告 ○性犯罪被害者のプライバシーと刑事司法上の問題点
第61回	2011年12月15日 ヒアリング ○強姦罪見直しに係る論点ごとの現状と検討の方向性 ○強姦罪の見直しと性犯罪に関する罰則の在り方の検討
第62回	2012年2月13日 ヒアリング ○強姦罪見直しに係る論点の整理 ○性犯罪の適正な処罰と予防
第63回	2012年3月15日 ヒアリング ○指導的立場の者による性犯罪の防止へスクール・セクシャル・ハラスメントの実態と防止の必要性へ ○韓国における性犯罪被害者支援及び性犯罪関連制度
第64回	2012年4月23日 ヒアリング ○第3次男女共同参画基本計画「第2部第9分野3 性犯罪への対策の推進」の取組の進捗
第65回	2012年6月4日 報告書の検討
第66回	2012年7月2日 報告書の検討
第67回	2012年7月8日 報告書の検討
開催日	主な議事
第1回	2014年10月31日 検討の対象とする論点について
第2回	2014年11月21日 ヒアリング
第3回	2014年11月28日 ヒアリング
第4回	2014年12月24日 第2「性犯罪を非報告罪とする点について」 第3「性犯罪に関する公訴時効の撤廃又は停止について」 第1の1「配偶者間における強姦罪の成立について」 第1の2「強姦罪の主体等の拡大」 第1の3「性交類似行為に関する構成要件の創設」
第5回	2015年1月29日 第1の4「強姦罪等における暴行・脅迫要件の緩和」 第1の5「地位・関係性を利用した性的行為に関する規定の創設」 第1の6「いわゆる性交同意年齢の引き上げ」
第6回	2015年2月12日 第1の1「性犯罪の法定刑の見直し」 第4「刑法における性犯罪に関する条項の位置について」 第2「性犯罪を非報告罪とする点について」 第3「性犯罪に関する公訴時効の撤廃又は停止について」 第1の2「強姦罪の主体等の拡大」 第1の3「性交類似行為に関する構成要件の創設」
第7回	2015年2月27日 第1の1「性犯罪の法定刑の見直し」 第4「刑法における性犯罪に関する条項の位置について」 第2「性犯罪を非報告罪とする点について」 第3「性犯罪に関する公訴時効の撤廃又は停止について」 第1の2「強姦罪の主体等の拡大」 第1の3「性交類似行為に関する構成要件の創設」
第8回	2015年3月17日 第1の1「性犯罪の法定刑の見直し」 第4「刑法における性犯罪に関する条項の位置について」 第2「性犯罪を非報告罪とする点について」 第3「性犯罪に関する公訴時効の撤廃又は停止について」 第1の2「強姦罪の主体等の拡大」 第1の3「性交類似行為に関する構成要件の創設」
第9回	2015年4月24日 第1の1「性犯罪の法定刑の見直し」 第4「刑法における性犯罪に関する条項の位置について」 第2「性犯罪を非報告罪とする点について」 第3「性犯罪に関する公訴時効の撤廃又は停止について」 第1の2「強姦罪の主体等の拡大」 第1の3「性交類似行為に関する構成要件の創設」
第10回	2015年5月28日 第1の2「強姦罪の主体等の拡大」 第1の3「性交類似行為に関する構成要件の創設」 第1の4「強姦罪等における暴行・脅迫要件の緩和」及び第1の5「地位・関係性を利用した性的行為に関する規定の創設」 第1の6「いわゆる性交同意年齢の引き上げ」 第1の7「法定刑の見直し」について※議論相互の関連検討
第11回	2015年7月10日 取りまとめに向けた検討
第12回	2015年8月6日 取りまとめのための検討
開催日	主な議事
第1回	2015年11月2日 要綱(骨子)第4「強姦等の罪等の非報告罪化」について
第2回	2015年11月27日 要綱(骨子)第1「強姦の罪(刑法第177条)の改正」、第2「準強姦の罪(刑法第178条第2項)の改正」及び第6「強制わいせつ等致死傷及び強姦等致死傷の各罪(刑法第179条第2項及び第180条)の改正」について
第3回	2015年12月16日 要綱(骨子)第3「監禁者であることによる影響力を利用したわいせつな行為又は性交等に係る罪の新設」について
第4回	2016年1月20日 要綱(骨子)第4「強姦の罪等の非報告罪化」について
第5回	2016年3月25日 要綱(骨子)第1「強姦の罪(刑法第177条)の改正」、第2「準強姦の罪(刑法第178条第2項)の改正」、第3「集団強姦等の罪及び同罪に係る強姦等致死傷の罪(刑法第179条第2項及び第180条第1項)の新設」及び第6「強制わいせつ等致死傷及び強姦等致死傷の各罪(刑法第179条第2項及び第180条)の改正」について
第6回	2016年5月25日 ヒアリング
第7回	2016年6月16日 要綱(骨子)第1「強姦の罪(刑法第177条)の改正」、第2「準強姦の罪(刑法第178条第2項)の改正」及び第4「強姦等の罪等の非報告罪化」について

図表 34 専門調査会や検討会等での検討内容

出典：拙稿「批判的被害者学からみた改正性刑法の評価と今後の課題— 3 年後を目処とした検討に向けて」被害者学研究 28 号（2018 年）43 頁。

を行った 2017 年（平成 29 年）の刑法改正においても、学説では、実務上評価済みであることを確認した上での当該犯罪に対する価値判断の変化に基づいた評価変更を行ったものであると理解する考え方が有力に主張されていた²¹⁾が、本分析によって、改めてそれが裏づけられたものと解される。

4. 求刑との関係

4.1. 方法

分析の対象としたのは、調査対象の 335 件のうち、求刑が判明した 285 例である。

求刑の刑期（月換算）と宣告刑の刑期（月換算）の関係について分析するべく、①それぞれの度数を集計し、②二変量間の単回帰分析をするとともに、③＜宣告刑/求刑＞の割合を算出した（分析には、IBM 社の SPSS Statistics 24 を使用した）。

4.2. 結果

（1）求刑の刑期

図表 35 は、対象とした 285 件の求刑と宣告刑を刑期別にカウントしたものである [SA]。

対象とした全事例（N=285）をみたところ、最小値は 12 月（懲役 1 年）であり、最大値は 360 月（懲役 30 年）であった。平均値は月に換算すると 103.79 月であり、だいたい懲役 8 年～9 年ということになる。中央値は月換算で 72.00 月（懲役 6 年）であった。最頻値は 48 月（懲役 6 年）である。

宣告刑で実刑となった事例（N=222）に限定してみたところ、最小値は 24 月（懲役 2 年）であり、最大値は 360 月（懲役 30 年）であった。平均値は月に換算すると 122.27 月であり、だいたい懲役 10 年弱ということになる。中央値は月換算で 96.00 月（懲役 8 年）であった。最頻値は 120 月（懲役 10 年）である。

他方で、宣告刑で執行猶予に付された事例（N=63）に限定してみたところ、最小値は 12 月（懲役 1 年）であり、最大値は 72 月（懲役 6 年）であった。平均値は月に換算すると 38.67 月であり、だいたい懲役 3 年弱ということになる。中央値は月換算で 36.00 月（懲役 3 年）であった。最頻値は 36 月（懲役 3 年）と 48 月（懲役 4 年）である。

（2）求刑・宣告刑の相関

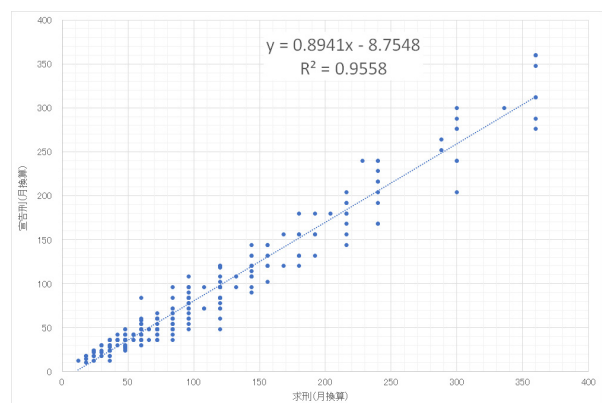
図表 36 は、対象とした全事例（N=285）について、求刑の刑期（月換算）を X 軸に、求刑の刑期（月換算）の刑期を Y 軸に設定してプロットした散布図である。近似曲線（線形）を書き入れたところ、バラツキが少なく、近似していることが見て取れる（決定係数：0.9558）。

刑 期	月換算	求 刑						宣告刑[求刑判明分]					
		合計		実刑 ◎宣告刑		付執行猶予 ◎宣告刑		合計		実刑 ◎宣告刑		付執行猶予 ◎宣告刑	
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
懲役10月	(10月)							1	0.4	0	0.0	1	1.6
懲役1年	(12月)	1	0.4	0	0.0	1	1.6	4	1.4	1	0.5	3	4.8
懲役1年2月	(14月)							1	0.4	0	0.0	1	1.6
懲役1年6月	(18月)	5	1.8	0	0.0	5	7.9	10	3.5	2	0.9	8	12.7
懲役1年10月	(22月)							2	0.7	1	0.5	1	1.6
懲役2年	(24月)	12	4.2	2	0.9	10	15.9	17	6.0	11	5.0	6	9.5
懲役2年2月	(26月)							1	0.4	0	0.0	1	1.6
懲役2年4月	(28月)							3	1.1	3	1.4	0	0.0
懲役2年6月	(30月)	8	2.8	3	1.4	5	7.9	15	5.3	6	2.7	9	14.3
懲役3年	(36月)	25	8.8	11	5.0	14	22.2	47	16.5	14	6.3	33	52.4
懲役3年6月	(42月)	8	2.8	3	1.4	5	7.9	15	5.3	15	6.8		
懲役4年	(48月)	33	11.6	19	8.6	14	22.2	24	8.4	24	10.8		
懲役4年6月	(54月)	6	2.1	4	1.8	2	3.2	8	2.8	8	3.6		
懲役4年10月	(58月)							1	0.4	1	0.5		
懲役5年	(60月)	23	8.1	19	8.6	4	6.3	13	4.6	13	5.9		
懲役5年6月	(66月)	3	1.1	2	0.9	1	1.6	4	1.4	4	1.8		
懲役6年	(72月)	22	7.7	20	9.0	2	3.2	8	2.8	8	3.6		
懲役6年6月	(78月)							4	1.4	4	1.8		
懲役7年	(84月)	18	6.3	18	8.1	0	0.0	16	5.6	16	7.2		
懲役7年6月	(90月)							2	0.7	2	0.9		
懲役8年	(96月)	22	7.7	22	9.9	0	0.0	12	4.2	12	5.4		
懲役8年6月	(102月)							2	0.7	2	0.9		
懲役9年	(108月)	3	1.1	3	1.4	0	0.0	6	2.1	6	2.7		
懲役9年6月	(114月)							1	0.4	1	0.5		
懲役9年10月	(118月)							1	0.4	1	0.5		
懲役10年	(120月)	24	8.4	24	10.8	0	0.0	12	4.2	12	5.4		
懲役11年	(132月)	2	0.7	2	0.9	0	0.0	8	2.8	8	3.6		
懲役12年	(144月)	12	4.2	12	5.4	0	0.0	4	1.4	4	1.8		
懲役13年	(156月)	8	2.8	8	3.6	0	0.0	6	2.1	6	2.7		
懲役14年	(168月)	2	0.7	2	0.9	0	0.0	3	1.1	3	1.4		
懲役15年	(180月)	7	2.5	7	3.2	0	0.0	5	1.8	5	2.3		
懲役16年	(192月)	4	1.4	4	1.8	0	0.0	3	1.1	3	1.4		
懲役17年	(204月)	1	0.4	1	0.5	0	0.0	3	1.1	3	1.4		
懲役18年	(216月)	8	2.8	8	3.6	0	0.0	2	0.7	2	0.9		
懲役19年	(228月)	1	0.4	1	0.5	0	0.0	1	0.4	1	0.5		
懲役20年	(240月)	9	3.2	9	4.1	0	0.0	5	1.8	5	2.3		
懲役21年	(252月)							1	0.4	1	0.5		
懲役22年	(264月)							1	0.4	1	0.5		
懲役23年	(276月)							3	1.1	3	1.4		
懲役24年	(288月)	2	0.7	2	0.9	0	0.0	2	0.7	2	0.9		
懲役25年	(300月)	7	2.5	7	3.2	0	0.0	2	0.7	2	0.9		
懲役26年	(312月)							2	0.7	2	0.9		
懲役29年	(348月)	1	0.4	1	0.5	0	0.0	1	0.4	1	0.5		
懲役30年	(360月)	8	2.8	8	3.6	0	0.0	3	1.1	3	1.4		
合 計		285	100.0	222	100.0	63	100.0	285	100.0	222	100.0	63	100.0

刑 期 (月換算)	求 刑			宣告刑[求刑判明分]		
	平均値	103.79	122.27	38.67	84.04	29.43
	標準偏差	80.622	82.137	13.917	73.733	76.653
	中央値	72.00	96.00	36.00	54.00	75.00
	最頻値	48	120	36*	36	48
最小値	12	24	12	10	12	10
最大値	360	360	72	360	360	36

* 複数ある最頻値のうち、最小値を表示している。

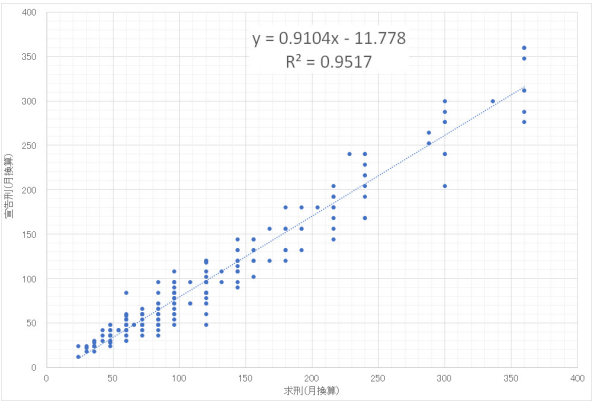
図表 35 求刑と宣告刑の刑期別の分布状況
(求刑判明分のみ (N=285))



図表 36 求刑と宣告刑の散布図
(求刑判明分のみ (N=285))

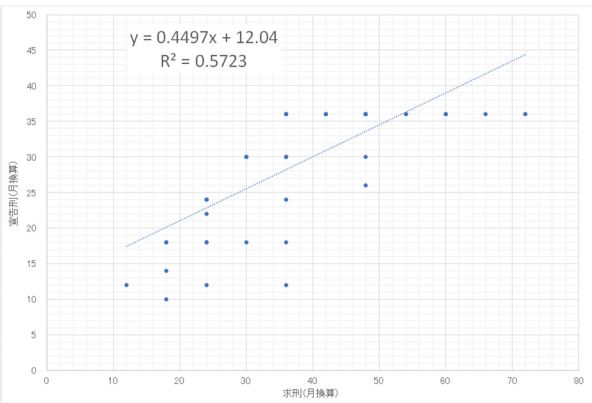
非常に高い相関が見られた。

図表 37 は、宣告刑で実刑となった事例（N=222）について、図表 33 と同様にプロットした散布図である。近似曲線（線形）を書き入れたところ、バラツキが少なく、近似曲線を近似していることが見て取れる（決定係数：0.9517）。非常に高い相関が見られた。



図表 37 求刑と宣告刑の散布図
(求刑判明分のみ×実刑 (N=222))

図表 38 は、宣告刑で執行猶予に付された事例（N=63）について、図表 33 と同様にプロットした散布図である。近似曲線（線形）を書き入れたところ、制度はややよかったものの、多少のバラツキが見られた（決定係数：0.5723）。



図表 38 求刑と宣告刑の散布図
(求刑判明分のみ×付執行猶予 (N=63))

(3) <宣告刑/求刑>の割合

図表 39 は、対象とした全事例（N=285）の<宣告刑/求刑>の割合を算出して、階級幅を 0.10 に設定してカウントしたものである [SA] 。

対象とした全事例（N=285）をみたところ、平均値は 0.79 で（標準偏差：0.15），中央値は 0.78 であった。求刑どおりの事例（=1.00）は 41 件（14.4%），求刑超えの事例（>1.00）は 4 件（1.4%），求刑を下回った事例のうち 0.5 未満となった事例（<0.50）は 3 件（1.1%）であった。

宣告刑で実刑となった事例（N=222）に限定してみたところ、平均値は 0.78 で（標準偏差：0.15），中央値は 0.78 であった。求刑どおりの事例（=1.00）は 21 例（9.5%），求刑超えの事例（>1.00）は 4 例（1.8%），求刑を下回った事例のうち 0.5 未満となった事例（<0.50）は 2 例（0.9%）であった。

他方で、宣告刑で執行猶予に付された事例（N=63）に限定してみたところ、平均値は 0.80 で（標準偏差：0.17），中央値は 0.78 であった。求刑どおりの事例（=1.00）は 20 例（31.7%），求刑超えの事例（>1.00）は 0 例（0.0%），求刑を下回った事例のうち 0.5 未満となった事例（<0.50）は 1 例（1.6%）であった。

	総数 (N=285)		実刑 (N=222)		付執行猶予 (N=63)	
	N	%	N	%	N	%
求刑どおりの事例 (=1.00)	41	14.4	21	9.5	20	31.7
求刑超えの事例 (>1.00)	4	1.4	4	1.8	0	0.0
求刑を下回った事例 (<1.00)	240	84.2	197	88.7	43	68.3
0.90~0.99	24	8.4	23	10.4	1	1.6
0.80~0.89	69	24.2	60	27.0	9	14.3
0.70~0.79	70	24.6	54	24.3	16	25.4
0.60~0.69	49	17.2	40	18.0	9	14.3
0.50~0.59	25	8.8	18	8.1	7	11.1
0.40~0.49	2	0.7	2	0.9	0	0.0
0.30~0.39	1	0.4	0	0.0	1	1.6
平均値	0.79		0.78		0.80	
標準偏差	0.15		0.15		0.17	
中央値	0.78		0.78		0.78	
最大値	1.40		1.40		1.00	
最小値	0.33		0.40		0.33	

図表 39 <宣告刑/求刑>の割合に関する
階級別度数分布

4.3. 外れ値事例に関する検討

以上の結果から、宣告刑が求刑のだいたい 0.8（±0.15）[いわゆる八掛け] であるという傾向が見えてきた。そ

こで、予測レンジを 1.00～0.50 に設定して、①それを上回った求刑超えの事例 (>1.00) [4 例] と、求刑を下回った事例のうち 0.5 未満となった事例 (<0.50) [3 例] について検証する。

4.3.1. 求刑超えの事例 (>1.00)

(1) 宮崎地判平成 26 年 5 月 16 日 LEX/DB25504150 【住居侵入、強姦被告事件】

実績値 : 84	予測値 : 99.843
残差 : -15.843	標準化残差 : -0.469

〔事案の概要〕

第 1 被告人は、宮崎県都城市 α×号×番地×a-×号 C 方につき、かねて女性の居住先として把握していたことから、平成 25 年 2 月 22 日午前 10 時頃、強姦の目的で、無施錠の同女方台所東側掃き出し窓から侵入し、同日午前 10 時 30 分頃、一人で在室するとともに板間の布団の上で就寝中であつた同女に近寄るなどした上、異変に気付いて声を出した同女（当時 20 歳）に対し、馬乗りになり、その両肩を両手で押さえ付けて、静かにするよう言い、更に、同女の着衣を無理矢理脱がせて、その両膝を両手で押し広げるなどの暴行を加え、その反抗を抑圧して、同女を姦淫した。

第 2 被告人は、同市 β××××番地×b ハイツ×××号 D 方につき、女性の居室として確認できたことなどから、平成 26 年 1 月 14 日午後 6 時 20 分頃、強姦の目的で、無施錠の同女方玄関ドアから侵入し、単身で居住していた同女の様子をうかがい、同女が入浴を始めた隙に台所に置かれていた包丁を手取るなどした上、同日午後 7 時頃、同女方において、風呂から出てきた同女（当時 24 歳）に対し、上記包丁を突き付けるなどして脅迫し、その反抗を抑圧して、同女を姦淫した。

〔量刑の理由〕懲役 7 年

宮崎地方裁判所は、本件の量刑に関し、以下のような理由を示した。

1 被告人は、約 1 年間で 2 度にわたり、いずれも全く面識のない女性方に強姦目的でそれぞれ忍び込み、就寝中あるいは入浴直後の被害者を襲って

その目的を遂げた。いずれも性交類似のわいせつ行為を伴うもので、特に後者の犯行では包丁を突き付けて脅迫し、極度の恐怖心から抵抗できなくなった被害者に対して、殊更に膣内射精を敢行しており、このようにして性的自由を侵害された被害者らの精神的苦痛も大きいものと認定せざるを得ない。もとより被害者らに何ら落ち度は見出せず、妻の束縛から逃れて妻以外のとりわけ見知らぬ女性と関係を持ちたかったなどという動機も極めて身勝手とするほかないのであって、これらに加え、予め女性の居宅であると把握するなどして事を進めた判示のような経過等に照らしても、非難を弱めることはできない。こうした犯情を中心に、見ず知らずの女性 2 名に対する強姦事案として、これに見合った量刑を検討すると、おおむね懲役 5 年付近から 10 年程度に刑の大枠としての傾向を見出していく中で、直ちに軽い部類に位置付けるのは困難であり、比較的重い部類にあるとして判断していくのが相当である。

2 ところで、検察官は論告において、本件犯情の悪質性ととも被告の再犯のおそれを指摘し、懲役 5 年を求刑した。そして検察官が我が国の刑事政策の在り方を追求していく機関に属し、公益の代表者として訴追裁量も付与された立場にあることなどに鑑み、一般的にその求刑には重みがあるものとして認識されるべきといえる。しかしながら、この種事犯の量刑傾向は当然ながら罪刑の均衡、量刑の公平性を踏まえつつも、旧来のそれより既に全体的に重罰化を示してきており、このことは致傷を伴う事案を対象とするとはいえ、いわゆる裁判員裁判において積み重ねられてきた量刑の動向からも支持されていると考えられる。こうした状況下において、本件各被害者の処罰感情に関する指摘も含め、検察官の本件科刑意見を極力被告人に有利に捉えようとしても、関係各証拠及びこれらに基づく当事者の意見を公正かつ慎重に評価していく限り、本件各被害者が被害当日のうちに警察に届け出た後、現在までに相当な時日が経過しながら、この間被告人から被害者らに対する金銭的な慰謝の措置すら講じられておらず、同

人らの処罰感情が厳しいのも当然とみるほかない。してみると、本件検察官の論告・求刑は、特段の合理的な理由もなく、明らかに軽きに失する量刑傾向を念頭にしたか、又は前記1のような量刑傾向の中で本件を軽い部類に位置付けたとしかいいようがない。少なくともこのような場合には、判断者の立場である裁判所としても、検察官の求刑に配慮することには限度があり、本件においてこれを上回る量刑判断を行うのはやむを得ないと考え

る。

3 そこで、以上のような見方を踏まえ、被告人が平成25年7月の軽犯罪法違反（トイレののぞき行為）で検挙され、同年11月に科料に処せられながら、判示第2の犯行に及んだ経緯には、規範意識の乏しさもうかがわれるものの、他方、同犯行での検挙後とはいえ、判示第1の犯罪を自ら警察に申告した上、当公判廷でも本件各犯罪事実を認めて、反省の態度を示したこと、社会復帰後に父親ら親族の支援が見込まれることなど、被告人のために酌むべき事情も十分勘案し、被告人に対しては、主文のとおり量刑するのが相当であると判断した。

（求刑 懲役5年）

【予測モデル式からの若干の考察】

本判決では、懲役5年の求刑に対して、懲役7年が宣告された。宮崎地方裁判所は、「被告人は、犯罪の成立を認めて、反省の弁を述べ、その気持ちを被告人なりの言葉で表現しようとしてはいるが、その発言内容から見ると、内省が十分深まっているものであるか、疑問なしとせず、このような犯行を、約10か月の間に、4回も繰り返した被告人に対しては、相当長期間の懲役刑を科すほかはない。平成23年9月30日付け追起訴状記載の公訴事実第2について主位的訴因の強盗を認定せず、予備的訴因の窃盗を認定したことを考慮しても、検察官の求刑懲役19年は被告人に対する刑罰としては十分ではない」と言及した。

では、妥当な判断であったのかを検証するために、予測モデル式に照らして検証してみよう。まず、予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく

と、すべての被害者数については、「(3-①)強姦」が<2名>(56.513)、「(3-②)強姦未遂」が<なし>(-10.387)、「(3-③)強制わいせつ」が<なし>(-13.951)、「(3-④)強制わいせつ未遂」が<なし>(-1.615)となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④)被害結果(傷害)」が<なし>(-11.612)となり、その基本スコアは18.948となった。

予測モデル式では、予測値を99.843と算出した(残差-15.843〔標準化残差:-0.469〕)。年に換算すると懲役8年弱というところであり、したがって、懲役5年の求刑は軽きに失しており、懲役7年の宣告刑は妥当な判決であったと解される。それゆえ、本判決は「外れ値事例」とは評価できない。

(2) 東京地立川支平成24年5月18日 LEX/DB25481752 【強姦致傷、強姦、窃盗、住居侵入、強盗被告事件】

実績値 : 240	予測値 : 182.677
残差 : 57.323	標準化残差 : 1.698

【事案の概要】

第1 被告人は、通行中のA(当時19歳)を認め、好みのタイプの女性であったことなどから、同女を強姦しようと考え、その跡をつけた上、平成22年10月18日午後11時頃、同女に対し、東京都西東京市(以下略)のE号棟×階エントランスにおいて、その背後から近付いて、その口を手で塞ぎ、「騒ぐと殺すぞ。」などと申し向け、その背中を押すなどして、同棟東側植込みに連れ込み、所において、その場にしゃがみ込んだ同女を仰向けに押し倒すなどの暴行脅迫を加えてその反抗を抑圧した上、同女を強いて姦淫し、その際、同女に全治約3日間を要する処女膜裂傷の傷害を負わせた。

第2 被告人は、

1 通行中のB(当時27歳)を認め、好みのタイプの女性であったことなどから、同女を強姦しようと考え、その跡をつけた上、平成23年1月28日午前3時10分頃から同日午前3時30分頃までの間、同女に対し、同市(以下略)前路上において、その背後から近付いて、その口を手で塞ぎ、「騒いだら殺すぞ。」などと申し向け、その背中を押すなどして、近くの同市(以下略)のF緑

地に連れ込み、同所において、その顔にネックウォーマーをかぶせて目隠しをし、その場に仰向けに押し倒して馬乗りになるなどの暴行脅迫を加えてその反抗を抑圧した上、同女を強いて姦淫し、

2 上記犯行を終えて逃走中、同日午前3時30分頃、同市（以下略）前路上付近において、上記犯行の際同女がその場に落としていた同女所有又は管理の現金約3万9000円及びキャッシュカード1枚等6点在中の財布1個（時価約3万円相当）を窃取した。

第3 被告人は、同市（以下略）のG×階のC（当時37歳）方付近を通りかかった際、かねて同女が同家に入っていく姿を認め、好みのタイプの女性と考えていたことや、同家付近の駐車場に外国製自動車が駐車してあることから、同女が金持ちであり、また、同家前に昼間オートバイが置いてあるのに夜にはそれがないことから、同女が夜仕事をし、昼間は家にいると考えていたことなどから、同家に侵入して、金品を窃取するとともに同女を強姦しようと考え、同年6月24日午後2時5分頃、同家内に、無施錠の東側南寄りの窓から侵入し、同所において、同女所有の現金約16万円を財布内から抜き取って窃取し、さらに、その頃から同日午後2時35分頃までの間、同所で就寝中の同女に対し、その顔にタオルをかぶせ、刃物様のものを首筋付近に突き付けながら「静かにして。」と申し向けるなどの暴行脅迫を加えてその反抗を抑圧した上、同女を強いて姦淫した。

第4 被告人は、通行中のD（当時31歳）を認め、同女から金品を強取しようと考え、その跡をつけた上、同年8月13日午前1時25分頃、同都練馬区（以下略）のH敷地内において、同女に対し、その背後から近付いて、その口を手で塞ぎ、背後からその場に押さえつけて、「叫んだら殺すぞ。」などと申し向けるなどの暴行脅迫を加えてその反抗を抑圧した上、同女から同女所有又は管理の現金約9000円及び運転免許証1通等12点在中の財布1個（時価約5000円相当）並びにウーロン茶1本等2点在中のビニール袋1袋（時価合計約210円相当）を奪い取って強取した。

〔量刑の理由〕懲役20年

東京地方裁判所立川支部は、本件の量刑に関し、以下のような理由を示した。

本件は、被告人が、約10か月の間に、〔1〕深夜、通行中の当時19歳の被害者の跡をつけ、マンション入り口で同女を強姦し、その際、同女に全治約3日間を要する処女膜裂傷の傷害を負わせ、〔2〕深夜、通行中の当時27歳の別の被害者の跡をつけ、路上から緑地内に連れ込んで強姦し、その犯行後、逃走中に、同女が路上に落としていた財布を窃取し、〔3〕白昼、当時37歳の別の被害者方に侵入して、現金を窃取した上、同女を強姦し、〔4〕深夜、通行中の当時31歳の別の被害者の跡をつけ、アパート入り口で同人から財布等を強取したという事案である。

本件強姦、強盗の態様は、判示第3の犯行以外では、凶器は用いられてはいないものの、これらは、いずれも、深夜、被害者に対し、いきなり背後から口を塞ぐなどして襲いかかり、「騒いだら殺すぞ」などという強烈な脅し文句を申し向けるなどしたものであり、また、判示第3の犯行では、被害者の住居に侵入した上、鋭利な刃物様のものを被害者の首筋付近に突き付けるなど一つ間違えば被害者に重篤な傷害を負わせかねない極めて危険な手段が用いられている。強姦の態様も、被害者に口淫させた上、姦淫し、膣内に射精するというものである。犯行態様は甚だ卑劣悪質である。

その結果、強姦、強盗はいずれも既遂に達しており、判示第1の被害者は全治約3日間を要する処女膜裂傷の傷害を負わされている。確かに、同女は、男性経験があったようであるが、傷害の部位からすると、その程度は、全治期間のみでは推し量れない重みを持っている。被害者らは、事件後も、そのような犯行にあったことに苦しみ、転居・転職等を余儀なくされた者もいるなど、被害者らの被った肉体的・精神的苦痛は甚だ大きい。強取ないし窃取された被害額も合計約24万3210円と少ないとはいえない。被害者らがいずれも厳罰を望んでいるのは当然である。

被告人は、自分の性的欲望を満たすため、あるいは、金品欲しさに本件各犯行を行ったもので、犯行に至る経緯・動機にも酌量の余地は全くない。被害者らの懇願も無視して犯行を継続するなど、

その犯意も強固である。

被告人は、犯罪の成立を認めて、反省の弁を述べ、その気持ちを被告人なりの言葉で表現しようとしてはいるが、その発言内容から見ると、反省が十分深まっているものであるか、疑問なしとせず、このような犯行を、約 10 か月の間に、4 回も繰り返した被告人に対しては、相当長期間の懲役刑を科すほかはない。平成 23 年 9 月 30 日付け追起訴状記載の公訴事実第 2 について主位的訴因の強盗を認定せず、予備的訴因の窃盗を認定したことを考慮しても、検察官の求刑懲役 19 年は被告人に対する刑罰としては十分ではないと考えられる。

判示第 1 の犯行は、19 歳 11 か月とはいえ少年時代の犯行であり、その余の犯行も成人後間もない 20 歳時の犯行であって、被告人が現在 21 歳と若年であること、愛情薄く育った生育環境に同情の余地がないわけではないこと、前科がないこと、被告人が、上記のとおり、不十分なところがあるものの、犯罪の成立を認め、反省の態度を示していることを考慮しても、被告人に対しては、主文の刑を科するのが相当である。

(求刑 懲役 19 年)

【予測モデル式からの若干の考察】

本判決では、懲役 19 年の求刑に対して、懲役 20 年が宣告された。東京地方裁判所立川支部は、「本件各被害者の処罰感情に関する指摘も含め、検察官の本件科刑意見を極力被告人に有利に捉えようとしても、関係各証拠及びこれらに基づく当事者の意見を公正かつ慎重に評価していく限り、本件各被害者が被害当日のうちに警察に届け出た後、現在までに相当な時日が経過しながら、この間被告人から被害者らに対する金銭的な慰謝の措置すら講じられておらず、同人らの処罰感情が厳しいのも当然とみるほかない」として、「本件検察官の論告・求刑は、特段の合理的な理由もなく、明らかに軽きに失する量刑傾向を念頭にしたか、又は前記 1 のような量刑傾向の中で本件を軽い部類に位置付けたとしかいいようがなく、「少なくともこのような場合には、判断者の立場である裁判所としても、検察官の求刑に配慮することには

限度があり、本件においてこれを上回る量刑判断を行うのはやむを得ない」と言及した。

では、妥当な判断であったのかを検証するために、予測モデル式に照らして検証してみよう。まず、予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておくと、すべての被害者数については、「(3-①) 強姦」が<3 名> (122.224)、「(3-②) 強姦未遂」が<なし> (-10.387)、「(3-③) 強制わいせつ」が<なし> (-13.951)、「(3-④) 強制わいせつ未遂」が<なし> (-1.615) となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④) 被害結果(傷害)」が<傷害：全治 2 週間以内> (11.886) となり、その基本スコアは 108.157 となった。

予測モデル式では、予測値を 182.677 と算出した(残差 57.323 [標準化残差：1.698])。年に換算すると懲役 15 年弱というところであり、したがって、懲役 20 年の宣告刑は重く、懲役 19 年の求刑に対する八掛け(懲役 15 年弱)が妥当な宣告刑であったと解される。本判決では、再犯可能性の高さが予測モデル式のカテゴリースコアよりも高く評価されていると推察されるが、「被告人が現在 21 歳と若年であること」などを考慮に入れた場合、果たして適正な範囲内であったのかは検証する余地があるように思われる。それゆえ、予測モデル式に照らして検証する限り、本判決は、刑期が顕著に高く、「外れ値事例」として位置づけられる可能性を有している。

(3) 宇都宮地判平成 23 年 2 月 3 日 LEX/DB25470407【強姦致傷被告事件】

実績値：108	予測値：89.557
残差：18.443	標準化残差：0.546

【事実の概要】

被告人は、帰宅途中の高校生である被害者(当時 15 歳)を認め、強いて同女を姦淫しようと企て、平成 22 年 5 月 28 日午後 9 時ころ、宇都宮市内の路上において、自転車に乗っていた同女の身体をその右横から両手で押して自転車もろとも路上に転倒させた上、同女に対し、その口を手でふさぎ、「静かにしろ。声出すな。」などと強い口調で言い、その腕を手でつかんで同女を同所付近の草むらに引きずり込むなどの暴行脅迫を加えてその反抗を

抑圧し、自己の陰茎を無理やり同女の口に押し込むなどした後、その場に押し倒し下着を脱がせるなどして強い同女を姦淫し、その際、同女に全治約 2 週間を要する処女膜損傷の傷害を負わせた。

【量刑の理由】懲役 9 年

宇都宮地方裁判所は、本件の量刑に関し、以下のよう
な理由を示した。

1 本件は、被告人が、女子高校生である被害者に対し、自転車に乗っていた同女の身体を押して自転車もろとも路上に転倒させたり、「静かにしろ。声出すな。」などと言うなどの暴行脅迫を加え、無理やり口淫させるなどした上で強姦し、その際、同女に全治約 2 週間の処女膜損傷の傷害を負わせた強姦致傷の事案である。

2 本件犯行の結果は誠に重大である。

被害者は本件被害により、全治約 2 週間を要する処女膜損傷の傷害を負ったものであり、その傷害内容等からすると、全治期間では計り知ることのできない意味があり、肉体的被害は重大である。

次に、精神的苦痛についてみると、被害者は、性交経験のない 15 歳の女子高校生であったところ、自転車での帰宅途中、突如として本件被害に遭ったものであり、被害者が受けた恐怖感、屈辱感、喪失感等は非常に大きかったと認められる。被害者は、本件被害後、自転車で通学するのが怖くなって電車やバスで通学するようになったり、車内で知らない男性に近付かれるだけで通学できなくなるほどの苦痛を感じたり、1 人でいるのが怖くなって睡眠や入浴を母親とともにするようになったり、被害者としての意見陳述の文面を作成することを示唆されるやコントロールできない恐怖感等で思いも掛けない反応を示すなどしているという。また、現在に至っても、1 日 1 日やっとの思いで生きている、事件前に抱いていた将来の目標や希望まで失ったなどとも述べている。このように、被害者が負った心の傷は余りに深く、被害から約 8 か月が経過した現在においてもその傷は癒えておらず、癒える見込みも定かでない。本件が、15 歳と

いう若年の被害者の将来に与える影響は非常に憂慮される。被害者が受けたこれら被害の点は、量刑上もっとも重視すべき事情である。

また、被害者の両親は、愛情いっぱい育ててきた娘が本件被害に遭い、苦しんでいる姿を間近で見るなどして、自ら深い心の傷を負っている。被害者の父親は、娘を守りきれず本当に申し訳ない気持ちでいっぱいであると、母親は、事件のときから時が止まってしまった、悲しみはおさまるところか、ますます強くなっているなどと、その苦しい心情を法廷で明らかにしている。

被害者は、両親に心配や迷惑を掛けて申し訳ないと思っているなどと、両親に対する思いを意見陳述において明らかにしているが、このように、何ら落ち度のない被害者の家族が、それぞれの立場で苦しみを抱える毎日を過ごしていることは見過ごすことができない。

被害者及び両親ともに、被告人に対する厳しい処罰感情を明らかにしているが、そのような感情を持つのは至極当然のこととして、理解できる。

3 被告人は、本件犯行前夜、人気のない場所で制服を着た女子高校生を見つけたらレイプしたいと思い、細い道をうろつくなどしていた。本件犯行当日も同じように、レイプできそうな女子高校生を目当てにして犯行現場付近の細い道をうろついていたところ、自転車に乗った女子高校生である被害者を見かけるや、先回りをして車を止めて待ち伏せし、車内に積んでおいた目出し帽、ゴム手袋及びローションを出し、目出し帽をかぶり、両手にゴム手袋をはめ、ローションをポケットに入れて、自転車で近付いてきた被害者に対し、判示の暴行脅迫を加えたものである。このような被告人の行動からして、本件が計画的犯行であることは明らかである。

暴行脅迫の態様は、自転車に乗っていた被害者の身体を両手で押して自転車もろとも路上に転倒させた上、夜間、人気のない暗い場所で、「静かにしろ。声出すな。」などと言い、また、被告人の供述によれば、「殺すぞ。」などと強い口調で言ったというのであり、被害者に強い恐怖を与え

る悪質なものである。被告人から上記の暴行脅迫を加えられ、声を出したら殺されてしまう、静かにするしかないという気持ちになった被害者の様子を見て、被告人は、レイプをするときには、もっと騒がれるのではないかと思っていたが、案外と簡単におとなしくなるものだったなどと述べ、被害者の顔を観察するなどしながら本件犯行を敢行したものであって、非情というべきである。また、被害者に対し、無理やり口淫させ、乳房を揉むなどの陵辱行為も加えており、被害者の人格を無視した卑劣かつ悪質な犯行である。

弁護人は、被告人が被害者を妊娠させては可哀想と思って膣外射精したことを、被告人が、わずかながら、良心を保っていたことの現れとして主張する。しかしながら、仮に弁護人が主張するとおりであったとしても、結果の重大性や行為態様の悪質さからすれば量刑上考慮に値しない事情である。

4 被告人が本件犯行に及んだのは、つまるところ、自己の性欲をみたすためであって、このような動機に酌むべき点は全くない。

弁護人は、本件犯行当時、職場での人間関係、交際していた女性との別れ、経済的行き詰まりから抱え込んでいたストレスが、被告人の正常心を失わせ、空想の世界にあった強姦願望が表に出てきてしまった旨主張する。

しかしながら、そのようなストレスがあったとしても、強姦願望といったものについては抑制が効くのが通常であり、またそうでなければならぬのであって、そもそも本件犯行は、被告人が自認するとおり、女性を性欲のはけ口として見るという被告人の歪んだ女性観に基づくものというべきで、そこに何ら同情の余地はない。

5 被告人は、犯行後、被害者の名前や学校名を聞いた上、被害者の家を知っているなどと言って口止め工作をしており、被害者はそのために事件後もおびえる生活を送っているものであって、犯行後の行動も悪質である。

6 本件犯行が前記のような被告人の歪んだ女性観に基づくものであり、また、被告人が、平成 22 年

2 月ころ、制服を着た女子高校生の体に触ろうとしてその自転車の前に立ちふさがったが、大声を出されたため逃げたという事件を起こしながら、その約3か月後に本件犯行に及んでいることをも併せ考えると、被告人に前科がないことを考慮しても、再犯のおそれは高いというべきである。

7 被告人は、事実を認め、どんな刑にも服するなどと述べ、被害者らに対する謝罪の言葉を述べている。しかしながら、被害者に宛てた手紙（ただし、受け取りは拒否されている。）では、被害者に対し、カウンセリングを受けることを勧めるなど、被害者に苦しみを与えた張本人が書くとはおよそ思われない自己中心的な内容を記載しており、被害者やその両親の気持ちに真に思いを至らせた謝罪とは到底いえないものである。このように、被告人は、本件犯行が被害者やその両親に与えた影響の大きさを理解していないというほかない。また、犯行に至った原因や女性観を含め、自分自身と十分に向き合っているとは認められず、その反省は深まっていない。

8 一方、被告人の父親が示談金を準備し、これまで150万円の弁償の申入れをしていること、父親が情状証人として出廷し、社会復帰後の被告人の監督を約束したことは、被告人のために酌むべき事情として指摘できる。

しかしながら、具体的な監督態勢が必ずしも明らかでないなど、父親による監督の実効性にはいささか不安が残るといわなければならない。

9 そこで被告人の具体的量刑について検討するに、本件犯行結果が単なる傷害の治療期間では計ることのできない重大なものであることは十分に斟酌されるべきであり、その他計画的犯行であること、犯行態様が卑劣かつ悪質であること、動機や経緯に酌むべき点が全くないこと、犯行後の行動も悪質であること、再犯のおそれは高く、反省も深まっていないことなどの諸事情を考慮すると、懲役8年という検察官の求刑は軽きに失するといわなければならない。被告人の真の更生を図る観点からも、被告人に対しては、主文の刑を科するのを相当と認めたものである。

(求刑 懲役 8 年)

〔予測モデル式からの若干の考察〕

本判決では、懲役 8 年の求刑に対して、懲役 9 年が宣告された。宇都宮地方裁判所は、「本件犯行結果が単なる傷害の治療期間では計ることのできない重大なものであることは十分に斟酌されるべきであり、その他計画的犯行であること、犯行態様が卑劣かつ悪質であること、動機や経緯に酌むべき点が全くないこと、犯行後の行動も悪質であること、再犯のおそれは高く、反省も深まっていないことなどの諸事情を考慮すると、懲役 8 年という検察官の求刑は軽きに失するといわなければならない、被告人の真の更生を図る観点から」懲役 9 年を言い渡した。

では、妥当な判断であったのかを検証するために、予測モデル式に照らして検証してみよう。まず、予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておくと、すべての被害者数については、「(3-①) 強姦」が<1 名> (9.134) , 「(3-②) 強姦未遂」が<なし> (-10.387) , 「(3-③) 強制わいせつ」が<なし> (-13.951) , 「(3-④) 強制わいせつ未遂」が<なし> (-1.615) となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④) 被害結果(傷害)」が<傷害: 全治 2 週間以内> (11.886) となり、その基本スコアは-4.933 となった。

予測モデル式では、予測値を 89.557 と算出した(残差 18.443 [標準化残差: 0.546])。年に換算するとだいたい懲役 7 年~懲役 7 年 6 月というところであり、したがって、懲役 9 年の宣告刑は重く、他方で、懲役 8 年の求刑に対する八掛け(だいたい懲役 6 年~6 年 6 月)では少し軽かったものと解される。本判決でも、前記の東京地立川支平成 24 年 5 月 18 日 LEX/DB25481752 と同様に、再犯可能性の高さが予測モデル式のカテゴリースコアよりも高く評価されていると推察されるが、「懲役 8 年という検察官の求刑は軽きに失する」とまでは評価できるかは疑問の余地が多少あるように思われる(仮に重く評価するのだとしても、「求刑どおり」という判断が適正な範囲内であったように思われる)。それゆえ、予測モデル式に照らして検証する限り、本判決は、刑期が顕著に高く、「外れ値事例」として位置づけられる可能性を

有している。

(4) さいたま地判平成 22 年 5 月 19 日 LEX/DB25442644

【強制わいせつ致傷被告事件】

実績値 : 96	予測値 : 67.291
残差 : 28.709	標準化残差 : 0.851

〔事案の概要〕

被告人は、自転車に乗って通行中の A (当時 19 歳) に強いてわいせつな行為をしようとして、平成 21 年 10 月 1 日午後 10 時 35 分ころ、埼玉県 a 市 b 区 cd 丁目 e 番 f 号南側路上において、同人の左腕をつかんで引っ張り、同人を自転車から降ろし、手で同人のショーツをスカートごと引き下ろし、さらに同人を仰向けに押し倒すなどの暴行を加え、その膣内に手指を挿入するなどし、もって強いてわいせつな行為をし、その際、同人に全治約 8 日間を要する右肘挫傷等の傷害を負わせた。

〔量刑の理由〕 懲役 8 年

さいたま地方裁判所は、本件の量刑に関し、以下のようない理由を示した。

1 不利な事情

(1) 経緯、動機・目的

被告人は、犯行当日、原動機付自転車を運転して勤務先に向かう途中、たまたま、自転車で走行中の被害者を認め、痴漢行為の対象と定め、被害者の嫌がる反応による快感を味わいたいなどという自己の特異な性的嗜好に基づく欲求を満たすため、直ちに同女の後をつけて本件犯行に及んだものであって、その経緯及び動機・目的は短絡的かつ自己中心的であって酌量の余地は全くない。

(2) 行為態様

被告人は、夜間、人通りの少ない路上において、自転車に乗った被害者の右横から原動機付自転車で追い抜きざまに被害者の右乳房を左手で鷲掴みにして揉んだ。そして、逃げようとする被害者に対し、その自転車の前かごを掴んでこれを止めさせ、右手で被害者の左腕を掴んで引っ張り、被害者を自転車から降ろし、右手を被害者のスカート

内に差入れて陰部を触り、ショーツをスカートごと太ももの上辺りまで引き下ろした。被告人は、前屈みになってしゃがみ込むようになった被害者を仰向けにコンクリートで舗装された路上に押し倒し、右手で被害者の首を押さえ付けながら、両足を閉じて抵抗している被害者の陰部を左手で触り、その手指を膣内にこじるようにして挿入した。

このような犯行態様は、手慣れた執拗なものであり、また、幸い全治期間としては比較的軽微な傷害で済んだとはいえ、より大きな傷害結果をも生ぜしめかねない粗暴かつ危険な行為であって、悪質である。

(3) 結果

被害者は、被告人の暴行によって、全治約8日間を要する右肘挫傷、右第5指切傷の傷害を負ったものであり、全治期間だけを取り上げれば重大なものとはいえないとしても、その部位及び被害者の年齢などを考慮すれば決して軽微なものということとはできない。

また、被害者は、夜間、路上を通行中に、見知らぬ男に突然追い抜きざまに襲われ、上記のように危険な暴行を受け、また、乳房を鷲掴みにして揉まれたり、下着を着衣ごと引き下ろされて仰向けに倒されて、手指を膣内に挿入されるなどの執拗なわいせつ行為を受け、「レイプされて殺されてしまうと考えると、本当に恐ろしい思いをした」旨述べているなどその恐怖・屈辱感・絶望感が大きかったことは明らかである。事件後も、初対面の男性に恐怖心を抱いたり、バイクのエンジン音に過敏になってしまうなど大きな精神的苦痛を負っている。被告人からは謝罪文が検察官を通じて送付されているが、被害弁償などの措置は何ら果たされておらず、被害者が「できる限り長い間刑務所に入ってもらいたい」旨述べて厳重処罰を求めているのも当然である。

本件結果は大きい。

(4) その他

被告人には、上記の累犯前科を含め、平成9年以降、やはり強制わいせつ罪、同末遂罪といった同種前科が4件あり、いずれも服役している。そして、

服役しても出所後約1年程度経過すると同じ態様の犯罪を繰り返し、本件も前刑を終えて社会復帰後約11か月で再び全く同じ態様の犯行に及んでいる。さらに、被告人自身の当公判廷における言葉によっても、それ以外に相当数の同種類事案があるという。そうすると、本件は被告人の独特の性的嗜好に基づくものであり、その常習性は顕著である。被告人のこの種事案についての規範意識は極めて乏しいと評価せざるをえず、被告人の抱える問題は相当に根深く深刻なものである。しかも後記のとおり、情状証人となった養父がいるとはいえ、適切な監督者がいるとはいえない。

したがって、被告人が今後カウンセリングや治療を受けて更生していく意思を当公判廷において表明していることを考慮しても、現時点においては、被告人の再犯可能性は非常に高いというほかない。

本件のような路上における通り魔的なわいせつ犯罪は、周辺住民らに与える不安が大きく、このような点も軽視することはできない。

2 有利な事情

(1) 被告人の養父の存在

被告人には、以前の本件同種事案で身柄拘束中に知り合って、平成21年5月に養子縁組した養父があり、その養父が、被告人を案じて情状証人として出頭している。ただし、この養子縁組の経緯には理解し難いものがあつたり、さらに、これまでの被告人との関わり及び養父の身上関係などからすれば、今後の監督の実効性については疑問があり、かえって、被告人に対して甘えを許す素地がないではない。そうすると、この点を被告人にそれほど有利な事情と考えることはできない。

(2) 被告人の反省や謝罪

被告人は、謝罪文を作成し検察官を通じて被害者に送付したり、反省文を作成したりしている。また、当公判廷においても、「今回は今までとは異なり、被害者を思いやることができた。今後は二度と犯罪を繰り返さない」旨述べるなど謝罪や反省の弁を述べている。こうした言葉に嘘はないと信じたいが、被告人が一部被害者の言い分と整

合しない供述をしながらも謝罪文や反省文を作成した経緯が必ずしも明らかではないこと、また、前回の法廷でも同様の反省や謝罪の言葉を述べ、そのことについて、被告人自身、「前回の裁判までは、刑を軽くするために口から出任せのその場限りの言葉を言っていた」旨述べていることなどからすれば、社会復帰後に、当公判廷におけるそうした言葉に基づいた行動を実践していけるかは甚だ心許ない。そうすると、この点も被告人のためにそれほど有利な事情とみることはできない。

(3) また、弁護人は、被告人が何度も服役したにもかかわらず繰り返し同種の犯行に及んでいることなどからすれば性依存症であり、被告人にとっては長期間の服役よりも治療が必要である旨主張する。しかし、そもそも被告人が性依存症であると証拠上認定することはできない上、裁判所としては、被告人において、まず自らの犯した罪に対する責任としての服役を果たし、その後に、必要があれば医師による診断を受けて適切な治療を受けることを期待するものであって、弁護人の主張を採用することはできない。

3 結論

以上の事情を総合考慮すると、検察官は被告人を懲役 7 年に、他方、弁護人は前刑同様に懲役 3 年に処すべきとの意見を述べるが、本件犯情の悪さ及び被告人の再犯可能性の高さなどに照らし、主文の刑を量定するのが相当と判断した。

(求刑 懲役 7 年)

[予測モデル式からの若干の考察]

本判決では、懲役 7 年の求刑に対して、懲役 8 年が宣告された。さいたま地方裁判所は、「検察官は被告人を懲役 7 年に、他方、弁護人は前刑同様に懲役 3 年に処すべきとの意見を述べるが、本件犯情の悪さ及び被告人の再犯可能性の高さなどに照らし」て、懲役 9 年を言い渡した。

では、妥当な判断であったのかを検証するために、予測モデル式に照らして検証してみよう。まず、予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく

と、すべての被害者数については、「(3-①) 強姦」が<なし> (-38.333)、「(3-②) 強姦未遂」が<なし> (-10.387)、「(3-③) 強制わいせつ」が<1 名> (5.298)、「(3-④) 強制わいせつ未遂」が<なし> (-1.615) となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④) 被害結果(傷害)」が<傷害: 全治 2 週間以内> (11.886) となり、その基本スコアは 33.151 となった。

予測モデル式では、予測値を 67.291 と算出した(残差 28.709 [標準化残差: 0.851])。年に換算するとだいたい懲役 5 年 6 月～懲役 6 年というところであり、したがって、懲役 8 年の宣告刑は重く、他方で、懲役 7 年の求刑に対する八掛け(だいたい懲役 5 年 6 月～懲役 6 年)が妥当な宣告刑であったと解される。本判決でも、前記の東京地立川支平成 24 年 5 月 18 日 LEX/DB25481752、宇都宮地判平成 23 年 2 月 3 日 LEX/DB25470407 と同様に、再犯可能性の高さが予測モデル式のカテゴリースコアよりも高く評価されていると推察されるが、やはり「求刑超え」が妥当な判断であったのかは疑問の余地が多少あるように思われる(仮に重く評価するのだとしても、「求刑どおり」という判断が適正な範囲内であったように思われる)。それゆえ、予測モデル式に照らして検証する限り、本判決は、刑期が顕著に高く、「外れ値事例」として位置づけられる可能性を有している。

4.3.2. 求刑を大幅に下回った事例 (<0.50)

(1) 熊本地判平成 28 年 6 月 29 日 LEX/DB25543554【強姦、わいせつ誘拐被告事件】

実績値 : 48	予測値 : 59.585
残差 : -11.585	標準化残差 : -0.343

[事案の概要]

被告人は、当時 17 歳の被害者を強姦しようと考え、平成 27 年 2 月 15 日午前 5 時 37 分頃から同日午前 6 時 30 分頃までの間、熊本市 α 区 β × 丁目 × 番 × 号に在るホテル(以下「本件ホテル」という。)の客室において、被害者に覆い被さり、腕を掴むなどして、抵抗することが著しく困難な状態にさせて性交した。

〔一部無罪の理由〕

1 平成 27 年 10 月 19 日付け起訴状記載の公訴事実の要旨

平成 27 年 10 月 19 日付け起訴状記載の公訴事実（わいせつ誘拐、強姦）の要旨は、被告人が、B（当時 16 歳。以下「告訴人」という。）及びその友人を自らが運転する自動車に乗車させて走行していた際、告訴人を誘拐して強姦しようと考え、平成 26 年 11 月 24 日午前 2 時頃から午後 3 時頃までの間、熊本市 A 区内のタクシー乗り場に停車中の同車内において、前記友人に対し、嘘を言って同車から降車させた上、同車を発進させて告訴人を同所から被告人方まで連れ去り、同所において、告訴人を押し倒して覆い被さり両手首を押さえつけた上で、「声出したら中出しするぞ。」などと言い、同女が抵抗することが著しく困難な状態にさせて性交したというものである。

2 強姦の点について

(1) 争点及び判断の分岐点

弁護人は、被告人は告訴人に対して、上記 1 の暴行脅迫（以下「本件暴行脅迫」という。）を行っていないと主張する。関係証拠上、被告人と告訴人が被告人方で性交したことは明らかであるものの、被告人と性交したのは本件暴行脅迫を受けたからであるという告訴人の供述と、告訴人と性交したのは告訴人が承諾したからであるという被告人の供述とが対立している。したがって、告訴人に対する強姦罪の成否に関する争点は飽くまで本件暴行脅迫の有無であり、その判断の分岐点は、主として、被告人から本件暴行脅迫を受けた旨の告訴人の供述の信用性であり、検察官がそれを支える証拠と位置付けている被告人が告訴人の父との間で取り交わした念書（以下「本件念書」という。）の証明力も問題となる。

(2) 告訴人供述の信用性

ア 被害申告の状況との整合性について

(ア) 告訴人が、被告人から本件暴行脅迫を受けたことによって性交したとすれば、性交状況の細部はともかく、被告人と性交したことや、それが被告人から暴行や脅迫を受けたことによるものであったことという被害の核心部分については、明確に認識するはずであり、その記憶が直ちに曖昧になるとは考え難い。

ところが、友人等に対する被害申告の内容は、強姦被

害があったとされる直後の時期にされたものであるにもかかわらず、曖昧である。すなわち、告訴人は、強姦被害があったとされる平成 26 年 11 月 24 日の夕方頃、友人の D からの安否を確認する LINE のメッセージに対し、被告人に何かされたのかもしれないがよく覚えていない旨のメッセージを送っている。また、告訴人は、その 2 日後である同月 26 日に受診した産婦人科の医師に対し、強姦されたとは断言していないとみられるのである（甲 44（P2 医院作成の告訴人の診療録）・3 丁の「主訴」欄に「11/23～11/24－rape？」とあり、末尾に「？」が記載されているところ、これは、告訴人が医師に対してレイプされた可能性があるとは述べつつも、レイプされた旨を断言しなかったためであると考えられる。）。この点、強姦被害に遭ったことを隠そうとして意図的に曖昧な申告をした可能性があると考えられることでもできそうである。しかし、告訴人が強姦被害に遭ったことを隠したのであれば、D には、何らかの被害に遭ったかもしれないなどと曖昧な答えをする必要はなく、単に大丈夫だったとだけ答えておけば足りるし、産婦人科医師にも、妊娠等を懸念していたとしても、強姦被害に遭った可能性があることまで説明する必要はない。

そうすると、告訴人が前述したような曖昧な被害申告をしていることは、強姦被害に遭った者の言動としていささか不自然であり、告訴人が、公判廷において、自己の認識して記憶したことをありのままに供述しているのかにつき疑問を持たざるを得ない。

(イ) 他方、告訴人は、被害に遭ったとされる当日のうちに父母や友人に対して公判廷で供述したと同様の被害を申告している旨供述する。しかし、上記 (ア) のような被害申告の状況に照らせば、告訴人が父母らに対して公判廷で供述したような被害申告をしているのかについてはそもそも疑問があるが、その点は措くとしても、父や友人の供述等を検討すると、そうした疑問は一層強くなる。

a まず、告訴人は、平成 26 年 11 月 24 日の夕方頃に被告人に父親宅周辺まで送ってもらっている最中か到着後のいずれかの時期に、友人である E に電話を掛け、被告人から 3 回姦淫された旨を話したと供述する。

確かに、E も、同日の午後 4 時か 5 時頃に、告訴人から電話が掛かってきて、「車の中にいる。」、震えた声

で泣きながら「もう嫌だ。」などと言っているのを聞いた旨供述する。しかし、E は、告訴人がずっと「もう嫌だ。」という言葉の繰り返していたが、告訴人の口から被害の内容を聞いたことはなく、被告人宅で告訴人と被告人との間で何があったのかについて、現在も知らない」と供述する。検察官も指摘するとおり、E 供述の信用性に疑問はないが、E の供述は、E に対し具体的な被害申告をしたという告訴人の公判供述を裏付ける証拠とはいえず、むしろその日のうちに E に対し姦淫されたことやその回数と話したという告訴人の供述の信用性を疑わせる証拠である。

b 次に、告訴人は、被告人に強姦された後、被告人に父親宅周辺まで送ってもらい、父親宅到着後、父から何をしていたのか尋ねられ、被告人に 3 回姦淫された旨を話したと供述する。

確かに、父も、告訴人が、平成 26 年 11 月 24 日の夕方頃に父親宅に来た際、被告人から無理やり 3 回姦淫された旨を話したと供述する。しかし、告訴人は、父に被害を申告したとき、「そうかみたいな感じで」話を流された」と供述する一方、父は、「そうか」と流すことはなかったし、被告人から姦淫された旨の被害を聞いた後、性交時に抵抗したのか、被告人がコンドームを付けていたのか、被告人の性器をくわえさせられたのかなどを質問していったと供述している。このように、父に対する告訴人の被害申告の状況に関する両名の供述は整合しない部分がある。さらに、父は、被告人の性器をくわえさせられたのかという質問に対して告訴人が首を縦に振ったと供述するが、告訴人は、そもそも被告人からそのような被害に遭ったとは述べていない。そうすると、父の上記供述は、告訴人が供述する被害内容と矛盾している。このように父に対する被害申告の状況に関する両名の供述は、整合しない部分がある上、矛盾する部分まであり、父の供述は、父に対し公判廷で供述したような被害申告をしたという告訴人の公判供述を裏付ける証拠とはいえない。

c さらに、告訴人は、帰宅した平成 26 年 11 月 24 日のうちに、母に対し、レイプされた旨を話したと供述し、父は、刑事告訴に関する告訴人と母の意向を確認したところ、その日のうちに刑事告訴はしないという方針になったと供述する。

しかし、母は、その日の夜、E に対し、「とりあえず妊娠しとらんならいいけどねぇって感じだね」というやや深刻さに欠ける LINE のメッセージを送っているとともに、当日は警察に対する被害申告等をしていない。他方、母は、同月 26 日、告訴人と共に産婦人科医院に赴き、強姦被害に関して事件化するか否かについて告訴人と話し合う前に警察に相談している。このような経緯からすると、告訴人が供述するように、帰宅した同月 24 日のうちに、母に対し、レイプされた旨を話し、刑事告訴に関する意向確認がされたとの事実が存在したかについては、疑問を抱かざるを得ない。母の E に対する LINE のメッセージや、同月 26 日の母の言動は、母に対し、帰宅した日のうちに被害申告をしたという告訴人の公判供述を裏付けるものとはいえず、かえって、そのような事実がなかったことをうかがわせるものである。

(ウ) 以上によれば、告訴人が強姦被害に遭ったとされる直後の言動は、強姦被害に遭った者のそれとして不自然であり、強姦被害に遭ったことを家族らに話した旨の供述については裏付けとなる証拠がないから、告訴人の供述の信用性を肯定することは困難である。

イ 供述内容の自然性及び迫真性について

検察官は、告訴人の供述内容が自然で迫真的であると評価できることが告訴人の供述の信用性を高める事情であると主張している。しかし、供述内容が自然で迫真的であるなどの抽象的な指標によって、その供述の信用性を判断することは困難であるだけでなく危険が伴う。そして、上記アのとおり、告訴人が、公判廷において、被告人との性交状況に関して、自己が認識して記憶したことをありのままに供述しているのかにつき疑問があることからすれば、供述内容が自然で迫真的であることは供述の信用性を高めることには結びつかないというべきである。

(3) 本件念書について

被告人は、平成 26 年 12 月 8 日、告訴人の父と共通の知合いである F と会った際、告訴人に対して「準強姦してしまった事を、認めます。」と記載してある本件念書に署名している。検察官は、被告人が「強姦」を認める念書に署名したと主張するが、そもそも、本件念書の記載を見る限り、告訴人に対する暴行脅迫に関する言及が何らない以上、その記載自体から被告人が告訴人に対す

る暴行脅迫、ひいては告訴人を強姦したことを自認していたと認めることはできない。また、本件念書の作成に至る経緯を見ても、F の供述によっても、被告人が、告訴人との性交が結果的には告訴人の承諾があったとはいえないものであったことを F の誘導によって認めたにとどまっており、被告人が告訴人に対する暴行脅迫を自認したわけではない。さらに、被告人が未成年の告訴人とコンドームを使用せずに性交していることに照らせば、この点について罪の意識を感じて本件念書に署名したと考えることも不可能ではなく、被告人が強姦行為を行ったという意識を有していたから本件念書に署名したと推認することもできない。

以上によれば、被告人が告訴人の父との間で本件念書を取り交わしているからといって、被告人が本件暴行脅迫を行ったと認めることや、告訴人の供述の信用性を肯定することはできない。

(4) 小括

以上によると、告訴人の被害供述の信用性を肯定することはできず、その他の証拠によっても本件暴行脅迫を認めることはできないから、強姦罪は成立しない。

3 わいせつ誘拐の点

(1) 検察官は、被告人が、告訴人と二人きりになるため、告訴人と共に自動車に乗車していた G に対し、停車して待っているからと嘘を言って降車させた上、同車を発進させて自宅まで連れて行ったことが誘拐の実行行為であると主張している。

(2) しかし、告訴人らの供述によれば、告訴人は、泥酔して公園で嘔吐した後、その場に居た被告人や G に対し、シャワーを浴びたいと自ら話していたこと、それを聞いた被告人が告訴人に対して「シャワーを浴びるとこまで連れて行くから来い。」と言ったこと、その後、告訴人が被告人宅で実際にシャワーを浴びたことが認められる。そうすると、被告人が告訴人を自宅まで連れて行った目的が、シャワーを浴びたがっていた告訴人にシャワーを浴びさせることにあったことは明らかである。

他方、D の供述によれば、被告人が、泥酔していた告訴人を介抱しようとしていた D を告訴人の側から追い払おうとしていたことが認められるから、その後被告人が自宅で告訴人と性交に及んでいることも併せ考えれば、被告人は、G を降車させた時点から、告訴人を自宅に連

れ込んだ後にわいせつな行為に及ぼうと考えていたのではないかと推認することも不可能ではないようにも思われる。しかし、前記のような態度に加え、被告人が告訴人と共に G も乗車させていることに照らせば、被告人がその時点で既に、告訴人と二人きりになってわいせつな行為をしようと考えていたとまで推認することは難しい。また、前記 2 のとおり告訴人が本件暴行脅迫を受けたために被告人と性交に及んだとは認められないことに照らすと、被告人宅での被告人と告訴人とのやりとりの中で被告人が告訴人に対して性交を含むわいせつな行為をすることを考え始めた可能性を排斥することは困難である。

そうすると、被告人が、告訴人を自動車で被告人宅まで連れて行くために G を降車させるための嘘を言ったとまでは認められない以上、誘拐罪も成立しない。

4 小括

以上の次第で、平成 27 年 10 月 19 日付け起訴状記載の公訴事実の点については、犯罪の証明がないことになるから、刑事訴訟法 336 条により被告人に対し無罪の言渡しをする。

【量刑の理由】懲役 4 年

熊本地方裁判所は、本件の量刑に関し、以下のような理由を示した。

凶器を用いない強姦既遂 1 件の事案である本件は、本件暴行自体が強姦の手段たる暴行として比較的軽度なものであるから、性交に至るまでの経緯を踏まえても、性的自由を侵害する危険性が他の強姦事案と比較して高いとはいえない。他方、被告人に性犯罪の前科があり、それが本件犯行後に処せられた罰金刑 1 犯にとどまるとはいえ、被告人の言動からは、女性の心情を思いやることができない自己中心的な性格傾向が顕著であり、この種の行為に対する規範意識が極めて乏しく、被告人の意思決定に対する非難の程度は、他の強姦事案と比較して低いとは到底いえない。そうすると、本件は同種事案の中で中程度の部類に属する事案であると評価できるから、同種事案の量刑傾向を踏まえると、被告人に対しては基本的に懲役 4 年程度をもって臨むのが相当である。

そして、一般情状の中では重要性が一段高い量刑事情である慰謝の措置についてみると、被告人は慰謝の措置を何ら執っていない。しかも、否認して自己の行為を省みる姿勢が全くうかがえない被告人には、その他の酌むべき事情も見当たらない。

(求刑 懲役 10 年)

〔予測モデル式からの若干の考察〕

本判決では、懲役 10 年の求刑に対して、懲役 4 年が宣告された。本件では、もう 1 件の強姦、わいせつ誘拐被告事件が起訴されていたが、この件について、熊本地方裁判所は、無罪を言い渡している（一部無罪事件）。

では、一部無罪となったが、宣告された刑が妥当な判断であったのかを検証するために、予測モデル式に照らして検証してみよう。まず、予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく、すべての被害者数については、「(3-①) 強姦」が<1 名> (9.134) , 「(3-②) 強姦未遂」が<なし> (-10.387) , 「(3-③) 強制わいせつ」が<なし> (-13.951) , 「(3-④) 強制わいせつ未遂」が<なし> (-1.615) となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④) 被害結果(傷害)」が<なし> (-11.612) となり、その基本スコアは-28.431 となった。

予測モデル式では、予測値を 59.585 と算出した(残差 -11.585 [標準化偏差: -0.343])。年に換算するとだいたい懲役 5 年というところであるが、標準化残差を見る限り、懲役 4 年の宣告刑は適正な範囲内であったと解される。よって、本判決は「外れ値事例」とは評価できない。

(2) 名古屋地判平成 27 年 6 月 26 日 LEX/DB25540835

【強姦致傷、銃砲刀剣類所持等取締法違反被告事件】

実績値 : 36	予測値 : 23.159
残差 : 12.841	標準化残差 : 0.380

〔事案の概要〕

第1 被告人は、夜間に一人で歩いていた女性を強姦しようと考え、平成 27 年 1 月 26 日午後 10 時 50 分頃、愛知

県内の路上において、A (当時 25 歳) に対し、その背後から両手で体を押さえ付けるなどの暴行を加え、その顔面に向けて電工用ナイフを突き付け、「騒ぐな。騒いだら殺すぞ。おとなしくしろ。」などと言って脅迫し、その反抗を抑圧した上、付近にあった神社の敷地に同人を連れ込んで強姦しようとしたが、同人の悲鳴を聞いた近隣住民が駆け付けたため、その目的を遂げず、その際、上記 A が右手で上記電工用ナイフをつかんで抵抗したことなどにより、同人に通院加療約 6 か月間を要する右中指屈筋腱・指神経断裂、右環指屈筋腱・指神経断裂等の傷害を負わせるとともに、上記暴行脅迫等に起因する重大な精神的ストレスにより、同人に加療期間不詳の心的外傷後ストレス障害の傷害を負わせた。

第2 被告人は、業務その他正当な理由による場合でないのに、前記日時頃、前記路上において、刃体の長さ約 8.9 センチメートルの前記電工用ナイフ 1 本を携帯した。

〔量刑の理由〕 懲役 3 年

名古屋地方裁判所は、本件の量刑に関し、以下のようない理由を示した。

本件は、深夜に帰宅中の若い女性に対して刃物を用いて敢行された通り魔的な強姦致傷の事案である。被告人は、被害女性に対して姦淫行為はもとより何らわいせつな行為をするにまで至っていない上、電工用ナイフも脅す目的で用いたにとどまり、被害女性を傷つける意思はなかった。また、被告人が本件犯行に及んだ背景には、当時の勤務先において過酷な労働環境に置かれていたことに加えて、被告人の勤務条件について強い不満を抱いていた妻が、勤務先に労働環境の改善を申入れるよう被告人に強く迫っており、被告人が妻と勤務先との間で板挟みとなっていたことがあると認められ、被告人がそれらによる過重なストレスを受けて精神的に追い詰められていたとの経緯には同情の余地がある。

しかしその反面、このような経緯に同情の余地があるとはいえ、そのはけ口を身勝手にも無関係な被害女性に向け、その人格や心情を無視した強姦に及ぼうとすることなどおおよそ許されるもので

はなく、また、被告人が性的行為に及ばなかったのは被害女性が抵抗して時間を稼いだ上に近隣住民が駆け付けたためである。また、被告人は、電工用ナイフを突き付けて脅した際に、「騒いだら殺すぞ。」などと強烈な脅迫文言を用いて被害女性に殺されるかもしれないなどと恐怖心を抱かせた上、本件犯行の1か月くらい前から犯意を抱き、姦淫の様子を撮影して口止めをするためのビデオカメラを充電し、電工用ナイフとともに自動車内に積載していたことにも照らせば、本件の態様は悪い。その結果、被害女性は、後遺症が残る可能性もある重大な指のけがを負わされたのみならず、重篤な心的外傷後ストレス障害を発症するなどの大きな精神的苦痛を受け、被害に遭う前のような日常生活を営むことすらできずにおり、謝罪文や被害弁償金の受取を拒絶するなど処罰感情が厳しいのも当然である。

以上のとおり、本件は、経緯に同情の余地があり、性的行為に至っていない上、不運にも被告人のした暴行脅迫の態様に比して重い結果が生じた側面があるとはいえ、行為態様の悪質さや生じた結果の重大さ、それに伴う被害感情の厳しさに鑑みれば、被告人の刑事責任は相応に重く、弁護人が求めるような懲役3年以下とした上でその刑の執行を猶予することが相当な事案ということではない。

もっとも、前述したとおり、被告人がストレスを抱えるに至った経緯には酌むべき事情がある上、何らの性的行為にも及んでいないことにも照らせば、本件は通り魔的な強姦致傷の事案の中では比較的軽い部類に属する事案といえる。その上、被告人は被害者に対して謝罪の言葉を述べるとともに被害弁償金として100万円を現実に準備し、これを超える金額については分割払になっても支払う意欲をみせていること、妻が公判廷において被告人の社会復帰後も監督していくとともに、被告人が本件犯行に及ぶ端緒の一因となった被告人に対する接し方を改めていくと誓っていること、被告人には異種罰金前科1犯のほか前科前歴がないこと、真摯に反省しており更生していく旨誓ってい

ることなど、酌むべき事情も認められる。これらの事情を併せ考慮すれば、被告人に対する本件の刑としては、強姦致傷罪の法定刑の最下限では重過ぎるから、酌量減軽をした上、主文の刑に処するのが相当である。

(求刑 懲役7年)

〔予測モデル式からの若干の考察〕

本判決では、懲役7年の求刑に対して、「被告人がストレスを抱えるに至った経緯には酌むべき事情がある上、何らの性的行為にも及んでいないことにも照らせば、本件は通り魔的な強姦致傷の事案の中では比較的軽い部類に属する事案といえる。その上、被告人は被害者に対して謝罪の言葉を述べるとともに被害弁償金として100万円を現実に準備し、これを超える金額については分割払になっても支払う意欲をみせていること、妻が公判廷において被告人の社会復帰後も監督していくとともに、被告人が本件犯行に及ぶ端緒の一因となった被告人に対する接し方を改めていくと誓っていること、被告人には異種罰金前科1犯のほか前科前歴がないこと、真摯に反省しており更生していく旨誓っていることなど、酌むべき事情も認められる。これらの事情を併せ考慮すれば、被告人に対する本件の刑としては、強姦致傷罪の法定刑の最下限では重過ぎるから、酌量減軽をした上、主文の刑に処するのが相当である」として、懲役3年が宣告された。

では、妥当な判断であったのかを検証するために、予測モデル式に照らして検証してみよう。まず、予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておく、すべての被害者数については、「(3-①)強姦」が<なし>(-38.333)、「(3-②)強姦未遂」が<1名>(-18.143)、「(3-③)強制わいせつ」が<なし>(-13.951)、「(3-④)強制わいせつ未遂」が<なし>(-1.615)となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④)被害結果(傷害)」が<傷害:全治不明>(-23.387)となり、その基本スコアは-59.143となった。

予測モデル式では、予測値を23.159と算出した(残差12.841〔標準化偏差:0.380〕)。年に換算するとだいたい懲役2年というところであるが、標準化残差値を見る

限り、懲役 3 年の宣告刑は適正な範囲内であったと解される。だが、本件では、被害者に「通院加療約 6 か月間を要する右中指屈筋腱・指神経断裂、右環指屈筋腱・指神経断裂等の傷害」とともに、「暴行脅迫等に起因する重大な精神的ストレスにより、同人に加療期間不詳の心的外傷後ストレス障害の傷害」といったとても重い傷害を負わせており、その結果の考慮が適正であったのかは慎重に検証されなければならないものと思われる。予測モデル式においても、「(1-④)被害結果(傷害)」・「<傷害：全治不明>のカテゴリースコアがマイナス方向に引っ張られているのは適正值と言えず、仮に<傷害：全治 6 か月以内>(36.956)を当てはめたならば、予測値は 83.502 になり、だいたい懲役 7 年となる。犯行に至る経緯において同情の余地があり、姦淫行為は未遂であったにせよ、傷害結果に対する帰責は軽きに失していたものと解される。よって、本判決は、刑期が顕著に軽く、「外れ値事例」として位置づけられる可能性を有している。

(3) 那覇地判平成 16 年 7 月 8 日 LEX/DB28105104【強姦未遂、器物損壊被告事件】

実績値：12	予測値：24.422
残差：-12.422	標準化残差：-0.368

【事案の概要】

第 1 被告人は、平成 14 年 11 月 2 日午前 1 時 50 分ころ、沖縄県具志川市<以下略>先路上付近に停車した普通乗用自動車内において、P6(当時 40 歳)に対し、その頭部を掴んで自己の下腹部に引き寄せるなどの暴行を加え、その反抗を著しく困難にした上、強いて同女に対し口淫させようとしたが、同女に抵抗されたため、その目的を遂げなかった。

第 2 被告人は、同日同時刻ころ、前記場所において、前記 P6 所有の携帯電話機 1 台(時価 2000 円相当)を河川に投棄して使用不能にし、もって、他人の器物を損壊した。

【公訴事実第 1 につき、強制わいせつ未遂の限度で事実を認定した理由】

第 1 本件の公訴事実第 1 の内容と弁護人の主張

本件の公訴事実第 1 は、次のとおりである。

「被告人は、平成 14 年 11 月 2 日午前 1 時 30 分ころから同日午前 1 時 50 分ころまでの間、沖縄県具志川市<以下略>〇〇番〇〇号及び同市<以下略>先路上に停車した普通乗用自動車内において、P6(当時 40 歳)を強いて姦淫しようとして企て、同女に対し、やにわにその腕を掴んだ上、その身体を同車座席に押さえ付け、その胸部を舐め、陰部に指を挿入し、さらに、そのズボンと下着を引き下ろすなどの暴行を加え、その反抗を抑圧した上、強いて同女を姦淫しようとしたが、同女に激しく抵抗されたため、その目的を遂げなかった」

弁護人らは、本件において、強姦未遂を構成する事実はなく、被告人の被害者に対する行為は被害者の合意の下で行われた旨主張する。

第 2 証拠上認められる事実

関係証拠によれば、次の事実が認められる。

1 被害者は、平成 14 年 11 月 2 日午前 1 時 30 分ころ、被告人から車を止めるように言われ第 1 現場付近で車を止めた。

2 被告人は、被害者の左胸にキスをした。被害者は「やめなさい。」と言ったが、被告人は「I like your act like that.」などと言った。被告人は、被害者の性器に指を入れようとした。その後、被害者は、自分の手を被告人の腕から外し、ドアを開けて、車から出て、車から離れた。その後、被告人も車から出た。

3 被害者は車に戻り、エンジンをかけて発進させた。そして、近くを歩いていた被告人を再び車に乗せた。被害者は、第 2 現場に停車した。同所で、被害者は、被告人に「奥さんはいるの。」などと聞いた。

4 被告人は被害者の手をつかみ、被告人が性交を要求すると、被害者は拒否した。被告人は、被害者の頭部を押さえるなどして自分の方に引き寄せ、被害者に自分の陰茎を舐めろと言った。被害者は拒否し、私はあなたの奴隷ではない。と言った。被告人は、「今からお前は俺の奴隷だ」というようなことを言った。

5 被害者は携帯電話を持ち、警察官を呼ぶと言い、ダイヤルするような仕草を見せたので、被告人は、携帯電話を取上げ、助手席のドアを開け、川に投げた。その後、2 人の間で車のエンジンキーの取り合いになり、被害者がキーを取ったが、キーホルダーについていたマスコット

が外れた。

6 被告人は歩いてその場を立ち去り、帰宅した。

第3 被告人の供述

1 捜査段階の供述

将校クラブを出て歩いていると、本件の女性（以下「彼女」という。）から車に乗って行きますかと声を掛けられたが断った。

P9の車も追い越していき、2台続けて止まると、P9は乗らないかというようなジェスチャーをしたが、手を振って先に行ってくれという合図をした。

その後、メインゲートの見える辺りで彼女に「乗りませんか。」と声を掛けられたので乗った。

財布を助手席のドアの取っ手のくぼみに入れた。

彼女が「もっと楽しい時間を過ごしましょう。」と言ったので、「カラオケバーに行こう。」と言うと、彼女は「カラオケは嫌い。」と言った。そして、彼女に「あなたはP15でしょう。」と言われ、自分は「P5だ。」と言った。

彼女は、自分が行ったことのない場所に車を止めて、ここで友達を待つと言った。

彼女は、「結婚してるの、私もあなたの家に行こうかな、どうして今日は奥さんと一緒じゃないの、彼女は欲しくないの。」と聞いてきた。

彼女は、「リラックスしなさい。」と言いながら、助手席シートをいきなり倒した。私は気分が悪くなり、「やめてくれ。」と言い助手席のドアを開けた。彼女が「車を汚さないで。」と言ったので、車から降りた。

小便をして車に戻ったところ、彼女は運転席のシートを完全に倒し、服のボタンを外していた。彼女は私に体を近づけてきて、右太股をさわりながら、「どうして私のこと好きじゃないの。」などと言い、ズボンのジッパーに手を入れた。私は彼女の腕をつかんで払いのけると、急いでジッパーを閉めた。彼女は、手淫をするジェスチャーをしながら、「これは好きじゃないけど、あなたならやってみてもいいよ。」などと言った。彼女は、服の前を広げブラジャーを見せながら「私のブラ好き、下着と合っているのよ。」等と言った。そのような会話を続け、私が「売春婦と君に違いはあるのか。」と言ったりした。

私は誘惑されたりしたので車から出て歩き始めたが、

彼女は車についてきて「あなたは酔っているでしょ。」などと言った。財布を忘れたことを思い出したので、「返してくれ。」と言ったところ、「車に戻ったら返してあげる。」と言われたので、また車に乗り込んだ。車の中で財布の取り合いになり、私は、「返さないと君の持ち物を投げるぞ。」と言って携帯電話を取って外に投げ投げ、エンジンキーも投げようと思って抜き取った。すると、エンジンキーの取り合いになり、キーホルダーについていたものがちぎれたようだった。彼女は、キーを取り返すと、財布を投げつけた。

財布を拾って車から降り、家に向かって歩き出した。

（なお、これら捜査段階の供述は、被告人自身公判で虚偽である旨供述する。）

2 公判供述

私は、11月1日午後9時ころ、将校クラブでP9と彼女をデートに誘うことについて話した。その際、クラブの閉店後に彼女を連れ出すことについてP9がどう思っているのか彼に尋ねたところ、P9は彼女を誘い出すかどうかというのはあなた自身にかかっていることだというようなことを言っていた。後で、誘ってみてはどうかということも言っていた。

車で駐車場に向かう彼女を見て手を振ると、彼女は車を止めた。一緒にどこかに出掛ける気持ちはあるかと尋ねると、彼女はノーとは言わなかったが、自分はお金をP8まで持っていかなければいけないと言っていた。

その後、P9に声をかけられ、「君たち2人はどこかに行くのかい。」と尋ねられた。私は「分からない。」と答えた。彼は、「自分に話させてくれ。」と言い、「自分たちは書類など処理しなければいけないものがあるから1時ごろP8に来るように。」と言った。

P8の駐車場に行き、車のところに3ないし5分ほどいたが、作業が済んだかどうかを見るためにドアを開け中に入った。階段の踊り場のようなところに行き、大声を出したら、彼女が左側の事務所から出てきた。出掛けていつて何か一緒にしないかと尋ねると、彼女は「はい。」と答えた。すると、P9が出てきて、「2人ともどこに行くか決めたかい。」などと尋ねた。そして、MPのパトロールの車が近くまで来て止まった。P9は怒ったような声でもうここにはいない、どこかに行かなければいけないということを言った。私は、P9がMPのパトカ

一が来た後、そのような態度をとったのは、従業員でない者が立ち入っているのが規則違反になるからかと思った。私はドアから外に出て駐車場に行き、1分もしないうちに彼女が出てきて一緒に車に乗った。

私はカラオケに行きたいと言ったが、彼女は、「カラオケには行きたくない。翌日仕事がある。」と言っていた。彼女は、どこか静かな場所で話し合い、もっとよく知り合いたいと言った。

彼女は、第1現場付近（彼女が捜査段階で指示した場所より東南方向）に車を止めた。しばらくは、軽いジョークを言ったり、一つのことを言ったら次にまた会話がつながっていくというような形で話があった。

その後で、キスをしたりあるいはお互いに触れたりした（英語で、「**making out**」という。）。私は、シートを倒したり、シートベルトを外したり、車のドアをロックしたりはしなかった。ベストを外したのは彼女で、ブラウスのボタンは2人で外した。自分がブラジャーをまくり上げたが、抵抗しなかった。私は、彼女の乳房を舐めた。互いに触れ合っているという流れで彼女の体の部分の下の方に自分の手が触れた。それに対して、彼女は、駄目とかやめてとか言っていたが、特に大声を上げて拒否するというのではなく、初めてのデートでは嫌よというようなことを言った。彼女が手足を激しくばたつかせるなどして抵抗したことはなかった。私はやめた。

その後、彼女は運転席の側から車の外に出た。

私は、P23と名乗り、P15とは言っていない。

私も車の外に出て、歩いて帰ろうとした。間もなく彼女が車に戻って、車を運転して私のところにきて、車に乗るように言った。

自分は車に乗って、彼女は車を運転して、その付近の別の場所に車を止め、話をしたいということだった。

そこでも、私が彼女に手を触れて、自分の手が彼女の腰よりも下のほうに行くと、彼女は、「やめて、私はそのような種類の女性ではない。」と言った。私は、彼女は、ノーというが、5分後になるとまた同じような状況になってしまうので、ゲームをしていると思った。

私は苛々して金を払えばやるんだろうとか、バーで働いているフィリピン人ではないかとか、奴隷だというような言葉を言った。彼女は、「そんな類の女ではない。自分は奴隷ではない。」と言った。私は、彼女に性交を

求めたが、彼女はノーと言った。彼女は初めてのデートではそんなことはしないとやったので、私は、これは2回目のデートなんだと言った。

私は彼女の頭を押さえて陰茎を舐めろと言った。その時点ではもう既に性交渉をするというようなムードでは全くなくなっていた。

彼女が咬むと言ったかどうかは覚えていない。

彼女は「出ていきなさい。」と言った。私は、「いや、自分は歩いては帰らない、あなたは私を車で送っていくんだ。」と言った。そこで彼女は携帯電話を取り出して警察官を呼ぶと言い、ダイヤルをするような仕草を見せたので、私は、その携帯電話を取って窓から投げ捨てた。

彼女が、車から出ていこうとしたと思ったので、鍵を取って自分で運転しようと思った。彼女は、それをさせまいとして2人の間で鍵の取り合いがあった。

自分は車から出て家に歩いて帰った。

第4 本件の争点

本件において、被告人が被害者の胸部をなめたこと、被告人が被害者の頭部を押さえるなどして自分の方に引き寄せ、被害者に自分の陰茎を舐めろと言ったことは明らかである。

また、本件において、被告人が被害者の腕を掴んだこと、陰部に指を挿入しようとしたこと、被害者のズボンと下着を引き下ろそうとしたことについて、被害者は公判において、これを認める供述をしている。被害者は、公判段階においては、被告人に対する処罰意思がなかったことは明らかで、被害者が公判において、意図的に被告人に不利益な虚偽供述をすべき事情は認められないことに照らすと、その供述は信用できる。よって、上記事実も被害者の公判供述により認定できる。

更に、本件において、被告人が被害者に対し性交を求めたものの、被害者がこれを拒否し、行われていないことは、証拠上明らかである。

被告人は、性交実現に向けた被告人の一連の行為について被害者の合意があり、従って被害者の意思に反して性交を行おうとしたものではないから、強姦未遂に当たらないと主張している。

そこで、前記被告人の行為が強姦未遂の実行行為に当たるか、被害者は、被告人の行為について同意していたか、被告人は、被害者の同意があるものと認識していた

か否かが問題となる。

第5 争点に対する判断

1 被害者供述の信用性について

被害者の意思に反する強姦未遂の犯罪事実を直接基礎づける証拠は被害者の捜査段階の供述（甲 4, 5, 7）及び公判供述の一部であるから、その信用性について検討する。

（1）信用性判断についてプラスに働く点

〔1〕被害者の体には、被告人が有形力を行使した痕跡があったこと

関係証拠によれば、被害者の腕及び首の後ろには、本件直後に発赤があったことが認められ、被告人が被害者の腕及び首の後ろにある程度の力を加えたことが推認できる。

〔2〕被害者は被告人の行為を拒否する態度を示していること

被害者は、被告人が被害者の性器に指を入れようとするのに対し、やめなさいと言ったり、ドアを開けて、車から出ており、その後も性交を求められたのを拒否している。

〔3〕被害者は、携帯電話を取り出し、警察に電話すると言ったところ、被告人は携帯電話を取り上げ、ドアを開けて川に投げたこと

被害者は、米海兵隊将校であることを認識していた被告人に対して、携帯電話で警察に電話する意図を示す必要があった状況、すなわち、被害者の意思に反して性的行為を強要した可能性が窺われる。

〔4〕被害者は、本件後米軍基地のゲートに赴き、憲兵隊員に対し、英語で、レイプされそうになった、男に腕を掴まれ怪我をしたなどと言って、手首あたりを見せたこと

〔5〕被害者は、被告人と本件当日以前に、声を交わしたことはなく個人的な交際はなかったこと

〔6〕小括

以上の諸点のみに照らすと、被害者は被告人の行為を承諾しておらず、被告人は、被害者の意思に反して、相当程度の有形力を行使して本件行為に及んだとの被害者の供述は信用できるともみられる。

（2）信用性判断についてマイナスに働く点

〔1〕当初、車に乗せた経緯についての被害者の供述には、

憲兵隊員 P12 の供述に反している点があることなど

被害者は、検察官調書及び公判廷において、P8 から出た駐車場のところで被告人が待っており、何度も送ってくれと頼むので被告人を乗せたと供述し、被告人は、P8 の中に入ると被害者が出てきて、出掛けることに同意し、次に P9 が出てきて話していると、憲兵隊のパトロールの車が来て止まったので、P9 は怒ったような様子になり、自分が先に駐車場に出て、後から被害者が出てきて車に乗ったと供述する。

この点、P12 は、公判において、P8 のホールで被告人と被害者が話しているのを見た供述している上、捜査段階においても被告人がそのホールにいた旨供述している。P12 は、アメリカ海兵隊の憲兵であり、特に捜査段階において被告人に有利な虚偽の供述をすることは考えられず、その供述は信用できるものである。

被害者の供述は、これに反することになる（また、被告人が、P9 が自分に対して怒っているのではないかと気にしていたことは、被害者も同様の供述をしているところ、被告人の、憲兵隊のパトロールに自分たちの様子を見られたことが原因で P9 が不機嫌になったと思うという供述も、深夜に従業員以外の者が P8 内に立ち入っていることに照らすと、あながち不自然ではなく、これらの点に、将校クラブでの被告人と P9 の会話の内容を勘案すれば、同ホールで 3 者による会話が持たれ、被害者もその時点で被告人を車に乗せること自体は了解していたものと認めることができる。）。

〔2〕被告人が被害者の胸部をなめたこと、被害者の腕を掴んだこと、陰部に指を挿入しようとしたこと、被害者のズボンと下着を引き下ろそうとしたことなどは、ペッティングや男女間の強姦に至らない性行為においてもみられるものであること

また、男性が女性の腕及び首の後ろにある程度の力を加え、女性の腕及び首の後ろに発赤が生じるということも、強姦に至らない性行為においてもみられることは否定できない。〔3〕被告人が、姦淫行為に向けて、被害者の意思に反して被害者の着衣を外し、胸を舐めるなどに及んだとすると、被害者の着衣にボタンの欠落等何らの破損も認められないのはいささか不自然であること

すなわち、被害者の供述のとおり、被告人がその右手で抵抗する被害者の両手を押さえつけたうえ、左手で被

害者のシャツ及びチョッキのボタンを、これら着衣に破損を生じることなく順次外すというのは困難と見られるものである。

〔4〕その後、被害者は、被告人を突き飛ばして車外に出て、暗い人気のない道を裸足で走るなどしてようやく強姦被害の難を逃れたというのであるのに、また車に戻り、謝っているとはいえ、被告人を再び車に乗せたうえ、被告人の言うがままに第 1 現場からわずかしき離れていない本件第 2 現場に車を停めて会話を始めるなどということは、当初から全く自己の意に反する行為をなされた性犯罪被害者の行動としては不自然ともみられること

〔5〕被害者はやめなさいと言ったり、被告人は、被害者の性器に指を入れようとした後、被害者が、ドアを開けて、車から出たことは認められるが、これは、被害者がいわゆるペッティングについては、承諾していたとしても、性行為に直接結びつく行為については強く拒否したとして理解することも可能であること

〔6〕当初、ある程度の性的行為については明確に拒否をしていなかった被害者が、被告人が性交を要求したところ、これを拒否し、被告人が、被害者の頭部を押さえるなどして自分の方に引き寄せ、被害者に自分の陰茎を舐めろ、今からお前は俺の奴隷だというようなことを言い、更に、被害者が携帯電話を持ち、警察官を呼ぶと言ったところ、被告人が、携帯電話を取って、川に投げたような場合、被害者が一連の経緯についてレイプされそうになったと言って届け出ることは不自然ではないこと

〔7〕被害者が被告人に対する怒りのあまり、捜査段階においては、被告人の前記ペッティング行為を明確に拒否しなかったことを秘したうえ、被告人からの性交の要求自体を取り上げてこれを強姦未遂であったと事実を誇張して供述していた疑いも否定できないこと

被害者は、公判において、犯行直後に、警備員に被害を申告した際、強姦されそうになったと言ったが大げさだった、真実を告げたら信じてくれないと思った、ガードが信じてくれず、怒りを覚えたと言っており、その際対応した P12 も、被害者の様子について、怯えている様子はなかったが、怒っているような感じがした旨供述しており、被害者が被告人に対する怒りのあまり、捜査段階においては、被告人の前記ペッティング行為を明確に拒否しなかったことを秘したうえ、被告人からの性交

の要求自体を取り上げてこれを強姦未遂であったなどと事実を誇張して供述していた疑いも否定できないものである。

〔8〕被告人の行為に対する被害者の捜査段階の供述には不自然な点があること

検察官調書においては、被害者は、被告人が被害者のズボンとパンティを太股辺りまで脱がせ、自分のズボンを太股辺りまで下ろし、自分の性器を被害者の性器に入れようとした旨供述するが、片手で被害者の両手を押さえ、もう片方の手でかかる行為を行うことは容易ではないとも認められ、不自然ともみられる。また、前述した、平成 14 年 11 月 2 日付け告訴調書には、これら具体的な強姦未遂を構成する事実が記載されていないことも、この供述を弾劾する事情であり、被害者のこの点の供述には疑いを入れる余地がある。

〔9〕被害者は、公判においては、被告人から胸を吸われたときなどに抵抗していない旨供述し、起訴後作成した供述書においては、被告人がなした行為は、被害者の同意の下になしたものである旨記載していること

本件起訴後第 3 回公判までの間に被害者が作成した供述書（弁 13, 14）においては、「被告人がなした行為は、私の同意の下になしたものである。その夜彼が私に対してなした乱暴な行為は、被告人が陰茎を舐めるように求めたが、私は拒んだところ、私の両手と腕を掴み、私の体を自分の方へ引き寄せて私の首を掴み私の頭を陰茎の方へ押しつけて舐めろと命令したことだけである。」と記載されている。

〔10〕小括

以上の諸点に照らすと、被害者の捜査段階の供述は、事実より誇張して供述しており、特に、被告人の行った行為やこれについての被害者の内心の動きについての供述の信用性には疑いを入れる余地がある。

2 被告人の供述について

被告人の公判供述中、車の中で、会話した後、キスをしたり、触れ合ったり、彼女の体の下の部分に手が触れた際、彼女は駄目とか言ったが、特に大声を上げて拒否するというのではなく、初めてのデートでは嫌よというようなことを言うだけで、手足を激しくばたつかせるなどして抵抗したことはなく、自分は、強姦をするつもりはなかった旨の部分は、次の諸点に照らすと、必ずし

も不自然、不合理であるとはいえない。

〔1〕被告人が、P9から午前1時ころP8に来るように言われたことは、現に被告人がそのころP8内で被害者及びP9と一緒にいるところを目撃されていることと符合し、そうすると、P9が、被告人が被害者を誘い出すことについて何らかの仲介をすることについての話し合いがあったことを推測することも不合理とも見られない。してみると、本件で被害者がその運転する自動車内に被告人を乗せたのは、被告人と一緒に出掛けようとの誘いに応じてのものであった可能性は否定できない。特に、深夜、単に自宅に送ってもらうためだけに、被告人がわざわざ数十分程度も待つて、女性である被害者の車に乗せてもらうというのは、不自然であり、被害者も被告人の意図を了解していると被告人が考えたというのは不合理ではない。

そうだとすると、その後、車内で、雑談の後、被告人のいうところのいわゆる *maiking out* が行われ、被害者が真に拒否抵抗するのではなく（拒否の姿勢を取るのとは一種のゲームあるいはポーズと理解できる状況で）、キスや胸を舐めるなどのペッティング行為がなされたという被告人の供述も、それ自体必ずしも不自然と言うことはできないものである。

〔2〕被告人が二度にわたって被害者の車に乗り込んで、被害者の意思に反してまで姦淫しようとしていたとすれば、たとえ被害者が激しく抵抗したとしても、現役軍人である被告人と小柄な女性である被害者との体力差を考える限り、夜間人影のない路上において、密室である車内での姦淫行為の遂行は困難ではなかったと考えられる。よって、被告人としては、被害者が真に拒否する状況で暴行脅迫を加え性交を持とうとまでは考えていなかったことが推認できる。

〔3〕検察官は、被告人の捜査段階の供述と公判における供述には変遷があり、その変遷に合理的理由が見い出せないと主張する。

しかし、被告人の公判供述を前提とすれば、被告人の行為は妻子を有する被告人が、妻以外の女性といわゆる婚外の性関係を持とうとしたことに他ならず、被告人がこれを隠そうと考えること自体はむしろ自然な発想であり、真実を妻に知られることをおそれるあまりに、あえて被害者からの誘いがあったという虚偽供述をしたとい

うのは不自然とはいえない。よって、供述の変遷を理由に被告人の公判供述を排斥することはできない。

3 結論

以上によれば、被告人は、被害者と性交したいとの意図があり、本件行為はそれに向けられていたものとみられるが、後述する被告人が被害者に対し口淫を強要しようとした以前の行為については、被告人は、被害者がこれに同意するものと認識していた疑いが残ると共に、被告人には、被害者の反抗を著しく困難にする程度の暴行を加え被害者の意思に反して姦淫しようとの故意を有していたと認めるにはなお合理的な疑いが残るものである。

なお、前記認定事実のとおり、被告人のいわゆるペッティング行為に対しても被害者が「やめて。」と言ってこれを拒んだり、陰部を触られそうになった際、これを拒否し、車から外へ出たというのであるから、それについてある程度の嫌悪感、拒否感を抱いていたともみられ、この意味では被害者には積極的に被告人の行為に応じる意思があったとまでは認定できないものである。しかしながら、男女間の性的な行為という、事の性質上、消極的にはこれを受け入れるという同意の存在、あるいは、被告人が被害者にはこの同意があると認識していた可能性が否定できないのであって（いったん被害者が車から外に出た後車に戻り被告人を自車に乗せ、会話をしたということから、被告人が被害者の拒否が一種のゲームであると考えたというのは、不自然ではない。）、結局、この時点までの行為について、強姦未遂罪あるいは強制わいせつ罪が成立するとは認定できない。

第6 強制わいせつ未遂の成否について

しかしながら、前記認定事実及び関係証拠によれば、被告人は、すでに性交を拒否され、いわゆる *maiking out* のムードを失った状態で、被害者が明確に拒絶の意思表示をしているにもかかわらず、これを認識しながら被害者の頭部を押さえるなどして自分の方に引き寄せ、被害者に自分の陰茎を舐めろと言って口淫を強要しようとしたこと、被害者はこれに抵抗し、被告人から離れて口淫には至らなかったこと、被害者は、その直後、自己の携帯電話から警察に通報しようとしたことが認められる。

そして、口淫は、徒に性欲を興奮または刺激せしめ、かつ普通人の正常な性的羞恥心を害し、善良な性的道義観念に反するものと認められるところ、被告人が被害者

の頭部を押さえるなどして自分の方に引き寄せた行為は、被害者の意思に反してわいせつ行為を行うに必要な程度に抗拒を抑制する暴行に当たる（この暴行自体はわいせつ行為には当たらない。また、被告人は、口淫等について被害者が同意していないことは認識していたものと認められるものの、強姦の故意までは有していなかったものと認められ、強姦未遂とはならない。）。

したがって、これらの行為は、強制わいせつ未遂に当たる。

そうすると、被告人は、判示第 1 の事実の限度で強制わいせつ未遂の罪責を負う（なお、同事実は、本件訴因中に包含されているものと認められる。）。

〔量刑の理由〕懲役 1 年・付執行猶予 3 年

那覇地方裁判所は、本件の量刑に関し、以下のような理由を示した。

本件は、米国海兵隊の将校である被告人が、基地内のクラブで働いていた被害者運転の自動車に同乗した際、同女に性交を求めたものの拒否されて、暴行を用いて口淫を強要しようとしたが被害者に抵抗されたためその目的を遂げなかった強制わいせつ未遂の事案、その後、被害者がその所有する携帯電話を取り出して警察に通報する様子を見せたことから、これを取上げ、河川に投棄した器物損壊の事案である。

被告人は、深夜、人通りのない路上に停車中の車内で性交を求めたものの、これを拒否され続け、思惑どおりにことが進まないことに憤慨して、口淫をさせようとしたものであり、その際被害者に対し、バーで働くフィリピン人だとか奴隷だなどと同女の尊厳を傷つける暴言を吐いているのであって、態様も芳しくない。被害者が警察へ通報するのを防ぐために被害者の携帯電話を投棄しており、犯情は悪い。以上によれば、被告人の刑事責任は軽視できない。

しかし、本件で、被害者は誇張した被害申告を行ったことが窺われ、被害者にも軽率な面があったともみられること、被害者は、公判で被告人に対する処罰を望まないことと供述していること、被告

人も最終的には判示第 2 の行為については、被害者に携帯電話機代の損害賠償をしたうえ謝罪する意思を表明していること、被告人には本邦での前科前歴はなく、アメリカ合衆国海兵隊員として働く傍ら大学の修士課程を修了し、一兵卒から将校になるなど真面目に人生を送ってきたと考えられること等被告人にとって酌むべき事情も認められる。

以上の事情を総合考慮し、主文のとおり刑を定めた。

（求刑 懲役 3 年）

〔予測モデル式からの若干の考察〕

本判決では、懲役 3 年の求刑に対して、懲役 1 年・付執行猶予 3 年が宣告された。本件は、強姦未遂被告事件として起訴されていたが、この件について、那覇地方裁判所は、強姦未遂や強制わいせつの成立を否定し、強制わいせつ未遂が成立すると判断した。強姦未遂の成立を否定したことが正当な判断であったのかは疑問の余地が残るが、本分析の対象外なのでここではその考察を留保しておこう。

では、強制わいせつ未遂が成立すると判断されたが、その宣告刑が妥当な判断であったのかを検証するべく、予測モデル式に照らして検証してみよう。まず、予測モデル式に照らして本件の基本的な位置づけを確認しておくと、すべての被害者数については、「(3-①) 強姦」が<なし> (-38.333)、「(3-②) 強姦未遂」が<なし> (-10.387)、「(3-③) 強制わいせつ」が<なし> (-13.951)、「(3-④) 強制わいせつ未遂」が<1 名> (28.917) となり、また、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度については、「(1-④) 被害結果(傷害)」が<なし> (-11.612) となり、その基本スコアは-45.366 となった。

予測モデル式では、予測値を 24.422 と算出した(残差-12.422 [標準化偏差: -0.368])。年に換算するとだいたい懲役 2 年というところであり、標準化残差値を見る限り、懲役 1 年の宣告刑は適正な範囲内であったようにも思われるのだが、しかしながら、多少の疑問もなくはない。本件は、強姦未遂の成立を否定して、強制わいせつ未遂の成立を認めていること、「被害者は誇張した被

害申告を行ったことが窺われ、被害者にも軽率な面があったともみられること」、「被害者は、公判で被告人に対する処罰を望まない」と供述していること」などの事情を織り込んで、刑期を大幅に減刑したものと推察するが、筆者はそれでも、懲役 2 年～懲役 3 年の判断の方が適正であったのではないかと考えている（ただ、本件は、懲役 3 年の求刑であったことから、当初より、執行猶予に付すか否かの判断が中心であったものと推察され、刑期判断に関する関心は低かったのかもしれない）。もっとも、本判決は、事実認定及び刑期判断に関して、疑問の余地を多少残すが、だが「外れ値事例」とまでは評価できないものと解される。

4.4. 小括⑥

本節での分析の結果、宣告刑が求刑のだいたい 0.8（±0.15）〔いわゆる八掛け〕であり、非常に高い相関があることが分かった。ただ、求刑超えの事案において、再犯可能性の高さが通常の計測値よりも高く評価されていると推察される事案が 3 例あったが、「求刑超え」について正当性や妥当性があるのかは、今後、規範的な観点からも検証していく必要があろう。

5. まとめ

5.1. 総括（小括①～⑥のまとめ）

以上の分析結果を総括すると、以下のとおりである。

（1-1）現在の性犯罪の刑期判断基準

①すべての被害者数〔「（3-①）強姦」、「（3-②）強姦未遂」、「（3-③）強制わいせつ」、「（3-④）強制わいせつ未遂」〕と、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度〔「（1-④）被害結果（傷害）」〕によって、刑期の基本的位置づけを決定している。

②性犯罪で犯情が最も重い犯行に関する、「（1-③）共犯関係」、「（1-⑨）心神耗弱」、「（1-⑩）被害者の落ち度」、「（1-⑪）飲酒」、「（2-②）窃盗・詐欺（未遂も含む）」、「（2-④）その他犯行後の行為」などが、①の犯情で決定した基本的な位置づけに対する修正的な要素として影響を与えて、刑期の枠を決定している。

③そして、「（4-②）累犯前科」、「（4-⑥）示談」、「（4-⑪）再犯可能性」、「（4-⑫）更生可能性」、「（4-⑭）若年」、「（4-⑰）身元引受け・更生支援体制」が、一般情状として、上記①及び②の犯情要素で決定した刑期の大枠に対する修正要素として影響を与えるとともに、また、限定的ながら、不遇（4-⑱）、身元引受け・更生支援体制（4-⑲）も、同様の影響を与えている。

（1-2）現在の性犯罪の量刑傾向

④現在の性犯罪の刑期判断基準は、＜連続強姦・強制わいせつ型＞、＜拉致・連行犯行型＞、＜面識ない者犯行型＞、＜勤務先関係者犯行型＞を中心に組み立てられており（標準値となっており）、それに比べて、＜飲酒・薬物抗拒不能型＞、＜集団強姦・強制わいせつ型＞については、これらの犯行類型に比べると、刑期が若干低くなる傾向にある。

⑤＜性的虐待型＞、＜教師・指導者犯行型＞、＜幼児性愛型＞については、類型的に刑期が加重される傾向がある。

⑥＜配偶者・交際相手犯行型＞、＜対知的障害者犯行型＞、＜友人・知人犯行型＞、＜SNS 犯行型＞については、類型的に刑期が軽減される傾向にある。

⑦そして、平成年間での量刑傾向については、緩やかな重罰化傾向にあった。

（1-3）求刑との関係

⑧宣告刑が求刑のだいたい 0.8（±0.15）〔いわゆる八掛け〕であり、非常に高い相関がある。

⑨求刑超えの事案において、再犯可能性の高さが通常の計測値よりも高く評価されていると推察される事案がある。

他方で、以下のような課題も見えてきた。

（2-1）予測モデル式の課題（改良ポイント）

①量刑因子（アイテム）において、犯行類型（社会的類型／刑事学的類型）、児童淫行罪（児童福

祉法違反)の被害者数を設定する。

②予測モデル式において、性犯罪以外の身体的被害や財産的被害、児童買春、児童ポルノに係る行為等の処罰及び児童の保護等に関する法律違反を組み込む。

③「(3-①)強姦」の〈4名〉のカテゴリースコア及び「(3-②)強姦未遂」の〈4名〉・〈5名〉のカテゴリースコアについて再検証を要する。

(2-2) 現在の性犯罪の刑期判断基準に関する課題 (法学的な検証ポイント)

④犯行類型による量刑傾向の差が、規範的な観点から見て適正であるのかを検証する。

⑤再犯可能性の高さが通常の計測値よりも高く評価されていることの正当性や妥当性について、規範的な観点から検証する。

5.2. 先行研究の知見との比較にみる本研究の意義

では最後に、先行研究の知見と照らし合わせて、さらに本研究の意義を整理していこう。

先行研究の知見①：

刑の大枠は、被害者数、姦淫既遂・未遂(姦淫が既遂に達しているか否か)、犯行態様(暴行・脅迫の程度、陵辱行為の有無や内容)、傷害の内容・程度、前科前歴(とりわけ同種犯罪のもの)の有無により決定されている。

本研究でも、すべての被害者数と、犯情が最も重い性犯罪に関する傷害の有無や程度によって、刑期の基本的な位置づけ(刑期の枠)を決定していると分析しており、先行研究①との共通性があることから、部分的に統計的な裏づけができたものと解される。

だが、本研究では、性犯罪で犯情が最も重い犯行に関する、「共犯関係」、「心神耗弱」、「被害者の落ち度」、「飲酒」、「窃盗・詐欺(未遂も含む)」、「その他犯行後の行為」などが、①の犯情で決定した基本的な位置づけに対する修正的な要素として影響を与えて、刑期の枠を決定していると分析しており、他方で、先行研究①では、姦淫既遂・未遂(姦淫が既遂に達している

か否か)、犯行態様(暴行・脅迫の程度、陵辱行為の有無や内容)、前科前歴(とりわけ同種犯罪のもの)の有無も刑の大枠に関する判断に影響を与えていると分析していることから、本研究の分析結果との間に多少の齟齬がある。この点について、刑事司法の実務家にインタビュー調査をしたり、統計的な追検証を行って、よりの確に解明していきたいと思う。

先行研究の知見②：

慰謝の措置(示談の成立)、被告人の若年性、非計画性が軽減因子となり、他方で、被害者の年齢(13歳未満)、計画性が加重因子となっている。

本研究でも、示談の成否、被告人の若年性が、一般情状として、刑期の大枠に対する修正要素として影響を与えると分析しており、先行研究②との共通性があることから、部分的に統計的な裏づけができたものと解される。

「被害者の年齢(13歳未満)」について、量刑因子(アイテム)の1つとするのか、それとも、犯行類型(社会的類型/刑事学的類型)のなかでカテゴリーの1つとして捉えるのかなどの検討の余地があるが、本研究での予測モデル式の課題(改良ポイント)として挙げているものであり、今後、再検証を行って、よりの確に解明していきたいと思う。

また、「計画性の有無」について、先行研究②では量刑判断に影響を与えていると分析しているが、本研究の分析結果はそれを否定するものであった。この点については、データを読み解く限り、本研究が、先行研究②を部分的に否定しえたものと解している。

先行研究の知見③：

被害者の落ち度は決定的な要素とはなっていないという指摘もあるが、軽減因子となるという指摘もある。

本研究では、「被害者の落ち度」が刑期の枠を決定するための一因子になっていると分析した。統計的な観点から見ると、実態として、被害者に落ち度があると指摘されている場合には、刑期の判断にある程度影響を与え

ていることが証明しえたものと解している。

ただ、どのような行動を被害者の落ち度と捉えるのかは、規範的な観点から検討を行う必要性があり、そして、判断のバラツキを抑えるために、場合によっては、法的規律やガイドラインの設定を考えていかなければならないのではないだろうか。この点については、規範的な検討課題として、諸外国の状況などと照らし合わせて語っていきたいと思う。

先行研究の知見④：

宣告刑と求刑には関連性があり、宣告刑は求刑よりも軽くなる傾向がある。

本研究において、宣告刑が求刑のだいたい 0.8 (±0.15) [いわゆる八掛け] であること (すなわち、先行研究④の知見) を統計的に確認することができたと解している。

5.3. 今後の課題

執行猶予に付すか否かの判断 (基準) については、本稿で合わせて提示することも考えたが、あまりにも膨大になるので、別稿で報告したいと思う。また、無期刑と有期刑の分水嶺、強盗強姦、強姦致死などに関する量刑基準は、分析を順次進めている最中である。これらについては、今後、報告していきたいと思う。

本研究によって、現在の性犯罪の刑期判断基準や量刑傾向を定量的に解明することができたのではないかと考えている。本研究が、改正性刑法の見直しなどに資すれば幸いである。

注

1) 解説として、松田哲也=今井将人「刑法の一部を改正する法律について」法曹時報 69 卷 11 号 (2017 年) 211 頁～309 頁、今井将人「『刑法の一部を改正する法律』の概要」研修 830 号 (2017 年) 39 頁～54 頁、同「性犯罪に対処するための刑法の一部改正」時の法令 2036 号 (2017 年) 4 頁～26 頁、加藤俊治「性犯罪に対処するための刑法改正の概要」法律のひろば 70 卷年 8 号 (2017 年) 52 頁～63 頁、同「性犯罪に対処するための『刑法の一部を改正する法律』の概要」刑

事法ジャーナル 53 号 (2017 年) 73 頁～87 頁、田野尻猛「性犯罪の罰則整備に関する刑法改正の概要」論究ジュリスト 23 号 (2017 年) 112 頁～119 頁、岡田志乃布「刑法の一部を改正する法律について」警察学論集 70 卷 10 号 (2017 年) 67 頁～91 頁、堀田さつき「『刑法の一部を改正する法律』の概要について」捜査研究 802 号 (2017 年) 2 頁～15 頁、北川佳世子「性犯罪の罰則に関する刑法改正」法学教室 445 号 (2017 年) 62 頁～68 頁など参照。

- 2) 角田由紀子「性犯罪法の改正—改正の意義と課題」論究ジュリスト 23 号 (2017 年) 122 頁、拙稿「批判的被害者学からみた改正性刑法の評価と今後の課題—3 年後を目処とした検討に向けて」被害者学研究 28 号 (2018 年) 34 頁。
- 3) 性犯罪に関する施策検討に向けた実態調査ワーキンググループの議事要旨等について、
<http://www.moj.go.jp/shingi1/shingi00400006.htm>
(法務省 HP トップページ>政策・審議会等>省議・審議会等>検討会等>性犯罪に関する施策検討に向けた実態調査ワーキンググループ) [2020 年 10 月 15 日最終閲覧]。
- 4) 「性犯罪に関する施策検討に向けた実態調査ワーキンググループ取りまとめ報告書」
(<http://www.moj.go.jp/content/001318153.pdf>)
[2020 年 10 月 15 日最終閲覧]。
- 5) 性犯罪に関する刑事法検討会の開催状況について、
http://www.moj.go.jp/keiji1/keiji12_00020.html (法務省 HP トップページ>政策・審議会等>省議・審議会等>検討会等>性犯罪に関する刑事法検討会)
[2020 年 10 月 15 日最終閲覧]。
- 6) 性犯罪・性暴力対策強化のための関係府省会議「性犯罪・性暴力対策の強化の方針」
(<http://www.moj.go.jp/content/001322544.pdf>)
[2020 年 10 月 15 日最終閲覧]。性犯罪・性暴力対策強化のための関係府省会議の開催状況について、
<http://www.gender.go.jp/kaigi/sonota/kyoukakaigi.html> (内閣府ホーム>内閣府男女共同参画局ホーム>推進本部・会議等>その他>性犯罪・性暴力対策強化のための関係府省会議) [2020 年 10 月 15 日最終閲覧]。

- 7) 与党や一部野党もそれに追随した肯定的な提言を出していることから、見直し（法改正）自体は不可避の方向にあると見ることもできよう（「性犯罪刑事法の見直しについて（令和元年 6 月 13 日立憲民主党）」（<http://www.moj.go.jp/content/001322547.pdf>），「性犯罪・性暴力対策の抜本的強化を求める緊急提言（令和 2 年 6 月 5 日自由民主党政務調査会）」（<http://www.moj.go.jp/content/001322548.pdf>），「性犯罪・性暴力対策の抜本的強化に関する提言（令和 2 年 6 月 5 日公明党男女共同参画社会推進本部，内閣部会，法務部会，ストーカー・DV・性暴力等対策推進 PT）」（<http://www.moj.go.jp/content/001322549.pdf>）（いずれも 2020 年 10 月 15 日最終閲覧））。
- 8) 拙稿「性犯罪の非親告罪化と被害者保護」被害者学研究 24 号（2014 年）29 頁以下，拙稿「性犯罪の親告罪規定と公訴時効」女性犯罪研究会編『性犯罪・被害—性犯罪規定の見直しに向けて』（尚学社，2014 年）167 頁以下。
- 9) 被害者学の観点から改正性刑法の見直しについて提言したものとして，拙稿・注 2）32 頁以下。また，拙稿「顕在化する被害を報じる意義—刑事政策・被害者学から見る刑法改正」新聞研究 799 号（2018 年）36 頁以下。
- 10) 筆者らが近年行った調査研究及び性犯罪・性暴力対策に関する提言について，宮園久栄ほか「〔公益財団法人日工祖社会安全研究財団 2018 年度一般研究助成最終報告書〕性刑法改正後の性暴力対策及び被害者支援のあり方に関する研究」（http://www.syaanken.or.jp/wp-content/uploads/2019/12/RP2018A_004.pdf）〔2020 年 10 月 15 日最終閲覧〕，山梨光貴=柴田守=宮園久栄「婦人保護施設等への調査結果からみた性暴力被害者支援の課題」被害者学研究 30 号（2020 年）40 頁以下，柴田守=宮園久栄「平成年間における性犯罪の量刑基準」日本犯罪社会学会第 46 回大会報告要旨集（2020 年）113 頁-114 頁，宮園久栄=柴田守=山梨光貴「婦人相談員への調査結果からみる性暴力被害の実態」同 123 頁-124 頁（http://hansha.daishodai.ac.jp/meeting_reports/PD/F/meeting-reports_46_2019.pdf）〔2020 年 10 月 15 日最終閲覧〕，拙稿「犯行類型別にみた性犯罪事件の量刑傾向」犯罪学雑誌 86 巻 2 号（2020 年）65 頁。
- 11) たとえば，拙稿「交通犯罪の量刑基準——公判請求された事件を中心に（1）」専修法学論集 114 号（2012 年）173 頁以下，拙稿「同（2）」専修法学論集 116 号（2012 年）57 頁以下，拙稿「同（3・完）」『〔専修大学法学研究所紀要 40 号〕刑事法の諸問題IX』（2015 年）61 頁以下，拙稿「裁判員裁判における殺人罪の刑期判断基準」『〔専修大学法学研究所紀要 44 号〕刑事法の諸問題X』（2019 年）23 頁以下，拙稿「変数増減法を用いた殺人罪の刑期判断予測モデル——学習アルゴリズムの構築に向けた予備的検討」地域論叢 34 号（2019 年）15 頁以下。
- 12) 重森幸雄「強姦事件の量刑と被害者に関する研究」法務総合研究所研究部紀要 1966（1966 年）48 頁以下。
- 13) 鬼塚賢太郎「刑の量定の実証的研究（強姦罪）」司法研究報告書第 17 輯第 3 号（1967 年）1 頁以下。
- 14) 萩原玉味「我が国における強姦罪の量刑事情と今後の課題—昭和 42 年 1 月から平成 9 年 12 月までの第一審判決を中心に」明治学院論叢 635 号（1999 年）83 頁以下，同「強姦事件の量刑」刑事弁護 35 号（2003 年）56 頁以下。
- 15) 並木正男=石川恭司=丸田顕「強姦致傷罪」大阪刑事実務研究会編著『量刑実務体系 5—主要犯罪類型の量刑』（判例タイムズ社，2013 年）158 頁以下。
- 16) 佐々木尚『強制性交罪における量刑相場分析』（Amazon Services International, Inc.）Kindle 版（2019 年）。
- 17) 青木孝之「裁判員裁判における量刑の理由と動向（上）」判例時報 2073 号（2010 年）4 頁。酒巻匡「裁判員裁判における量刑の意義」井上正仁=酒巻匡編著『三井誠先生古稀祝賀論文集』（有斐閣，2012 年）876 頁-878 頁参照。
- 18) 現在の量刑実務では，このモデルがおおむね定着している（大阪高判平成 25 年 2 月 26 日判タ 1390 号 375 頁，東京高判平成 28 年 6 月 30 日判時 2345 号 113 頁，判タ 1438 号 124 頁，高刑集（平 28）号 106 頁）。

- 19) 司法研修所編『裁判員裁判における第一審の判決書及び控訴審の在り方』（法曹会，2009 年）113 頁以下。
- 20) 拙稿「路上での連続強盗致傷等事件の被告人を執行猶予とした原判決につき，行為責任の原則に基づく量刑判断の在り方に反して，これまでの量刑傾向の大枠から外れた量刑判断を行ったものであるとして，これを破棄し実刑に処した事例－東京高判平成 28 年 6 年 30 日判時 2345 号 113 頁，判タ 1438 号 124 頁，高刑集(平 28)号 106 頁」判例時報 2371 号／判例評論 714 号（2018 年）176 頁／31 頁。
- 21) 2004 年の刑法の一部改正について，松尾浩也「最近の刑事立法」日本学士院紀要 68 巻 2 号（2013 年）189 頁。また，2017 年の刑法改正について，樋口亮介「性犯罪規定の改正」法律時報 89 巻 11 号（2017 年）112 頁，拙稿・前掲注 9) 被害者学研究 28 号（2018 年）38 頁。

参考文献

- 日本弁護士連合会裁判員本部編『裁判員裁判の量刑』（現代人文社，2012 年）424 頁-497 頁。
- 日本弁護士連合会刑事弁護センター編『裁判員裁判の量刑Ⅱ』（現代人文社，2017 年）153 頁-168 頁。